

栃木県埋蔵文化財調査報告第323集

原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎Ⅲ遺跡

-北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査XV-

2009.3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ生涯学習文化財団

はら きた

かや つつみ きた

い せ さき

原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎Ⅲ遺跡

–北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査XV–

2009.3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ生涯学習文化財団



原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎III遺跡 遠景（南東上空から）



原北遺跡 航空写真（俯瞰・上が北西）



伊勢崎III遺跡 航空写真（俯瞰・上が北）



伊勢崎III遺跡 出土旧石器

序

北関東自動車道は群馬・栃木・茨城の3県を結ぶ高速道路で、古くからの歴史・産業を合わせ持つ北関東の各都市を繋ぎ、沿線の産業の発展や観光の振興などを目指して計画されました。その建設に先立ち、路線内に所在する遺跡について関係機関と協議の結果、記録による保存のための発掘調査を実施することとなりました。

山王遺跡・原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎IV遺跡・伊勢崎III遺跡は、茨城県境と宇都宮上三川インターチェンジの間に位置し、県南東部の文化・商工業の中心地である真岡市に所在します。

伊勢崎III遺跡の発掘調査では、旧石器時代から、古墳時代、奈良・平安時代にかけて、さまざまな資料を発見いたしました。また、原北遺跡・茅堤北遺跡においては、中世と考えられる遺構を発見いたしました。これらの諸調査により、鬼怒川と五行川に挟まれた当地で、さまざまな時代にわたる人々の生活の営みを、うかがい知ることができました。

本書はその調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとりまして、郷土の歴史を理解する一助となるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで多くのご協力をいただきました東日本高速道路株式会社、真岡市教育委員会、栃木県県土整備部をはじめとする関係諸機関、並びに関係者各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

栃木県教育委員会
教育長 須藤 稔

例　　言

1. 本書は、栃木県真岡市柳林・龜山に所在する柳林遺跡(仮称)、長田地内に所在する山王遺跡、高間木地内に所在する原北遺跡・茅堤北遺跡、伊勢崎地内に所在する伊勢崎IV遺跡・伊勢崎III遺跡の発掘調査報告書である。各遺跡の概要については、年報等で一部公表されているが、本書をもって正式報告とする。
2. 発掘調査は、北関東自動車道（上三川～二宮地区）建設に伴う記録保存調査である。
3. 発掘調査は、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）の委託事業として、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査から整理作業および報告書作成までの担当は次のとおりである。

発掘調査

平成 12 年度 (試掘調査)	平成 12 年 1 月 15 日～平成 12 年 1 月 31 日 (柳林遺跡 (仮称))
	主査 進藤 敏雄　　主任 安永 真一
平成 14 年度 (確認調査)	平成 14 年 8 月 2 日～平成 14 年 8 月 22 日 (原北遺跡)
	平成 14 年 8 月 26 日～平成 14 年 9 月 4 日 (茅堤北遺跡)
	平成 14 年 8 月 28 日～平成 14 年 8 月 30 日 (伊勢崎IV遺跡)
	平成 14 年 9 月 2 日～平成 14 年 9 月 10 日 (伊勢崎III遺跡)
	平成 14 年 9 月 9 日～平成 14 年 9 月 30 日 (山王遺跡)
	総括 藤田 典夫　　主査 塚本 師也　　主査 森口 尚志
	主査 西田 和生　　主任 安永 真一
平成 15 年度 (本調査)	平成 15 年 4 月 1 日～平成 15 年 11 月 12 日 (伊勢崎III遺跡)
	平成 15 年 7 月 1 日～平成 15 年 11 月 13 日 (原北遺跡)
	主査 鈴木 泰浩　　主査 西田 和生　　嘱託調査員 平山 紋子
	調査補助員 玉橋さやか
平成 16 年度 (確認調査)	平成 17 年 3 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日 (山王遺跡)
	主査 塚本 師也　　主査 西田 和生　　主任 池田 敏宏

整理作業・報告書作成

平成 20 年度 (整理・報告)	平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日	主査 吉田 哲
5. 本書の執筆は、第 3 章 第 1 節(3) 項・第 3 節(8) 項 繩文土器・第 3 節(8) 項 弥生土器を塚本が、ほかを吉田が行った。また、第 3 章 第 3 節(8) 項 繩文石器は亀田幸久が補佐し、最終的な編集は吉田が担当した。		
6. 自然科学分析については、株式会社古環境研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社第四紀地質研究所に委託し、その結果を付章に掲載した。		
7. 写真撮影は発掘調査における遺構を各年度の担当者が行った。遺物は土師器・須恵器等を吉田が行い、旧石器等を小川忠博に委託した。		
8. 航空写真撮影は、中央航業株式会社に委託した。		
9. 基準杭建植は、アクリング株式会社に委託した。		
10. 金属製品の保存処理・X線撮影・写真撮影は車塚哲久が行った。		
11. 発掘調査の実施ならびに報告書の作成にあたっては、次の方々からご指導、ご協力を賜った。		

東日本高速道路株式会社関東第二支社宇都宮工事事務所（旧日本道路公団東京建設局宇都宮工事事務所）、栃木県教育委員会事務局文化財課、栃木県県土整備部（旧県土木部）交通政策課高速道路対策室、栃木県土地開発公社、真岡市教育委員会、荒川竜一、上野修一、布川嘉英、森嶋秀一（順不同、敬称略）

12. 本遺跡の出土遺物・資料類は、財団法人とちぎ生涯学習文化財団で保管している。
13. 発掘調査参加者は、次の通りである。秋元イツ子、浅香ツヤ、荒川幸夫、有馬紗由美、石崎正則、上野広勝、上野礼子、上原しげ、大川モンラッチャー、大塚武男、大塚タマ子、川俣由美子、小堀里子、小堀不二夫、

古谷野安子、坂入輝男、篠崎 章、篠崎節夫、島田有美、鈴木キヨ、関口フミ子、関口由紀子、土橋智夫、直井恵子、野沢 勇、羽鳥敏子、樋口重夫、福富 準、藤沢信吉、藤沢ミイ子、星野高雄、増渕三枝子、水沼京子、水沼武男、水沼 弘、美野輪銳二、宮田 哲、矢板橋金作、柳すみ子（五十音順）

14. 整理作業・報告書作成参加者は、次の通りである。蒲生光子、菅 智子、鶴見里子（五十音順）

凡 例

1. 遺跡の略号は、山王遺跡がMO-S N (MOOKA-SANNOH)、原北遺跡がMO-H K (MOOKA-HARAKITA)、茅堤北遺跡がMO-K T (MOOKA-KAYATSUTSUMIKITA)、伊勢崎IV遺跡がMO-I S・IV (MOOKA-ISESAKI・4)、伊勢崎III遺跡がMO-I S・III (MOOKA-ISESAKI・3) である。
2. 遺構略号および番号は、発掘調査時の名称を踏襲している。
3. 遺構実測図の縮尺は、実測図中にスケールで示した。原則として1/60であるが、竈については住居跡平面図のほかに1/30のものを併せて掲載した。また、溝状遺構については、1/60・1/240としている。
4. 遺構実測平面図中の方針は、平成12年度 柳林遺跡(候補)試掘調査、平成14年度 山王遺跡確認調査・原北遺跡確認調査・茅堤北遺跡確認調査・伊勢崎IV遺跡確認調査・伊勢崎III遺跡確認調査、平成16年度 山王遺跡確認調査が日本測地系(Tokyo Datum) 平面直角座標系第IX系に、平成15年度 原北遺跡本調査・伊勢崎III遺跡本調査が世界測地系(日本測地系2000・Japanese Geodetic Datum 2000) 平面直角座標系第IX系に基づいている。断面図中の水準は、東京湾平均海面からの標高である。
5. 土層説明における含有物分量についての記載は、発掘調査時の観察に準拠している。
6. 遺物実測図の縮尺は、実測図中にスケールで示した。原則として縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・陶器・瓦・石製品・金属製品1/3、旧石器2/3、縄文石器1/1・1/3としている。
7. 破片遺物の拓本は、その性格により配置が異なる。表裏縄文土器の場合は左側から「表面-裏面-断面」、その他の縄文土器の場合は「表面-断面」、須恵器は「裏面-断面-表面」の順に掲載した。
8. 出土遺物実測図中の遺物番号は、遺物出土状況図・出土遺物観察表・遺物写真図版中の番号に対応する。
9. 出土遺物観察表中における寸法の、口径・器高・底径・胴径(土師器・須恵器など)、長・幅・厚(石製品・金属製品・鉄滓)、全長・広長・広厚・狭長・狭厚(瓦)の略称は、それぞれ口縁部直径・器高・底部直径・胴部最大直径・最大長・最大幅・最大厚・全長・広端部長・広端部厚・狭端部長・狭端部厚を示す。
10. 出土遺物観察表中における計測値の()は推定値、[]は残存値を表す。
11. 金属製品の実測図および重量計測値は乾燥処理後、写真図版は錆落とし処理後のものである。
12. 遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帳』1996年版に従っている。
13. 遺物写真図版の縮尺は基本的に不統一であるが、以下の遺物は図版内に縮小率を表記して統一した。
(旧石器時代)石器・接合資料2/3。(縄文時代)石鏃1/1、スクレイパー・敲石2/3、磨石・石皿1/2。
14. 実測図中のスクリーントーンは以下の意味を示している。

(遺構)



地山



粘土



礫

(遺物)



纖維混入



土師器断面



須恵器断面



灰釉断面



陶器断面



瓦断面



鉄製品断面



黑色処理



朱墨

目 次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	
(1) 発掘調査の方法	5
(2) 試掘・確認調査の経過	7
(3) 本調査の経過	11
(4) 整理作業・報告書作成の経過	13

第2章 遺跡の環境

第1節 周辺の地形	14
第2節 周辺の遺跡	17
第3節 基本層序と堆積状況	22

第3章 遺構と遺物

第1節 原北遺跡	
(1) 概 要	24
(2) 溝 跡	24
(3) 遺構外出土遺物	26
第2節 茅堤北遺跡	
(1) 概 要	28
(2) 溝 跡	28
第3節 伊勢崎Ⅲ遺跡	
(1) 概 要	30
(2) 旧石器時代	30
(3) 壁穴住居跡	69
(4) 井戸跡	93
(5) 溝 跡	95
(6) 土 坑	105
(7) 性格不明遺構	108
(8) 遺構外出土遺物	109

第4章 調査の成果

第1節 原北遺跡について	115
第2節 茅堤北遺跡について	115
第3節 伊勢崎Ⅲ遺跡について	115

付 章 自然科学分析

第1節 伊勢崎Ⅲ遺跡の火山灰分析	117
第2節 伊勢崎Ⅲ遺跡出土石器の石材肉眼鑑定	122
第3節 黒曜石・黒色安山岩の産地同定分析	128

挿 図 目 次

第 1 図 北関東自動車道（上三川～二宮間）関連の遺跡 (S=1/80,000).....	2
第 2 図 伊勢崎III遺跡 旧石器調査区グリッド表記概念図.....	6
第 3 図 柳林遺跡（仮称）トレンチ配置図.....	7
第 4 図 山王遺跡 トレンチ配置図	8
第 5 図 原北遺跡 トレンチ配置図	9
第 6 図 茅堤北遺跡 トレンチ配置図	9
第 7 図 伊勢崎IV遺跡 トレンチ配置図	10
第 8 図 伊勢崎III遺跡 トレンチ配置図	11
第 9 図 原北遺跡 遺構配置図.....	11
第 10 図 伊勢崎III遺跡 遺構配置図	12
第 11 図 栃木県行政界図	14
第 12 図 周辺の地形図.....	15
第 13 図 周辺の遺跡.....	19
第 14 図 伊勢崎III遺跡 基本土層柱状図.....	22
第 15 図 伊勢崎III遺跡 旧石器調査区セクション	23
第 16 図 原北遺跡 S D-0 1・0 2 実測図 (1).....	24
第 17 図 原北遺跡 S D-0 1・0 2 実測図 (2).....	25
第 18 図 原北遺跡 遺構外出土縄文土器	26
第 19 図 原北遺跡 遺構外出土弥生土器	27
第 20 図 茅堤北遺跡 S-0 1 実測図 (1)	28
第 21 図 茅堤北遺跡 S-0 1 実測図 (2)	29
第 22 図 伊勢崎III遺跡 旧石器時代調査区全体図	31
第 23 図 伊勢崎III遺跡 旧石器出土レベル度数分布図.....	33
第 24 図 伊勢崎III遺跡 1・2号ブロック出土旧石器分布図	33
第 25 図 伊勢崎III遺跡 3・4・5号ブロック出土旧石器分布図	35
第 26 図 伊勢崎III遺跡 6号ブロック出土旧石器分布図	37
第 27 図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図 (1)	39
第 28 図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図 (2)	41
第 29 図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図 (3)	43
第 30 図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図 (4)	44
第 31 図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図 (5)	45
第 32 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図 (1).....	48
第 33 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図 (2).....	48
第 34 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料実測図 (1).....	49
第 35 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図 (3).....	50
第 36 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図 (4).....	50
第 37 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図 (5).....	50
第 38 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料実測図 (2).....	51
第 39 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図 (6).....	52
第 40 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料実測図 (3).....	53
第 41 図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料実測図 (4).....	54
第 42 図 伊勢崎III遺跡 磔接合資料分布図 (1).....	56

第 43 図	伊勢崎III遺跡	縦接合資料分布図（2）	56
第 44 図	伊勢崎III遺跡	縦接合資料分布図（3）	57
第 45 図	伊勢崎III遺跡	縦接合資料分布図（4）	57
第 46 図	伊勢崎III遺跡	縦接合資料分布図（5）	57
第 47 図	伊勢崎III遺跡	出土層位不明旧石器実測図（1）	59
第 48 図	伊勢崎III遺跡	出土層位不明旧石器実測図（2）	60
第 49 図	伊勢崎III遺跡	S-1 実測図（1）	69
第 50 図	伊勢崎III遺跡	S-1 実測図（2）	71
第 51 図	伊勢崎III遺跡	S-1 出土遺物実測図	72
第 52 図	伊勢崎III遺跡	S-2 実測図（1）	73
第 53 図	伊勢崎III遺跡	S-2 実測図（2）	74
第 54 図	伊勢崎III遺跡	S-2 実測図（3）	75
第 55 図	伊勢崎III遺跡	S-2 出土遺物実測図（1）	76
第 56 図	伊勢崎III遺跡	S-2 出土遺物実測図（2）	77
第 57 図	伊勢崎III遺跡	S-3 0 実測図（1）	79
第 58 図	伊勢崎III遺跡	S-3 0 実測図（2）	80
第 59 図	伊勢崎III遺跡	S-3 0 実測図（3）	81
第 60 図	伊勢崎III遺跡	S-3 0 出土遺物実測図	82
第 61 図	伊勢崎III遺跡	S-3 2 実測図（1）	84
第 62 図	伊勢崎III遺跡	S-3 2 実測図（2）	85
第 63 図	伊勢崎III遺跡	S-3 2 実測図（3）	86
第 64 図	伊勢崎III遺跡	S-3 2 実測図（4）	87
第 65 図	伊勢崎III遺跡	S-3 2 出土遺物実測図（1）	88
第 66 図	伊勢崎III遺跡	S-3 2 出土遺物実測図（2）	89
第 67 図	伊勢崎III遺跡	S-3 2 出土遺物実測図（3）	90
第 68 図	伊勢崎III遺跡	S-3 2 出土遺物実測図（4）	91
第 69 図	伊勢崎III遺跡	S-2 1・2 5・3 6 実測図	94
第 70 図	伊勢崎III遺跡	S-3 6 出土遺物実測図	95
第 71 図	伊勢崎III遺跡	S-4・5・6・8・9 実測図（1）	96
第 72 図	伊勢崎III遺跡	S-4・5・6・8・9 実測図（2）	97
第 73 図	伊勢崎III遺跡	S-4 出土遺物実測図	98
第 74 図	伊勢崎III遺跡	S-5・6・9・3 1 出土遺物実測図	101
第 75 図	伊勢崎III遺跡	S-2 6・2 7 実測図	103
第 76 図	伊勢崎III遺跡	S-3 1 実測図	104
第 77 図	伊勢崎III遺跡	土坑実測図	107
第 78 図	伊勢崎III遺跡	S-2 8 実測図・出土遺物実測図	108
第 79 図	伊勢崎III遺跡	遺構外出土縄文土器実測図	109
第 80 図	伊勢崎III遺跡	遺構外出土縄文時代石器実測図（1）	111
第 81 図	伊勢崎III遺跡	遺構外出土縄文時代石器実測図（2）	112
第 82 図	伊勢崎III遺跡	遺構外出土弥生土器実測図	113
第 83 図	伊勢崎III遺跡	遺構外出土遺物実測図	114

表 目 次

第 1 表 北関東自動車道（上三川～二宮間）埋蔵文化財発掘調査箇所一覧	3
第 2 表 柳林遺跡（仮称）トレンチ概要	7
第 3 表 山王遺跡 トレンチ概要	8
第 4 表 原北遺跡 トレンチ概要	8
第 5 表 茅堤北遺跡 トレンチ概要	9
第 6 表 伊勢崎IV遺跡 トレンチ概要	10
第 7 表 伊勢崎III遺跡 トレンチ概要	10
第 8 表 周辺の遺跡一覧（1）	20
第 9 表 周辺の遺跡一覧（2）	21
第 10 表 伊勢崎III遺跡 旧石器器種組成	38
第 11 表 伊勢崎III遺跡 黒曜石製旧石器産地分析結果	46
第 12 表 伊勢崎III遺跡 旧石器石材組成（ブロック別）	47
第 13 表 伊勢崎III遺跡 旧石器石材組成（器種別）	47
第 14 表 伊勢崎III遺跡 磔石材組成	55
第 15 表 伊勢崎III遺跡 旧石器属性表（1）	61
第 16 表 伊勢崎III遺跡 旧石器属性表（2）	62
第 17 表 伊勢崎III遺跡 旧石器属性表（3）	63
第 18 表 伊勢崎III遺跡 磔属性表（1）	64
第 19 表 伊勢崎III遺跡 磔属性表（2）	65
第 20 表 伊勢崎III遺跡 磔属性表（3）	66
第 21 表 伊勢崎III遺跡 磔属性表（4）	67
第 22 表 伊勢崎III遺跡 磔属性表（5）	68
第 23 表 伊勢崎III遺跡 S-1出土遺物観察表	72
第 24 表 伊勢崎III遺跡 S-2出土遺物観察表	78
第 25 表 伊勢崎III遺跡 S-30出土遺物観察表	83
第 26 表 伊勢崎III遺跡 S-32出土遺物観察表（1）	92
第 27 表 伊勢崎III遺跡 S-32出土遺物観察表（2）	93
第 28 表 伊勢崎III遺跡 S-36出土遺物観察表	95
第 29 表 伊勢崎III遺跡 S-4出土遺物観察表	99
第 30 表 伊勢崎III遺跡 S-5出土遺物観察表	100
第 31 表 伊勢崎III遺跡 S-6出土遺物観察表	100
第 32 表 伊勢崎III遺跡 S-9出土遺物観察表	102
第 33 表 伊勢崎III遺跡 S-31出土遺物観察表	105
第 34 表 伊勢崎III遺跡 S-28出土遺物観察表	108
第 35 表 伊勢崎III遺跡 遺構外出土縄文土器属性表	109
第 36 表 伊勢崎III遺跡 遺構外出土縄文時代石器属性表	111
第 37 表 伊勢崎III遺跡 遺構外出土弥生土器属性表	113
第 38 表 伊勢崎III遺跡 遺構外出土遺物観察表	114

図版目次

卷頭図版一

原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎III遺跡 遠景（南東上空から）
原北遺跡 航空写真（俯瞰・上が北西）

卷頭図版二

伊勢崎III遺跡 航空写真（俯瞰・上が北）
伊勢崎III遺跡 出土旧石器

図版一 試掘・確認調査

柳林遺跡（仮称）現況（南から）
柳林遺跡（仮称）トレンチ1（南西から）
柳林遺跡（仮称）トレンチ1セクション（南から）
柳林遺跡（仮称）トレンチ7作業風景（北東から）
山王遺跡 トレンチ1（北東から）
山王遺跡 トレンチ1セクション（東から）
山王遺跡 トレンチ5小穴半截（西から）
山王遺跡 トレンチ4作業風景（南西から）

図版二 確認調査・遺構

原北遺跡 トレンチ1（南から）
原北遺跡 トレンチ3セクション（南から）
原北遺跡 トレンチ4作業風景（南から）
原北遺跡 S D-01・02確認状況（西から）
原北遺跡 S D-01セクション（西から）
原北遺跡 S D-02セクション（西から）
原北遺跡 S D-01・02完掘（東から）
原北遺跡 S D-01・02完掘（南西から）

図版三 確認調査・遺構

茅堤北遺跡 トレンチ1（西から）
茅堤北遺跡 トレンチ5セクション（南西から）
茅堤北遺跡 トレンチ5作業風景（南東から）
茅堤北遺跡 S-01a・b確認状況（南東から）
茅堤北遺跡 S-01Bセクション（東から）
茅堤北遺跡 S-01Dセクション（西から）
茅堤北遺跡 S-01Fセクション（南から）
茅堤北遺跡 S-01Gセクション（西から）

図版四 確認調査

伊勢崎IV遺跡 トレンチ1（南東から）
伊勢崎IV遺跡 トレンチ1セクション（南西から）
伊勢崎IV遺跡 トレンチ1・2・3（東から）
伊勢崎IV遺跡 トレンチ4作業風景（南東から）
伊勢崎III遺跡 トレンチ3（西から）
伊勢崎III遺跡 トレンチ3セクション（南西から）
伊勢崎III遺跡 トレンチ5（南西から）
伊勢崎III遺跡 トレンチ2・3・4実測作業（北東から）

図版五 遺構

伊勢崎III遺跡 旧石器調査区 現況（北西から）
伊勢崎III遺跡 旧石器調査区 全景（北西から）
伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Aグリッドセクション（南から）

伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Aグリッド（南から）

伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Bグリッド（南から）

伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Bグリッド東部（南から）

伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Bグリッド西部（南から）

伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Cグリッド（北西から）

図版六 遺構

伊勢崎III遺跡 旧石器調査区A-58グリッド（西から）
伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Aグリッド作業風景（南西から）
伊勢崎III遺跡 旧石器調査区A-58グリッド（東から）
伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Aグリッド写真撮影（北西から）
伊勢崎III遺跡 No.225 旧石器出土状況（東から）
伊勢崎III遺跡 No.19 旧石器出土状況（南から）
伊勢崎III遺跡 No.22 旧石器出土状況（南から）
伊勢崎III遺跡 No.118 旧石器出土状況（南から）

図版七 遺構

伊勢崎III遺跡 A区 全景（北西から）
伊勢崎III遺跡 B区北部 全景（東から）
伊勢崎III遺跡 B区南部 全景（東から）
伊勢崎III遺跡 C区 全景（西から）
伊勢崎III遺跡 S-1セクション（南西から）
伊勢崎III遺跡 S-1完掘（北西から）
伊勢崎III遺跡 S-1竪遺物出土状況（北西から）
伊勢崎III遺跡 S-1貯蔵穴遺物出土状況（北西から）

図版八 遺構

伊勢崎III遺跡 S-2セクション（南西から）
伊勢崎III遺跡 S-2遺物出土状況（南西から）
伊勢崎III遺跡 S-2竪遺物出土状況（南西から）
伊勢崎III遺跡 S-2掘方完掘（南西から）
伊勢崎III遺跡 S-2竪掘方完掘（南から）
伊勢崎III遺跡 S-2P1完掘（南西から）
伊勢崎III遺跡 S-30セクション（東から）
伊勢崎III遺跡 S-30遺物出土状況（北から）

図版九 遺構

伊勢崎III遺跡 S-30掘方完掘（南から）
伊勢崎III遺跡 S-30P4完掘（南から）
伊勢崎III遺跡 S-32遺物出土状況（西から）
伊勢崎III遺跡 S-32作業風景（西から）
伊勢崎III遺跡 S-32No.21女瓦出土状況（西から）
伊勢崎III遺跡 S-32第一・第二東竪完掘（南西から）
伊勢崎III遺跡 S-32第二東竪完掘（北西から）
伊勢崎III遺跡 S-32第一東竪掘方完掘（西から）

図版一〇 遺構

伊勢崎III遺跡 S-32掘方完掘（西から）
伊勢崎III遺跡 S-32第二東竪脇棚状施設（西から）
伊勢崎III遺跡 S-21完掘（南から）
伊勢崎III遺跡 S-25完掘（西から）

伊勢崎III遺跡 S-3 6 セクション（北から）
伊勢崎III遺跡 S-4・5・6・8・9 完掘（東から）
伊勢崎III遺跡 S-4 Cセクション（西から）
伊勢崎III遺跡 S-4 Dセクション（南から）

図版一一 遺構

伊勢崎III遺跡 S-4 完掘（東から）
伊勢崎III遺跡 S-5・6 Gセクション（南から）
伊勢崎III遺跡 S-5 完掘（北東から）
伊勢崎III遺跡 S-6・8 Jセクション（東から）
伊勢崎III遺跡 S-8 Mセクション（南から）
伊勢崎III遺跡 S-9 完掘（北西から）
伊勢崎III遺跡 S-2 6 Cセクション（西から）
伊勢崎III遺跡 S-2 6 完掘（北西から）

図版一二 遺構

伊勢崎III遺跡 S-2 7 Cセクション（南から）
伊勢崎III遺跡 S-2 7 完掘（北西から）
伊勢崎III遺跡 S-3 1 Aセクション（北東から）
伊勢崎III遺跡 S-3 1 完掘（西から）
伊勢崎III遺跡 S-1 0・1 1・1 2 セクション（南から）
伊勢崎III遺跡 S-1 0・1 1・1 2・1 3 完掘（西から）
伊勢崎III遺跡 S-1 4 完掘（北から）
伊勢崎III遺跡 S-1 5 完掘（南から）

図版一三 遺構

伊勢崎III遺跡 S-1 6 完掘（東から）
伊勢崎III遺跡 S-3 3 遺物出土状況（南から）
伊勢崎III遺跡 S-3 4 遺物出土状況（南から）
伊勢崎III遺跡 S-3 5 遺物出土状況（南から）
伊勢崎III遺跡 S-2 8 Aセクション（東から）
伊勢崎III遺跡 S-2 8 Bセクション（南から）
伊勢崎III遺跡 S-2 8 天井部崩落状況（南東から）
伊勢崎III遺跡 S-2 8 完掘（南から）

図版一四 原北遺跡 遺物

縄文時代 遺構外 土器 1～18
弥生時代 遺構外 土器 1・2

図版一五 伊勢崎III遺跡 遺物

旧石器時代 石器（1）

図版一六 伊勢崎III遺跡 遺物

旧石器時代 石器（2）

図版一七 伊勢崎III遺跡 遺物

旧石器時代 石器（3）

図版一八 伊勢崎III遺跡 遺物

旧石器時代 石器（4）

図版一九 伊勢崎III遺跡 遺物

旧石器時代 接合資料 No. 1
旧石器時代 接合資料 No. 2

図版二〇 伊勢崎III遺跡 遺物

旧石器時代 接合資料 No. 3
旧石器時代 接合資料 No. 4
旧石器時代 接合資料 No. 5
旧石器時代 接合資料 No. 6

図版二一 伊勢崎III遺跡 遺物

旧石器時代 接合資料 No. 9
旧石器時代 接合資料 No. 10
旧石器時代 接合資料 No. 11

図版二二 伊勢崎III遺跡 遺物

旧石器時代 出土層位不明 石器

図版二三 伊勢崎III遺跡 遺物

縄文時代 遺構外 土器（1） 1～5
縄文時代 遺構外 土器（2） 6～9

図版二四 伊勢崎III遺跡 遺物

縄文時代 遺構外 土器（3） 10～22
弥生時代 遺構外 土器 1～15

図版二五 伊勢崎III遺跡 遺物

縄文時代 遺構外 石器 1～18

図版二六 伊勢崎III遺跡 遺物

S-1 出土遺物 1～8
S-2 出土遺物 1～7・9

図版二七 伊勢崎III遺跡 遺物

S-2 出土遺物 10
S-30 出土遺物 1～9

図版二八 伊勢崎III遺跡 遺物

S-32 出土遺物 1～3・5～14・16・17・19
製塙土器

図版二九 伊勢崎III遺跡 遺物

S-32 出土遺物 20～23
S-36 出土遺物 1
S-4 出土遺物 1～5

図版三〇 伊勢崎III遺跡 遺物

S-4 出土遺物 6～8
S-5 出土遺物 1・2
S-6 出土遺物 1
S-9 出土遺物 1
S-28 出土遺物 1
S-31 出土遺物 1～3
遺構外 出土遺物 1
鉄製品・鉄滓・羽口破片

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

北関東自動車道（路線名「北関東自動車道高崎水戸線」）は、群馬県高崎市から茨城県ひたちなか市に至る延長約150kmの国土開発幹線自動車道である。群馬、栃木、茨城3県の主要都市並びに国際港常陸那珂港を結ぶとともに、上信越自動車道や中部横断自動車道と一体となり、東京から100km～150km圏を環状に結ぶ「関東環状道路」を形成する高速道路である。関東地方における高速道路網の強化により各主要都市の交流の促進や地域の総合的発展の基盤施設としての役割が期待されている。

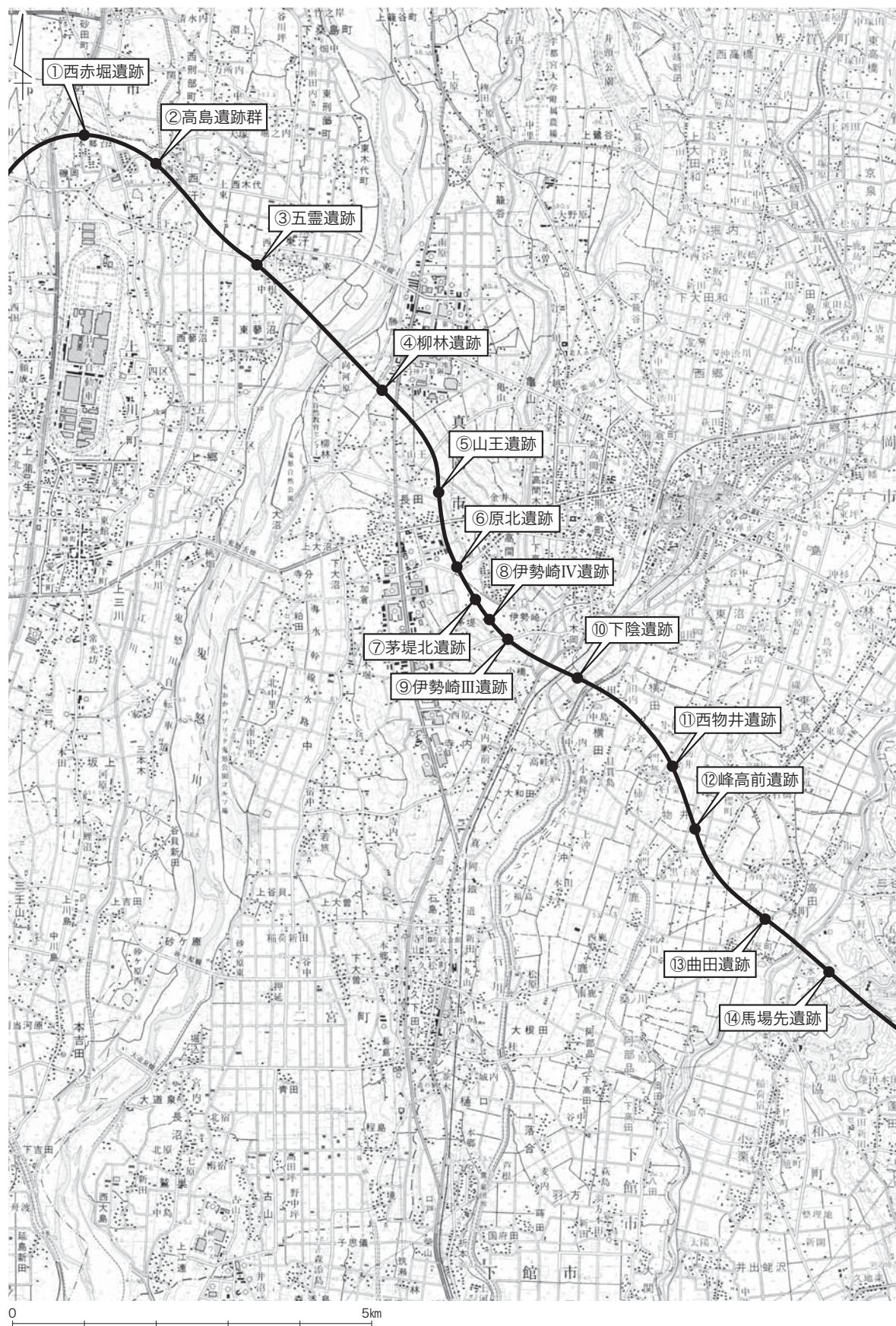
栃木県内は足利市、佐野市、岩舟町、栃木市、都賀町、壬生町、下野市、宇都宮市、上三川町、真岡市、二宮町の6市5町、約58kmを通過する。このうち、東北自動車道（栃木都賀J.C.T）から新4号国道（宇都宮上三川I.C）までの約19kmは優先着工区間とされ、平成12年7月27日に開通している。次いで、宇都宮上三川I.Cから真岡I.Cまでの約8kmが平成20年3月15日に、真岡I.Cから桜川筑西I.Cまでの約14kmが平成20年12月20日にそれぞれ開通している。

東北自動車道重複区間及び優先着工区間の両側に位置する上三川～二宮間、足利～岩舟間においては平成3年2月8日都市計画決定、平成3年12月3日基本計画決定、平成8年12月27日整備計画決定をへて、群馬県境～足利は平成9年12月25日、真岡～茨城県境は平成10年4月8日にそれぞれ施行命令が出されている。

日本道路公団東京第一建設局（当時、以下公団）長は施行命令を受け、平成9年7月1日、栃木県土木部高速道路対策室（当時、以下県高対室）を経由し県教育長あて路線内の埋蔵文化財について照会した。そこで栃木県教育委員会事務局文化課（以下県文化課、平成11年度より県文化財課）は、平成9年7月8日から18日にかけて所在調査を実施した。この調査により周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に上三川～二宮間で14箇所、足利～岩舟間で18箇所の調査必要箇所が確認された。結果は平成10年3月18日付で公団局長あて回答され、あわせて県高対室長あて報告された。

これら調査必要箇所の取り扱いについて、県文化課、公団、県高対室による協議の結果、工事の影響を免れない範囲について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。そのため、平成13年1月15日、公団局長、県教育長及び発掘主体者の財団法人とちぎ生涯学習文化財団（以下財団）理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」（以下協定書）が締結された。この協定書において、上記の32箇所について現地発掘調査期間は平成18年3月まで、整理作業・報告書作成期間は平成19年3月まで、費用概算額は2,167,967,000円とされた。また、平成12年度は上三川～二宮間の柳林遺跡、西物井遺跡、峰高前遺跡について調査に着手することとなり、協定書に基づき公団局長及び財団理事長間で「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」が締結され、北関東自動車道上三川～二宮間及び足利～岩舟間の発掘調査が開始された。

その後、財団は文化財課の指導にもとづき発掘調査業務を実施してきたところ、工事予定の変更や新たな埋蔵文化財包蔵地の確認等により協定書中全体実施計画等の見直しが必要となった。そのため、平成18年3月29日付、東日本高速道路株式会社（平成17年10月1日、日本道路公団の民営化に伴い設立：以下東日本高速（株））関東支社宇都宮工事事務所長、県教育長及び財団理事長により「北関東自動車道（足利～岩舟、上三川～二宮）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する変更協定書（第1回変更）」が締結された。この協定においては新たに4箇所を加えた36箇所（壬生P.A新規建設に伴う都賀～上三川間、谷向遺跡を含



第1図 北関東自動車道（上三川～二宮間）関連の遺跡（S=1/80,000）

第1表 北関東自動車道（上三川～二宮間）埋蔵文化財発掘調査箇所一覧

No	遺跡名	所在地	当初調査 対象面積 (m ²)	調査区分	調査面積 (m ²)	遺跡の概要
1	西赤堀遺跡 (18年度報告)	河内郡上三川町 西汗	27,100	発掘	24,260	平成13～15年度本調査。縄文時代住居跡1軒・古墳時代住居跡61軒・古墳2基など。
				確認	730	対象面積：5,000m ²
2	高島遺跡群 (19年度報告)	河内郡上三川町 西汗	29,000	発掘	10,500	平成13・14年度本調査。古墳～平安時代住居跡18軒・掘立柱建物跡11棟など。
				確認	930	対象面積：8,300m ²
				試掘	1,085	対象面積：17,100m ²
3	五霊遺跡 (20年度報告)	河内郡上三川町 東汗	10,400	発掘	9,385	平成14・15年度本調査。古墳～平安時代住居跡23軒・溝跡33条など。
				試掘	1,266	対象面積：10,400m ²
4	柳林遺跡(仮称) (当報告書)	真岡市 柳林・龜山	9,200	試掘	369	平成12年度試掘調査（対象面積：9,200m ² ）遺構なし。
5	山王遺跡 (当報告書)	真岡市長田	11,000	確認	1,018	平成14・16年度試掘調査（対象面積：11,000m ² ）遺構なし。
6	原北遺跡 (当報告書)	真岡市西高間木	6,600	発掘	1,500	平成15年度本調査。時期不明の溝2条。
				確認	570	対象面積：5,900m ²
7	茅堤北遺跡 (当報告書)	真岡市西高間木	3,300	確認	804	平成14年度試掘調査（対象面積：3,300m ² ）時期不明の溝1条
8	伊勢崎IV遺跡 (当報告書)	真岡市伊勢崎	7,900	確認	620	平成14年度試掘調査（対象面積：7,900m ² ）遺構なし。
9	伊勢崎III遺跡 (当報告書)	真岡市伊勢崎	10,500	発掘	8,100	平成15年度本調査。旧石器時代遺物ブロック・古墳～平安時代住居跡4軒など。
				確認	404	対象面積：2,700m ²
10	下陰遺跡 (I分冊19年度 報告・II分冊21 年度報告予定)	真岡市八木岡	64,700	発掘	41,183	平成13・14・17・18年度本調査。縄文時代住居跡5軒・古墳～平安時代住居跡8軒・古墳2基・中世遺構約5,000基など。
				試掘	2,822	対象面積：37,476m ²
11	西物井遺跡 (20年度報告)	芳賀郡二宮町 物井	26,800	発掘	26,350	平成13～17年度本調査。古墳～平安時代住居跡68軒・方形周溝遺構7基・井戸跡29基・火葬墓11基・溝状遺構101条・ピット状遺構1,436基など。
				確認	1,047	対象面積：6,900m ²
12	峰高前遺跡 (19年度報告)	芳賀郡二宮町 物井	17,600	発掘	13,780	平成13～15・17年度本調査。古墳～平安時代住居跡104軒・掘立柱建物跡22棟・溝27条・井戸状遺構62基など。
				確認	2,097	対象面積：22,900m ²
13	曲田遺跡 (20年度報告)	芳賀郡二宮町 高田	22,150	発掘	28,310	平成14～16年度本調査。古墳時代住居跡31軒・古墳2基など。
				確認	2,592	対象面積：22,150m ²
14	馬場先遺跡 (20年度報告)	芳賀郡二宮町 水戸部	10,600	発掘	10,600	平成15年度本調査。奈良・平安時代住居跡5軒など。
				試掘	530	対象面積：9,000m ²

む）について、現地発掘調査は平成23年3月まで、また整理作業・報告書作成は平成24年3月までの期間、費用概算額は3,302,692,000円と変更された。

なお、平成19年3月には、上三川～二宮間における14箇所の現地発掘調査が総て終了した。また、平成20年3月までに足利～岩舟間及び都賀～上三川間における22箇所の現地発掘調査も終了した。整理作業・報告書作成作業においては、総ての遺跡について平成23年度までに報告書を刊行する予定である。

本報告書収録の山王遺跡（県遺跡番号4411）は真岡市長田地内、原北遺跡（県遺跡番号7980）・茅堤北遺跡（県遺跡番号7981）は同市西高間木地内、伊勢崎IV遺跡（県遺跡番号7987）・伊勢崎III遺跡（県遺跡番号7986）は同市伊勢崎地内に所在し、いずれも周知の埋蔵文化財包蔵地である。柳林遺跡（仮称）は同市柳林・龜

第1章 調査の経緯

山地内に所在するが、遺構・遺物とも確認されず、周知の埋蔵文化財包蔵地とはならなかつた。

発掘調査の経緯は次の通りである。平成12年度は柳林遺跡(仮称)の試掘調査を実施した。平成14年度は、山王遺跡・原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎IV遺跡・伊勢崎III遺跡の確認調査を実施した。平成15年度は、原北遺跡・伊勢崎III遺跡の本調査を実施した。平成16年度には、再び山王遺跡の確認調査を実施している。

整理作業・報告書作成については、平成20年度に6遺跡を併せて実施し、このたび報告書上梓のはこびとなつたものである。なお、栃木県教育委員会事務局文化財課との協議により、周知の埋蔵文化財包蔵地ではない柳林遺跡について本文中に掲載する必要がある場合は(仮称)を付すことにした。また、周知の埋蔵文化財包蔵地である他5遺跡のうち、遺構・遺物量が少ない山王遺跡・伊勢崎IV遺跡については本文・抄録のみの掲載とし、原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎III遺跡については報告書名・本文・抄録ともに掲載することにした。

調査組織

平成12年度

埋蔵文化財センター所長 山内 正吉
管理部長 中田 清
管理部管理担当主任 桜井 恭子
主幹兼調査部長 大金 宣亮
大規模調査班班長 橋本 澄朗
北関東道路調査担当総括 藤田 典夫
主査 鈴木 元 主査 塚本 師也 主査 進藤 敏雄
主任 谷中 隆 主任 安永 真一 主任 亀田 幸久
技師 安藤 美保 技師 平久保 直希 技師 合田 恵美子
嘱託調査員 大島美智子

平成14年度

埋蔵文化財センター所長 望月 守
管理部長 中田 清
管理部管理担当主任 桜井 恭子
主幹兼調査部長 大金 宣亮
大規模調査班班長 橋本 澄朗
北関東道路調査担当総括 藤田 典夫
主査 永岡 正美 主査 賀川 倫夫 主査 塚本 師也
主任 森口 尚志 主査 伸山 英樹 主査 西田 知生
主任 江原 英 主任 池田 敏宏 主任 田代 己佳
主任 安永 真一 主任 亀田 幸久 主任 塚田 浩久
主任 横田 桂 技師 安藤 美保 技師 合田恵美子
主事 吉村 英子
嘱託調査員 平山 紋子(7/1～3/31)
調査補助員 玉橋さやか 平山 紋子(4/1～6/30)

平成15年度

埋蔵文化財センター所長 篠原 洋
管理部長 中田 清
管理部管理担当主任 桜井 恭子
主幹兼調査部長兼大規模調査班班長 橋本 澄朗
北関東道路調査担当総括 藤田 典夫
主査 芹澤 清八 主査 賀川 倫夫 主査 塚本 師也
主査 森口 尚志 主査 鈴木 泰浩 主査 西田 知生
主任 池田 敏宏 主任 田代 己佳 主任 亀田 幸久
主任 横田 桂 技師 合田恵美子 主事 吉村 英子
嘱託調査員 平山 紋子(4/1～8/31)
調査補助員 玉橋さやか 鈴木 芳英
平山 紋子(9/1～3/31)

平成16年度

埋蔵文化財センター所長 篠原 洋
管理部長 大田原 博
管理部管理担当主任 桜井 恭子
主幹兼調査部長兼大規模調査班班長 橋本 澄朗
北関東道路調査担当係長 藤田 典夫
主査 芹澤 清八 主査 塚本 師也 主査 西田 知生
主査 中村 享史 主任 池田 敏宏 主任 田代 己佳
主任 横田 桂 主任 吉田 哲 技師 合田恵美子
調査補助員 玉橋さやか 平山 紋子 鈴木 芳英

平成20年度

埋蔵文化財センター所長 会沢 登
管理普及部長 安西 和雄
管理部管理担当主任 桜井 恭子
調査部長 川原 由典
北関東道路調査担当副主幹 藤田 典夫
主査 伸山 英樹 主査 篠原 浩恵 主査 田代 己佳
主査 池田 敏宏 主査 吉田 哲

第2節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

北関東自動車道（上三川～二宮）建設予定地内に所在する本報告書所収遺跡（柳林遺跡（仮称）・山王遺跡・原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎IV遺跡・伊勢崎III遺跡）の発掘調査は、調査対象区設定後に以下の手順で行った。

まず、試掘・確認調査により調査対象範囲の絞り込みを実施した。重機により幅1.5m～2.0mのトレーニングを設定して遺構確認を行ったが、設定基準は、調査年度・遺跡によって異なるため、経過と併せて後段にて詳述する。トレーニング配置図等は、日本測地系 平面直角座標第IX系を基準とし、平板測量にて作成した。

次に、遺構・遺物が確認された原北遺跡と伊勢崎III遺跡において本発掘調査（以下、「本調査」と呼称）を行った。重機を使用して遺構確認面までの表土除去作業を行い、その後、業者委託による基準杭建植を実施した。グリッド杭は平成14年4月に移行した世界測地系 平面直角座標第IX系を基準とし、調査区の形状に合わせて10m間隔に設定した。グリッドNo.は建植時の番号をそのまま用い、平面位置はx yの座標値にて把握した。

古墳時代以降の遺構確認作業は人力で行い、遺構番号は検出順に付し、並行して遺構配置略測図（S=1/200）を作成した。調査の過程により遺構認定しなかった場合は欠番としている。

竪穴住居跡の掘り下げは、十字に土層観察用のベルトを設定して行った。確認面でプランのはつきりしない住居跡については、このベルトに沿ってトレーニング状に試し掘りをし、床面と壁の立ち上がりを確認した後に埋土の掘り下げを行った。いずれも生活時の床面まで発掘（以下、「完掘」と呼称）した段階で平面図（S=1/20）を作成し、レベリングを行った。竪・炉は住居本体とは別に平面・断面の微細図（S=1/10）を作成した。貯蔵穴や柱穴、入口施設については半截し、断面図もしくはエレベーション図（S=1/20）を作成した。また、必要に応じて、掘方の発掘、平面図・エレベーション図（S=1/20）作成を行っている。

井戸跡・土坑・地下式壙は基本的に半截して、溝跡はベルトを設定して掘り下げ、断面図もしくはエレベーション図（S=1/20）を作成し、機能時の底面まで発掘（以下、「完掘」と呼称）した後に、平面図（S=1/20・1/40・1/80）作成を行った。井戸跡に関しては人力のほかに重機による截ち割り調査も併用して行っている。全ての遺構のベルトは、通路として使用したものを除き、断面図作成後に除去している。

出土した遺物は、床面直上、遺存状態良好、大型のものを優先し、遺物出土状況図（S=1/20）として図化した。破片は埋土一括としたが、竪穴住居跡の場合のみ、ベルトによって分けられた4つの区ごとに取り上げた。

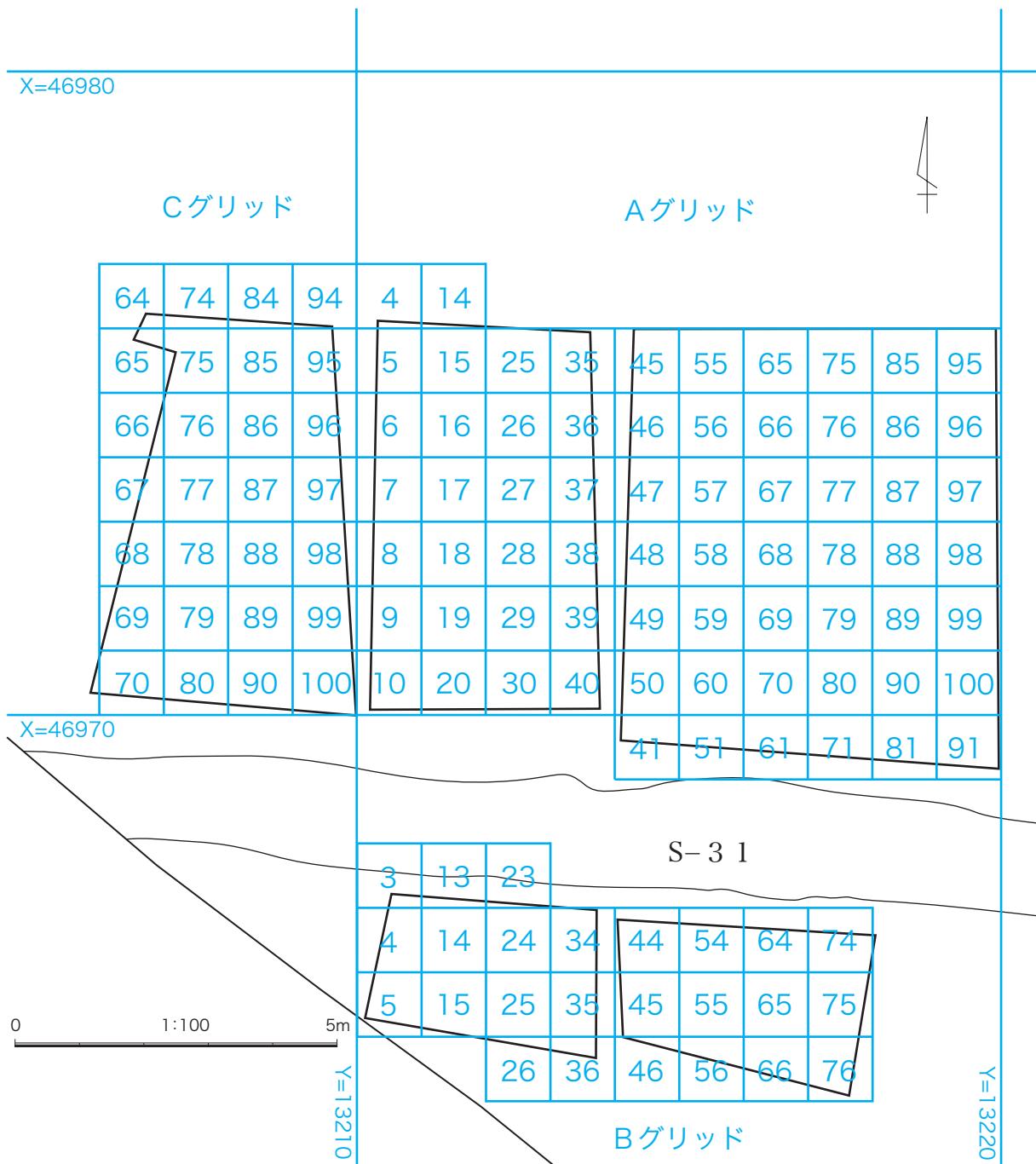
以上の方法は原則であり、遺構の性格、残存状況などを加味し適宜判断して変更し、最終的に遺構配置図（S=1/200）を作成した。また、調査区全体の地形測量も検討したが、後世の土地改良などにより台地部分の削平や谷部の埋没が激しく、住居などが営まれた当時の現況とは異なると判断し、レベリングのみを行い、等高線図の作成などは行わなかった。なお、図面作成方法として、平面図は平板測量もしくは水糸を用いた1m方眼のメッシュ設定にて、断面図・エレベーション図は水平に設定した水糸を基準に作成した。

旧石器時代の調査は、対象区内の古墳～平安時代などの遺構調査が終了してから行った。まず、AからCまで10m四方の大グリッドを設定し、遺物集中区を中心に東西・南北の基本層序観察用セクションを残して人力で掘り下げを行った。遺物は大グリッド内を更に1m四方に分割した小グリッドごとに平面・断面位置の座標値を記録して1から連番で取り上げた。小グリッドには北西から順に1から100をあてて、遺物出土箇所のみ、大グリッドのアルファベットと組み合わせて表記している（例 A-10）。石器集中区・礫群範囲の認定は、後日座標値から作成した図面上にて調査時所見や撮影写真資料などから、総合的に判断して行った。

なお、図示した調査区設定（第2図）は調査着手時のもので、進捗に合わせて適宜拡張・ベルト除去などを行つたため、調査終了時では変更がなされている。

遺構写真撮影は、35mmモノクロフィルムとリバーサルフィルムを用い、基本的に遺構確認状況・土層断面・遺物出土状況・完掘状況など、必要に応じて段階的に行った。航空写真撮影に関しては、すべての調査が終了してから、もしくは調査途中でも、各調査対象区の進捗に合わせて、業者委託により実施した。

また、調査状況に応じ、堆積土壌中の火山灰分析、出土旧石器石材の肉眼鑑定、旧石器に使用された黒曜石・ガラス質安山岩（考古学で用いられる黒色安山岩と同義）の産地同定などを目的として、業者委託により自然科学分析を実施した。



第2図 伊勢崎III遺跡 旧石器調査区グリッド表記概念図

(2) 試掘・確認調査の経過

試掘調査は平成12年度（柳林遺跡（仮称））、確認調査は平成14年度（山王遺跡・原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎IV遺跡・伊勢崎III遺跡）・平成16年度（山王遺跡）に実施された。山王遺跡のように複数年度にわたり調査した例もあるので、本項では遺跡ごとに掲載する。なお、所在調査などによる新規確認の埋蔵文化財包蔵地で行ったトレンチ調査を試掘調査、周知の埋蔵文化財包蔵地で行った場合を確認調査と区別している。

第2表 柳林遺跡（仮称）トレンチ概要

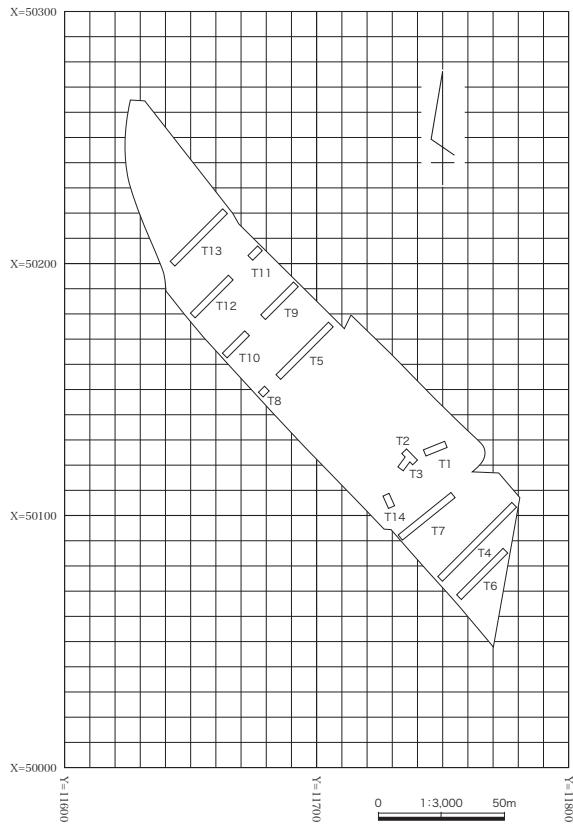
柳林遺跡（仮称）（第3図、第2表、図版一）

平成13年1月15日から31日にかけて試掘調査を実施した。調査対象面積9,200m²のうち約4.0%にあたる369m²を掘削した（第3図）。確認トレンチは、所在調査により確認した古墳の可能性がある高まり周辺に4本と、調査区長軸に直交するよう南西-北東方向に約20mおきに1.5mの幅で10本を設定し、重機によりローム上面まで掘削を行った。その結果、すべてのトレンチで遺構・遺物共に確認できなかった。トレンチ1～3・14では高まり部分の土質も非常に軟らかく、周溝も無いことから、古墳ではないと判断した。さらに、トレンチ12で旧石器時代遺構・遺物の確認を行ったが確認できず、これを受け対応を協議した結果、すべての調査が完了した。

山王遺跡（第4図、第3表、図版一）

平成14年度は、平成14年9月9日から30日にかけて確認調査を実施した。調査対象面積4,680m²（調査区北側）のうち約8.2%にあたる386m²を掘削した（第4図）。確認トレンチは、地形の傾斜に直交するよう南南西-北北東方向に約10mから20mおきに2.0mの幅で5本を設定し、重機により旧地形の把握などのため部分的に鹿沼軽石層まで掘り下げた。トレンチ1～4からは遺構・遺物共に確認できず、周辺は階段状に土地改良したことが判った。段直上は盛り土をし、段直下はローム層（黒色帶）まで削平している。トレンチ5からは、鹿沼軽石層上面から掘り込まれた直径約20cmの小穴状の落ち込み2基が確認された。小穴の壁は直線的に立ち上がり、人為的な遺構の

トレンチNo	幅(m)	長(m)	面積(m ²)	調査結果
トレンチ1	1.5	9.0	13.5	遺構・遺物なし
トレンチ2	1.5	6.0	9.0	遺構・遺物なし
トレンチ3	1.5	5.0	7.5	遺構・遺物なし
トレンチ4	1.5	45.0	67.5	遺構・遺物なし
トレンチ5	1.5	31.0	46.5	遺構・遺物なし
トレンチ6	1.5	26.0	39.0	遺構・遺物なし
トレンチ7	1.5	27.0	40.5	遺構・遺物なし
トレンチ8	1.5	3.0	4.5	遺構・遺物なし
トレンチ9	1.5	18.0	27.0	遺構・遺物なし
トレンチ10	1.5	13.0	19.5	遺構・遺物なし
トレンチ11	1.5	6.0	9.0	遺構・遺物なし
トレンチ12	1.5	22.0	33.0	遺構・遺物なし
トレンチ13	1.5	30.0	45.0	遺構・遺物なし
トレンチ14	1.5	5.0	7.5	遺構・遺物なし



第3図 柳林遺跡（仮称）トレンチ配置図

可能性があったが、県文化財課からの指導や県立博物館の観察所見から、広く学識者の視察を受けて検討することが望ましいとし、今年度は引き続き截ち割り調査を実施しないで該当箇所にブルーシートを被せたまま埋め戻した。

平成16年度は、平成17年3月1日から31日にかけて確認調査を実施した。調査対象面積6,320m²（調査区南側）のうち10%にあたる632m²と平成14年度調査の小穴確認部分を掘削した（第4図）。確認トレンチ6～12は、調査区長軸に平行するよう南北方向に5本、地割りを利用して東西方向に2本を約10mおきに2.0mの幅で設定し、重機によってローム層上部まで掘削を行った。その結果、7本すべてのトレンチで遺構・遺物共に確認できなかった。人為的な遺構と考えた小穴2基は、さらに截ち割り調査を実施したところ、壁の立ち上がりが曲線的となっており、自然の營力によるものと確認できた。調査箇所を南東側に拡張して新たに確認された小穴状の落ち込みも壁が曲線的となっており、同様に人為的な遺構ではないことが確認できた。

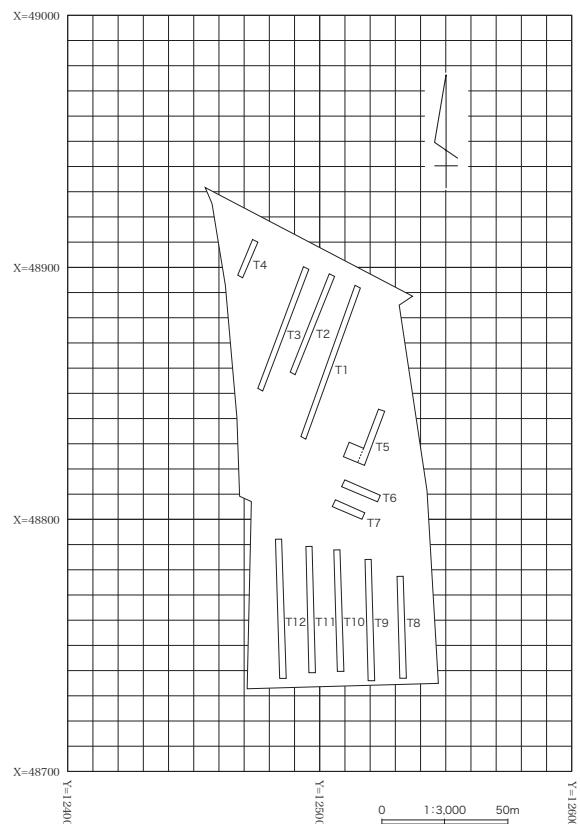
最終的に全体対象面積11,000m²のうち1,018m²（約9.2%）を掘削したが、遺構・遺物共に確認できず、調査完了となった。

原北遺跡（第5図、第4表、図版二）

平成14年8月2日から22日にかけて確認調査を実施した。調査対象面積5,900m²のうち約9.7%にあたる570m²を掘削した（第5図）。確認トレンチは、調査区長軸に平行するよう北西-南東方向方向に5本を、約10mから20mおきに2.0mの幅で設定し、重機によって掘削を行った。トレンチ1・2からは、薬研堀状で中世と考えられる溝跡が2条確認された。トレンチ3～5を設定した市道より南東側の調査区からは、時期不明の土器小片が僅かに出土したが、遺構は確認できなかつた。また、トレンチ3・4の大部分は鹿沼軽石層まで削平されていた。これを受け対応を協

第3表 山王遺跡 トレンチ概要

トレンチNo	幅(m)	長(m)	面積(m ²)	調査結果
トレンチ1	2.0	64.0	128.0	遺構・遺物なし
トレンチ2	2.0	42.0	84.0	遺構・遺物なし
トレンチ3	2.0	49.0	98.0	遺構・遺物なし
トレンチ4	2.0	16.0	32.0	遺構・遺物なし
トレンチ5 (拡張)	2.0 8.8	22.0 9.5	44.0 83.6	鹿沼軽石層中の小穴2基 遺構ではない・遺物なし
トレンチ6	2.0	15.3	30.6	遺構・遺物なし
トレンチ7	2.0	12.0	24.0	遺構・遺物なし
トレンチ8	2.0	50.3	100.6	遺構・遺物なし
トレンチ9	2.0	49.0	98.0	遺構・遺物なし
トレンチ10	2.0	48.9	97.8	遺構・遺物なし
トレンチ11	2.0	49.0	98.0	遺構・遺物なし
トレンチ12	2.0	49.7	99.4	遺構・遺物なし



第4図 山王遺跡 トレンチ配置図

第4表 原北遺跡 トレンチ概要

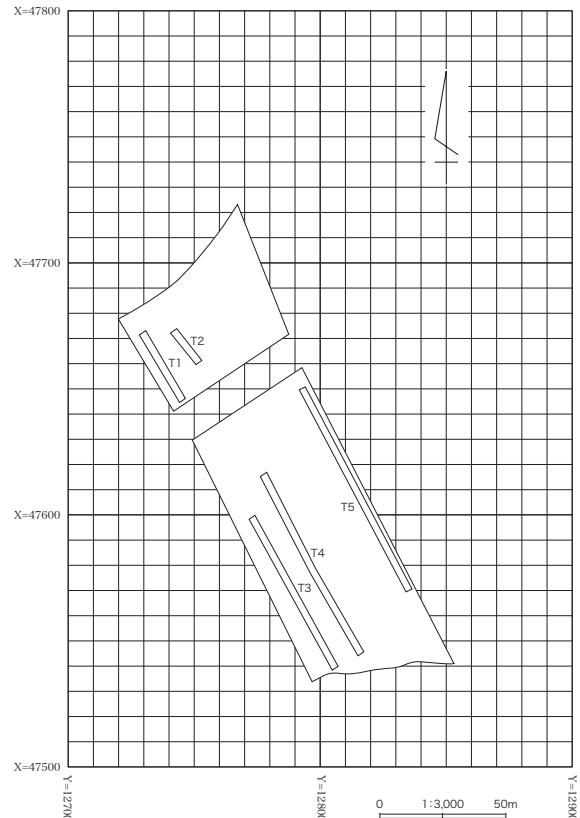
トレンチNo	幅(m)	長(m)	面積(m ²)	調査結果
トレンチ1	2.0	34.0	68.0	溝跡2条
トレンチ2	2.0	16.0	32.0	溝跡2条
トレンチ3	2.0	85.0	170.0	遺構・遺物なし
トレンチ4	2.0	80.0	160.0	時期不明土器小破片数点
トレンチ5	2.0	70.0	140.0	遺構・遺物なし

議した結果、溝跡が2条、台地縁辺に沿って伸びていると考えられる北西側の調査区を対象に本調査を実施することとなった。

茅堤北遺跡（第6図、第5表、巻頭図版一、図版三）

平成14年8月26・27日と9月3・4日に確

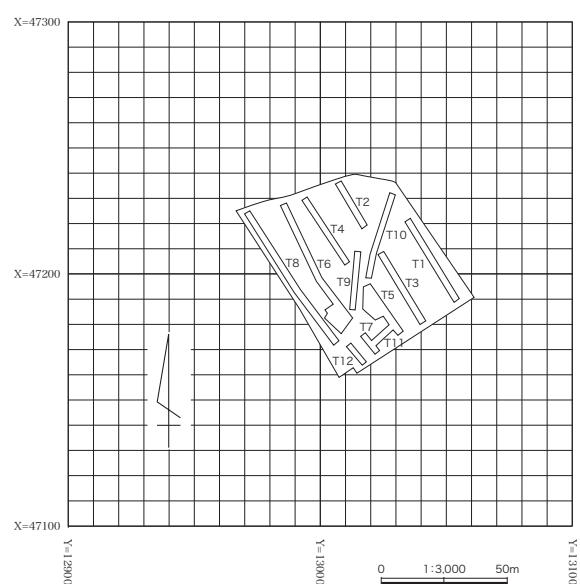
認調査を実施した。調査対象面積3,300m²のうち約24.4%にあたる804m²を掘削した（第6図）。確認トレンチは、まず、調査範囲を南北に横切る山道を分断しないよう、両側に路線に沿って北西-南東方向に約10mおきに2.0mの幅で計8本を設定し、重機によってローム上面まで掘り下げた。この結果、トレンチ8から薬研堀状で中世と考えられる溝跡が確認されたので、路線内でどのような方向に伸びるかを確認するべく、トレンチ5・6の部分的な拡張、新規トレンチ7～12の掘削を行った。溝跡は、東西方向に伸び、途中北東方向と南東方向に分岐し、共に埋没谷に至って消滅することが判った。なお、溝跡以外に遺構は確認できず、遺物は全く確認できなかった。これを受けて現地にて県文化財課と対応を協議した結果、調査区ほぼ全面に確認トレンチが入っており、遺構がこれ以上広がる可能性は低いと判断し、トレンチ範囲内ののみの追加調査を行い、本調査は実施しないこととし、すべての調査を完了した。



第5図 原北遺跡 トレンチ配置図

第5表 茅堤北遺跡 トレンチ概要

トレンチNo	幅(m)	長(m)	面積(m ²)	調査結果
トレンチ1	2.0	38.0	76.0	遺構・遺物なし
トレンチ2	2.0	20.0	40.0	遺構・遺物なし
トレンチ3	2.0	33.0	66.0	遺構・遺物なし
トレンチ4	2.0	32.0	64.0	遺構・遺物なし
トレンチ5 (拡張)	2.0	22.0	44.0	深掘土層断面に溝跡確認
	4.0	12.0	48.0	
トレンチ6 (拡張)	2.0	52.0	104.0	溝跡
	5.0	12.4	62.0	東端分岐状況確認
トレンチ7	2.0	8.0	16.0	遺構・遺物なし
トレンチ8	2.0	64.0	128.0	溝跡
トレンチ9	2.0	24.0	48.0	溝跡
トレンチ10	2.0	35.0	70.0	遺構・遺物なし
トレンチ11	2.0	9.0	18.0	遺構・遺物なし
トレンチ12	2.0	10.0	20.0	遺構・遺物なし



第6図 茅堤北遺跡 トレンチ配置図

伊勢崎IV遺跡（第7図、第6表、図版四）

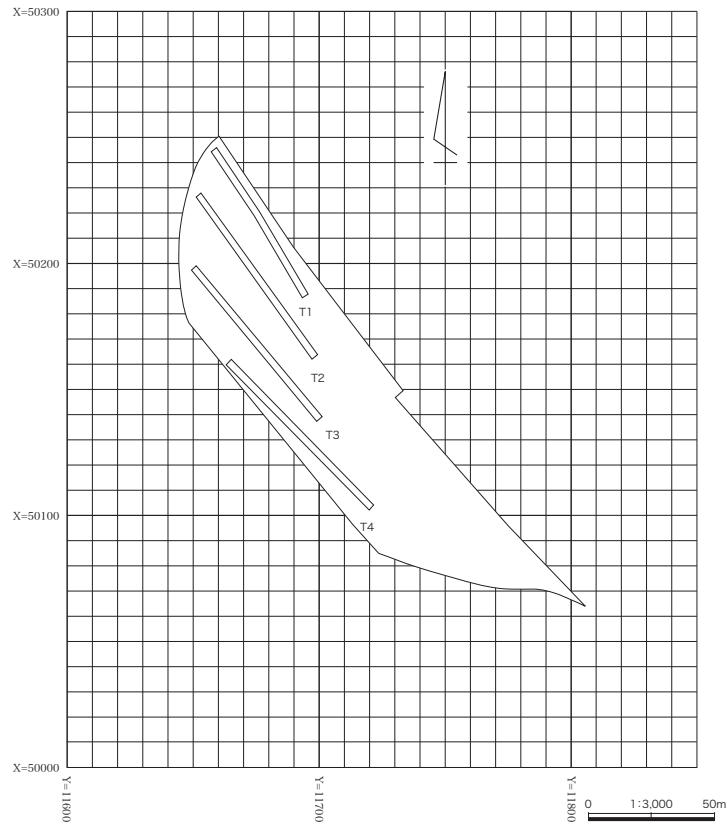
平成14年8月28日から30日にかけて確認調査を実施した。調査対象面積7,900m²のうち約7.8%にあたる620m²を掘削した（第7図）。確認トレンチは、調査区長軸に平行するよう北西-南東方向方向に4本を、約10mおきに2.0mの幅で設定し、重機によってローム上面まで掘削を行った。この結果、トレンチ1・4から縄文土器片一点と時期不明の土器小破片数点が出土したが、遺構は確認できず、これを受けて対応を協議した結果、すべての調査が完了となった。

伊勢崎III遺跡（第8図、第7表、図版四）

平成14年9月2日から10日にかけて確認調査を実施した。収容が完了した県道八木岡・下江連・下館線の北側に隣接する部分を対象に、2,700m²のうち約15.0%にあたる404m²を掘削した（第8図）。確認トレンチは、調査区長軸に平行するよう北西-南東方向方向に4本を、県道に平行するよう東西方向に2本を、約10mから20mおきに2.0mの幅で設定し、重機によってローム上面まで掘削を行った。この結果、トレンチ2を除き遺構を確認することができた。ただし、トレンチ1～4を設定した水田部分は土地改良によりハードローム層中位まで大きく削平を受け、確認できた遺構である溝跡1条、小ピット5基はいずれも近現代のものと思われ、遺物も確認することができなかった。畑部分はゴボウ耕作時のトレンチャによる攪乱が激しいものの、トレンチ4・5において地下式壙・溝跡などを確認することができ、それに伴う中世常滑大甕の破片も出土した。これを受け対応を協議した結果、今回対象区のうちトレンチ4・5を入れた畑部分において、本調査を実施することとなった。また、県道南側部分も収用が完了次第、併せて調査する運びとなった。

第6表 伊勢崎IV遺跡 トレンチ概要

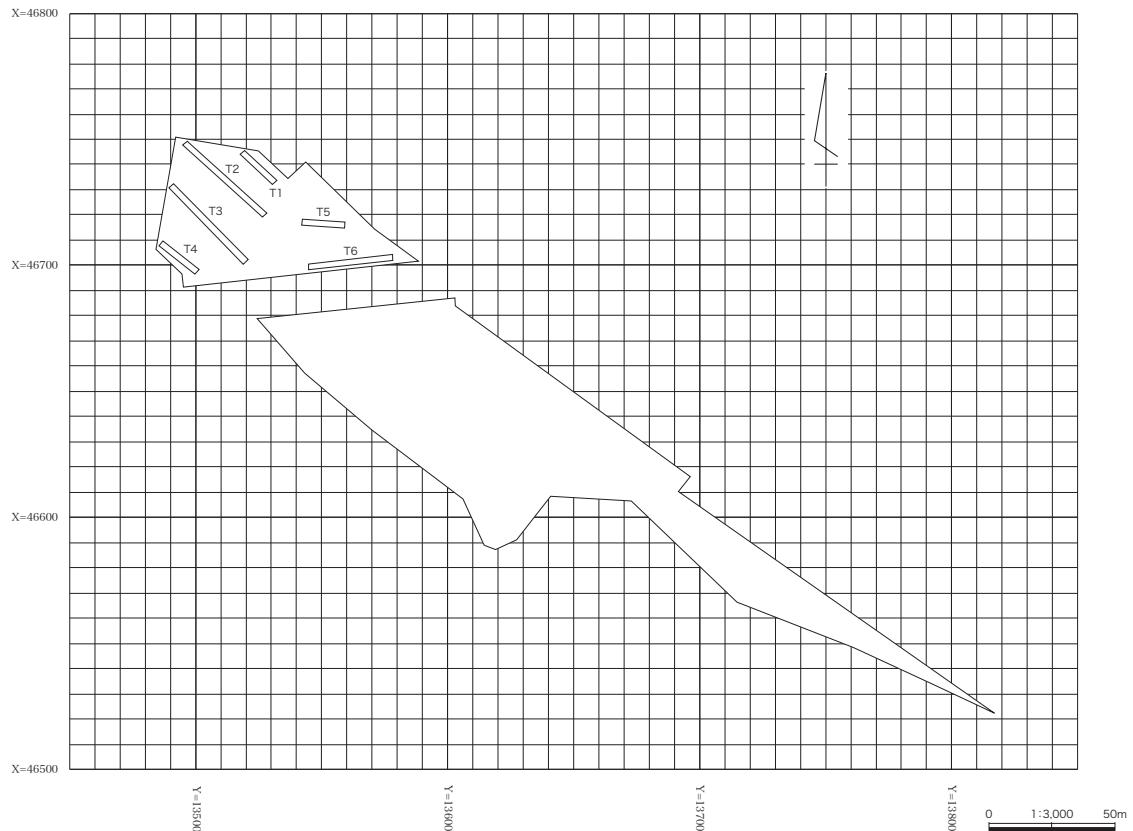
トレンチNo	幅(m)	長(m)	面積(m ²)	調査結果
トレンチ1	2.0	70.0	140.0	縄文土器片
トレンチ2	2.0	80.0	160.0	遺構・遺物なし
トレンチ3	2.0	78.0	156.0	時期不明土器小破片数点
トレンチ4	2.0	82.0	164.0	遺構・遺物なし



第7図 伊勢崎IV遺跡 トレンチ配置図

第7表 伊勢崎III遺跡 トレンチ概要

トレンチNo	幅(m)	長(m)	面積(m ²)	調査結果
トレンチ1	2.0	45.0	90.0	小ピット2基
トレンチ2	2.0	45.0	90.0	遺構・遺物なし
トレンチ3	2.0	43.0	86.0	小ピット2基
トレンチ4	2.0	19.0	38.0	溝跡1条、小ピット1基
トレンチ5	2.0	16.0	32.0	地下式壙1基、小ピット1基
トレンチ6	2.0	34.0	68.0	溝跡1条、小ピット1基



第8図 伊勢崎III遺跡 トレンチ配置図

(3) 本調査の経過

確認調査の結果を受けて対応を協議した結果、原北遺跡と伊勢崎III遺跡において本調査を実施することとなった。発掘調査は、平成15年4月から11月まで断続的に両遺跡を併行して行ったが、以下、調査の概要、および発掘日誌抄の順に、経過について遺跡ごとに掲載する。

原北遺跡（第9図、巻頭図版一、図版二）

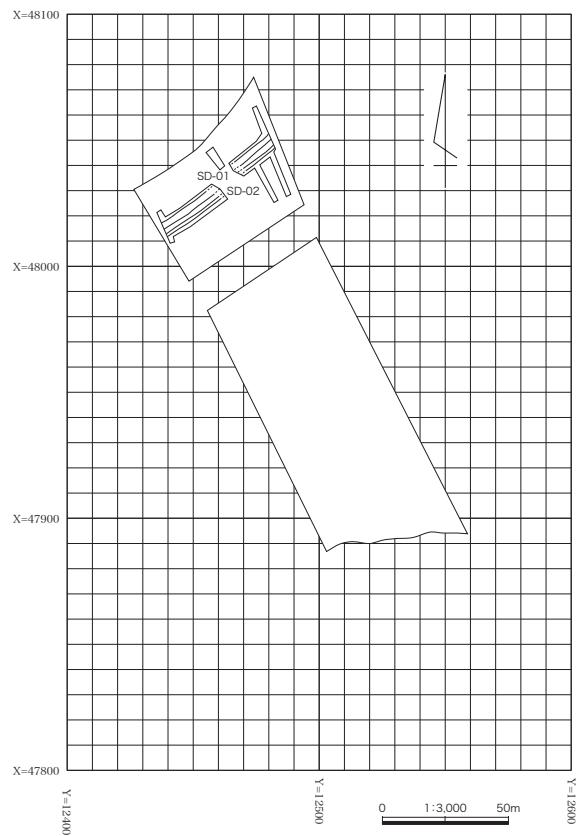
調査対象区面積6,600m²のうち、確認調査溝跡2条が発見された北西側調査区1,500m²の本調査を行った。その結果、溝跡は2条とも並行して台地縁辺部に沿って伸びることが確認された。

平成15年7月1日～24日 発掘調査準備

7月25日・8月5日 除草作業

7月28日～8月1日 重機による表土除去作業

8月1日 現場テント設営



第9図 原北遺跡 遺構配置図

第1章 調査の経緯

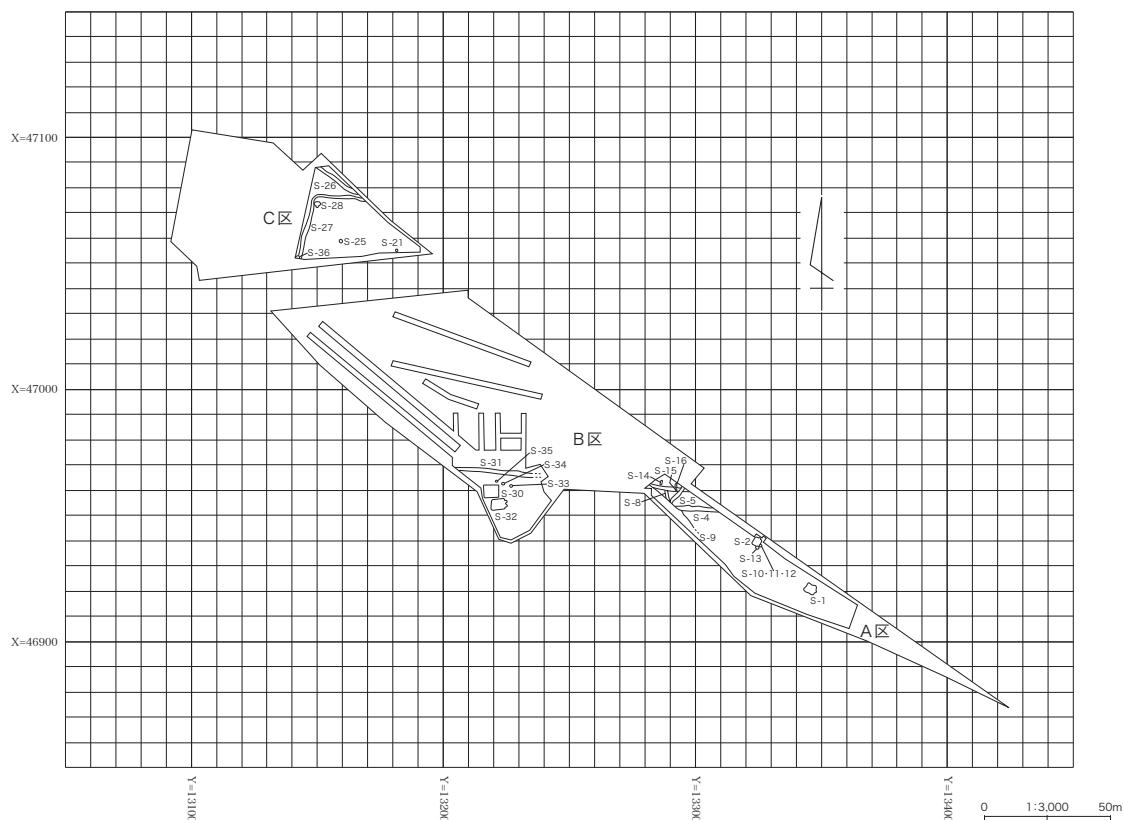
8月1日・4日	遺構確認作業、遺構配置略測図作成
8月8日～9月5日	遺構掘り下げ、実測図作成
9月2日～4日	遺構写真撮影
9月8日	航空写真撮影準備
9月9日	航空写真撮影
11月13日	重機による調査区埋め戻し作業

伊勢崎III遺跡（第10図、巻頭図版一・二、図版五～三〇）

調査対象面積 10,500 m²のうち、8,100 m²の本調査を行った。既に遺構の存在を確認している北側調査区（C区）は全面表土除去、南側調査区（A・B区）においては確認トレンチを入れて遺構が確認された部分を拡張する方式で調査を進めた。その結果、旧石器集中地点6基・礫群5基・竪穴住居跡4軒・井戸跡3基・溝跡8条・土坑10基・地下式壙1基が発見された。

平成15年4月1日～3日 発掘調査準備

4月4日	調査区の状況調査
4月11日	日本道路公団宇都宮工事事務所にて道路公団と協議
4月21日～25日	重機によるA・B区試掘トレンチ掘削、C区表土除去作業
5月1日	日本道路公団宇都宮工事事務所にて道路公団と協議
5月6日～8日	重機によるA・B区表土除去作業



第10図 伊勢崎III遺跡 遺構配置図

5月 12日	現場事務所設営
5月 13日・14日	A区遺構確認作業
5月 20日～7月 15日	A区遺構掘り下げ、実測図作成、遺構写真撮影
5月 21日	基準杭建植
5月 23日	B区遺構確認作業、A・B区遺構配置略測図作成
6月 9日～16日	C区遺構確認作業、C区遺構配置略測図作成
6月 18日～7月 23日	C区遺構掘り下げ、実測図作成、遺構写真撮影
6月 19日	B区除草作業
6月 23日～9月 30日	B区遺構掘り下げ、実測図作成、遺構写真撮影
9月 4日～8日	航空写真撮影準備
9月 9日	航空写真撮影
9月 29日	重機による基本層序観察トレーニング
11月 10日～12日	重機による井戸跡截ち割り調査、調査区埋め戻し作業

(4) 整理作業・報告書作成の経過

発掘調査で記録された情報は、本報告書所収の全遺跡を併せて遺構図面90枚、35mmモノクロフィルム36枚撮り34本、35mmリバーサルフィルム36枚撮り35本、航空写真1式、遺物収納箱22箱分の旧石器・土師器・須恵器を中心とする出土遺物である。これらの整理作業・報告書作成は平成20年度に埋蔵文化財センターで行った。また、遺物洗浄・写真整理・図面修正などは、発掘調査の進捗に併せて隨時行っている。以下、作業内容の経過を掲載する。なお、平成21年3月の本報告書をもって、北関東自動車道建設に伴う柳林遺跡(仮称)・山王遺跡・原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎IV遺跡・伊勢崎III遺跡の発掘調査はすべて終了した。

平成20年4月1日・2日	整理室準備、遺物・記録類搬入
4月3日～5月2日	遺物洗浄・乾燥・注記作業
5月7日～7月4日	遺物接合・復元・選別
5月12日～7月4日	写真整理、図面修正
5月29日～12月5日	遺物実測
6月26日～12月12日	遺構・遺物図面トレース
7月7日～12月24日	遺構・遺物図版作成
7月28日～11月14日	作表
8月4日～平成21年1月16日	原稿執筆
10月7日～平成21年1月16日	コンピュータートレース
11月5日～12月26日	出土旧石器石材肉眼鑑定
11月11日・12月5日	遺物写真撮影
12月1日～12月22日	写真図版作成
12月9日～1月9日	出土旧石器石材産地同定
平成21年1月19日～3月19日	報告書校正・印刷
3月23日～3月31日	遺物・記録類収納



遺物復元



コンピュータートレース

第2章 遺跡の環境

第1節 周辺の地形

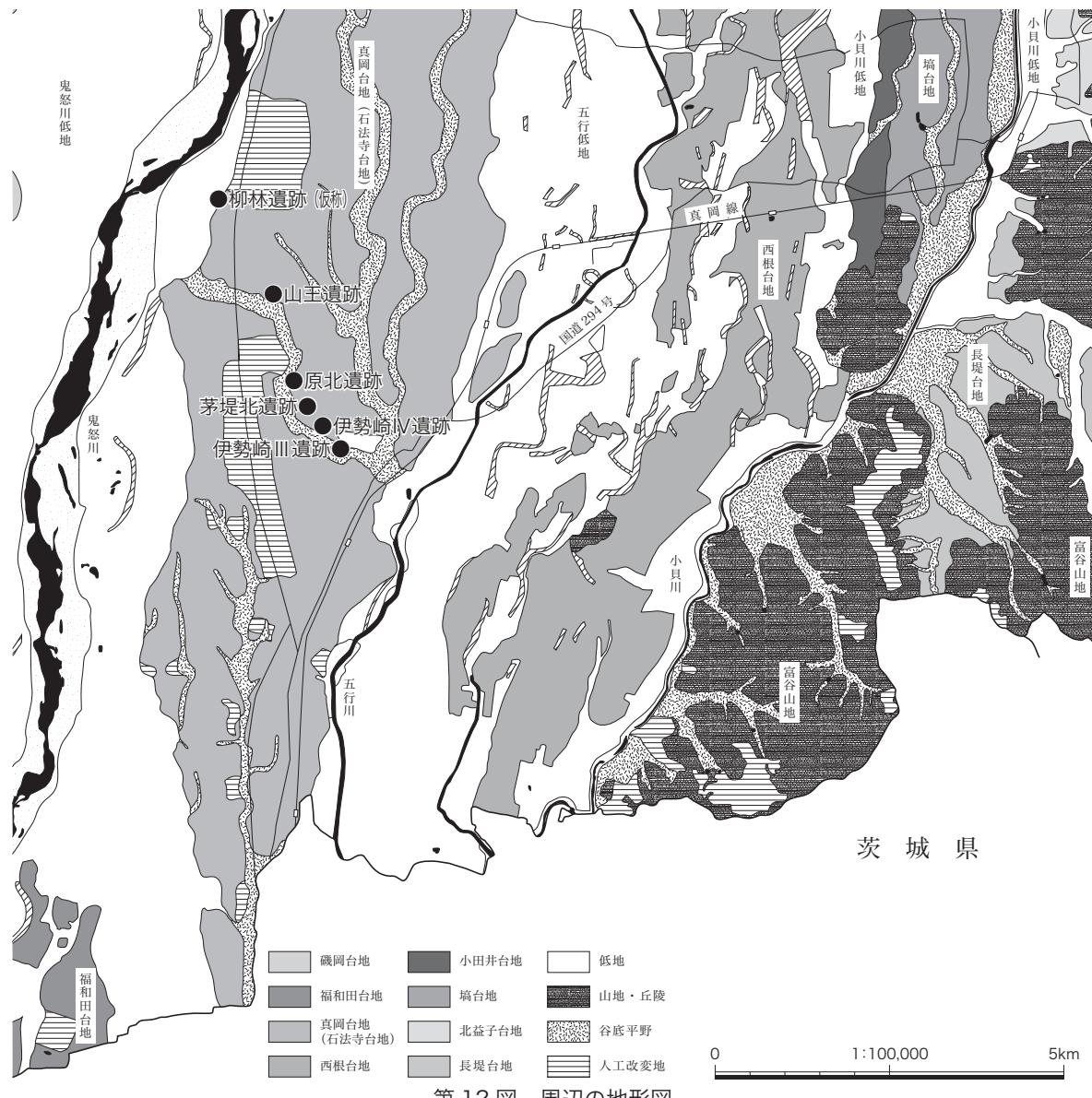
栃木県は、関東地方北部中央に位置する内陸県である。東に茨城県、西に群馬県、南に茨城県・埼玉県・群馬県、北に福島県が隣接する。県域の広がりは、東西約75km・南北約98km、面積約6,414km²で、平面形は南北にやや長い楕円形である。地形は、東部山地と西部山地、およびその間を南北に展開する中央部平地の三つに大別できる。東部山地は、茨城県境を南北に走る八溝山地を指し、北から八溝山塊・鷺子（とりのこ）山塊・鶏足山塊続き茨城県の筑波山塊へと至る。北方の八溝山（1,022m）が最も高く、山頂高度は南方に行くに従い低くなる。山は全体的に丸みを帯びるものが多く、那珂川等の浸食による小谷の発達が著しい。

西部山地は、福島県境から群馬県境にかけて南北に走る、北部の帝釈山地と南部の足尾山地からなる。帝釈山地は、主峰の帝釈山（2,066m）をはじめ、2,000m級の山岳からなり、群馬県境の白根山（2,578m）は関東以北の最高峰である。概して山は険しく、山地を刻む谷は深い。また、この帝釈山地の東部から南部にかけては、那須火山群・高原火山群・日光火山群が分布しており、那須・塩原・鬼怒川・川治など多数の温泉や、那須（茶臼）岳（1,917m）・男体山（2,484m）・中禅寺湖などの変化に富む景勝の地とみなされている。足尾山地は、北境を大谷川によって画され、南方と東方は関東平野に臨んでいる。概して山腹は急傾斜であるが、山麓は穏やかに傾斜しており、八溝山地と同様、山頂高度は南方に行くに従って低くなっている。

中央部平地は、丘陵・台地・平地からなり、全体として南方に開けた地形である。平地北部は那珂川とその支流域に含まれ、北から高久丘陵・那須扇状地・塩那丘陵と並んでいる。高久（白川）丘陵は、那須岳東麓から八溝山地西麓までの区域で、火山性堆積物によって構成される。その南に位置する木の葉状の那須扇状地は、那須野ヶ原とも呼ばれ、水利に乏しい地域で、明治時代に入るまで荒漠たる荒野であった。塩那（喜連川）丘陵は、簗川の南に展開し、高原火山群の山麓から益子まで及び、北西から南東方向にかけて緩やかな山容を見せている。平地中部・南部は、大谷川下流部の旧今市市街地付近に広がる今市扇状地、古賀志山地から宇都宮市街地にかけて発達している宇都宮丘陵、五行川・小貝川・鬼怒川等の支流域に沿って、宝木段丘・田原段丘・鬼怒川低地・宝積寺段丘等が交互に並ぶ沖積平野、渡良瀬川と思川の付近の低地などに大別される。これらの台地と低地は緩やかに南傾するが、台地の



第11図 栃木県行政界図



傾きが低地よりも大きいため、南下するに従い、台地と低地の比高差は小さくなる。また、中央部平地は南に開けるだけではなく、福島県中通りへと続く地形的特徴のため、東北地方への通路としての役割も古来果たしてきた

真岡市は、県の南東部に位置し、芳賀郡の中核をなす都市である。東に益子町・茨城県桜川町、南に二宮町、西に上三川町、北に宇都宮市・芳賀町・市貝町が接する。市域の大きさは、東西約13km・南北約14km、面積約112km²で、平面形は蝶が羽を広げたような形をしている。

地形的には、八溝山地に属する鶴足山塊の一部である東部の山地、鬼怒川左岸低地に並行して南北に走る真岡台地（宝積寺段丘）を主とする西部の台地、そして、中央部の五行川低地に大別される。南東端部を除けば、全体的に、南北方向に走る平坦な台地と低地が連続する地勢である。また、真岡台地の西縁から五行川低地にかけては、樹枝状に発達した細長い台地が、北西から南東方向に広がっている。主要河川としては、南東部を小貝川、中央部を五行川、西端を鬼怒川が、ほぼ並行するように南流している。

小貝川は、那須烏山市反畑に源流を発し、芳賀郡の中央部を南流する河川である。当市域へは益子町から

流入し、鶴足山塊の西麓と、塩那（喜連川）丘陵から連なる祖母井（うばがい）台地との間を北東から南西方向へ流下する。その後、二宮町を経て茨城県筑西市にて五行川と合流し、取手市で利根川に流れ込んでいる。また、鬼怒川の伏流水を集めるため流量が多く、中流・下流域沿岸部に洪水被害が出やすい河川である。

五行川は、さくら市長久保に源流を発し、高根沢町・芳賀町をほぼ南流し、当市域へは北部から流れ込んでいる。市域中央部の真岡台地（宝積寺段丘）と祖母井台地との間を北東から南西方向に蛇行しながら流下し、二宮町に至る。その後、茨城県筑西市で小貝川に合わさり、利根川に入る。また、豊富な水量から県内きつての穀倉地帯であるさくら市・高根沢町・芳賀町などで、全域にわたって農業用水として利用されている。

鬼怒川は、日光市鬼怒沼を源流とする本県最大の河川である。鬼怒沼の伏流水と、帝釈山地・日光火山群からの水を集めて東流し、川治温泉川治において南流する。そして、同市高徳にて大谷川等を合わせて再び東流し、上三川町付近に至り徐々に南に向きを変え、県央部を広大な氾濫源を従え流下する。その後、茨城県常総市を経て守谷市で利根川に流れ込んでいる。当市域西部においては、岡本台地と真岡台地（宝積寺段丘）との間に、幅約3～4kmの沖積低地を形成している。

次に、各遺跡の所在する地域について、その位置や沿革を大字ごとに詳述する。

柳林遺跡（仮称）は、市域西端部の大字柳林と亀山にまたがって位置する。柳林は、近世において鬼怒川の水運を利用した河岸が発達した。中村氏領をはじめとし、結城氏領・麻生藩領・宇都宮藩領・幕府領を経て、幕府・大森氏・宇都宮藩・一橋家などの相給となる。明治22年に中村、昭和29年3月真岡町、同年10月からは真岡市の大字となり、現在に至る。亀山は、近世において、中村氏領をはじめとし、結城氏領・幕府領・宇都宮藩領などを経て、幕府・常陸笠間藩・烏山藩・陸奥磐城平藩などの相給となる。明治22年に真岡町、昭和29年からは真岡市の大字となり、現在に至る。

山王遺跡は、市域中央部の長田に位置する。近世において、中村氏領をはじめとし、結城氏領・宇都宮藩領を経て、幕府・宇都宮藩・旗本野村氏・烏山藩などの相給となる。明治22年に中村、昭和29年3月真岡町、同年10月からは真岡市の大字となり、現在に至る。

原北遺跡・茅堤北遺跡は、市域南部の大字西高間木に位置する。近世において、宇都宮氏家臣中村氏領をはじめとし、下総結城氏領・常陸麻生藩領・宇都宮藩領などを経て、旗本大森氏知行地となる。明治22年に真岡町、昭和29年からは真岡市の大字となり、現在に至る。

伊勢崎IV・III遺跡は、市域南部の大字伊勢崎に位置する。近世では、伊勢新田とも称し、伊勢嵩とも書く新規開発の村である。宇都宮藩領をはじめとし、幕府領、幕府・上野館林藩領の相給などを経て再び幕府領となる。明治22年に中村、昭和29年3月真岡町、同年10月からは真岡市の大字となり、現在に至る。

参考文献

- 阿久津純 1976 「栃木県の地形・地質（県中北部を中心に）」『栃木県史』資料編 考古1 栃木県史編さん委員会
「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1984 『角川日本地名大辞典 9 栃木県』角川書店
塙 静夫 1984 「解説」『真岡市史』第一巻 考古資料編 真岡市史編さん委員会
1984 『真岡市史』第二巻 古代中世資料編 真岡市史編さん委員会
栃木県企画部土地対策課 1984 『土地分類基本調査 壬生』
下中直也 1988 『栃木県の地名』日本歴史地名大系第九巻 平凡社
栃木県企画部資源対策課 1990 『土地分類基本調査 真岡』
国土庁土地局国土調査課 1991 『土地分類図09（栃木県）1974』復刻版財團法人日本地図センター

第2節 周辺の遺跡

旧石器時代

真岡市街地から南南東方向に約3km離れた独立丘陵上に位置する磯山遺跡(50)は、本県における旧石器時代の本格的な発掘調査の出発点とも言える遺跡である。発掘調査は、昭和36・37年に東北大学考古学研究室、昭和48年に栃木県史編さん室原始部会が実施しており、遺跡は暗色帶上部からナイフ形石器・台形様石器・彫刻刀形石器等が出土している。

しかし、周辺地域に目を向けると、発掘調査された遺跡は決して多くはない。発掘調査に伴うものの、遺跡出土層位が未確認の遺跡は、内野(旧称・宇都宮大学農学部付属農場内)遺跡(10)、大曲北遺跡(31)が挙げられ、出土層位の確認された事例となると、当センター調査の伊勢崎II遺跡(28)と更に限定される。特に、伊勢崎II遺跡は、伊勢崎III遺跡(5)と隣接しており、文化層や石器石材の類似性などから同一共同体としての可能性が考えられる。また、表面採集の遺物等によって旧石器時代の存在を周知された遺跡としては、八木岡遺跡(30)、城内遺跡(41)、山崎台遺跡(67)、南高岡遺跡(68)、猿山遺跡(75)等が該当する。

縄文時代

真岡市の縄文時代遺跡で、発掘調査を伴うものは少ない。遺構の確認された事例となると僅かである。早期から晩期まで連綿と続く縄文時代の存在が明らかになったのは、真岡市史編さん事業による綿密な表面採集・既収集資料の紹介等によるところが非常に大きい。

発掘調査を行った遺跡としては、昭和45年に栃木県史編さん室調査の柳久保遺跡(55)、昭和51・52年に真岡市教育委員会が調査し、草創期の微隆起線文土器が出土した稻荷山遺跡(29)、昭和57年に真岡市史編さん事業の一環として調査し、墳丘・周溝内ではあるが、前期後半のまとまった資料の出土した山崎遺跡(57)、昭和58年に宇都宮大学考古学研究会調査の内野遺跡、昭和50年代後半、立会調査で中期の袋状土坑3基が確認された熊倉A遺跡(38)、平成9年度調査の伊勢崎II遺跡が挙げられる。また、遺物の採集等によって縄文時代の存在が明らかになった遺跡を以下列挙しておく。塚原遺跡(8)、井頭遺跡(11)、於宮遺跡(26)、丸山遺跡(33)、城内北A遺跡(39)、城内北B遺跡(40)、城内遺跡、城内東遺跡(42)、萩田遺跡(43)、磯山遺跡、山崎台遺跡、竹内遺跡(72)等が該当する。

弥生時代

当地域における弥生時代遺跡の大半は、後期のものである。特に小貝川流域に集中して分布しており、独立丘陵もしくは丘陵先端部にまとまって立地している例が多い。真岡市街地から東方向に約4.5kmにある小貝川右岸の独立丘陵である根本山には、柳久保遺跡を始め、山崎遺跡、能仁寺西遺跡(59)、が所在している。柳久保遺跡では、竪穴住居5軒を確認し、弥生土器は付加条縄文を施す二軒屋式が主体であった。五行川流域に目を向けると、前述の井頭遺跡や稻荷山遺跡も後期の遺跡として所在している。井頭遺跡からは竪穴住居跡5軒、稻荷山遺跡では竪穴住居跡1軒を確認している。どちらも二軒屋式主体であるが、一部十王台式を伴っている。伊勢崎II遺跡でも時期についての問題は残るが、竪穴住居跡2軒を確認している。

古墳時代

前期古墳は、山崎古墳群(58)内の山崎第1号墳、芳賀町亀の子塚古墳(77)などの前方後円墳が挙げられ、

稻荷山遺跡では、方形周溝墓5基が確認されている。同時期の集落遺跡としては、S字状口縁台付甕がまとまって出土したことで知られる芳賀町谷近台遺跡（76）のほか、井頭遺跡、伊勢崎II遺跡、亀山北遺跡（15）などが該当し、伊勢崎III遺跡との関連も考えられる。瓢箪塚古墳（27）は芳賀郡内最大の前方後円墳で、未発掘ではあるが5世紀後半から6世紀初め頃と考えられている。埴輪を伴う古墳としては、京泉シトミ原古墳群（46）の13号墳である鶏塚古墳（48）、亀山大塚古墳群内の亀山大塚古墳（13）が有名である。両者とも円墳で、前者からは、鶏形埴輪・上半身と下半身を別に作って組み合わせた大型の武人埴輪・女子人物埴輪等、後者からは、胡座する男子像・女子人物埴輪等、数多くの優れた形象埴輪等が出土している。古墳ごとに人物埴輪の表情が著しく異なることについては、埴輪製作者の相違か、時期差なのか意見が分かれるが、亀山大塚古墳の方がやや後出するようである。

奈良・平安時代

古代下野国九郡のうち、鬼怒川西方の芳賀郡と那珂川流域の那須郡は上郡であり、国府所在郡の都賀郡と河内郡が中郡、足利、安蘇、塩谷の三郡は下郡、梁田、寒川は小郡であった。芳賀郡は十四郷を管掌し、東と南の境界は常陸国の那賀郡、新治郡の郡界と接していた。7世紀代の後半には既に立評されていたり、藤原宮跡からは「下毛國芳宜評口×」と墨書きされた木簡が発見されている。この郡の古代の主要な遺跡は、西の宝積寺台地と東の稻毛田台地、およびその中央を南流する五行川、これに流入する野元川の流域に発見されており、稻毛田台地の東縁を流れる小貝川の流域を含めれば、おおよその古代の状況が把握できる。

鬼怒川の西、宝積寺台地上からは、芳賀郡の郡衙と氏寺（郡寺）に比定される堂法田遺跡（47）と大内廃寺跡（49）が確認されており、その南約8kmには郡倉の別院かと推定された中村遺跡（20）が所在している。

井頭遺跡の調査は、栃木県の古代集落の状況をいち早く確認した例である。奈良・平安時代の土器編年を本県で初めて示し、集落構成の復元に問題を提起するなど学史に残る成果を上げている。また、同時代の益子地方の須恵器生産窯と遺跡へ供給された土器との関連を指摘するなど、今日の須恵器研究の出発点ともみなされている。また、この調査を境として、「掘立柱建物と大型竪穴住居」で構成されていた村の状況をも注意させることとなった。これらは、8世紀中葉から9世紀後半までがその中心であり、農耕集落の一つの典型と見る以外に、芳賀郡衙の建立もしくは整備を主たる業務として設営された計画村落と見る考え方もある。

中世

中世における真岡市周辺は、宇都宮氏・芳賀氏系列の城館が多く、籠谷城、京泉館、芳賀城、御前城、八木岡城、中村城が確認されている。中村城跡（23）は県指定史跡となっており、別名中村館とも呼ばれる。

この城は、中村朝宗が1156年（保元元年）中村八幡宮の南東に築城し居城したと伝えている。朝宗が管掌した中村莊は、藤原摶関家の莊園であった。朝宗の子、宗村は中村莊と常陸国伊佐莊を管領して常陸介となり、のちに中村入道念西と称した。宗村は源頼朝の奥州征伐に従軍して戦功があり、伊達郡の地頭職となつたので、その子の朝定が中村の地を継いだ。朝定の子孫、経長は南北朝の動乱に北畠顕家軍に従い転戦したが、その後宇都宮公綱を頼って家臣となつた。1544年（天文13年）に至り中村城は下館城主水谷正村に攻められた。中村玄角は討死し、その子の時長は城を焼き宇都宮に走ったが、のち米沢に移り伊達正村の家臣となつた。翌年、宇都宮尚綱は中村城の復興を企て、武田治郎太輔信隆に命じ水谷蟠竜の久下田城を攻めたがこれに破れ、以後中村の地は蟠竜が支配するところとなつた。原北遺跡（2）、茅堤北遺跡（3）、伊勢崎III遺跡で確認された薬研堀状の溝跡は当該期のものと考えられる。



第13図 周辺の遺跡

第8表 周辺の遺跡一覧（1）

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	主な参考文献・備考
1	山王遺跡	真岡市長田字山王	集落跡	縄文	2005『真岡市遺跡分布調査報告書』 真岡市教育委員会 (以下『真岡市遺跡分布調査報告書』)
2	原北遺跡	〃 西高間木	集落跡	縄文・近世	『真岡市遺跡分布調査報告書』
3	茅堤北遺跡	〃 西高間木	散布地	古墳～平安	『真岡市遺跡分布調査報告書』
4	伊勢崎IV遺跡	〃 伊勢崎	集落跡	弥生～平安	『真岡市遺跡分布調査報告書』
5	伊勢崎III遺跡	〃 伊勢崎	集落跡	旧石器・古墳～中世	『真岡市遺跡分布調査報告書』
6	古内I遺跡	〃 下籠谷字古内	集落跡	縄文	1994『古内I・II遺跡確認調査報告書』 真岡市教育委員会(以下『古内I・II遺跡』)
7	古内II遺跡	〃 下籠谷字古内	集落跡	縄文～古墳	『古内I・II遺跡』
8	塚原遺跡	〃 下籠谷字塚原	散布地	縄文	1984『真岡市史』第一巻 考古資料編 真岡市史編さん委員会(以下『真岡市史』)
9	北原遺跡	〃 下籠谷字北原	集落跡	古墳(7c代)	『真岡市史』
10	内野遺跡	〃 下籠谷	集落跡	旧石器・縄文～平安	『真岡市史』
11	井頭遺跡	〃 下籠谷字井頭	集落跡	弥生～奈良・平安	1974『栃木県埋蔵文化財調査報告書第14集 井頭』栃木県教育委員会
12	勝瓜南原古墳群	〃 下籠谷字南原・勝瓜	古墳	古墳	『真岡市史』
13	亀山大塚古墳	〃 亀山	古墳	古墳(6c末～7c初)	『真岡市史』
14	赤曾II遺跡	〃 下籠谷	集落跡	縄文～平安	2004『栃木県埋蔵文化財調査報告書第282集 赤曾II遺跡・亀山北遺跡』 (以下『赤曾II遺跡・亀山北遺跡』)
15	亀山北遺跡	〃 亀山	集落跡	旧石器・縄文・古墳	『赤曾II遺跡・亀山北遺跡』
16	長田浅間塚	〃 長田	高塚	近世	2002『栃木県埋蔵文化財調査報告書第266集 長田浅間塚』栃木県教育委員会 (財)とちぎ生涯学習文化財団
17	山王薬師堂脇遺跡	〃 長田字山王	散布地	縄文	『真岡市史』
18	御殿山古墳群	〃 上大沼	古墳	古墳	『真岡市史』
19	北原台古墳群	〃 上大沼字北原台	古墳	古墳(6c後～7c前)	『真岡市史』
20	中村遺跡	〃 中字間木堀	官衙跡	奈良・平安(8c末～11c)	1979『栃木県埋蔵文化財調査報告書第28集 栃木県真岡市 中村遺跡調査報告書』 栃木県教育委員会
21	中村大塚古墳	〃 中	古墳	古墳(6c末)	『真岡市史』・市指定史跡
22	宿中天神山古墳群	〃 宿中字正法寺西	古墳	古墳(6c末～7c前)	『真岡市史』
23	中村城跡	〃 中	城館跡	中世	1983『栃木県の中世城館跡』(財)栃木県文化振興事業団・県指定史跡
24	小橋横塚古墳	〃 小橋	古墳	古墳	『真岡市史』
25	小橋I遺跡	〃 小橋	不明	不明	1997『栃木県埋蔵文化財調査報告書第194集 大曲北遺跡・小橋I遺跡』栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団 (以下『大曲北遺跡・小橋I遺跡』)
26	於宮遺跡	〃 八木岡字於宮	散布地	縄文	『真岡市史』
27	瓢箪塚古墳	〃 八木岡	古墳	古墳	『真岡市史』・県指定史跡
28	伊勢崎II遺跡	〃 伊勢崎	集落跡	旧石器～平安	1999・2000『栃木県埋蔵文化財調査報告書 第225・240集 伊勢崎II遺跡』栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団
29	稻荷山遺跡	〃 高勢町 (旧西高間木・伊勢崎)	集落跡	縄文・弥生・古墳	1977『稻荷山遺跡』確認発掘調査概報(第1 次)真岡市教育委員会・市指定史跡
30	八木岡遺跡	〃 八木岡	散布地	旧石器	『真岡市史』
31	大曲北遺跡	〃 八木岡	集落跡	奈良・平安	『大曲北遺跡・小橋I遺跡』
32	八木岡I遺跡	〃 八木岡	集落跡	奈良・平安・近代	1998『栃木県埋蔵文化財調査報告書第211集 八木岡I遺跡』栃木県教育委員会 (財)栃木県文化振興事業団
33	丸山遺跡	〃 台町	散布地	縄文～古墳	『真岡市史』
34	沼尻八幡山古墳	〃 東沼字沼尻	古墳	古墳(6c後～7c前)	『真岡市史』
35	吹上遺跡	〃 堀内	集落跡	古墳	『真岡市史』
36	西郷下如来遺跡	〃 西郷下如来	寺院跡	奈良・平安	『真岡市史』
37	真岡工業高校北遺跡	〃 西郷	集落跡	縄文(中期)	『真岡市史』
38	熊倉A遺跡	〃 熊倉町	集落跡	縄文～古墳	『真岡市史』

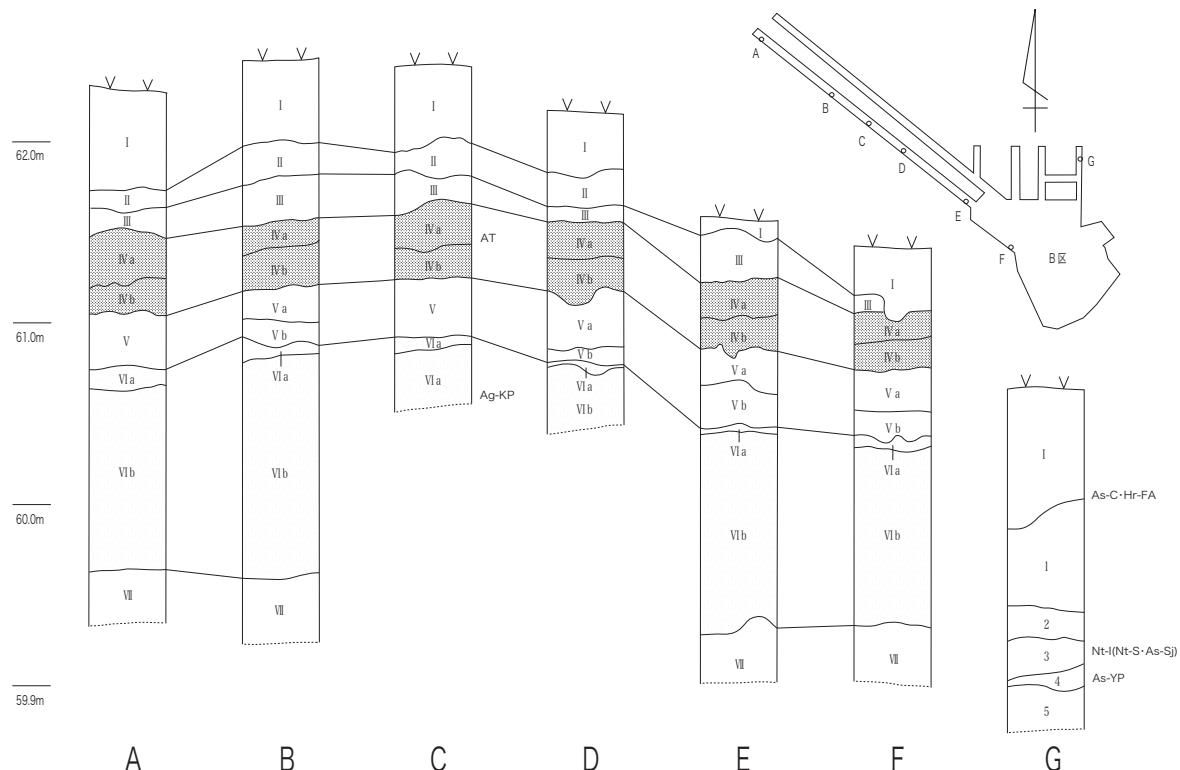
第9表 周辺の遺跡一覧（2）

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	主な参考文献・備考
39	城内北A遺跡	〃 台町	散布地	縄文	『真岡市史』
40	城内北B遺跡	〃 台町	散布地	縄文	『真岡市史』
41	城内遺跡	〃 台町	集落跡	縄文	『真岡市史』
42	城内東遺跡	〃 台町	散布地	縄文	『真岡市史』
43	萩田遺跡	〃 熊倉町	散布地	縄文	『真岡市史』
44	熱田遺跡	〃 田島	集落跡	古墳	『真岡市史』
45	箕輪前遺跡	〃 飯貝字箕輪前	集落跡	古墳	『真岡市史』
46	京泉シトミ原古墳群	〃 京泉	古墳	古墳（6c後～7c）	『真岡市史』
47	堂法田遺跡	〃 京泉字堂法田	官衙跡	奈良・平安	『真岡市史』・県指定史跡
48	鶴塚古墳	〃 京泉シトミ原	古墳	古墳（6c後）	『真岡市史』・県指定史跡
49	大内廃寺跡	〃 京泉字内畠・飯貝	寺院跡	奈良（7c末～8c後）	『真岡市史』・県指定史跡
50	磯山遺跡	〃 東大島字磯山	集落跡	旧石器	『真岡市史』・県指定史跡
51	東大島の箱式石棺	〃 東大島	古墳	古墳（6c～7c）	『真岡市史』
52	小林大塚古墳	〃 小林	古墳	古墳	『真岡市史』
53	岡古墳群	〃 西田井字岡	古墳	古墳（7c後）	『真岡市史』
54	深田遺跡	〃 根本	集落跡	古墳・平安	『真岡市史』
55	柳久保遺跡	〃 根本字柳久保	集落跡・古墳	縄文～古墳	『真岡市史』
56	柳久保東遺跡	〃 根本	散布地	縄文（中期）・ 弥生（後期）・奈良	1997『栃木県埋蔵文化財地図』 栃木県教育委員会
57	山崎遺跡	〃 根本字山崎	古墳	縄文・弥生	『真岡市史』
58	山崎古墳群	〃 根本字山崎	古墳	古墳（5c初～6c）	『真岡市史』・市指定史跡
59	能仁寺西遺跡	〃 根本字上根	散布地	弥生	『真岡市史』
60	大根山古墳	〃 根本字大根山	集落跡	古墳	『真岡市史』
61	大畠遺跡	〃 根本字大畠	集落跡	古墳	『真岡市史』
62	森ノ木古墳群	〃 根本字森ノ木	古墳	古墳	『真岡市史』
63	神宮寺塚古墳	〃 根本字森ノ木	古墳	古墳（6c後）	『真岡市史』・市指定史跡
64	峯の岩屋古墳	〃 須鎧字十九夜峯	古墳	古墳（7c中～末）	『真岡市史』
65	南高岡窯跡群	〃 南高岡	窯跡	古墳～平安	『真岡市史』・市指定史跡
66	稻荷林遺跡	〃 道祖土字稻荷林	集落跡	古墳（後期末葉）	『真岡市史』
67	山崎台遺跡	〃 南高岡	散布地	縄文	『真岡市史』
68	南高岡遺跡	〃 南高岡	散布地	旧石器	『真岡市史』
69	若旅富士山古墳群	〃 若旅	古墳	古墳（6c後～7c中）	『真岡市史』
70	旧日本蓄音機工場内遺跡	〃 台町	集落跡	古墳	『真岡市史』
71	彈正遺跡	〃 田町沼彈正	集落跡	古墳（7c代）	『真岡市史』
72	竹内遺跡	〃 南高岡字大手	散布地	縄文	『真岡市史』
73	谷中遺跡	〃 東沼	集落跡・墓壙	古墳（中～後期）～平安 ・近世	2000『栃木県埋蔵文化財調査報告書第233集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報22 平成10年度（1998）』栃木県教育委員会
74	鶴田A遺跡	〃 鶴田	集落跡	旧石器・古墳～平安	2001『栃木県埋蔵文化財調査報告書第243・ 253集 鶴田A遺跡 I・II』栃木県教育委員会 (財)とちぎ生涯学習文化財団
75	猿山遺跡	〃 亀山字東猿山	散布地	旧石器	『真岡市史』
76	谷近台遺跡	芳賀町西水沼字谷近台	集落跡	古墳	1980『宇大史学2』宇都宮大学史学会
77	亀の子塚古墳	〃 西高橋字高峯	古墳	古墳	1967『芳賀の文化財 第3集』 芳賀町教育委員会・芳賀町文化財調査委員会
78	大関高塚群	宇都宮市西刑部町	高塚	近世	1997『宇都宮市遺跡地図』宇都宮市教育委員会（以下『宇都宮市遺跡地図』）
79	西原庚申塚群	〃 上籠谷町	庚申塚	近世	『宇都宮市遺跡地図』
80	中極高塚群	〃 上籠谷町	高塚	近世	『宇都宮市遺跡地図』
81	小泉庚申塚	〃 上籠谷町	庚申塚	近世	『宇都宮市遺跡地図』
82	中台高塚	〃 氷室町	高塚	近世	『宇都宮市遺跡地図』
83	妙音寺高塚群	〃 氷室町	高塚	近世	『宇都宮市遺跡地図』
84	土堂塚	〃 氷室町	高塚	近世	『宇都宮市遺跡地図』
85	山下台高塚群	〃 下平出町	高塚	近世	『宇都宮市遺跡地図』
86	上籠谷和尚塚	〃 上籠谷町	高塚	近世	『宇都宮市遺跡地図』

第3節 基本層序と堆積状況

伊勢崎III遺跡の基本層序は第14図のとおりで、A～Gの各基本土層柱状図は右上の略図中に示した位置と対応している。各調査区に設定したセクションは第15図のとおりである。C(分析報告中第1地点)・G(第3地点)の両地点、およびAグリッド調査区セクション(第2地点)において、示標テフラの検出と層位の把握を目的に自然科学分析を行っている。分析試料採取位置の観察と分析結果を踏まえた各層の説明は、第14図中に示した。また、隣接する伊勢崎II遺跡の基本層序との対応関係も末尾に括弧書きで加えている(例〔III層〕)。

本調査区は、北東から南西方向にかけて緩やかに傾斜しており、ローム層以下の堆積状況もほぼ平行して傾斜していることが確認されている。また、E・F両地点では土地改良による削平のため、II層が確認できなかった。G地点ではローム層を確認することができず、分析結果から旧石器時代には開いていた可能性のある埋没谷の存在が明らかとなった。G地点各層の土層説明についても第14図中に示した。



I層：黒褐色の耕作土。〔伊勢崎II遺跡の耕に相当〕

II層：暗褐色のソフト化したローム層。〔I層〕

III層：黄褐色で赤褐色スコリア(最大径4mm)を少量含む硬質なローム層。〔II層〕

IVa層：若干灰色がかった褐色で、いわゆるブラックバンド上層に相当。下部に透明なバブル型火山ガラス・姶良Tn火山灰(AT)由来のテフラが含まれる。〔III層〕

IVb層：灰褐色で、いわゆるブラックバンド下層に相当。〔III層〕

Va層：黄褐色の硬質なローム層。〔IV層〕

Vb層：黄褐色の硬質なローム層であるが、VI層の細粒を若干含む。〔V層〕

VIa層：褐色で黄色軽石(赤城鹿沼テフラ・Ag-Kに同定)に富む。〔VI層〕

VIb層：明黄褐色で厚く降下した黄色軽石(Ag-K)層。

〔VI・VII・VIII層〕

VII層：暗褐色の粘質土層。〔IX層〕

1層：黒褐色で灰白色軽石(浅間C軽石・As-C)・白色軽石(榛名二ッ岳浜川テフラ・Hr-FA)を少量含む。

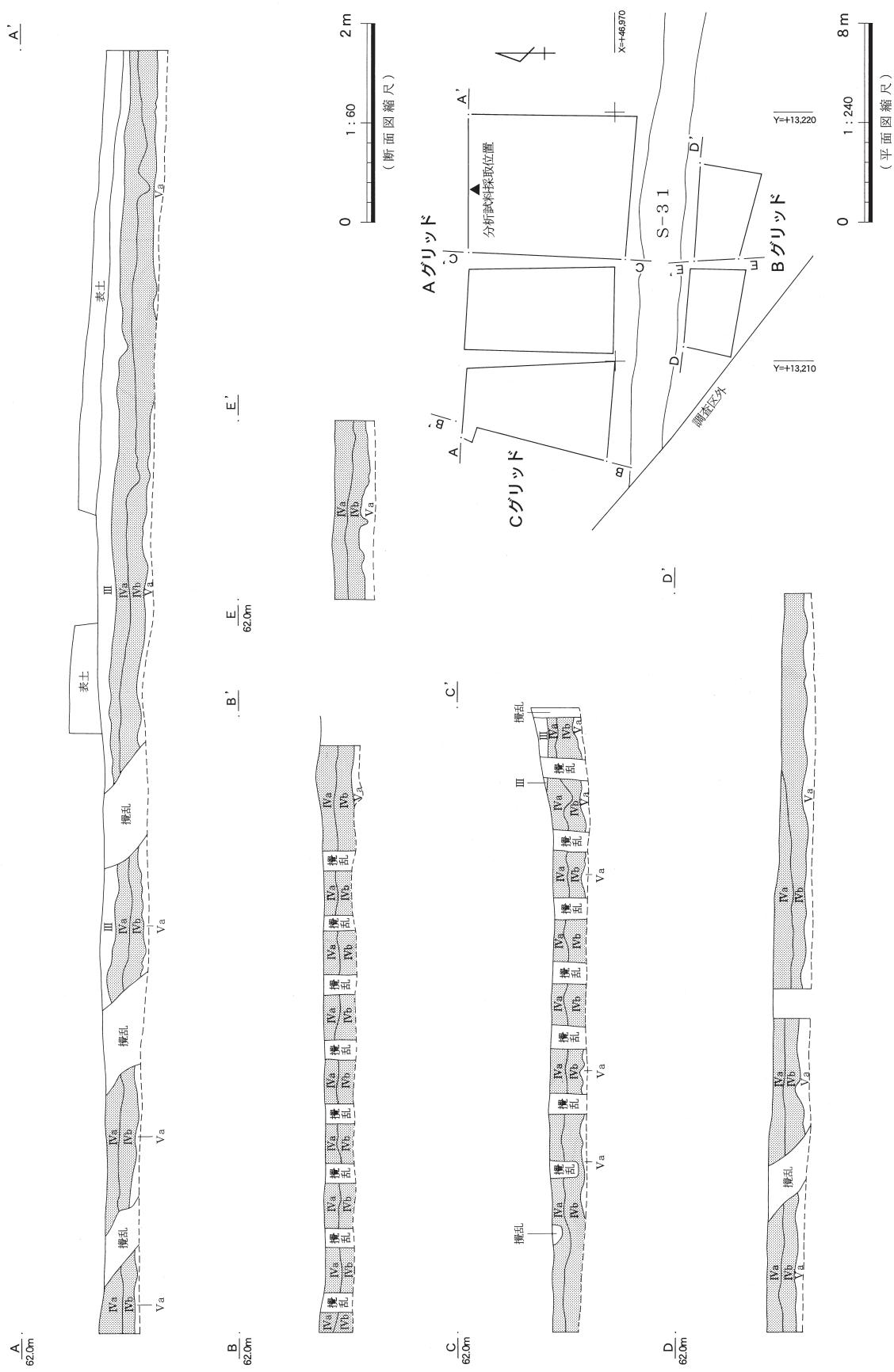
2層：黒褐色で赤褐色スコリア(男体今市スコリア・Nt-I)と白色の微粒子を少量含む。

3層：黒褐色で赤褐色スコリア(Nt-I)・白色軽石型ガラス(男体七本桜軽石・Nt-s)・灰白色石型ガラス(浅間総社軽石・As-Sj)の微粒子と黄色軽石(Ag-K)をやや少量含む。

4層：暗褐色で3層と5層の漸移層。

5層：明黄褐色で黄色軽石(Ag-K)の再堆積層。上層に断続的に薄桃色のテフラ(浅間板鼻黄色軽石・As-Yp)が成層。

第14図 伊勢崎III遺跡 基本土層柱状図



第15図 伊勢崎III遺跡 旧石器調査区セクション

第3章 遺構と遺物

第1節 原北遺跡

(1) 概要

原北遺跡は、真岡市の南西部に位置し、五行川と鬼怒川の間を南北に連なる宝積寺段丘（真岡台地）の南東部台地上に立地している。北には山王遺跡、南東には茅堤北遺跡が所在する。

地形は東から西方向にかけて緩やかに傾斜しており、標高は64～67m程度である。調査以前は主にゴボウなどの畠地として利用されており、一段低い北西方向の低地から、西側の南北に伸びる用水路周辺にかけて水田地帯が広がっている。

発掘調査区は長さ約170m、幅約40～60mの道路建設範囲（6,600m²）を対象とした。確認調査により絞り込みを行い、市道140号線の北西側に本調査区（1,500m²）が設定された。確認された遺構は、並行して調査区を横断する溝跡2条である。遺物は縄文土器・弥生土器・土師器などが出土し、図示し得たが溝跡の時期に伴わない流れ込みのものは（3）項に掲載した。

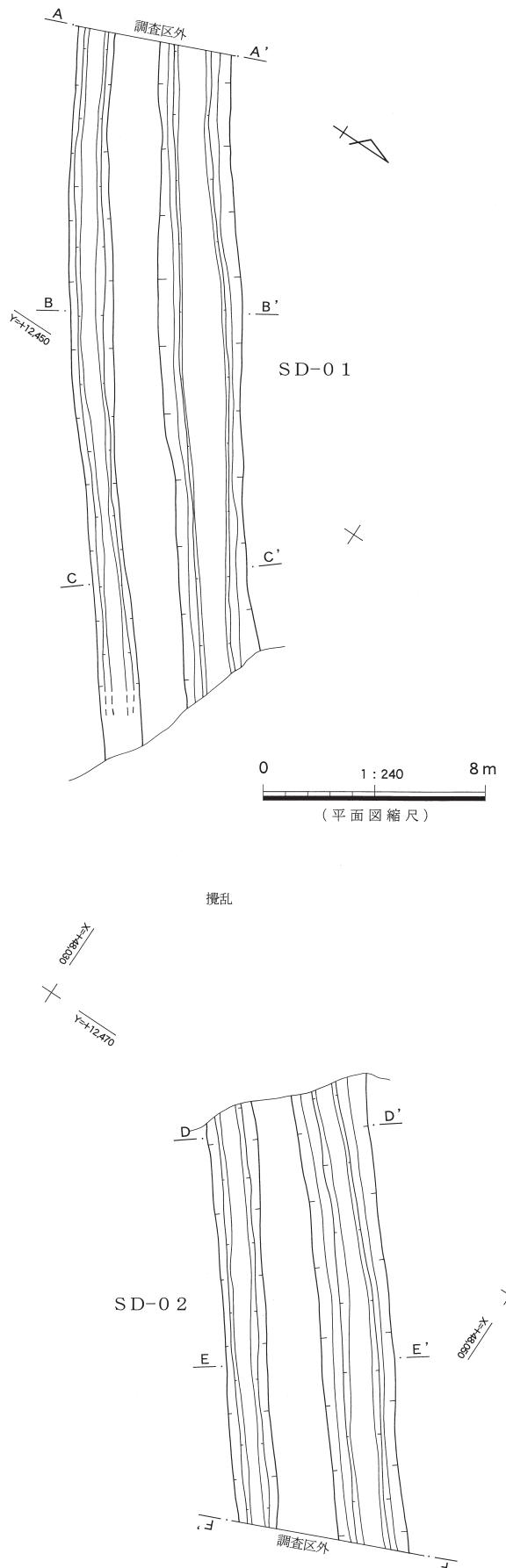
以下、遺構・遺物ごとに説明を加えるが、本節の遺構実測図作成に用いた座標値は、世界測地系平面直角座標系第IX系に準拠している。

(2) 溝跡

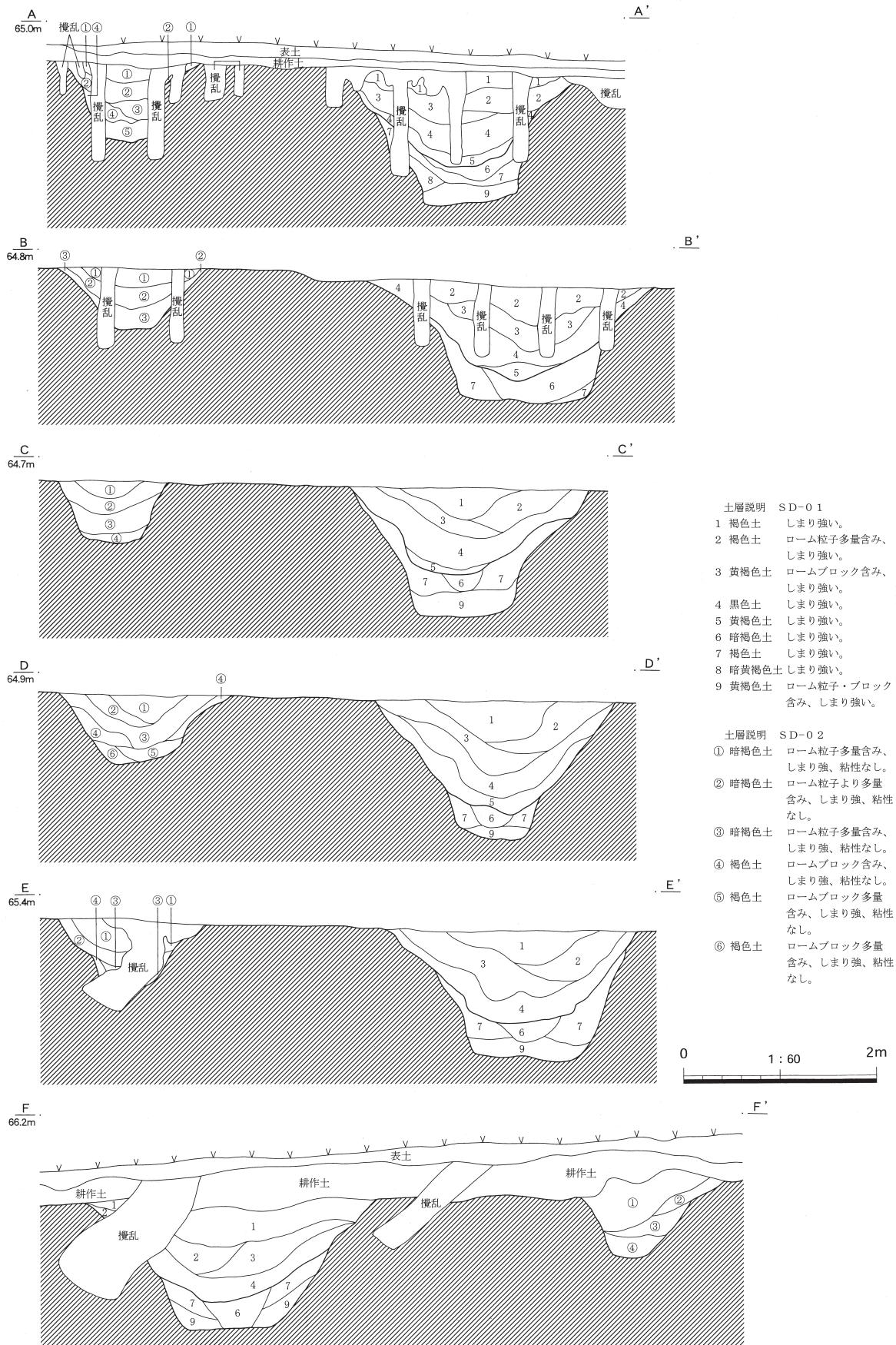
SD-01（第16・17図、図版二）

本溝跡は、調査区北側に確認した。南西方向から北東方向に向かって伸び、長軸方向両端は調査区外に存在する。他の遺構との重複はないが、1.68～2.08mの間隔でSD-02と並行している。

確認した長さは54.40mで、中央約15m部分が攪乱を受けている。両辺とも直線的で、断面は上幅が2.26～3.05m、下幅が0.86～1.35mの逆台形状である。底面はほぼ平坦で、北東方向に緩やかに傾斜し、確認面からの深さは1.18～1.45mである。當時、水が流れている痕跡などは



第16図 原北遺跡 SD-01・02実測図(1)



第17図 原北遺跡 SD-O 1・O 2実測図 (2)

見つかっていない。埋土は黄褐色土や褐色土を中心とした自然堆積で、確認面から0.85～1.25mの深さで一回以上の掘り返しが認められる。遺物はすべて流れ込みである。

断面形状から、中世のいわゆる薬研堀と考える。

SD-02 (第16・17図、図版二)

本溝跡は、調査区北側に確認した。南西方向から北東方向に向かって伸び、長軸方向両端は調査区外に存在する。他の遺構との重複はないが、1.68～2.08mの間隔でSD-01と並行している。

確認した長さは54.25mで中央の約15m部分が攪乱を受けている。両辺とも直線的で、断面は上幅が1.15～1.78m、下幅が0.35～0.65mの逆台形状である。底面はほぼ平坦で、北東方向に緩やかに傾斜している。確認面からの深さは0.64～0.80mである。當時、水が流れている痕跡などは見つかっていない。埋土は暗褐色土や褐色土を中心とした自然堆積で、遺物はすべて流れ込みである。

断面形状から、中世のいわゆる薬研堀と考える。

(3) 遺構外出土遺物

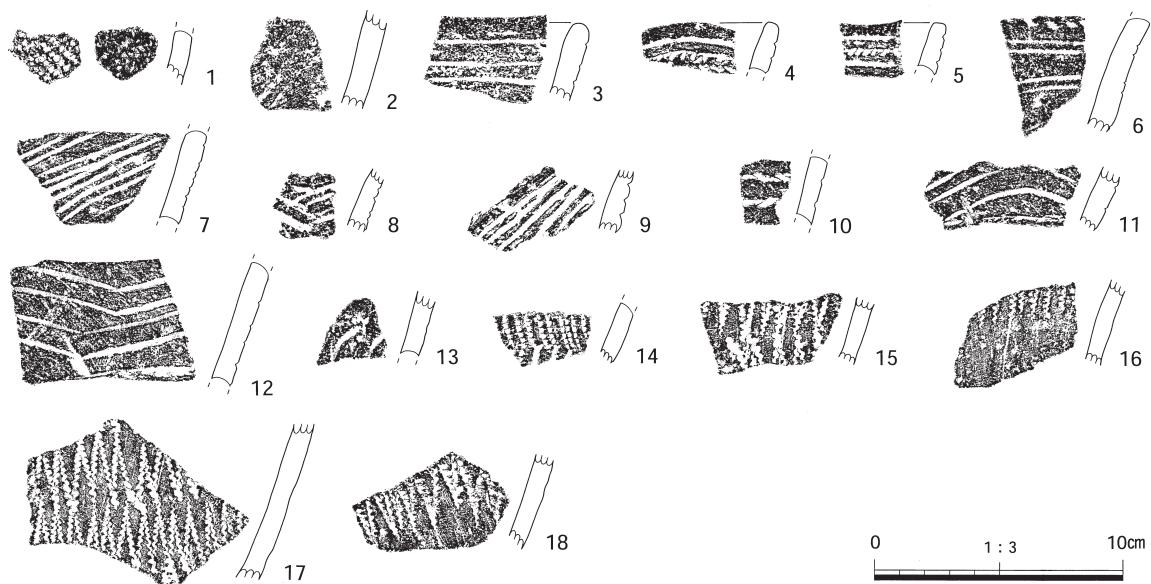
縄文土器 (第18図、図版一四)

第1群 多縄文系土器群 (第18図1)

草創期の多縄文系土器群の表裏縄文土器である。表面の縄文は2段LRの縄を縦位に施文した単節斜縄文である。裏面の縄文は浅く施文されており、原体の種類の判別は困難である。器厚は約8mmで、胎土には白色の小礫、砂粒及びガラス質微粒を含んでいる。色調はにぶい黄褐色 (10YR 5/3) を呈す。

第2群 諸磯・浮島式土器 (第18図2～18)

本群土器は、いずれも多量の微砂粒を含んでいる。これは浮島式に特徴的な胎土である。色調は、にぶい褐色 (7.5YR 5/4) や灰黄褐色 (10YR 4/2)、あるいはやや明るい明褐色 (7.5YR 5/6) などである。



第18図 原北遺跡 遺構外出土縄文土器

第1類 まばらな撲糸文がみられるもの（第18図2）

2はまばらな撲糸文がみられる浮島I式体部破片である。撲糸文の原体は、1段Rの縄を用いた単軸絡条体と思われる。胎土には多量の微砂粒を含み、色調は明褐色（7.5YR 5/6）を呈す。

第2類 縄文地に平行沈線（第18図3）

3は、口縁と平行に、半截竹管の内側による平行沈線を施している。平行沈線の幅は約10mmと幅広であるが、口縁部に条線帯が配されておらず、浮島II式に比定される。

第3類 幅狭な変形爪形文（第18図4・5）

4・5は、口縁部に沿って平行沈線を施し、以下に変形爪形文を配している。変形爪形文の上側は、平行沈線の下側と重ねている。変形爪形文は、半截竹管の内側を器面に当て、支点をずらしながら施文している。平行沈線や変形爪形文の幅は約6mmである。4は口縁が僅かに波状を呈す。

第4類 幅狭な半截竹管文（第18図7～9）

7～9は体部破片で、半截竹管による幅5mm前後の平行沈線がみられる。7・9は斜位の密な平行沈線がみられる。8は綾杉状に平行沈線が交差している。竹管が細く、浮島I～II式と思われる。

第5類 幅広の変形爪形文と平行線文（第18図6・10～12）

6は、破片上端に爪形文の下端がみられ、間隔を開けて横位に細い平行沈線を施している。10は、幅12mmと幅広の変形爪形文がみられる。11・12は同一個体である。半截竹管による弧状の平行沈線を配し、その施文域の下端を変形爪形文で画している。平行沈線は幅12mmと幅広である。6は浮島I～II式、10～12は浮島II～III式に比定される。

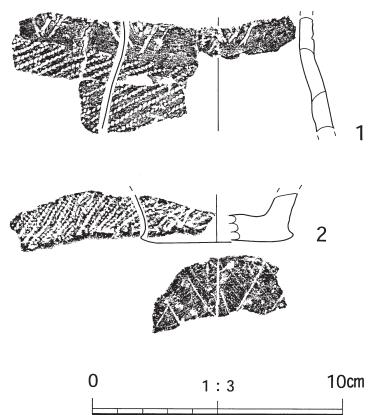
第6類 波状貝殻文がみられる土器（第18図13～18）

13は、小形の肋脈の無い貝殻を用いた波状貝殻文がみられる。14～18は、アルカ属の貝殻を用いた波状貝殻文がみられる。14～16は隣接する貝殻文の交差角度が小さく、古相を呈しており、浮島I式に比定される。本群は、浮島I式もしくはII式に比定できるものがほとんどで、積極的に浮島III式と考えられるものはない。本遺跡の縄文時代前期においては、生活痕跡は浮島I～II式期に限定されると考えることができる。

弥生土器（第19図、図版一四）

第3群 弥生時代後期の土器（第19図）

1は、口頸部に櫛齒状工具による鋸齒文を配し、以下附加条付き縄による縄文を施している。縄文は、2段LRの縄に1段Rの縄2条を附加した附加条第1種の縄を横位施文したものである。2は、底部直上に1と同種の縄文を施している。底部にはカシワの葉と思われる木葉痕がみられる。ともに胎土には、白色の小礫、砂粒および少量のガラス質微粒を含んでいる。弥生時代後期の広口壺形土器と思われる。



第19図 原北遺跡 遺構外出土弥生土器

第2節 茅堤北遺跡

(1) 概 要

茅堤北遺跡は、真岡市の南西部に位置し、五行川と鬼怒川の間を南北に連なる宝積寺段丘（真岡台地）の南東部台地上に立地している。北西には原北遺跡、南東には伊勢崎IV遺跡が所在する。

地形は南から北方向にかけて緩やかに傾斜しているが、調査区周辺は平坦地で、標高は63m前後である。調査以前は広葉樹や針葉樹の雑木林で、周辺に広がる低地部分は、畠地や一部宅地として利用されていた。なお、規模の詳細は不明だが、調査区東半部に埋没谷の存在が確認されている。

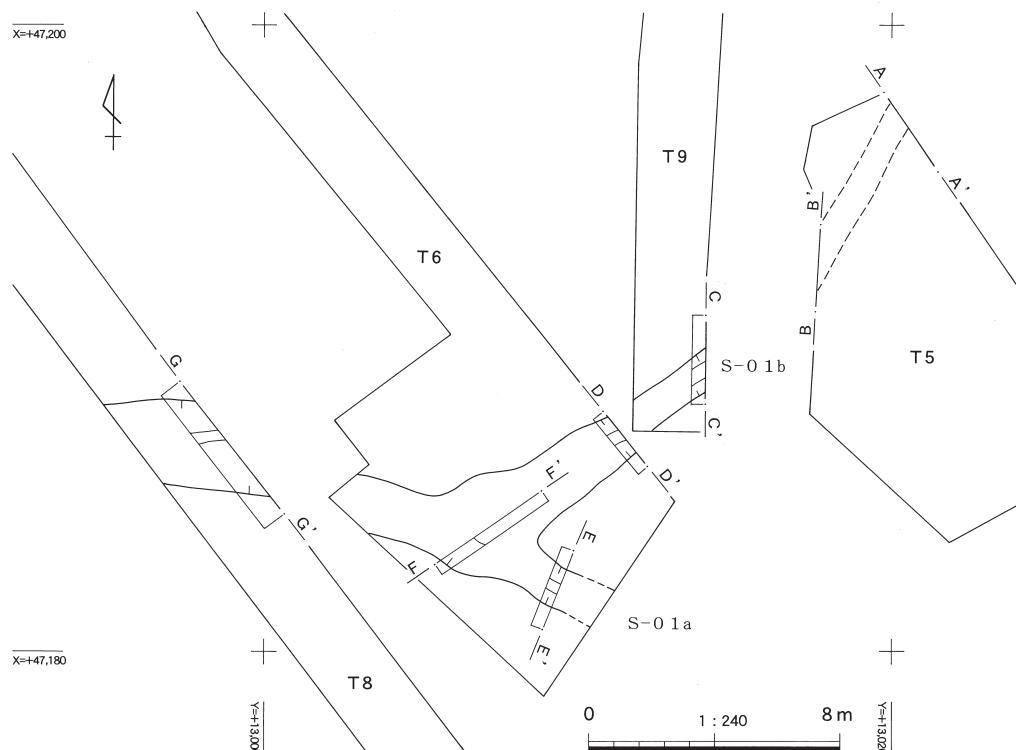
発掘調査区は長さ約75m、幅約45mの道路建設範囲（3,300m²）を対象とした。確認調査の結果、溝跡1条が確認され、路線内でどのような方向に伸びるか調べるために、トレント拡張などで対応した。その後、関係諸機関と協議した結果、遺構がこれ以上調査区内に広がる可能性は低いとして、トレント範囲内の追加調査を行うことで、本調査に代えることとした。遺物は全く出土しなかった。

以下、遺構の説明を加えるが、本節の遺構実測図作成に用いた座標値は、旧日本測地系 平面直角座標系第IX系に準拠している。

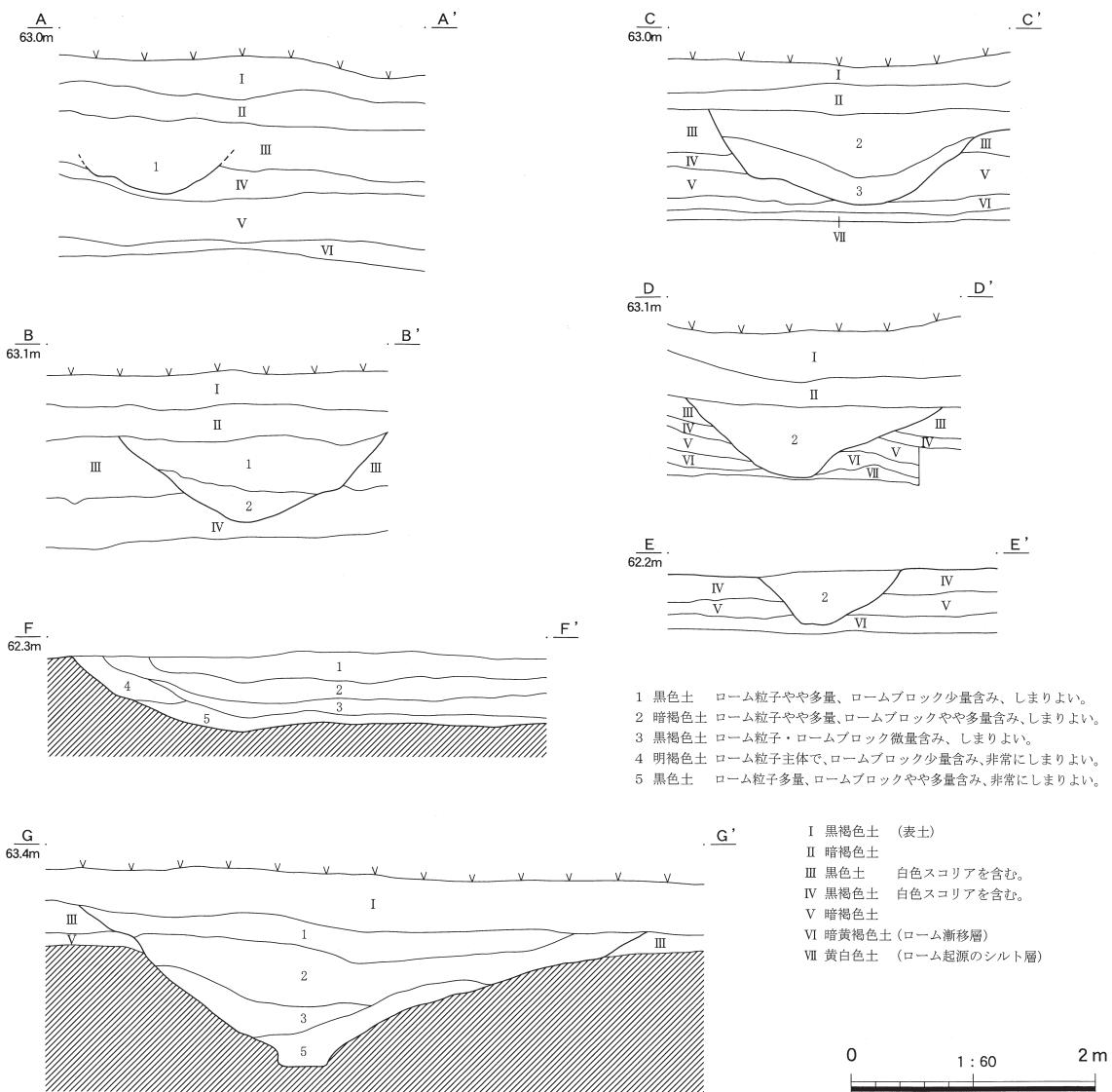
(2) 溝 跡

S-01 (第20・21図、図版三)

本溝跡は、調査区の南東側に確認した。西から東方向に伸び、途中南東方向へ伸びる部分（以下、「S-01a」と呼称）と北東方向へ伸びる部分（以下、「S-01b」と呼称）に分岐し、共に東側の埋没谷に至っている。長軸方向の西端は、調査区外に存在すると考えられる。他の遺構との重複はない。



第20図 茅堤北遺跡 S-01実測図(1)



第21図 茅堤北遺跡 S-01実測図(2)

確認した長さは西端から分岐点までが 14.50m、S-01a 部分が 4.4m、S-01b 部分が 18.6m である。各辺とも確認段階ではやや蛇行しているが、S-01b の先端は断面上での確認であったため、詳細は不明である。断面は西端から分岐点部分が上幅 1.64～2.78m、下幅 0.36m 前後、S-01a 部分が上幅 1.17～1.40m、下幅 0.25m 前後、S-01b 部分が上幅 1.25～2.20m、下幅 0.45m 前後で、すべて逆台形状である。底面はほぼ平坦であるが、S-01b が、やや緩やかに埋没谷に向かって傾斜していると考えられ、確認面からの深さは 0.43～1.61m である。埋土は自然堆積で、常時水が流れていた痕跡などは見つかっていないが、F セクションの 3 層下面と 2 層下面に、2 回以上の掘り返しが認められる。分岐点から先の、S-01a と S-01b の直接の新旧関係は不明であるが、断面の観察から S-01b が新しいと考えられる。もしくは、双方の埋土が似通っているので、S-01a・S-01b とも、同時期に開口していた可能性も考えられる。

断面形状から、やや小型ではあるが、中世のいわゆる薬研堀と考える。

第3節 伊勢崎III遺跡

(1) 概 要

伊勢崎III遺跡は、真岡市の南西部に位置し、五行川と鬼怒川の間を南北に連なる宝積寺段丘（真岡台地）の南東部台地上に立地している。同路線区内の遺跡としては、北西に伊勢崎IV遺跡、南東に下陰遺跡が所在する。また、時代構成・性格的に本遺跡と最も関係が深いと思われる一般国道294号バイパス路線区内の伊勢崎II遺跡は、東方向に隣接している。お互いの旧石器時代調査地点は、直線距離にして300m足らずである。

地形は、南北方向に樹枝状の小谷が複数入り込んでおり、当遺跡が北西-南東方向に横断するように立地している。基本的に北から南方向にかけて緩やかに傾斜しており、標高は59～62m程度である。調査以前は一部雑木林が広がる他は、主に耕作地として利用されており、ゴボウなどが栽培されていた。調査対象区の南側から西側にかけての低地部分には、水田地帯が広がっている。

発掘調査区は長さ約400m、幅約10～70mの道路建設範囲（10,500m²）を対象とした。確認調査により絞り込みを行い、本調査区（8,100m²）を設定し、更に調査区を横断する道路によりA・B・Cの3区に分割して調査を行った。A区は、本調査区の南東端に設定し、竪穴住居跡2軒・溝跡5条・土坑7基を確認した。B区は、A区と農道を挟んで北西側に設定し、旧石器集中地点6基・礫群5基・竪穴住居跡2軒・溝跡1条・土坑3基を確認した。C区は、B区と県道八木岡下江連下館線を挟んで北西側に設定し、溝跡2条・井戸跡3基・地下式壙1基を確認した。なお、全ての区においてゴボウトレントによる攪乱が激しい。

以上により確認された遺構総数は、旧石器集中地点6基・礫群5基・竪穴住居跡4軒・井戸跡3基・溝跡8条・土坑10基・地下式壙1基となった。遺構配置図は第1章第10図に示した。

遺物は、旧石器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石製品・土製品・鉄製品などが出土した。基本的に出土遺構ごとに掲載した。但し、図示し得たが時期が伴わない遺物は遺構外出土遺物として（8）項で時代ごとにまとめて掲載した。

以下、遺構・遺物ごとに説明を加えるが、本節の遺構実測図作成に用いた座標値は、世界測地系 平面直角座標系第IX系に準拠している。

(2) 旧石器時代

石器分類

本遺跡出土の旧石器を次のような基準で分類する。

ナイフ形石器 石刃や剥片の鋭い一縁辺を刃部とし、他の縁辺に連続した刃潰し状の二次加工を施して器体を整形した石器。

台形様石器 小型の剥片の鋭い一縁辺を刃部とし、他の縁辺を二次加工によって整形した石器。

彫刻刀形石器 石刃や剥片の側縁に細長い楕状の剥離を施した石器。

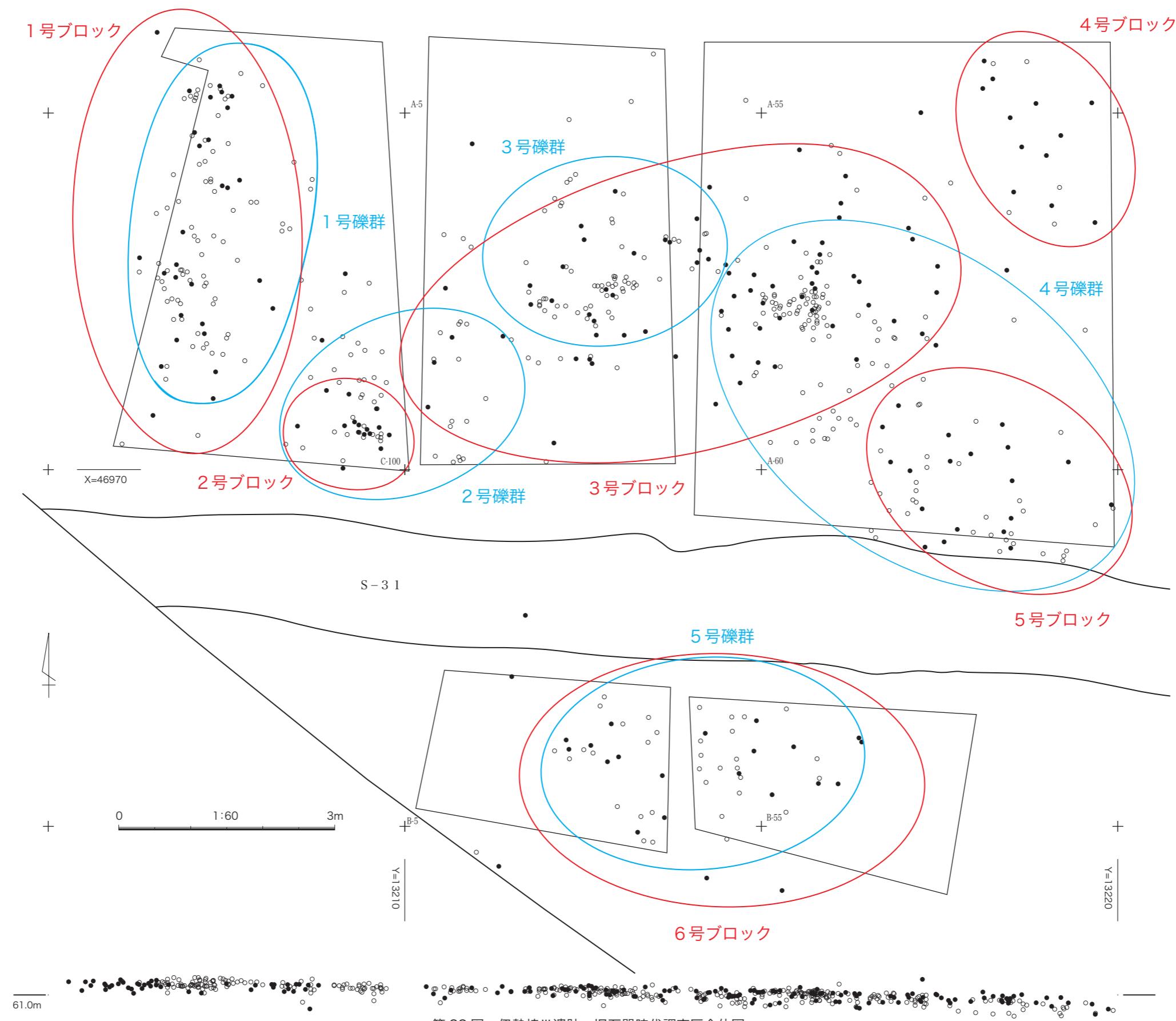
尖頭器 平坦な剥離によって素材を面的に加工し、木葉形もしくは柳葉形に整形した石器。

スクレイパー 剥片の縁辺に二次加工を施し、直線的あるいは曲線的な刃部を作出した石器。

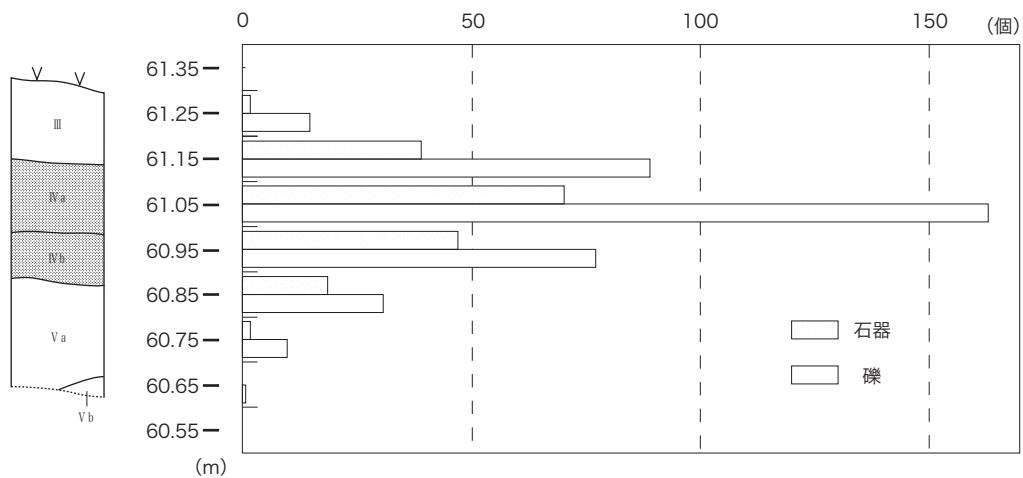
抉入石器 剥片の縁辺に二次加工によって抉りを釉繰り出した石器。

二次加工ある剥片 剥片の一部に不規則な二次加工が施されている石器。

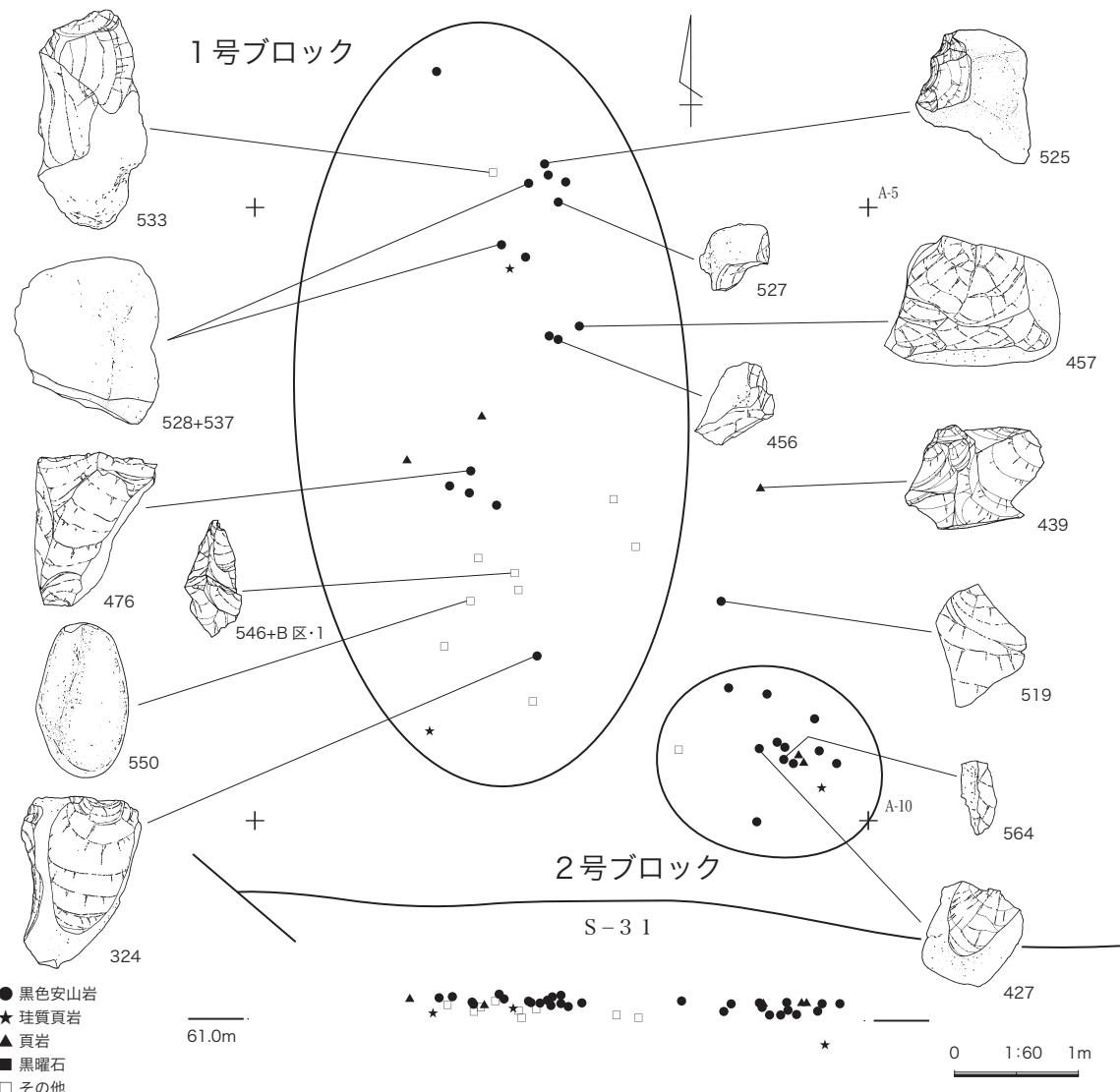
微細剥離痕ある剥片 剥片の縁辺に微細な刃こぼれ状の剥離を有する石器。ただし、この剥離痕が使用によるものか、その他の原因によるものかは不明。



第22図 伊勢崎III遺跡 旧石器時代調査区全体図



第23図 伊勢崎III遺跡 旧石器出土レベル度数分布図



第24図 伊勢崎III遺跡 1・2号ブロック出土旧石器分布図

敲石 石器製作に関与したと想定される敲打痕を有する礫。

剥片 剥離作業によって得られた石片。形態的には最終剥離面がポジティブで、打面を持つか、もしくは推定でき、かつ長さが2cm以上のもの。

石刃 背面の稜線と剥離軸がほぼ一致し、長さが幅の2倍以上の剥片を典型とする。

碎片 長さ2cmを超えない剥片、または打面を持たない石片。

石核 剥片を剥離する目的で整形された石器。遺跡に残されているのは、大抵は消費し尽くされた石核、すなわち残核である。

礫 人間によって遺跡にもたらされてはいるが、加工が施されていない石。粗粒で石器の使用には適さない。被熱・破碎していることが多い。

石材鑑定

石材の鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社が行い、その結果は付章・第2節に掲載した。そのため、伊勢崎II遺跡発掘調査報告書の石材名とは必ずしも一致しない場合がある。以下、代表的な石材の特徴を示す。

黒色安山岩（無斑晶ガラス質安山岩） 風化を受けていない新鮮な部分はガラス質で黒色を呈し、通常、貝殻状の断口を示す。表面は褐色～灰色に風化する場合が多く、象の肌状の外観を示すようになるものもある。

珪質頁岩 シリカ (SiO_2) に富む頁岩で、一般的な頁岩よりもシリカ成分が多いため、風化に強く、破断面に光沢を有することが多い。色調は、黒色、灰色、白灰色、褐色、暗褐色など多様である。

頁岩 剥離性の発達した泥質岩で、珪質頁岩よりもシリカ成分が少ないもの。一般に灰色～黒色系のものが多い。風化して淡灰色に脱色するものもある。

黒曜石 黒色で透明感を有するガラス質な火山岩である。流紋岩に含まれる斑晶と同様な斑晶が含まれる場合が多い。

チャート シリカに富む硬く緻密な珪質堆積岩。本邦においては、珪質頁岩よりも硬質な場合が多い。マイクロクラックを有することが多い。

玉髓 微小な石英の網目状集合体であり、破断面は一般に艶消し状を呈する。白色で、やや透明感を有する。

瑪瑙 玉髓質な珪質岩のうち、縞状組織を有する。

カタクラサイト 破碎岩片を含む断層岩である。肉眼的に各種の変形構造や破碎岩片がみられる。

砂岩 2～1/16mmの砂屑片を主とする堆積岩。肉眼的には、砂粒が固まった石に見える。

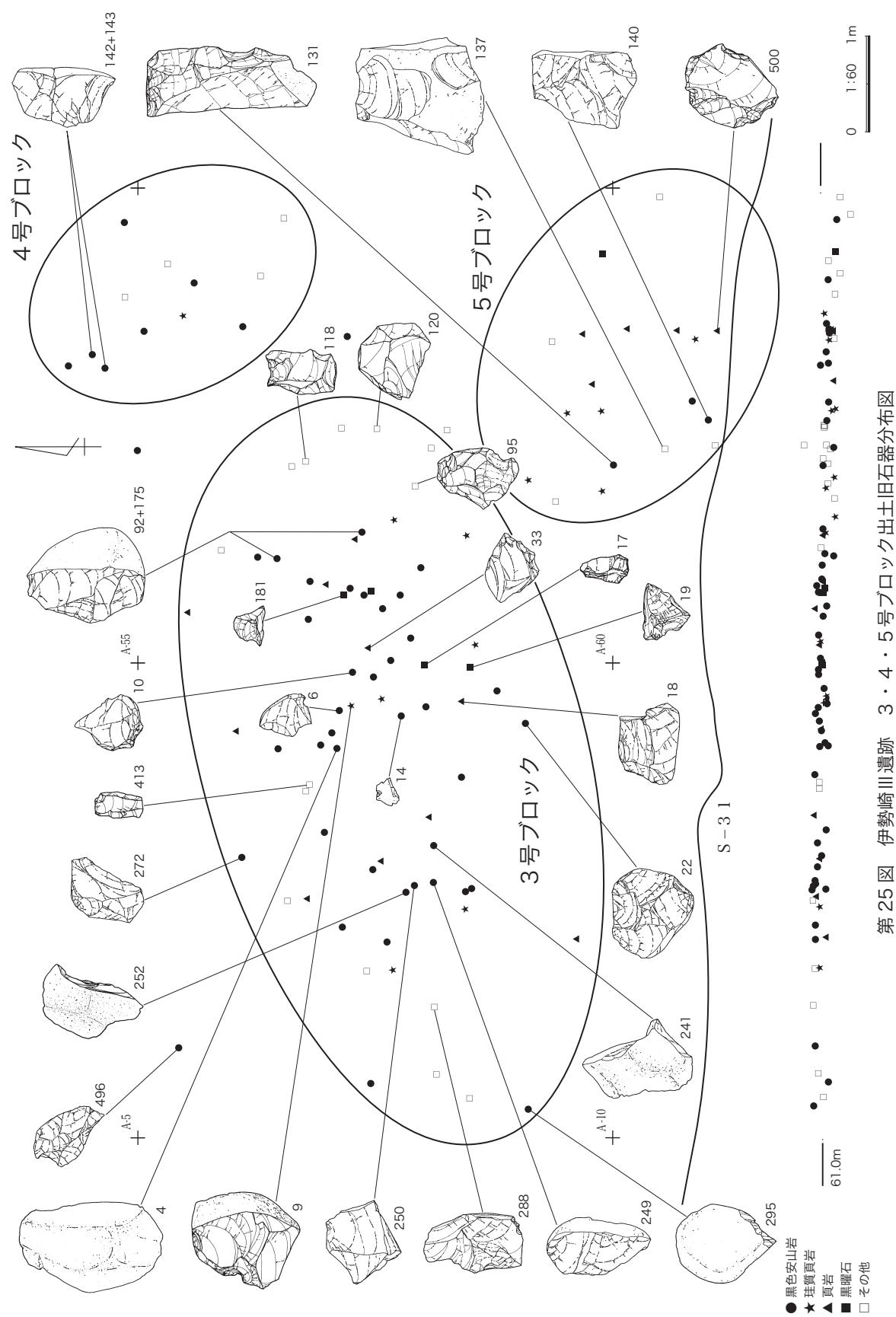
董青色ホルンフェルス 董青石の斑状変晶が認められるホルンフェルス。頁岩と同様な外観を示すが、再結晶した黒雲母や董青石が認められる。董青石が溶脱風化している場合もある。

珪化凝灰岩 硅化作用を受けた凝灰岩。普通の凝灰岩にシリカ成分が付加されたもの。

デイサイト 斜長石、石英、輝石、角閃石などの斑晶を含む珪長質火山岩。安山岩よりも淡色で、一般に淡灰色～白色系のものが多い。

調査概要

旧石器時代遺物は、A区からも表面採集（以下、「表採」と呼称）されているが、大半はB区南東部のローム層中（IVa・IVb層）から出土している。出土レベル度数分布図を第23図に示したが、柱状図は分析試料採取第2地点（第15図）のものである。調査は、B区石器集中地点に専用グリッド（第2図）を設定し、基本層序観察用ベルトを残しながら、出土遺物の座標値を記録して取り上げた。対象面積は、Aグリッド（58



第25図 伊勢崎Ⅲ遺跡 3・4・5号ブロック出土旧石器分布図

m^3)・B グリッド (16 m^3)・C グリッド (19 m^3) の計 93 m^3 である。また、調査区形状は、進捗に合わせて拡張・ベルト除去などを行ったため、適宜変更がなされた。

石器は、後世遺構埋土中・表採を含めると 208 点出土し、接合した 11 資料分を除けば 193 点となる。総重量は、3,399.37g である。ローム層中からの出土レベルは 60.715 ~ 61.211m で、厚さ 0.496m の範囲である。なお、ローム層中出土に限らず旧石器と判断した表採・遺構覆土出土のもの (29 点) も含まれる。主な器種としては、ナイフ形石器・台形様石器・彫刻刀形石器・尖頭器・スクレイパー・抉入石器が挙げられる。主な石材は、黒色安山岩・黒曜石・頁岩・珪質頁岩などである。第 15 ~ 17 表に、ブロック→器種→石材と昇順になるよう、属性一覧を示した。

礫は、386 点出土し、接合した 57 資料分を除けば 284 点となる。その、ほとんどが被熱・破碎している。総重量は、17,983.39g である。出土レベルは 60.692 ~ 61.237m で、厚さ 0.545m の範囲である。石材は多岐 (デイサイト質凝灰岩・輝石安山岩・チャート・砂岩・流紋岩質凝灰岩・流紋岩質溶結凝灰岩など) にわたるが、周辺の鬼怒川水系で採集可能なものである。第 18 ~ 22 表に、礫群→石材→接合No.と昇順になるよう、属性一覧を示した。

分布 (第 22 図)

分布範囲は、南北に展開する小谷の東縁部に沖積地を望んで展開する。この小谷は現在埋没谷だが、テフラ分析から旧石器時代には開いていたことがわかっている。また、遺物の分布は、後世の遺構や土地改良による削平、ゴボウの耕作などによって攪乱を受けている。詳細は「ブロック各説」「礫群各説」の項に譲るが、例えば S-3-1 によって掘り込まれている部分では、遺物分布が空白になっている。以上のような諸事情のため、遺物の本来の分布状況を確認したとは言い難いが、視覚的なまとまりによって石器ブロック 6 基、礫群 5 基を区分してみた。これらは重なりながら、大地の南縁に沿うように分布している。

ブロック各説

1号ブロック (第 22・24 図)

C グリッドの南東部に位置し、1号礫群とほぼ重なる。全体的にゴボウトレントチャードが入っているが、長径 6.10m、短径 3.05m の南北方向に長い楕円形状に石器が分布していたと思われる。

石器は、敲石 1 点 (第 28 図 -550)、剥片 19 点 (第 29 図 -324、第 30 図 -525、第 38 図 -456・527、第 40 図 -528・537・546、第 41 図 -533)、碎片 6 点、石核 3 点 (第 31 図 -457・476) の計 29 点、総重量 1,080.95g が出土しており、総重量は 1 ~ 6 号ブロック中最多である。また、接合資料は No.3・6・9・11 が出土している。

2号ブロック (第 22・24 図)

A グリッドの南西部と C グリッドの南東部にまたがって位置し、2号礫群の西半部分に重なる。全体的にゴボウトレントチャードが入っているが、直径 1.60 ~ 1.70m のほぼ円形状に石器が分布していたと思われる。当調査区で最も小さいブロックである。

石器は、剥片 14 点 (第 38 図 -427・564)、碎片 1 点、石核 1 点の計 16 点、総重量 111.05g が出土しており、総重量は 1 ~ 6 号ブロック中で最も少ない。また、接合資料は No.2・8 が出土している。

3号ブロック (第 22・25 図)

Aグリッドの中央部から南西部にかけて位置し、2号礫群の東部分・3号礫群・4号礫群の北西部と重なる。西部はゴボウトレンチャーが入っているが、石器の分布にはあまり影響がないようで、長径7.95m、短径4.05mの南南西-北北東方向に長い楕円形状に分布していたと思われる。当調査区で最も大きいブロックである。

石器は、ナイフ形石器1点（第27・34図-10）、台形様石器1点（第27図-33）、彫刻刀形石器1点（第27図-17）、抉入石器1点（第27図-9）、二次加工ある剥片2点（第27図-252・288）、微細剥離痕ある剥片2点（第28図-18・19）、剥片49点（第28図-4・241、第29図-249・250・272、第30図-95・118・120・181、第34図-6・295、第38図-92）、石刃1点（第30図-413）、碎片10点（第34図-14、第38図-175）、石核4点（第34図-22）の計72点、総重量900.49gが出土しており、点数は1～6号ブロック中最多である。黒曜石製石器は4点出土しており、産地分析によると星ヶ塔（17）、高原山（19）、和田峰系（181・182）との結果が出た。また、接合資料はNo.1・4・7・8が出土している。

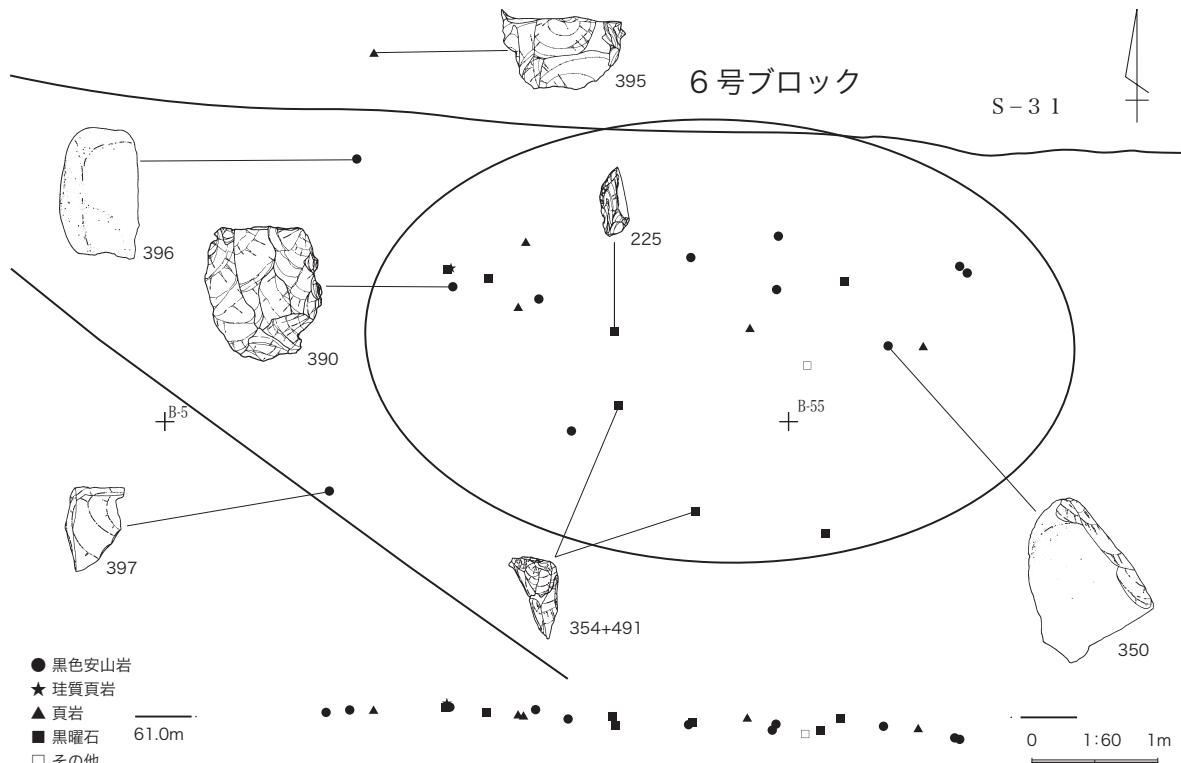
4号ブロック（第22・25図）

Aグリッドの東部に位置し、礫群との重複はない。長径3.15m、短径2.25mの北西-南東方向に長い楕円形状に石器が分布している。

石器は、剥片5点（第40図-142・143）、碎片6点、石核1点の計12点、総重量146.57gが出土しており、点数は1～6号ブロック中で最も少ない。また、接合資料はNo.5・7が出土している。

5号ブロック（第22・25図）

Aグリッドの南東部とBグリッドの北東部にまたがって位置し、4号礫群の東半部分と重なる。南端をS-31が通っているが、石器の分布にはあまり影響がなく、長径3.90m、短径2.85mの北西-南東方向に長



第26図 伊勢崎III遺跡 6号ブロック出土旧石器分布図

い楕円形状に分布している。

石器は、スクレイパー1点（第27図-500）、二次加工ある剥片1点（第27図-131）、剥片9点（第28図-140、第41図-137）、碎片8点の計19点、総重量276.43gが出土している。黒曜石製石器は1点（168）出土しており、産地分析によると和田峠系との結果が出た。また、接合資料はNo.9が出土している。

6号ブロック（第22・26図）

Bグリッド中央部に位置し、5号礫群とほぼ重なる。長径5.55m、短径3.50mの東西方向に長い楕円形状に石器が分布している。

石器は、ナイフ形石器1点（第27図-225）、剥片11点（第29図-350、第40図-354・491）、碎片9点、石核1点（第30図-390）の計22点、総重量181.49gが出土している。黒曜石製石器が7点と、1～6ブロック中最も多く出土しており、産地分析によると高原山（353）、和田峠系（225・347・354・387・391・491）との結果が出た。また、接合資料はNo.10が出土している。

石器組成

石器は、ローム中から179点出土した。トゥールとしては、ナイフ形石器（2点）・台形様石器（1点）・彫刻刀形石器（1点）・スクレイパー（1点）・抉入石器（1点）・二次加工ある剥片（3点）・微細剥離痕ある剥片（2点）がある。これらを合計すると11点で、出土石器総数に対するトゥールの割合は6.1%にすぎない。なお、本報告でのトゥールとは、「石器分類」の各項から敲石・剥片・石刃・碎片・石核を除いたものである。

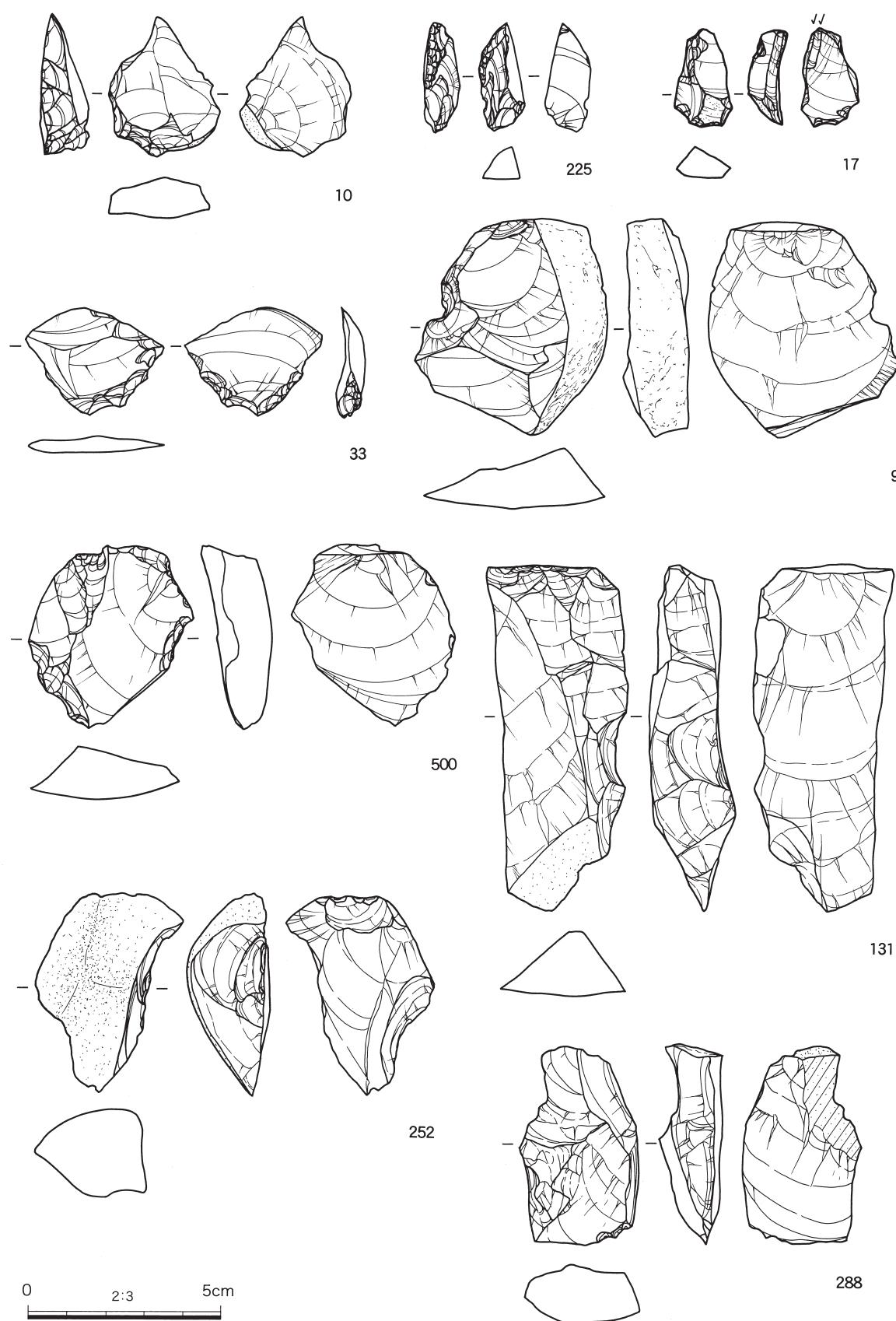
ブロック別に見ると、一番多く石器が出土したのは3号ブロック（72点・40.2%）で、トゥール数も大半（8点・72.7%）を占める。その次に多いのが6号ブロックの22点であるので、3号ブロックに石器が集中していることがわかる。

トゥール類を見てみると、ナイフ形石器は、3号・6号ブロックから出土している。台形様石器・彫刻刀形石器・抉入石器は、3号ブロックから出土している。スクレイパーは、5号ブロックから出土している。二次加工ある剥片は、3号（2点）・5号ブロックから出土している。微細剥離痕ある剥片は、3号ブロックから出土している。

その他の石器を見てみると、敲石は、1号ブロックから出土している。石刃は、3号ブロックから出土し

第10表 伊勢崎III遺跡 旧石器器種組成

器種＼ブロック等	1号	2号	3号	4号	5号	6号	外	他	計
ナイフ形石器			1			1		2	4
台形様石器			1						1
彫刻刀形石器			1						1
尖頭器								1	1
スクレイパー					1			2	3
抉入石器			1						1
二次加工ある剥片			2		1			19	22
微細剥離痕ある剥片			2						2
敲石	1								1
剥片	19	14	49	5	9	11	7	3	117
石刃			1						1
碎片	6	1	10	6	8	9			40
石核	3	1	4	1		1	2	2	14
計	29	16	72	12	19	22	9	29	208



第27図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図(1)

ている。石核は、5号ブロックを除く各ブロック及びブロック外から12点出土しているが、そのうち4点が3号ブロックから出土している。

出土した石器すべての器種組成を第10表に示したが、表中の「他」は、後世遺構埋土中出土品および表採品を表している。

石器各説 (第27~31・34・38・40・41図、巻頭図版二、図版六・一五~一八)

ここではローム中より出土した石器を扱い、遺構埋土中から出土した石器は「層位不明石器」に掲載した。

ナイフ形石器

2点 (第27・34図-10、第27図-225) 出土していて、それぞれ形状が異なる。

10は、3号ブロックからの出土で、接合No.1の資料である。石材は黒色安山岩、素材は縦長の剥片。背面図左側縁に急角度の二次加工が施されている。

225は、6号ブロックからの出土で、石材は黒曜石である。素材はやや厚手の横長剥片である。背面図右側縁下部と左側縁に急角度の二次加工が施されている。また、この加工により素材の打面部は除去されている。産地分析の結果、被熱しているため正確な値が出ていないが、おそらく和田岬系であろうと推定されている (p46・第11表)。

台形様石器

3号ブロックから1点 (第27図-33) 出土した。石材は頁岩、素材は横長剥片である。素材の打面部を基部、末端部を刃部としている。基部の腹面に、打面を除去するように二次加工が施されており、平面形は扇形を呈している。

彫刻刀形石器

3号ブロックから1点 (第27図-17) 出土した。石材は黒曜石、素材は剥片である。素材上端部に腹面側から二次加工を施し、そこを打面として腹面図左側縁に彫刻刀面を2条作り出している。分析の結果、産地は星ヶ塔とされている (p46・第11表)。

スクレイパー

5号ブロックから1点 (第27図-500) 出土した。石材は頁岩、素材は縦長剥片である。背面図左側縁下半部および右側縁上半部に連続した二次加工が認められる。

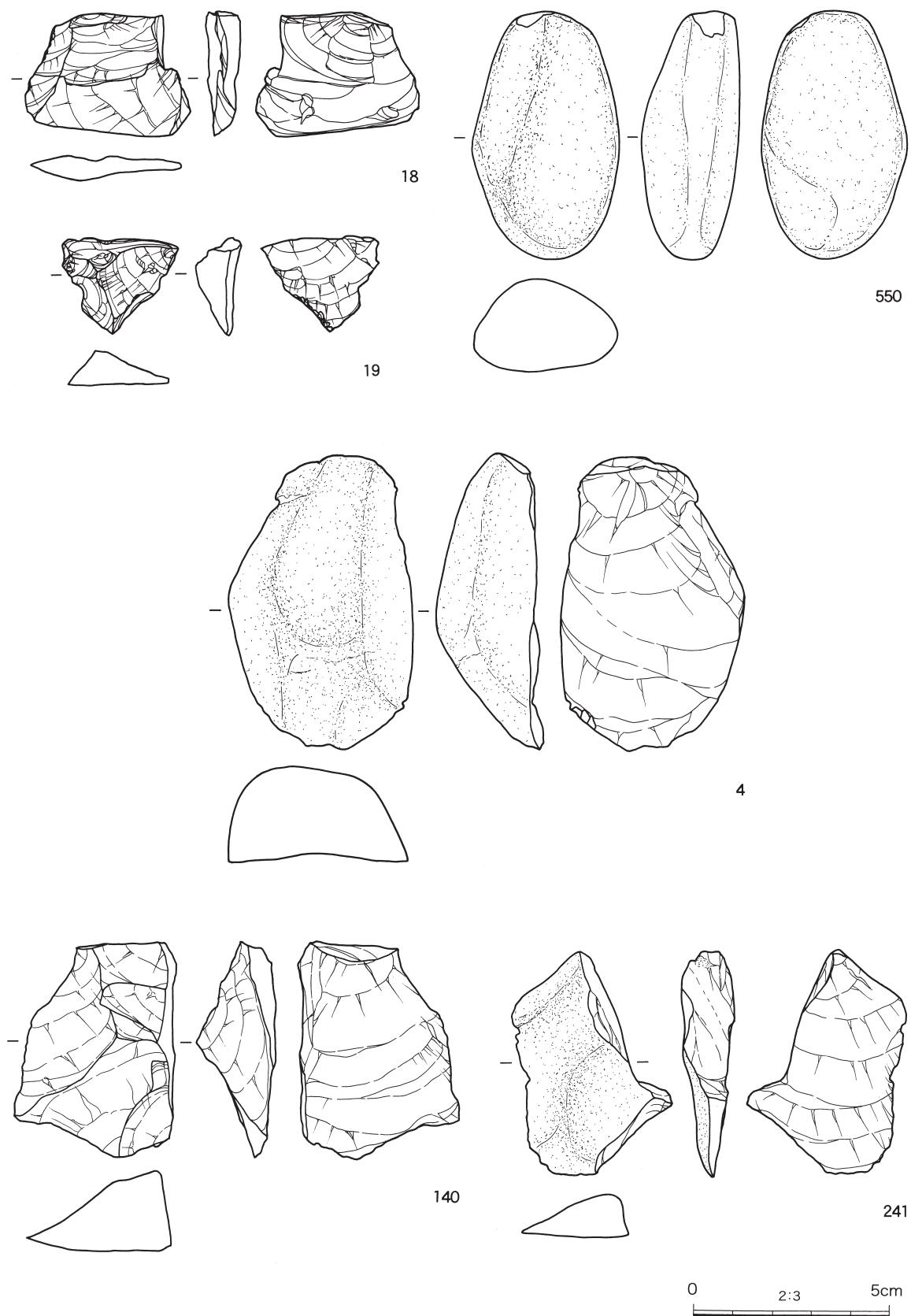
抉入石器

3号ブロックから1点 (第27図-9) 出土した。石材は珪質頁岩、素材は縦長剥片。末端部は折れている。抉入部は背面図左側縁中央に認められる。

二次加工ある剥片

3点 (第27図-131・252・288) 出土した。

131は、5号ブロックからの出土で、石材は黒色安山岩、素材は縦長剥片である。背面図右側縁下部に急



第28図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図 (2)

角度の二次加工がみられる。

252 は、3号ブロックからの出土で、石材は黒色安山岩である。素材は厚手の剥片で背面図右側縁に急角度の二次加工が、また腹面図右側縁および上端にも二次加工が施されている。

288 は、3号ブロックからの出土で、石材は玉髓である。背面図右側縁は折れ面、二次加工は下端部の一部に施されている。

微細剥離痕ある剥片

2点 (第28図-18・19) 出土し、どちらも3号ブロックより出土した。

18の石材は、頁岩である。素材は横長剥片、背面図左側縁の一部に微細剥離痕が認められる。

19の石材は、黒曜石である。素材の上端部は折れ面、腹面図左側縁下部に微細剥離痕が認められる。分析の結果、産地は高原山とされている (p46・第11表)。

敲石

1号ブロックから1点 (第28図-550) 出土した。石材はデイサイトである。平面形は長楕円形を呈していて、両端部に敲打痕が認められる。

剥片・碎片

剥片は、117点出土しているが、折れ面で接合するものが5組10点あるので、実際は112点になる。このうち接合資料関係を除き17点 (第28図-4・140・241、第29図-249・250・272・324・350・396・397・519、第30図-525・439・181・95・118・120) を図示した。石材は全部で10種類あるが、主要なものは黒色安山岩 (70点)、頁岩 (18点)、珪質頁岩 (8点) である。これらの石材で全体の82.1%を占める。黒曜石の剥片は3点 (181・354・491) 出土したが、すべて和田岬産との分析結果が出ており (p46・第11表)。

碎片は、接合資料関係を含め40点出土した。石材の傾向は剥片とほぼ同様である。黒曜石の碎片は6点出土したが、内1点 (353) が高原山産で、あとの5点 (168・182・347・387・391) は和田岬産との分析結果が出ており (p46・第11表)。

石刃

3号ブロックから1点 (第30図-413) 出土した。石材はチャートである。背面がすべて腹面と同方向の剥離面によって構成されており、伊勢崎II遺跡発掘調査報告書で分類したI類に相当する。打面調整および頭部調整は認められない。

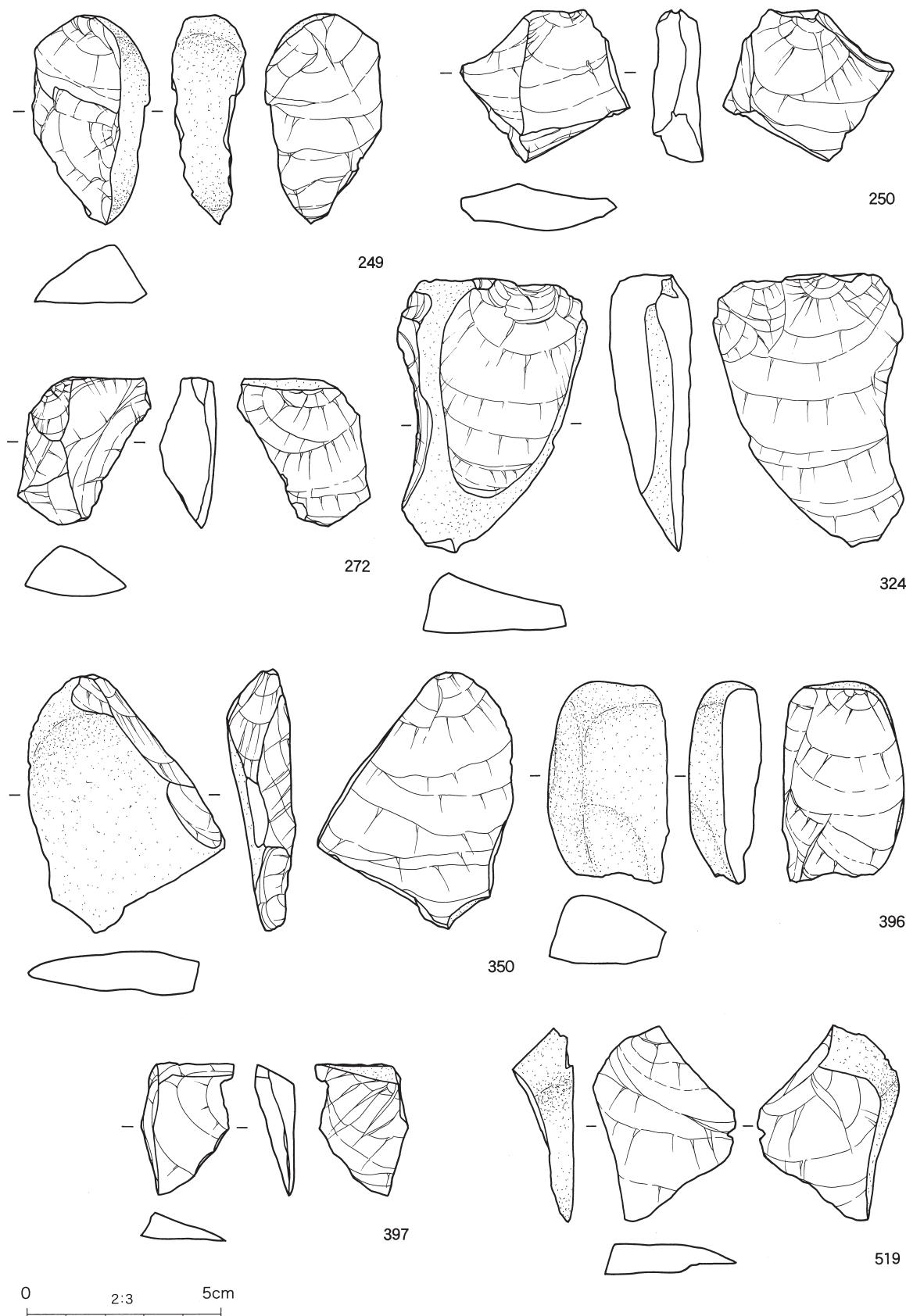
石核

接合資料関係を含め5点出土し、そのうち4点 (第30図-390、第31図-457・476・395) を図示した。

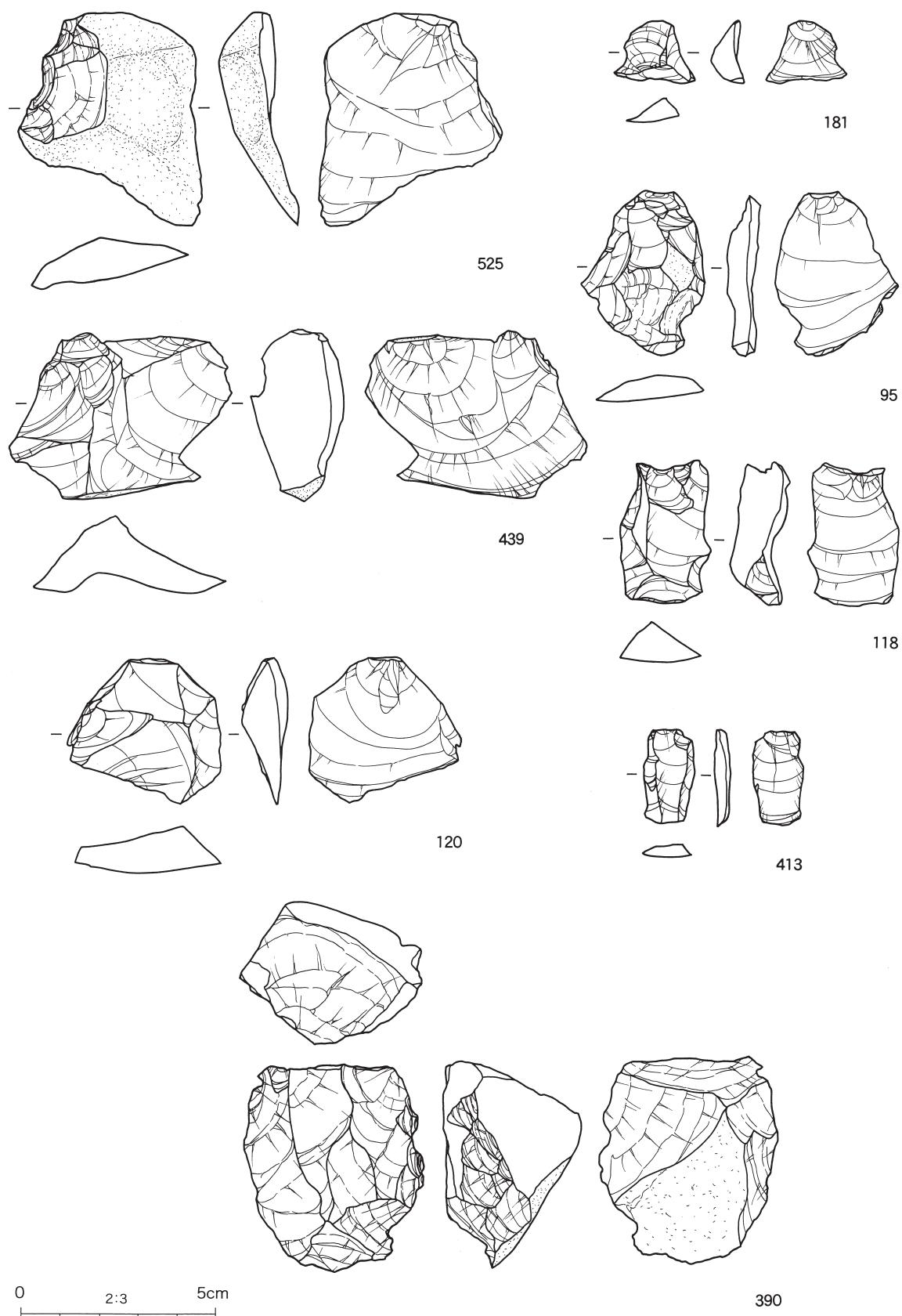
390は、6号ブロックからの出土で、石材は黒色安山岩。最終段階の工程では、作業面を固定し、左から右に回るように剥片が剥離されている。

457は、1号ブロックからの出土で、石材は黒色安山岩。最終段階の工程では、楕円盤の木口部分を作業面に剥片が剥離されている。

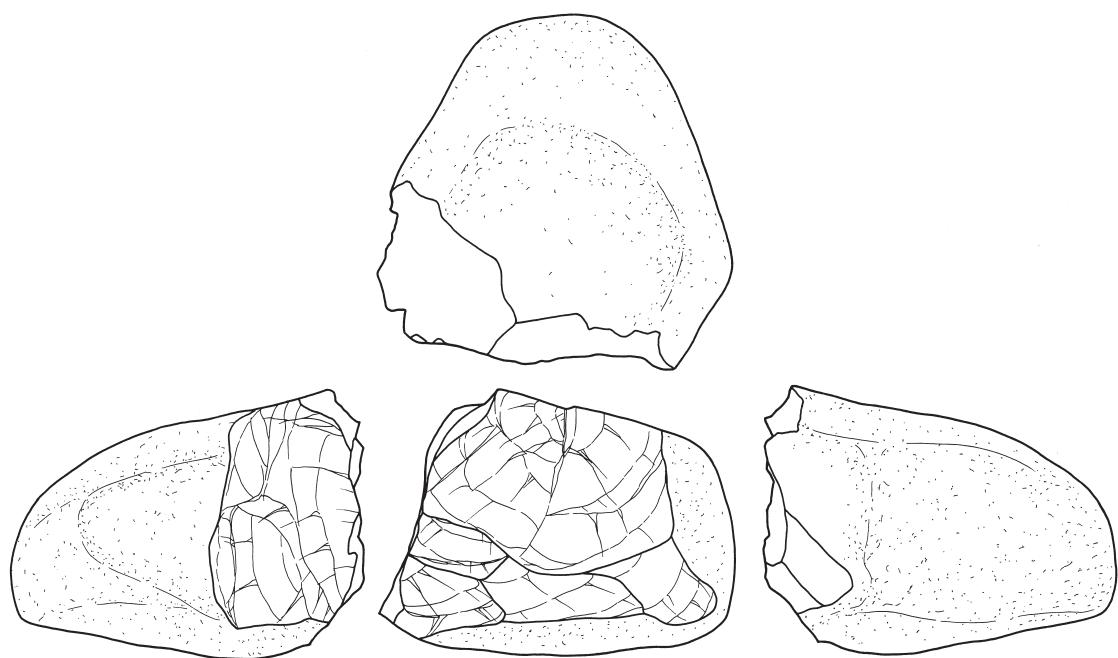
476は、1号ブロックからの出土で、石材は黒色安山岩。最終段階の工程では、上部に打面を作出後、数



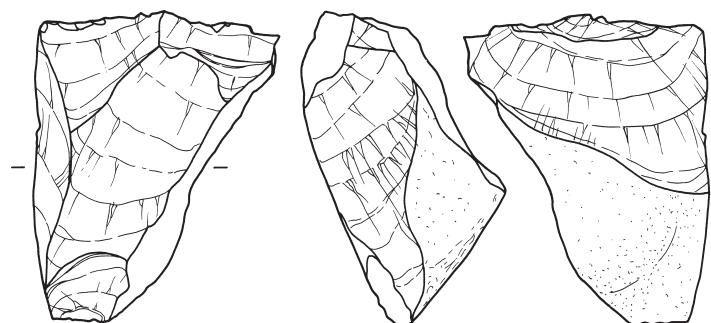
第29図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図 (3)



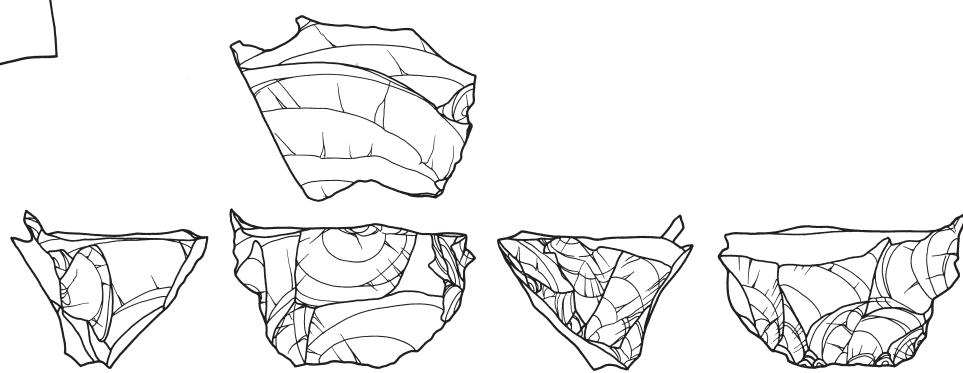
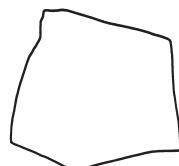
第30図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図(4)



457



476



395

0 2:3 5cm

第31図 伊勢崎III遺跡 旧石器実測図(5)

枚の剥片が剥離されている。打面調整等は認められない。

395は、7号ブロックからの出土で、石材は頁岩。打面転位を頻繁に行いながら剥片を剥離したと考えられる。

石器石材

石材は12種類におよぶが、主なものは黒色安山岩・頁岩・チャート・珪質頁岩である。この上位4種類で、全体の84.1%（数量）を占めている。出土した全石器の石材組成を第12表に示したが、表中の「他」は、後世遺構埋土中出土および表採を表している。これらの石材1点あたりの重量は、単純計算で黒色安山岩が25.17g、頁岩が10.02g、チャートが5.19g、珪質頁岩が6.17gとなる。したがって、黒色安山岩の石器は、一点一点が非常に大きい（重い）傾向を指摘できる。

器種との関係を見ると、トゥールに使用されている石材は、黒色安山岩・珪質頁岩・頁岩・黒曜石・チャート・玉髓・珪化凝灰岩であるが、前述の上位4種類で全体の8割を占める。出土した全石器の器種別石材組成を第13表に示したが、表中の「ナイフ」はナイフ形石器、「台形」は台形様石器、「彫刻刀」は彫刻刀形石器、「搔器」はスクレイパー、「抉入」は抉入石器、「RF」は二次加工ある剥片、「MF」は微細剥離痕ある剥片をそれぞれ表している。また、（ ）内は、折れ面等で接合した資料の、接合前の数量を指している。

黒曜石については、ローム中から出土したすべての石器11点、後世遺構埋土中などから出土した特徴的な石器4点の、併せて15点を蛍光X線分析にかけた（付章・第3節を参照）。個々の分析結果は、「ブロック各説」「石器各説」「接合資料」の項でも触れているが、それらをまとめたものが第11表である。11点が和田岬系、2点が高原山、1点が星ヶ塔、1点が高原山？と推定され、分析試料のほとんどが被熱しているが、和田岬産という推察がなされている。ところで、高原山産と和田岬産とされる試料は、外見上も異なっている。高原山産の黒曜石が黒色・不透明で球顆状の結晶を多く含むのに対し、和田岬産の黒曜石は概ね透明度が高く、黒い縞模様が入っているのが特徴である。

黒色安山岩については、肉眼鑑定 第11表 伊勢崎Ⅲ遺跡 黒曜石製旧石器産地分析結果

（付章・第2節を参照）により群馬県武尊山産との結果が出た。併せて蛍光X線分析（付章・第3節を参照）を行ったところ、栃木県・群馬県（武尊山を含む）・千葉県の標準試料と比較しても該当せず、産地同定には至らなかった。よって、本報告では蛍光X線分析結果を採用することにし、武尊山産ではなく、県内の未知の原石であろうとの見解に立ちたい。

試料No.	取上No.	図	ブロック	器種	産地
1	354+491	40	6	剥片（接合資料No.10）	和田岬系・被熱
2	17	27	3	彫刻刀形石器	星ヶ塔
3	19	28	3	微細剥離痕のある剥片	高原山
4	181	30	3	剥片	和田岬系・被熱
5	225	27	6	ナイフ形石器	和田岬系・被熱
6	168	—	5	碎片	和田岬系・被熱
7	182	—	3	碎片	和田岬系・被熱
8	347	—	6	碎片	和田岬系・被熱
9	353	—	6	碎片	高原山
10	387	—	6	碎片	和田岬系・被熱
11	391	—	6	碎片	和田岬系・被熱
12	B区・9	—	—	碎片	和田岬系・被熱
13	MOISIII・1	—	—	碎片	和田岬系・被熱
14	MOISIII・2	—	—	二次加工ある剥片	高原山？
15	MOISIII・3	—	—	二次加工ある剥片	和田岬系・被熱

接合資料（第32～41図、図版一九～二一）

ここでは石器接合資料のみを扱い、礫の接合資料については次項「礫群各説」内に詳述した。

接合資料は11組あるが、そのうち9組を図示した。No.1を除けばすべて2点の接合資料である。

また、旧石器接合資料分布図（第32・33・35～37図）中の「→」は剥離順序、「*」は折れ面などの接合、「CO.」は石核を表している。なお、「折れ面の接合」とは、剥片の折れ面接合や石核の破損面接合など、剥離

第12表 伊勢崎III遺跡 旧石器石材組成 (ブロック別)

数量

石材\ブロック等	1号	2号	3号	4号	5号	6号	外	他	計
黒色安山岩	16	13	37	7	3	9	6	4	95
珪質頁岩	2	1	7	1	5	1		3	20
頁岩	2	2	10		5	4	2	10	35
黒曜石			4		1	7			12
チャート	7		5	3		1		9	25
玉髓			8		2		1	2	13
瑪瑙				1					1
カタクラサイト	1				1				2
砂岩					1				1
董青石ホルンフェルス					1				1
珪化凝灰岩			1					1	2
デイサイト	1								1
計	29	16	72	12	19	22	9	29	208

重量 (g)

石材\ブロック等	1号	2号	3号	4号	5号	6号	外	他	計
黒色安山岩	923.55	101.81	667.38	141.51	96.18	129.52	90.83	240.79	2391.57
珪質頁岩	0.63	4.06	51.43	0.41	20.90	4.37		39.64	121.44
頁岩	4.97	5.18	67.52		36.08	19.99	70.33	146.56	350.63
黒曜石			8.20		0.08	8.37			16.65
チャート	24.64		18.77	2.39		19.24		64.75	129.79
玉髓			70.36		0.21		2.31	21.80	94.68
瑪瑙				2.26					2.26
カタクラサイト	57.60				73.55				131.15
砂岩					13.22				13.22
董青石ホルンフェルス					36.21				36.21
珪化凝灰岩			16.83					25.38	42.21
デイサイト	69.56								69.56
計	1080.95	111.05	900.49	146.57	276.43	181.49	163.47	538.92	3399.37

第13表 伊勢崎III遺跡 旧石器石材組成 (器種別)

石材\ブロック等	ナイフ	台形	彫刻刀	尖頭器	搔 器	抉 入	R F	M F
黒色安山岩	1						2	
珪質頁岩					1	1	2	
頁岩	2	1		1	2		6	1
黒曜石	1		1					1
チャート							8	
玉髓							3	
瑪瑙								
カタクラサイト								
砂岩								
董青石ホルンフェルス								
珪化凝灰岩							1	
デイサイト								
計	4	1	1	1	3	1	22	2
石材\ブロック等	敲 石	剥 片	石 刃	碎 片	石 核	合 計		
黒色安山岩		67 (70)		10	12	3	(95)	
珪質頁岩		8		8		4		
頁岩		18		3	1	13		
黒曜石		3		6		3		
チャート		6 (7)	1	9		8	(25)	
玉髓		5 (6)		3	1	3	(13)	
瑪瑙				1		0		
カタクラサイト		2				0		
砂岩		1				0		
董青石ホルンフェルス		1				0		
珪化凝灰岩		1				1		
デイサイト		1				0		
計	1	112 (117)	1	40	14	35	(208)	

作業には関連しない接合のことである。

接合資料No1 (第32・34図、図版一九)

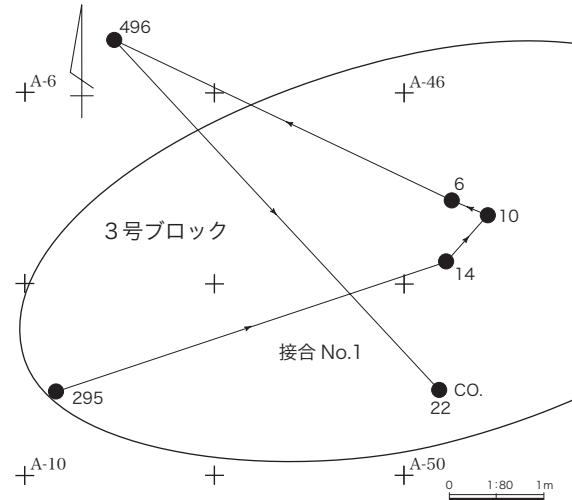
石材は黒色安山岩である。ナイフ形石器1点、剥片3点、碎片1点、石核1点で構成される。原石は径5cmほどの円礫である。

剥片生産は以下の工程に分けられる。

- 自然面を打面に剥片3枚以上の剥離 (295側面図にみられる剥離)。
- aの打面・作業面の90°転位、295→10+14の剥離。
- bの打面の180°転位、剥片2枚以上の剥離。
- cの打面の180°転位、剥片1枚の剥離→6の剥離。
- dの打面の180°転位、496の剥離→剥片2枚以上の剥離。

なお、これらの工程とは別に、ナイフ形石器(10)とその製作剥片(碎片14)が接合している。

分布は、ほぼ3号ブロック内で完結する(第32図)。上下のレベル差は7.4cmである。



第32図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図(1)

接合資料No2 (第33・38図、図版一九)

石材は黒色安山岩である。剥片2点で構成される。同一打面から427→564の順に剥離されている。

2号ブロック中央に分布し(第33図)、上下のレベル差は3.9cmである。

接合資料No3 (第33・38図、図版二〇)

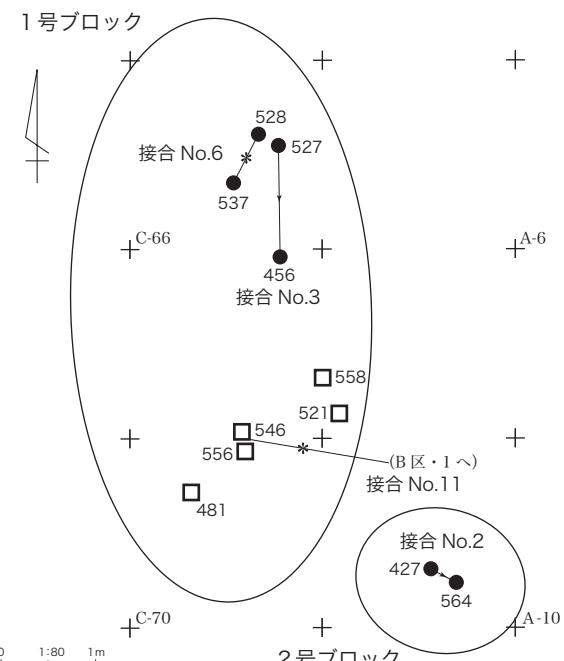
石材は黒色安山岩である。剥片2点で構成される。527が剥離された後、同一作業面で打点を横に移動して456が剥離されている。

1号ブロック北寄りに分布し(第33図)、上下のレベル差は7.2cmである。

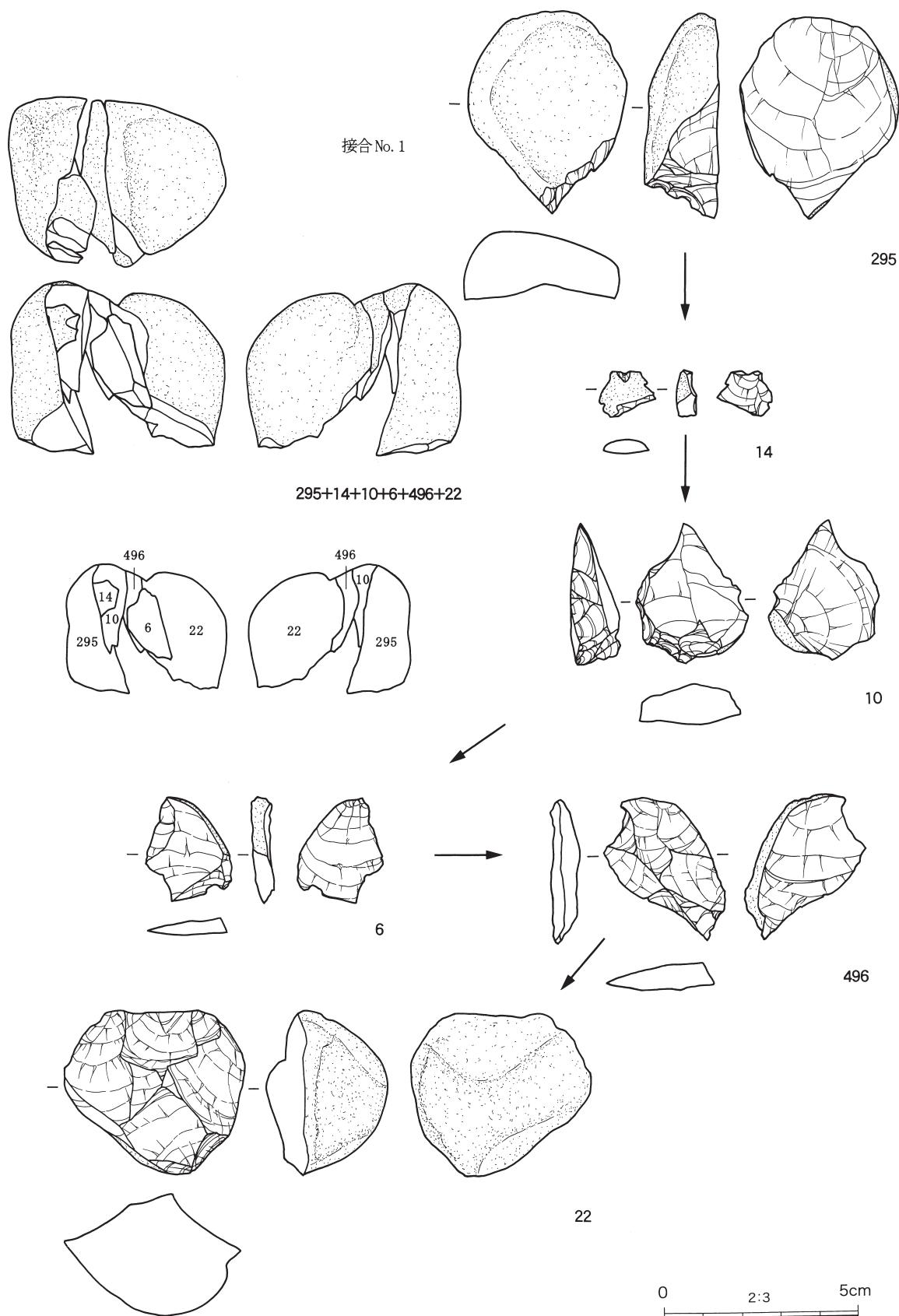
接合資料No4 (第35・38図、図版二〇)

石材は黒色安山岩である。剥片(92)と碎片(175)で構成される。碎片は剥片が剥離された際に、同時に剥がれたものと思われる。

3号ブロック東寄りに分布し(第35図)、上下のレベル差は10.8cmである。



第33図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図(2)



第34図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料実測図(1)

接合資料No.5 (第35・40図、図版二〇)

石材は黒色安山岩。折れた剥片が接合したもの。4号ブロック北西寄り (第35図) に分布し、上下のレベル差は 5.4 cm である。

接合資料No.6 (第33・40図、図版二〇)

石材は黒色安山岩。折れた剥片が接合したものであるが、接合してもなお下部に折れ面が残るため、この剥片は少なくとも3分割されていたと考えられる。

1号ブロック北寄りに分布し (第33図)、上下のレベル差は 2.9 cm である。

接合資料No.7 (第35図)

実測図と写真図版は掲載していないが、石材は黒色安山岩で、折れた剥片と碎片が接合したもの。

3号ブロックと4号ブロックに分布しており、相互の距離は 5.36 m である (第35図)。上下のレベル差は 6.2 cm である。

接合資料No.8 (第36図)

実測図と写真図版は掲載していないが、石材は黒色安山岩で、折れた剥片が接合したものである。

2号ブロックと3号ブロックに分布しており、相互の距離は 5.02 m である (第36図)。上下のレベル差は 2.6 cm である。

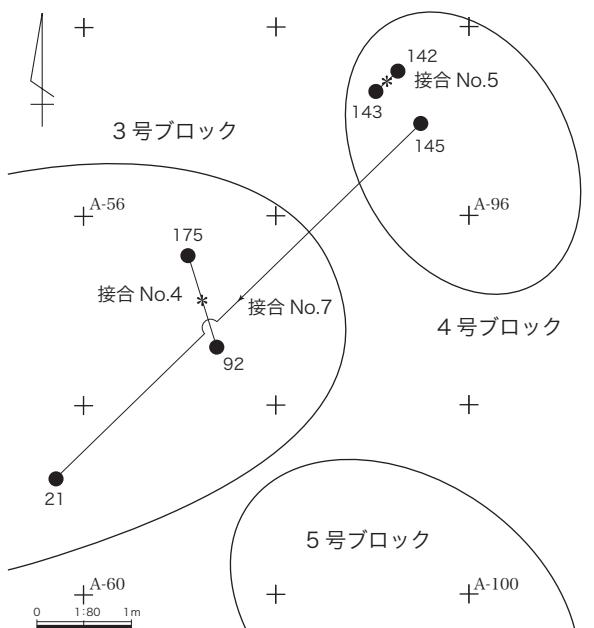
接合資料No.9 (第39・41図、図版二一)

石材はカタクラサイトである。剥片 2 点で構成される。同一打面から 533 → 137 の順に剥離されている。

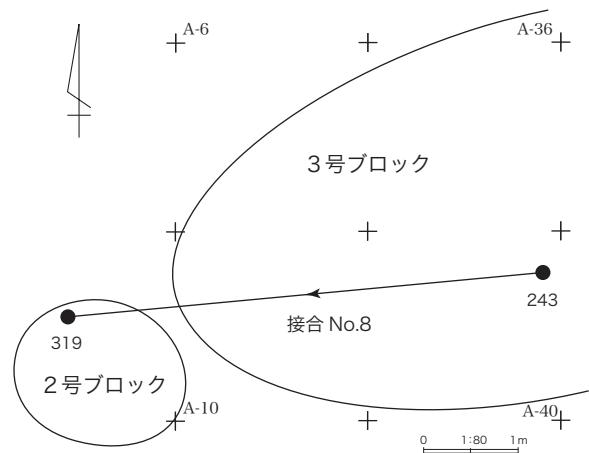
1号ブロックと5号ブロックに分布し (第39図)、相互の距離は 11.96 m とかなり離れている。上下のレベル差は 23.3 cm である。

接合資料No.10 (第37・40図、図版二一)

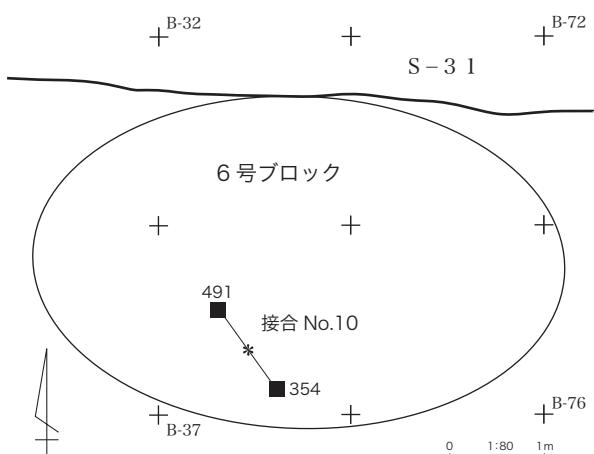
石材は黒曜石である。分析の結果、熱を受けているが、おそらく和田峠系であろうとされている (p46・第11表)。折れた剥片が接合したものであるが、接



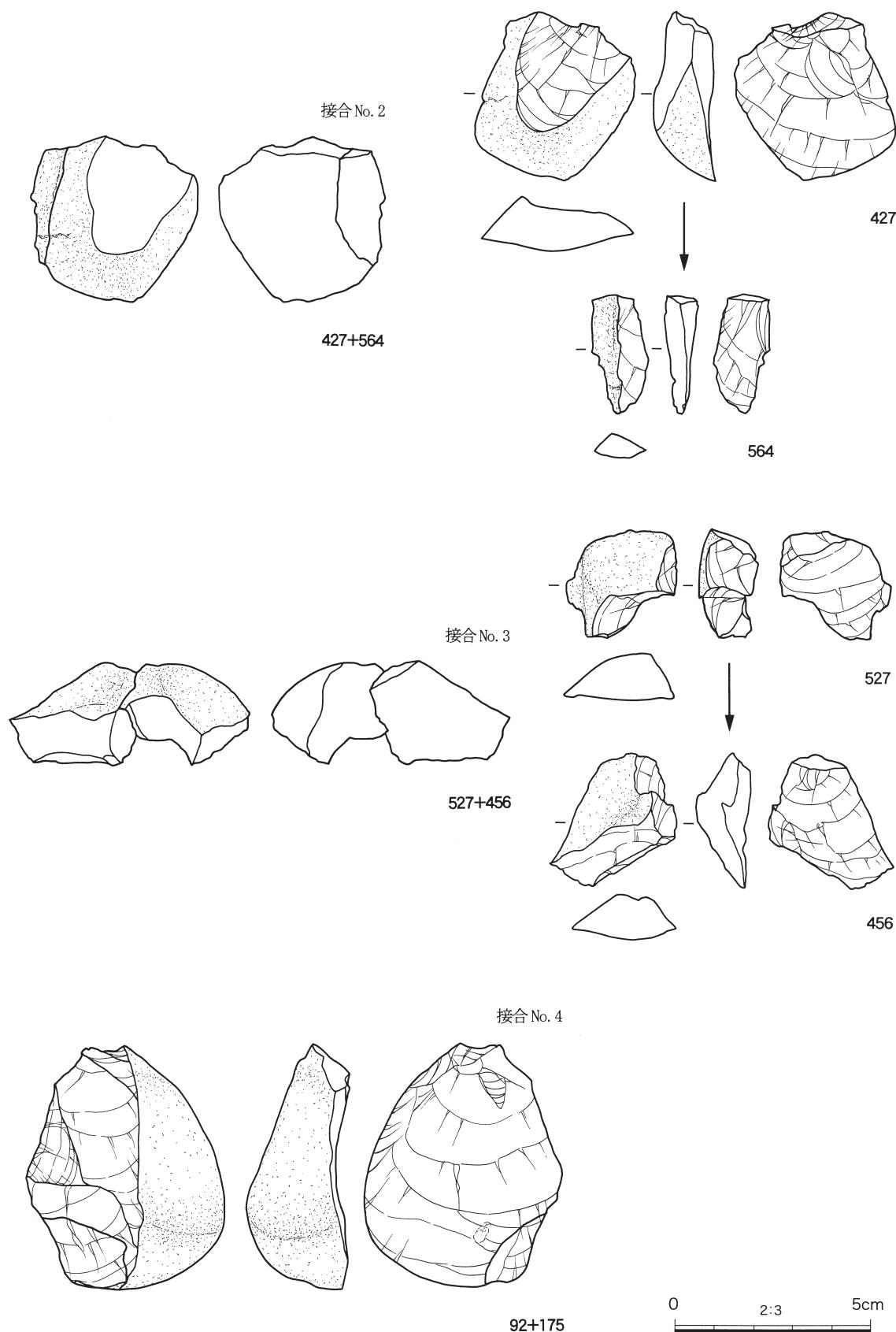
第35図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図 (3)



第36図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図 (4)



第37図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図 (5)



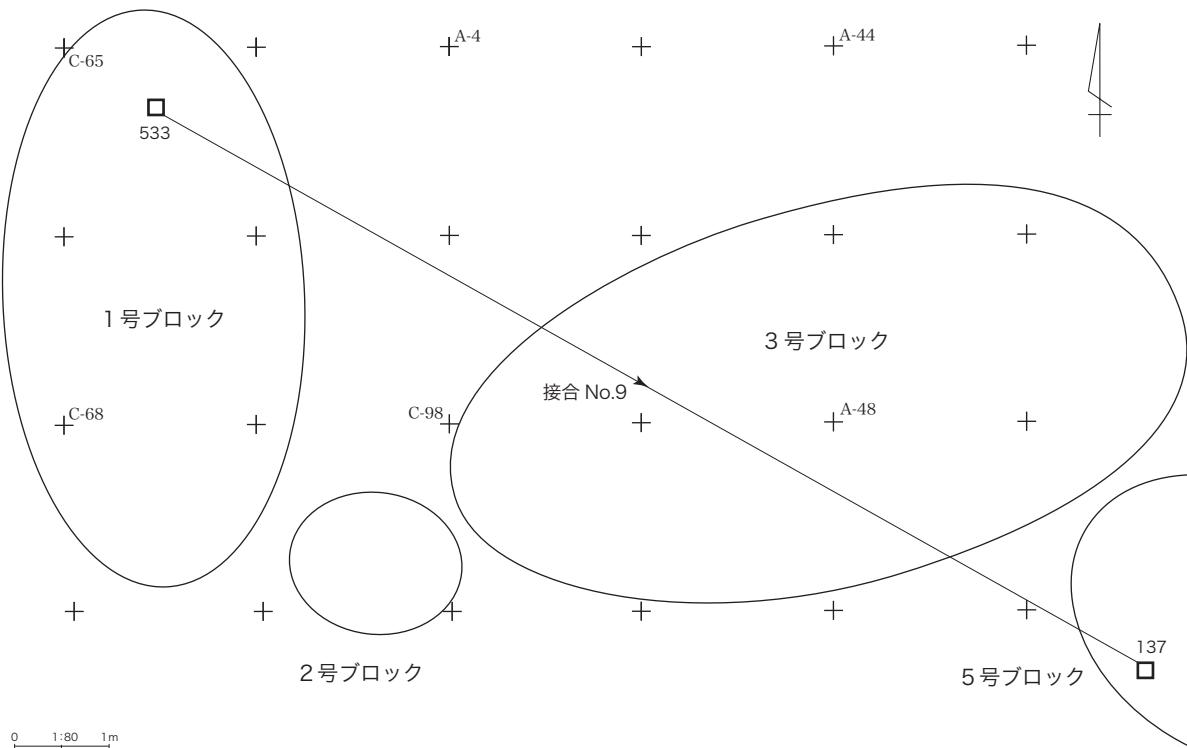
第38図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料実測図（2）

合してもなお側面に折れ面が残るため、この剥片は少なくとも3分割されていたと考えられる。

6号ブロック南寄りに分布する（第37図）。上下のレベル差は1.5cmである。

接合資料No.11（第33・40図、図版二一）

石材はチャートで、折れた剥片が接合したもの。周辺に同一母岩と思われる剥片（481・521・556・558）が散在している。546は1号ブロック南寄りに分布するが（第33図）、B区・1は一括出土のため、原位置は不明。



第39図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料分布図（6）

礫群各説（第22図）

礫群は5基確認され、各群の詳細は下記に、石材別組成は第14表に示した。

接合した資料は57点（第42～46図）で、同一母岩を除くと53点となる。

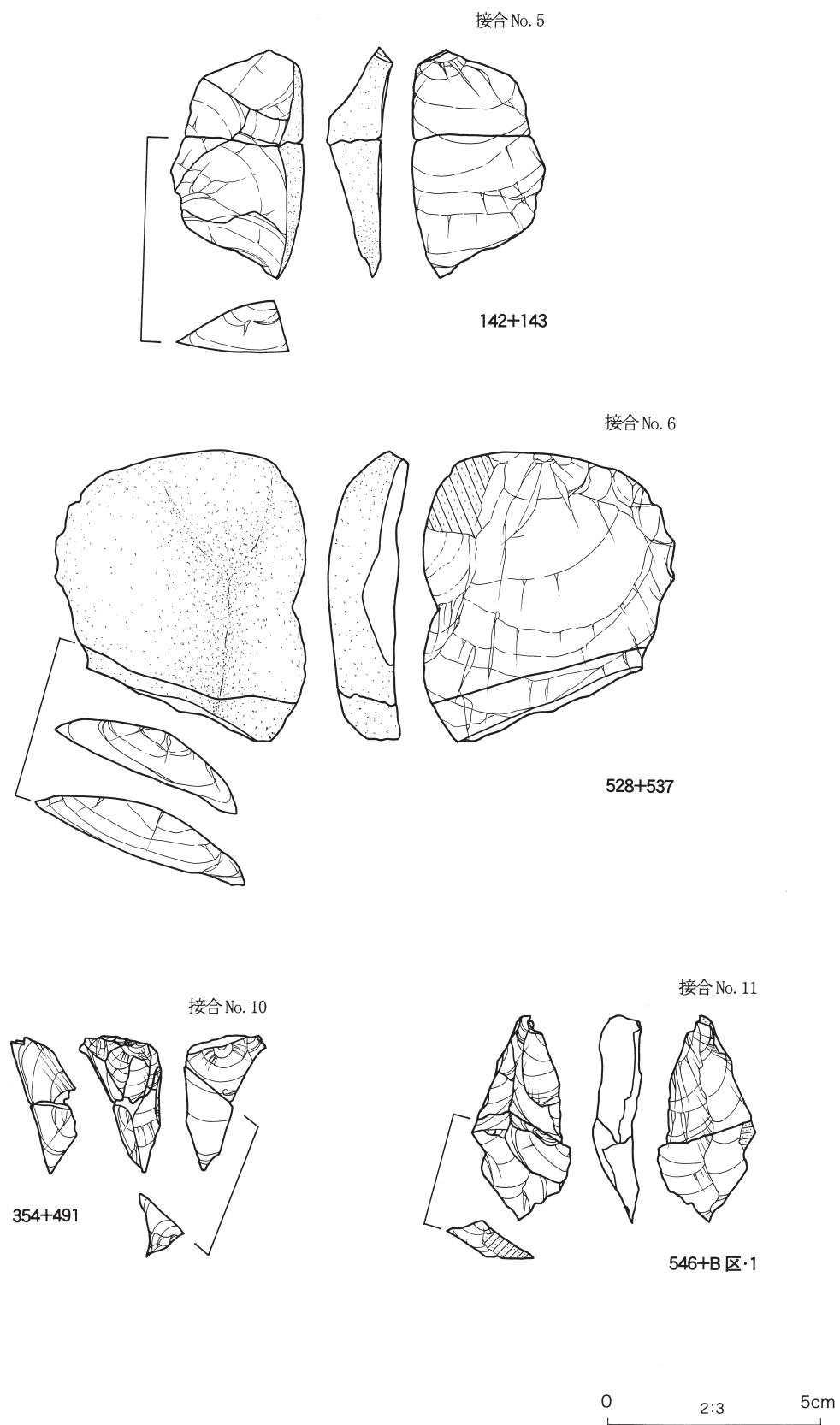
最も接合数が多かった資料はNo.8で、11点接合した。ほとんどが4号礫群内に収まるが、1点のみ3号礫群内であった。接合して完形になる資料は、No.32（3号礫群）・36（2号礫群）・47（1号礫群）・51（1号礫群）の4組である。

一番距離の離れた接合資料はNo.46で、直線距離で6.22mを測り、1・3号礫群にまたがっている。

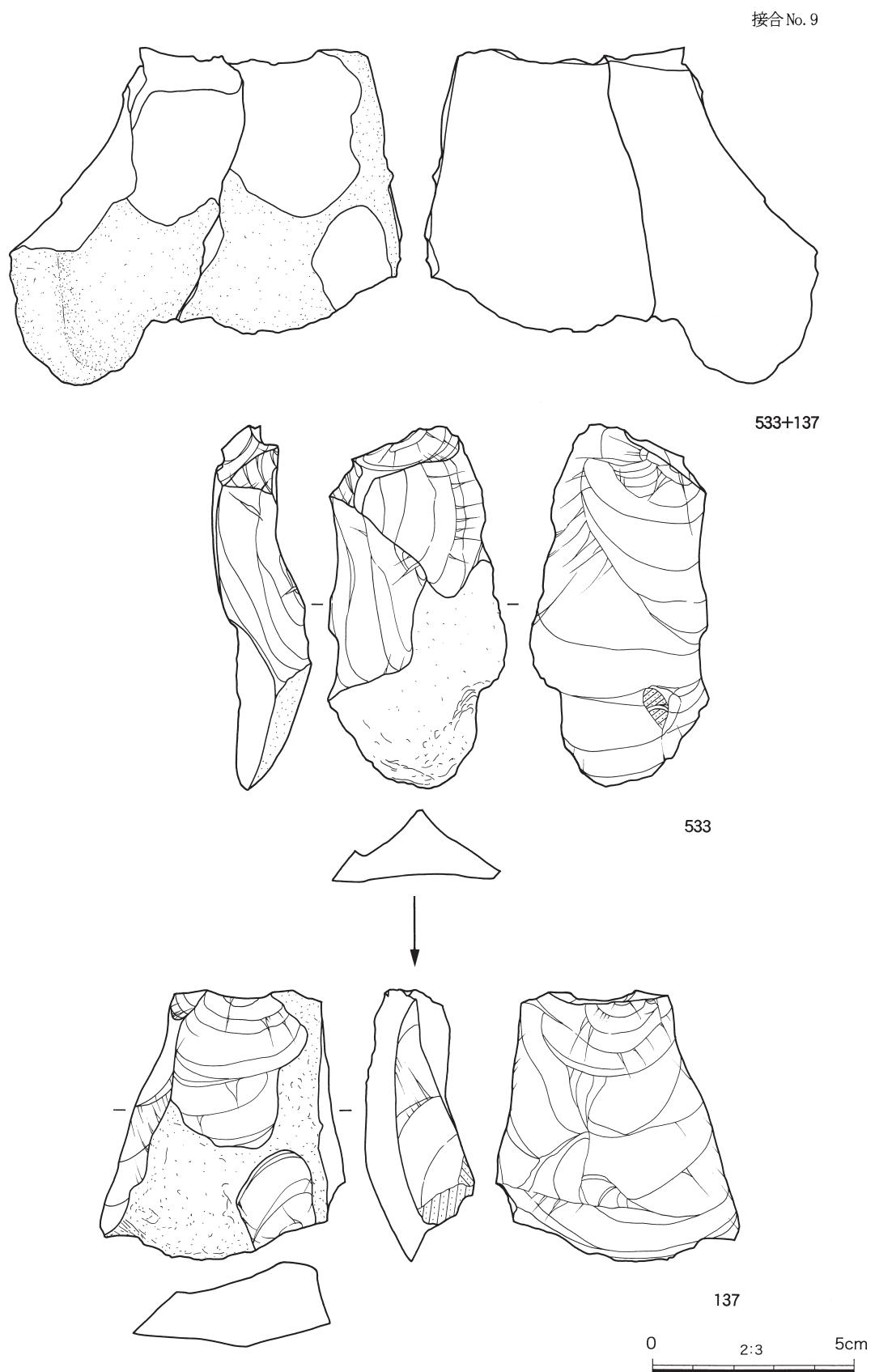
同一母岩と思われるものは、No.14（4号礫群）・20（4号礫群）・46（1・3号礫群）と、No.1（3号礫群）・27（3号礫群）・41（1号礫群）の2組である。あくまでも、外見的特徴から判断したもので、直接の接合点はない。また、直接接合した資料に比べて分布範囲が広い（前者が直線距離で12.52m、後者が7.43m）ので、やや信憑性が低いとも考えられる。

1号礫群（第22・46図）

Cグリッドの南東部に位置し、1号ブロックとほぼ重なる。全体的にゴボウトレントチャードが入っている



第40図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料実測図（3）



第41図 伊勢崎III遺跡 旧石器接合資料実測図 (4)

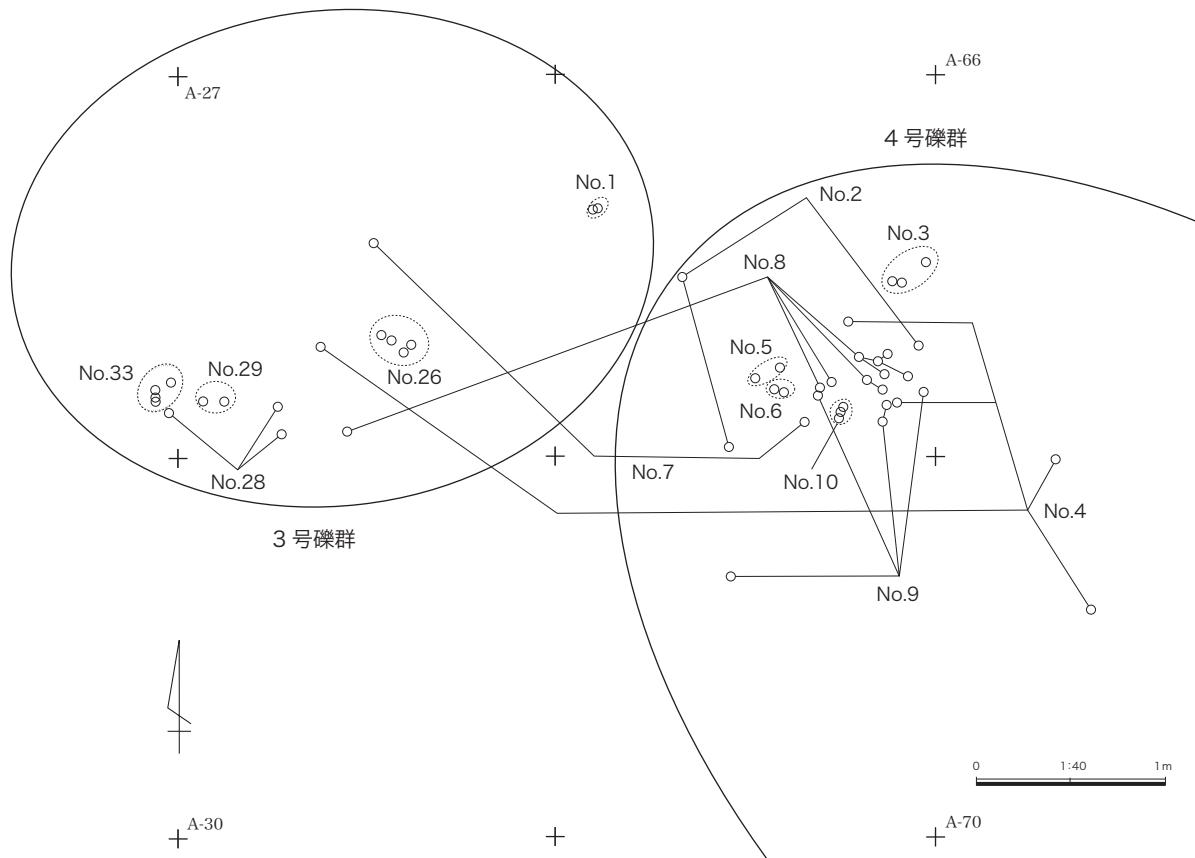
第14表 伊勢崎Ⅲ遺跡 磯石材組成

数量

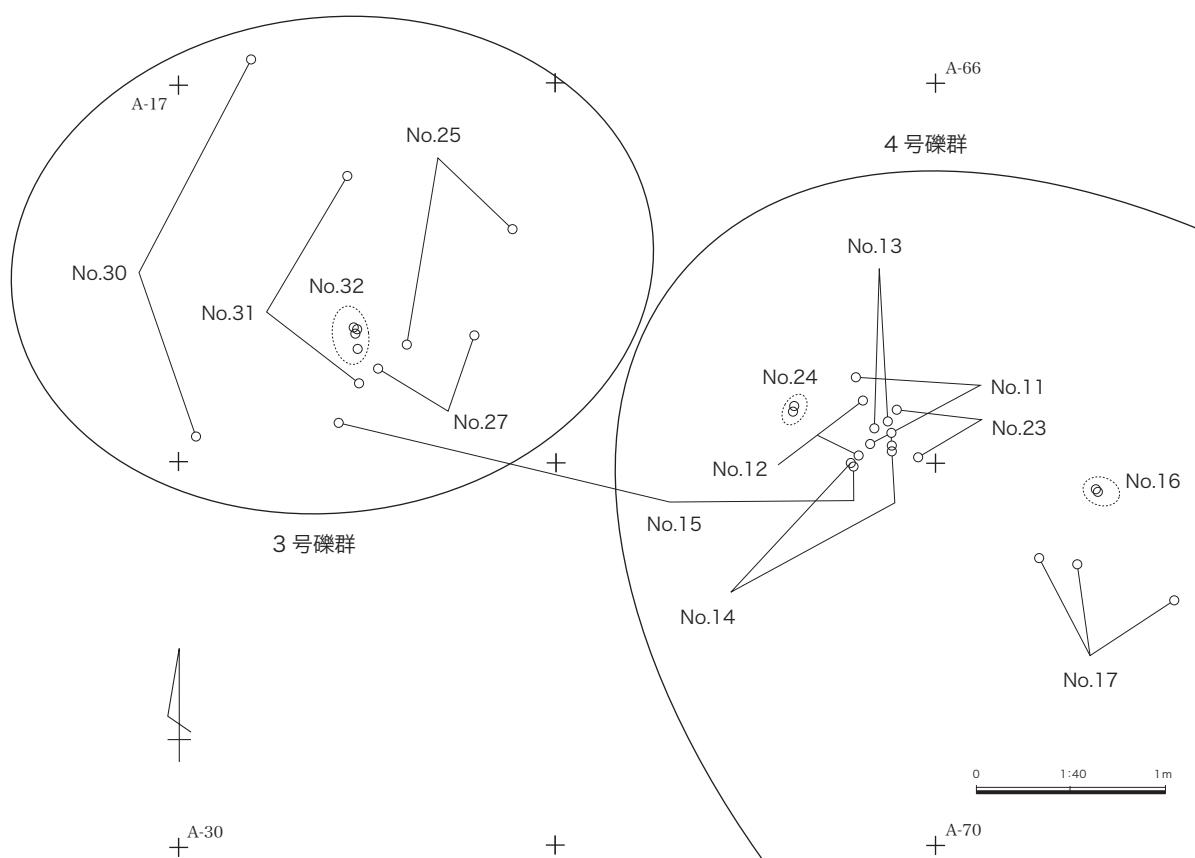
石材\礫群等	1号	2号	3号	4号	5号	外	計
黒雲母角閃石花崗閃綠岩	1		4				5
石英斑岩	4	1		4	4	1	14
花崗斑岩	1						1
黒雲母角閃石花崗斑岩	1						1
黒雲母角閃石花崗閃線斑岩	2						2
流紋岩	1	5	1	5	2	1	15
デイサイト	2	3	1	2	2	1	11
輝石デイサイト				1	1		2
多孔質輝石デイサイト				1			1
安山岩	1	2	1		1	2	7
無斑晶質安山岩	1						1
多孔質安山岩		2	1	3			6
多孔質輝石安山岩			1		1		2
緻密質安山岩	1				1		2
輝石安山岩	5	12	8	16	4	5	50
石英含有輝石安山岩	1						1
火山礫凝灰岩				4		1	5
デイサイト質火山礫凝灰岩						1	1
流紋岩質溶結火山礫凝灰岩			1				1
デイサイト質溶結凝灰岩	3	3	4	7		2	19
流紋岩質凝灰岩	1	2	2	22	4	3	34
デイサイト質凝灰岩	14	9	17	31	3	8	82
流紋岩質溶結凝灰岩	7		4	6		1	18
礫岩			1				1
礫質砂岩			4				4
砂岩	9		3	20	4	3	39
頁岩	3	5	1		5	1	15
チャート	19	3	8	8	2	4	44
珪化岩	2						2
計	79	47	62	130	34	34	386

重量 (g)

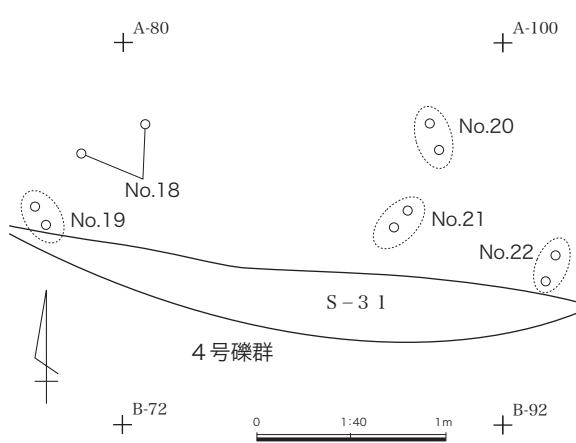
石材\礫群等	1号	2号	3号	4号	5号	外	計
黒雲母角閃石花崗閃綠岩	3.11		78.75				81.86
石英斑岩	361.85	42.48		34.96	58.97	262.37	760.63
花崗斑岩	4.58						4.58
黒雲母角閃石花崗斑岩	271.05						271.05
黒雲母角閃石花崗閃線斑岩	174.57						174.57
流紋岩	11.05	170.82	2.11	163.40	9.54	1.94	358.86
デイサイト	341.71	41.24	27.91	66.43	3.00	12.26	492.55
輝石デイサイト				13.46	2.04		15.50
多孔質輝石デイサイト				9.80			9.80
安山岩	0.39	90.83	4.23		6.29	4.17	105.91
無斑晶質安山岩	18.88						18.88
多孔質安山岩		381.00	3.14	128.20			512.34
多孔質輝石安山岩			21.39		20.89		42.28
緻密質安山岩	284.77				10.05		294.82
輝石安山岩	306.35	1,161.04	708.90	1,191.34	140.41	543.73	4,051.77
石英含有輝石安山岩	4.24						4.24
火山礫凝灰岩				759.71		25.78	785.49
デイサイト質火山礫凝灰岩						371.41	371.41
流紋岩質溶結火山礫凝灰岩			32.82				32.82
デイサイト質溶結凝灰岩	305.37	91.90	236.80	568.49		54.63	1,257.19
流紋岩質凝灰岩	3.51	47.21	193.09	1,502.17	13.48	117.71	1,877.17
デイサイト質凝灰岩	387.88	142.74	1,285.90	792.37	2.37	323.22	2,934.48
流紋岩質溶結凝灰岩	631.21		289.16	265.82		13.78	1,199.97
礫岩			82.86				82.86
礫質砂岩			122.99				122.99
砂岩	502.72		83.40	476.04	16.28	23.19	1,101.63
頁岩	94.86	124.93	0.84		45.74	0.62	266.99
チャート	213.63	168.78	137.65	121.23	49.92	41.85	733.06
珪化岩	17.68						17.68
計	3,939.41	2,462.97	3,311.94	6,093.42	378.98	1,796.66	17,983.38



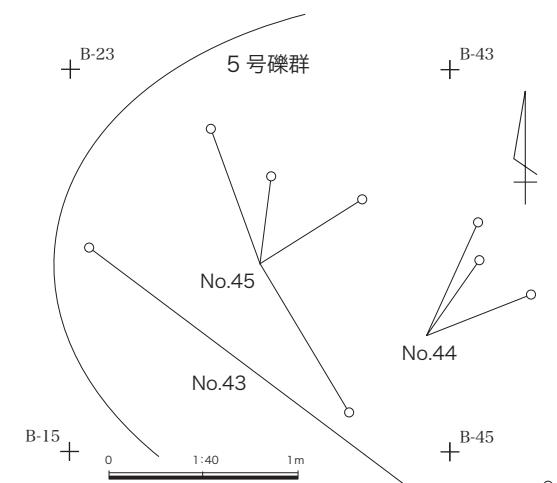
第42図 伊勢崎III遺跡 磚接合資料分布図(1)



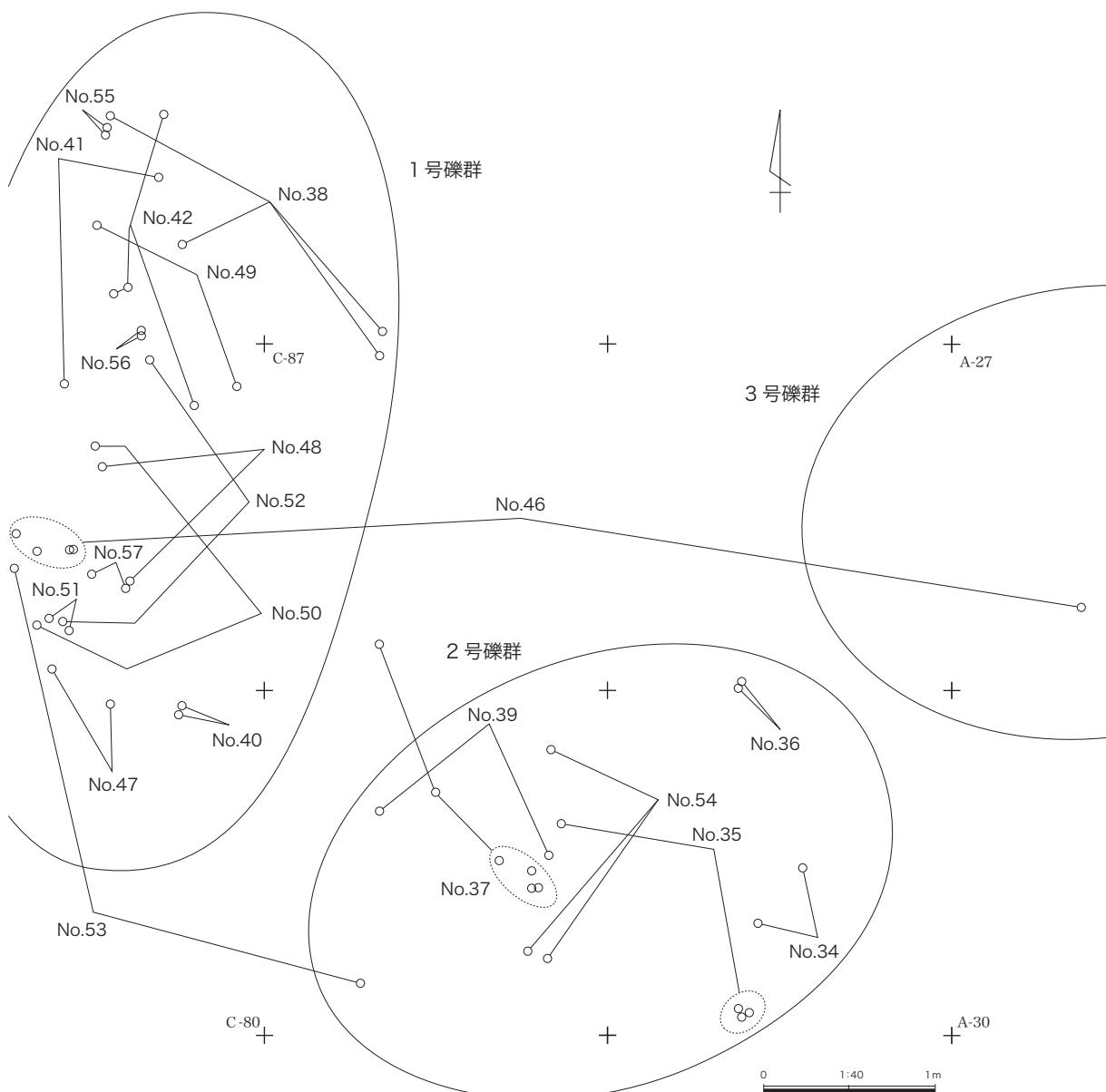
第43図 伊勢崎III遺跡 磚接合資料分布図(2)



第44図 伊勢崎III遺跡 磐接合資料分布図（3）



第45図 伊勢崎III遺跡 磐接合資料分布図（4）



第46図 伊勢崎III遺跡 磐接合資料分布図（5）

が、長径 5.00m、短径 2.55m の南北方向に長い楕円形状に礫が分布していたと思われる。礫は 79 点、総重量 3,939.41g が出土した。接合資料は 15 点 (No. 38・40・41・42・46・47・48・49・50・51・52・53・55・56・57) あり、No. 46 が 3 号礫群内と、No. 53 が 2 号礫群内と接合し、他はこの礫群内で完結する。石材は、チャートとデイサイト質凝灰岩が多い。

2 号礫群 (第 22・46 図)

A グリッドの南西部と B グリッドの北西部、および C グリッドの南東部にまたがって位置し、2 号ブロック全域と 3 号ブロックの西端に重なる。全体的にゴボウトレントナーが入っているが、長径 3.50m、短径 2.55m の南南西—北北東方向に長い楕円形状に礫が分布していたと思われる。礫は 47 点、総重量 2,462.97g が出土した。接合資料は 7 点 (No. 34・35・36・37・39・53・54) あり、No. 37 が礫群外と、No. 53 が 1 号礫群内と接合し、他はこの礫群内で完結する。石材は、輝石安山岩とデイサイト質凝灰岩が多い。

3 号礫群 (第 22・42・43・46 図)

A グリッドの南西部に位置し、3 号ブロック中央部北半とほぼ重なる。全体的にゴボウトレントナーが入っているが、礫の分布にはあまり影響がなく、長径 3.35m、短径 2.55m の東西方向に長い楕円形状に礫が分布していたと思われる。当調査区で最も範囲が狭い礫群である。礫は 62 点、総重量 3,311.94g が出土した。接合資料は 15 点 (No. 1・4・7・8・15・25・26・27・28・29・30・31・32・33・46) あり、No. 4・7・8・15 が 4 号礫群内と、No. 46 が 1 号礫群内と接合し、他はこの礫群内で完結する。石材は、デイサイト質凝灰岩とチャートが多い。

4 号礫群 (第 22・42～44 図)

A グリッドの南東部と B グリッドの北東部にまたがって位置し、3 号ブロック東端と 5 号ブロックのほぼ全域に重なる。長径 6.65m、短径 4.20m の北西—南東方向に長い楕円形状に礫が分布しており、当調査区で最も範囲の広い礫群である。礫は 130 点、総重量 6,093.42g が出土した。接合資料は 23 点 (No. 2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24) あり、No. 4・7・8・15 が 3 号礫群内と接合し、他はこの礫群内で完結する。礫群範囲に比例して、礫点数・総重量・接合資料点数ともに、礫群中最も多い。石材は、デイサイト質凝灰岩と流紋岩質凝灰岩が多い。

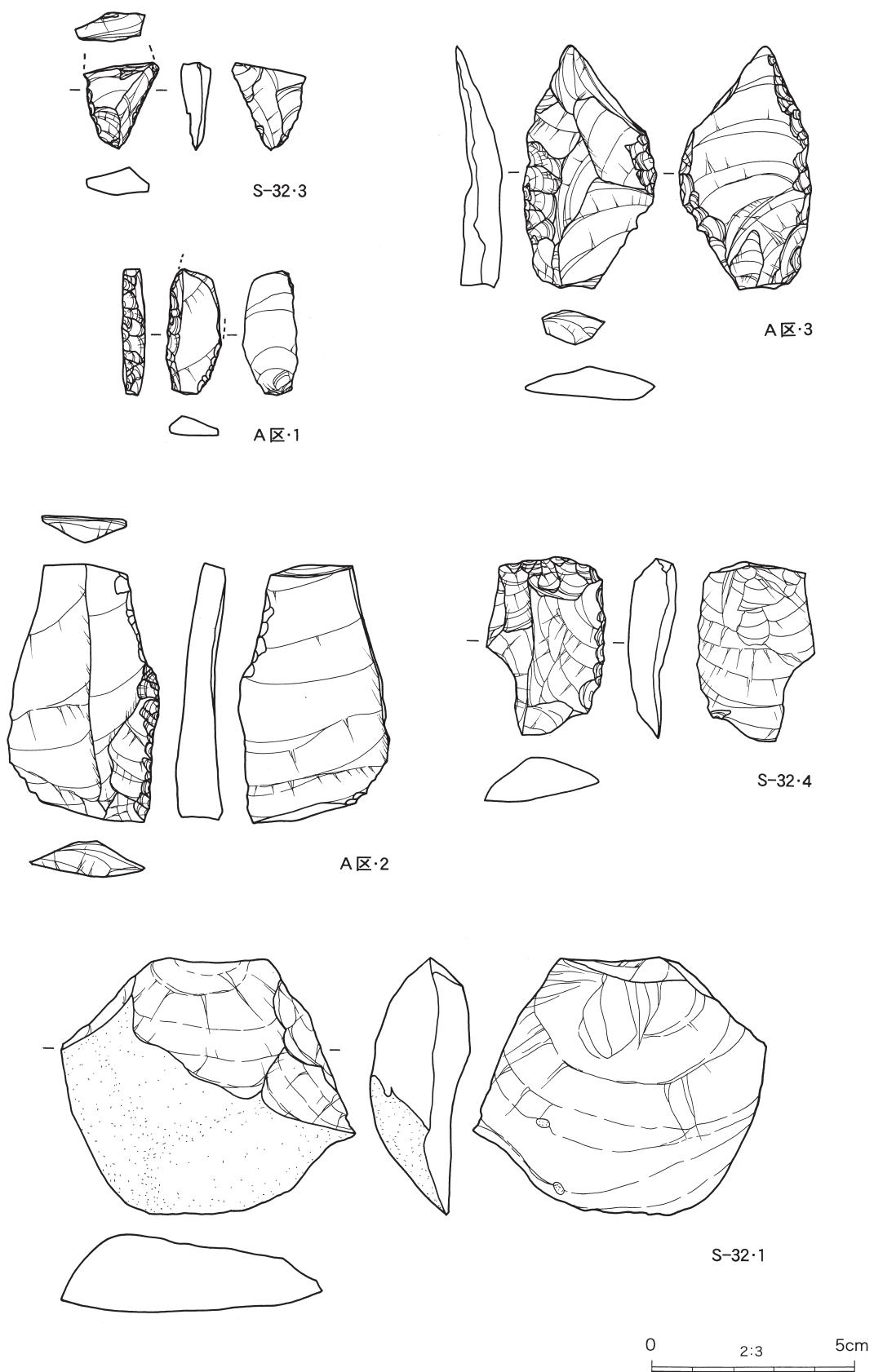
5 号礫群 (第 22・45 図)

B グリッド中央部に位置し、6 号ブロックに全域がほぼ重なる。長径 4.50m、短径 2.95m の東西方向に長い楕円形状に礫が分布している。礫は 34 点、総重量 378.98g が出土した。接合資料は 3 点 (No. 43・44・45) あり、すべてこの礫群内で完結する。他の礫群に比べて礫点数・総重量・接合資料点数共に少ないのは、包含層上部が削平されていることも原因の一つかもしれない。

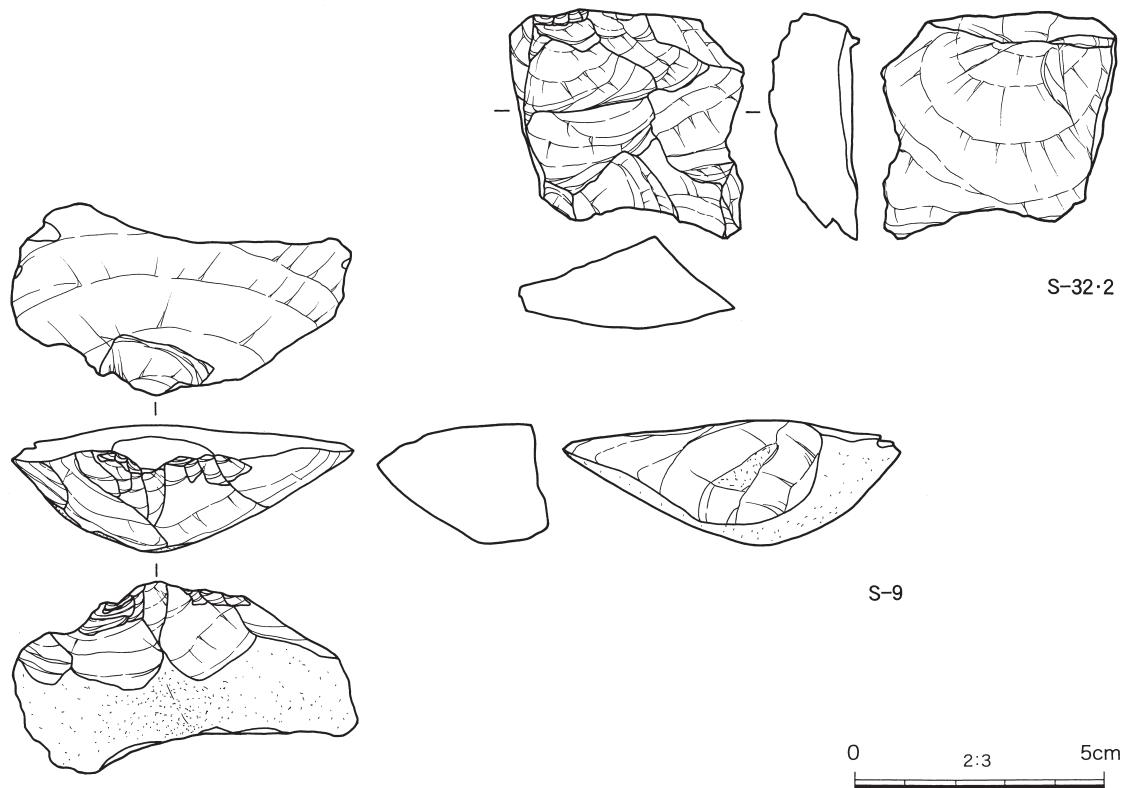
層位不明石器 (第 47・48 図、図版二二)

ナイフ形石器

S-32・3 (第 47 図) は、後世の古代竪穴住居跡からの出土で、石材は頁岩である。上半部を欠く。基部の両側縁に細かな剥離が施されている。



第47図 伊勢崎III遺跡 出土層位不明旧石器実測図（1）



第48図 伊勢崎III遺跡 出土層位不明旧石器実測図（2）

A区・1（第47図）は、表採品で、石材は頁岩である。背面図左側縁方向からの力により上端部を欠いている。素材は縦長剥片で、打面側を基部とし、両側縁に急角度の二次加工が施されている。

尖頭器

A区・3（第47図）は、表採品で、石材は頁岩である。縦長剥片を素材とし、背腹両側から平坦な剥離が施されている。整形途中の未成品であろう。

スクレイパー

A区・2（第47図）は、表採品で、石材は珪質頁岩である。両端部が折れた縦長剥片を素材とし、背面図右側縁に連続した二次加工が施されている。

S-32・4（第47図）は、後世の古代堅穴住居跡からの出土で、石材は頁岩である。縦長剥片を素材とし、背面図右側縁に連続した二次加工が施されている。

剥片

S-32・1（第47図）とS-32・2（第48図）は、後世の古代堅穴住居跡からの出土で、石材は黒色安山岩。

石核

S-9（第48図）は、後世の溝跡からの出土で、石材は黒色安山岩である。厚手の剥片を素材とし、素材の腹面を打面に数枚の剥片が剥離されている。

第15表 伊勢崎Ⅲ遺跡 旧石器属性表 (1)

No.	挿図	区	標高	器種	石材鑑定	石材備考	ア'ロック	接合No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
550	28	C-69	61.073	蔽石	デイサイト		1		6.3	3.7	2.5	69.56	
324	29	C-79	61.137	剥片	黒色安山岩		1		6.9	4.8	2.1	61.31	
330		C-78	61.211	剥片	黒色安山岩		1		(3.3)	3.2	0.5	(6.47)	
455		C-77	61.193	剥片	黒色安山岩		1		3.4	3.0	0.8	7.12	
456	38	C-77	61.197	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	1	3	3.1	2.7	1.4	8.85	
467		C-68	61.187	剥片	黒色安山岩		1		(3.6)	2.7	0.8	(7.56)	
475		C-68	61.147	剥片	黒色安山岩		1		5.6	4.3	1.8	26.61	
524		C-75	61.110	剥片	黒色安山岩		1		2.9	2.3	0.8	3.77	
525	30	C-75	61.163	剥片	黒色安山岩		1		4.9	4.5	1.5	26.73	
527	38	C-75	61.125	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	1	3	2.6	2.8	1.5	9.56	
528	40	C-75	61.139	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	1	6	(6.7)	5.9	1.6	(70.01)	537と接合
535		C-76	61.152	剥片	黒色安山岩		1		3.0	1.8	0.9	2.71	
537	40	C-76	61.168	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	1	6	—	—	—	—	528と接合
561		C-75	61.124	剥片	黒色安山岩		1		(1.9)	0.9	0.3	(0.59)	
466		C-68	61.182	剥片	頁岩		1		2.9	2.0	0.7	4.00	
542		C-67	61.133	剥片	頁岩		1		(2.4)	(1.3)	0.4	(0.97)	
481		C-69	61.131	剥片	チャート		1		2.2	1.5	0.5	1.42	
521		C-88	61.017	剥片	チャート		1		5.5	2.1	1.6	14.99	
546	40	C-78	61.077	剥片	チャート		1	11	4.8	2.1	1.0	6.63	B区・1と接合して完形
533	41	C-65	61.152	剥片	カタクラサイト		1	9	8.9	4.3	2.0	57.60	
336		C-76	61.097	碎片	珪質頁岩		1		1.4	1.1	0.4	0.44	
549		C-70	61.058	碎片	珪質頁岩	新第三紀	1		1.2	0.9	0.2	0.19	
484		C-80	61.094	碎片	チャート		1		(1.3)	(1.1)	0.2	(0.40)	
556		C-79	61.022	碎片	チャート		1		1.5	0.9	0.4	0.51	
557		C-68	61.114	碎片	チャート		1		0.5	0.5	0.2	0.05	
558		C-78	61.038	碎片	チャート		1		1.7	1.2	0.5	0.64	
457	31	C-76	61.137	石核	黒色安山岩		1		6.8	7.0	5.3	324.54	
476	31	C-68	61.133	石核	黒色安山岩		1		6.1	4.8	3.5	90.93	
563		C-64	61.182	石核	黒色安山岩		1		8.7	7.1	4.0	276.79	
309		C-100	61.129	剥片	黒色安山岩		2		3.2	1.0	0.4	0.93	
321		C-90	61.148	剥片	黒色安山岩		2		3.2	3.1	1.3	10.65	
323		C-100	61.140	剥片	黒色安山岩		2		2.9	2.4	0.8	5.03	
427	38	C-100	61.103	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	2	2	4.2	3.8	1.5	22.17	
501		C-100	61.127	剥片	黒色安山岩		2		3.6	1.8	0.6	3.47	
506		C-100	61.044	剥片	黒色安山岩		2		2.0	1.7	0.6	1.72	
508		C-100	61.081	剥片	黒色安山岩		2		2.9	2.2	1.1	5.05	
509		C-100	61.042	剥片	黒色安山岩		2		2.7	(1.6)	0.7	(2.45)	
513		C-99	61.041	剥片	黒色安山岩		2		2.0	2.0	0.9	3.09	
564	38	C-100	61.142	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	2	2	3.0	1.9	0.9	2.53	
565		C-100	61.142	剥片	黒色安山岩		2		2.5	2.3	0.4	1.75	
505		C-100	60.801	剥片	珪質頁岩	チャート質	2		3.2	1.8	1.0	4.06	
310		C-100	61.135	剥片	頁岩		2		3.1	(2.5)	0.8	(3.97)	
322		C-100	61.136	剥片	頁岩		2		2.4	1.7	0.4	1.21	
319		C-89	61.129	碎片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	2	8	4.9	3.1	1.6	12.59	
429		C-100	61.069	石核	黒色安山岩		2		4.2	2.8	2.3	30.38	
10	27・34	A-48	61.057	ナイフ形石器	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	3	1	3.6	2.7	1.3	10.41	
33	27	A-58	61.047	台形様石器	頁岩		3		3.5	2.8	0.6	4.44	
17	27	A-49	61.025	彫刻刀形石器	黒曜石	星ヶ塔(試料No.2)	3		2.5	1.5	0.8	2.65	
9	27	A-48	61.002	抉入石器	珪質頁岩	新第三紀。表皮に砂	3		5.5	4.7	1.7	40.96	
252	27	A-28	61.132	二次加工ある剥片	黒色安山岩		3		5.1	3.1	2.1	34.93	
288	27	A-19	61.119	二次加工ある剥片	玉髓		3		5.0	3.1	1.6	23.60	
18	28	A-49	60.982	微細剥離痕ある剥片	頁岩		3		3.1	4.2	0.9	9.74	
19	28	A-49	61.033	微細剥離痕ある剥片	黒曜石	高原山(試料No.3)	3		2.4	2.9	1.0	4.17	
3		A-47	60.989	剥片	黒色安山岩		3		3.5	2.4	1.4	12.83	
4	28	A-48	61.052	剥片	黒色安山岩		3		7.5	4.6	2.5	97.80	
5		A-48	61.026	剥片	黒色安山岩		3		3.0	1.5	0.9	4.05	
6	34	A-48	61.061	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	3	1	2.7	2.2	0.5	2.11	
11		A-48	61.062	剥片	黒色安山岩		3		4.9	2.9	1.8	22.63	
16		A-49	60.968	剥片	黒色安山岩		3		2.0	0.9	0.3	0.48	
25		A-57	61.006	剥片	黒色安山岩		3		2.7	1.9	0.4	5.19	
27		A-57	61.016	剥片	黒色安山岩		3		1.7	(1.2)	0.5	(0.85)	
31		A-58	61.066	剥片	黒色安山岩		3		(1.9)	2.1	0.6	(2.11)	
36		A-58	61.043	剥片	黒色安山岩		3		2.2	1.4	0.7	2.34	
41		A-58	61.058	剥片	黒色安山岩		3		3.4	2.5	1.2	13.13	
52		A-58	61.047	剥片	黒色安山岩		3		2.8	(1.0)	0.4	(1.04)	
62		A-58	61.058	剥片	黒色安山岩		3		(2.1)	1.2	0.5	(1.32)	
92	38	A-68	61.012	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	3	4	6.2	5.0	2.3	61.54	
201		A-58	60.967	剥片	黒色安山岩		3		3.4	(1.4)	1.3	(6.64)	
206		A-47	60.956	剥片	黒色安山岩		3		3.7	3.2	1.7	20.29	
241	28	A-39	61.069	剥片	黒色安山岩		3		5.7	(3.7)	1.3	(19.60)	

第3章 遺構と遺物

第16表 伊勢崎III遺跡 旧石器属性表 (2)

No.	挿図	区	標高	器種	石材鑑定	石材備考	ア'ロツク	接合No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
243		A-39	61.103	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	3	8	(2.0)	(1.6)	0.5	(1.28)	
249	29	A-29	61.102	剥片	黒色安山岩		3		5.3	3.0	1.9	24.09	
250	29	A-28	61.092	剥片	黒色安山岩		3		3.8	(4.0)	1.2	(17.49)	
259		A-28	61.094	剥片	黒色安山岩		3		5.0	4.4	2.2	34.85	
261		A-28	61.092	剥片	黒色安山岩		3		3.9	3.2	2.2	23.30	
272	29	A-27	61.032	剥片	黒色安山岩		3		3.7	3.0	1.4	12.51	
295	34	A-10	61.121	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	3	1	5.2	4.0	1.9	38.77	
412		A-37	60.982	剥片	黒色安山岩		3		3.0	2.7	1.0	9.91	
418		A-29	60.987	剥片	黒色安山岩		3		2.8	1.7	0.6	2.40	
497		A-08	60.964	剥片	黒色安山岩		3		(3.7)	2.3	0.8	(4.68)	
12		A-48	60.979	剥片	珪質頁岩	新第三紀	3		1.5	1.3	0.3	0.45	
77		A-59	61.038	剥片	珪質頁岩	良質。褐色で米沢系?	3		4.1	1.6	1.3	3.11	
217		A-68	60.878	剥片	珪質頁岩	新第三紀	3		1.7	0.6	0.3	0.18	
246		A-29	61.052	剥片	珪質頁岩	新第三紀	3		4.0	1.9	1.0	5.37	
409		A-18	61.045	剥片	珪質頁岩		3		2.3	1.2	0.5	1.20	
1		A-47	61.030	剥片	頁岩		3		5.3	2.5	0.6	7.32	
23		A-56	61.097	剥片	頁岩		3		3.8	3.3	0.7	9.91	
28		A-57	61.012	剥片	頁岩		3		3.5	2.4	0.9	5.96	
91		A-68	61.017	剥片	頁岩		3		4.4	2.8	1.7	16.24	
242		A-39	61.112	剥片	頁岩		3		2.9	2.2	0.8	5.24	
244		A-30	60.985	剥片	頁岩		3		2.4	1.3	0.7	1.46	
269		A-27	61.094	剥片	頁岩		3		4.3	1.7	0.5	2.78	
422		A-28	61.045	剥片	頁岩		3		3.9	1.7	0.9	4.43	
181	30	A-58	61.012	剥片	黒曜石	和田峠系(試料No4)	3		1.5	2.0	0.7	1.33	被熱
89		A-66	61.027	剥片	チャート		3		2.3	1.6	0.3	1.02	
420		A-09	61.072	剥片	チャート		3		(2.4)	1.7	0.7	(2.18)	
95	30	A-68	60.959	剥片	玉髓		3		4.2	3.2	0.8	7.23	
117		A-77	60.955	剥片	玉髓		3		2.2	1.5	0.5	1.31	
118	30	A-77	61.014	剥片	玉髓		3		3.5	2.3	1.3	9.42	
120	30	A-78	60.991	剥片	玉髓		3		3.6	3.9	1.2	13.35	
197		A-79	61.208	剥片	玉髓		3		2.4	(1.4)	0.7	(1.58)	
281		A-18	61.099	剥片	珪化凝灰岩		3		4.6	4.0	1.2	16.83	
413	30	A-37	61.055	石刃	チャート		3		2.4	1.3	0.4	1.18	
14	34	A-48	61.088	碎片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	3	1	(1.2)	1.4	0.5	(0.57)	
21		A-49	61.002	碎片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	3	7	(1.9)	1.7	0.5	(1.27)	
90		A-67	60.988	碎片	黒色安山岩		3		(1.7)	1.1	0.4	(0.50)	
175	38	A-67	60.904	碎片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	3	4	1.8	2.3	0.7	2.26	
247		A-29	61.122	碎片	黒色安山岩		3		0.9	0.5	0.3	0.11	
96		A-69	60.984	碎片	珪質頁岩	良質。褐色で米沢系?	3		1.3	0.9	0.2	0.16	
182		A-58	61.004	碎片	黒曜石	和田峠系(試料No7)	3		0.7	0.6	0.1	0.05	被熱
229		A-37	61.057	碎片	チャート		3		3.9	2.6	1.7	14.10	
499		A-09	61.023	碎片	チャート		3		1.0	0.7	0.5	0.29	
119		A-78	60.999	碎片	玉髓		3		1.2	0.9	0.3	0.25	
22	34	A-50	61.047	石核	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	3	1	4.2	4.6	3.1	56.66	
71		A-58	61.021	石核	黒色安山岩		3		3.9	3.2	1.9	23.71	
265		A-28	61.065	石核	黒色安山岩		3		5.7	5.1	3.3	93.73	
270		A-27	61.123	石核	玉髓		3		2.7	2.6	1.9	13.62	
142	40	A-85	60.972	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	4	5	5.3	3.1	1.2	16.75	143と接合して完形
143	40	A-85	61.026	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	4	5	—	—	—	—	142と接合して完形
147		A-86	60.954	剥片	黒色安山岩		4		2.2	1.9	0.7	2.35	
148		A-87	60.967	剥片	黒色安山岩		4		3.3	2.8	1.2	9.70	
164		A-95	60.859	剥片	黒色安山岩		4		1.3	1.2	0.4	0.67	
145		A-86	60.940	碎片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	4	7	(1.2)	1.0	0.4	(0.30)	
146		A-86	60.990	碎片	珪質頁岩	新第三紀	4		1.8	1.1	0.2	0.41	
144		A-85	60.882	碎片	チャート		4		1.2	(0.8)	0.4	(0.34)	
165		A-96	60.947	碎片	チャート		4		1.8	1.5	0.4	0.99	
166		A-97	60.827	碎片	チャート		4		2.0	(0.8)	0.6	(1.06)	
344		A-97	60.715	碎片	瑪瑙		4		1.9	1.8	0.6	2.26	
223		A-85	60.948	石核	黒色安山岩		4		6.4	5.2	3.3	111.74	
500	27	B-82	60.927	スクレイバー	頁岩		5		4.5	4.0	1.4	25.46	
131	27	B-71	60.988	二次加工ある剥片	黒色安山岩		5		8.9	3.4	2.1	58.33	
138		B-71	60.927	剥片	黒色安山岩		5		2.2	1.4	0.7	1.50	
140	28	B-72	60.949	剥片	黒色安山岩		5		5.4	(4.0)	2.0	(36.35)	
158		B-81	60.919	剥片	珪質頁岩	チャート質	5		4.9	3.5	1.6	19.27	
127		A-80	60.900	剥片	頁岩	新第三紀	5		2.2	1.0	0.7	1.09	
151		A-90	60.914	剥片	頁岩		5		4.8	(2.7)	0.9	(8.12)	
155		B-81	60.876	剥片	頁岩		5		2.6	2.4	0.3	1.30	
137	41	B-71	60.919	剥片	カタクラサイト		5	9	7.7	5.7	2.6	73.55	
141		B-72	60.958	剥片	砂岩		5		3.3	3.1	1.4	13.22	
169		B-91	60.797	剥片	董青石ホンフェルス		5		5.8	4.8	1.4	36.21	

第17表 伊勢崎III遺跡 旧石器属性表 (3)

No.	挿図	区	標高	器種	石材鑑定	石材備考	ヤ'ロック	接合No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
108		A-70	60.894	碎片	珪質頁岩	新第三紀	5		(1.0)	0.6	0.5	(0.17)	
110		A-70	60.977	碎片	珪質頁岩	新第三紀	5		1.5	1.3	0.4	0.45	
126		A-80	60.918	碎片	珪質頁岩	新第三紀	5		1.7	1.5	0.6	0.94	
128		A-80	60.879	碎片	珪質頁岩	新第三紀	5		(0.9)	0.7	0.1	(0.07)	
152		B-81	60.896	碎片	頁岩		5		1.2	0.7	0.2	0.11	
168		A-100	60.884	碎片	黒曜石	和田岬系(試料No.6)	5		0.9	0.7	0.2	0.08	被熱
111		A-70	60.894	碎片	玉髓		5		0.7	0.5	0.1	0.03	
150		A-90	60.892	碎片	玉髓		5		0.8	0.6	0.4	0.18	
225	27	B-35	60.980	ナイフ形石器	黒曜石	和田岬系(試料No.5)	6		2.8	1.1	0.9	2.33	被熱
350	29	B-55	60.907	剥片	黒色安山岩		6		(6.6)	(4.7)	1.6	(39.84)	
382		B-36	60.965	剥片	黒色安山岩		6		2.0	1.7	0.4	1.36	
384		B-25	61.042	剥片	黒色安山岩		6		2.3	1.0	0.5	0.83	
489		B-64	60.805	剥片	黒色安山岩		6		1.7	1.4	0.8	1.57	
490		B-64	60.820	剥片	黒色安山岩		6		2.0	1.3	0.4	0.74	
566		B-24	61.056	剥片	珪質頁岩	チャート質	6		3.1	(1.9)	0.8	(4.37)	
362		B-45	60.979	剥片	頁岩		6		2.3	1.2	0.4	0.90	
385		B-25	60.997	剥片	頁岩		6		5.8	3.0	1.5	17.45	
354	40	B-46	60.937	剥片	黒曜石	和田岬系(試料No.1)	6	10	3.0	(1.8)	1.2	(4.06)	被熱 491と接合
491	40	B-35	60.922	剥片	黒曜石	和田岬系(試料No.1)	6	10	—	—	—	—	被熱 354と接合
351		B-55	60.853	剥片	チャート		6		4.5	3.9	1.4	19.24	
367		B-44	60.926	碎片	黒色安山岩		6		1.4	1.2	0.6	0.89	
368		B-44	60.881	碎片	黒色安山岩		6		1.5	(1.1)	0.3	(0.48)	
370		B-44	60.925	碎片	黒色安山岩		6		(1.4)	0.8	0.4	(0.43)	
345		B-65	60.897	碎片	頁岩		6		1.6	1.3	0.4	0.82	
393		B-24	60.986	碎片	頁岩	新第三紀	6		2.1	1.5	0.5	0.82	
347		B-54	60.974	碎片	黒曜石	和田岬系(試料No.8)	6		1.1	1.0	0.4	0.32	被熱
353		B-56	60.876	碎片	黒曜石	高原山(試料No.9)	6		(1.6)	0.9	0.4	(0.42)	
387		B-24	61.011	碎片	黒曜石	和田岬系(試料No.10)	6		1.7	1.5	0.8	1.15	被熱
391		B-24	61.056	碎片	黒曜石	和田岬系(試料No.11)	6		1.0	0.6	0.2	0.09	被熱
390	30	B-24	61.059	石核	黒色安山岩		6		5.3	4.4	3.6	83.38	
116		A-76	60.897	剥片	黒色安山岩		外		2.0	1.4	0.6	1.40	
396	29	B-13	61.041	剥片	黒色安山岩		外		5.0	(3.1)	1.8	(36.80)	
397	29	B-16	61.015	剥片	黒色安山岩		外		3.3	(2.3)	1.0	(4.82)	
496	34	A-06	61.099	剥片	黒色安山岩	輝石斑晶ごく微量含む	外	1	2.8	2.7	0.7	6.43	
519	29	C-89	61.067	剥片	黒色安山岩		外		4.8	3.4	1.6	14.56	
439	30	C-98	61.143	剥片	頁岩		外		4.4	5.0	2.4	29.68	
123		A-79	61.002	剥片	玉髓		外		3.0	2.4	0.6	2.31	
149		A-88	60.939	石核	黒色安山岩		外		3.6	3.2	2.0	26.82	
395	31	B-13	61.041	石核	頁岩		外		2.9	4.7	3.9	40.65	
S-32・3	47		—	ナイフ形石器	頁岩				(2.1)	1.8	0.7	(1.96)	基部
A区・1	47		—	ナイフ形石器	頁岩				(3.0)	1.3	0.6	(2.06)	
A区・3	47		—	尖頭器	頁岩				5.9	3.2	0.9	16.06	未成品
A区・2	47		—	スクレイパー	珪質頁岩				6.2	3.6	1.0	17.95	
S-32・4	47		—	スクレイパー	頁岩				4.3	2.9	1.1	13.13	
B区・2			—	二次加工ある剥片	珪質頁岩				3.9	2.8	1.6	11.79	
B区・3			—	二次加工ある剥片	珪質頁岩				(3.5)	2.7	1.1	(9.90)	
S-4・1			—	二次加工ある剥片	頁岩	角礫状			5.2	4.3	1.0	17.18	
S-6			—	二次加工ある剥片	頁岩	角礫状			5.9	5.2	1.5	41.76	
S-9			—	二次加工ある剥片	頁岩	チャート質			6.1	3.8	1.1	27.07	
S-32・5			—	二次加工ある剥片	頁岩				2.4	1.6	0.5	1.63	
A区・5			—	二次加工ある剥片	頁岩				3.9	2.3	1.5	11.26	
B区・4			—	二次加工ある剥片	頁岩	新第三紀			(5.2)	4.2	1.0	(14.45)	
S-2			—	二次加工ある剥片	チャート				(3.3)	2.0	0.8	(5.97)	
S-4・2			—	二次加工ある剥片	チャート				(4.1)	2.3	1.1	(7.96)	
S-31・1			—	二次加工ある剥片	チャート				(2.7)	1.7	0.6	(2.90)	
S-31・4			—	二次加工ある剥片	チャート				2.9	(1.3)	0.7	(2.32)	
S-32・6			—	二次加工ある剥片	チャート				3.3	3.2	0.8	6.43	
A区・6			—	二次加工ある剥片	チャート	赤色チャート			4.5	3.6	1.2	12.95	
A区・7			—	二次加工ある剥片	チャート				4.6	2.9	1.0	12.51	
A区・8			—	二次加工ある剥片	チャート				4.2	3.4	1.3	13.71	
S-31・3			—	二次加工ある剥片	玉髓				4.9	3.3	1.4	16.25	
B区・5			—	二次加工ある剥片	玉髓				3.7	2.3	0.9	5.55	
S-31・2			—	二次加工ある剥片	珪化凝灰岩	奥日光流紋岩類			(4.4)	3.4	1.4	(25.38)	
S-32・1	47		—	剥片	黒色安山岩				6.3	6.7	2.3	106.78	
S-32・2	48		—	剥片	黒色安山岩				4.2	4.7	1.8	35.16	
B区・1	40		—	剥片	チャート		11		—	—	—	—	546と接合して完形
S-9	48		—	石核	黒色安山岩				3.2	6.5	2.5	54.13	
C'リガ'			—	石核	黒色安山岩				4.6	4.3	2.8	44.72	

第18表 伊勢崎III遺跡 碓属性表(1)

No.	区	標高	器種	石材鑑定	石材備考	礫群	接合No.	重量(g)	備考
332	C-77	61.215	礫	黒雲母角閃石花崗閃綠岩		1		3.11	被熱
543	C-78	61.122	礫	石英斑岩	古期	1	57	60.14	被熱
552	C-68	61.127	礫	石英斑岩	古期	1	57	34.57	被熱
477	C-68	61.121	礫	石英斑岩	古期	1		115.96	被熱
482	C-69	61.153	礫	石英斑岩	古期	1		151.18	被熱
341	C-75	61.235	礫	花崗斑岩		1		4.58	被熱
534	C-65	61.131	礫	黒雲母角閃石花崗斑岩		1		271.05	被熱
530	C-75	61.137	礫	黒雲母角閃石花崗閃綠斑岩		1	55	137.37	被熱
531	C-75	61.126	礫	黒雲母角閃石花崗閃綠斑岩		1	55	37.20	被熱
529	C-75	61.170	礫	流紋岩	古期	1		11.05	被熱
328	C-79	61.135	礫	デイサイト	新第三紀	1	40	72.46	被熱
329	C-79	61.111	礫	デイサイト	新第三紀	1	40	269.25	被熱
334	C-76	61.203	礫	安山岩		1		0.39	被熱
551	C-68	61.117	礫	無斑晶質安山岩		1		18.88	被熱
461	C-75	61.141	礫	緻密質安山岩		1		284.77	被熱
335	C-76	61.187	礫	輝石安山岩		1		16.77	被熱
446	C-78	61.098	礫	輝石安山岩		1		108.31	被熱
478	C-68	61.168	礫	輝石安山岩	新第三紀	1		44.78	
545	C-78	61.102	礫	輝石安山岩	新第三紀	1		111.45	被熱
553	C-68	61.100	礫	輝石安山岩	新第三紀	1		25.04	
536	C-76	61.177	礫	石英含有輝石安山岩	新第三紀	1		4.24	被熱
444	C-79	61.113	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	1	47	156.62	被熱 No.479と接合して完形
479	C-68	61.106	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	1	47	138.38	被熱 No.444と接合して完形
486	C-87	61.165	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	1		10.37	被熱
547	C-79	61.033	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	1		3.51	被熱
454	C-77	61.154	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1	50	100.26	被熱
469	C-68	61.170	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1	50	60.01	被熱
473	C-68	61.183	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1	53	2.48	被熱
325	C-79	61.171	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		4.16	被熱
326	C-79	61.171	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		0.19	被熱
327	C-79	61.187	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		8.91	被熱
442	C-79	61.121	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		30.96	被熱
443	C-79	61.129	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		98.09	被熱
450	C-77	61.140	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		9.60	被熱
462	C-66	61.236	礫	デイサイト質凝灰岩	新第三紀	1		29.23	被熱
472	C-68	61.173	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		3.15	被熱
474	C-68	61.182	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		9.24	
523	C-86	61.103	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		13.44	被熱
544	C-78	61.083	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	1		18.16	被熱
452	C-77	61.181	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	1	49	48.59	被熱
538	C-76	61.183	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	1	49	51.19	被熱
448	C-77	61.140	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	1		73.68	被熱
464	C-67	61.223	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	鮮新世?	1		9.95	
465	C-67	61.151	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	鮮新世?	1		196.44	被熱
532	C-75	61.143	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	1		241.02	被熱
548	C-69	61.029	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	鮮新世?	1		10.34	被熱
480	C-68	61.169	礫	砂岩		1	46	4.23	被熱 接合No.4・20と同一母岩の可能性
554	C-68	61.124	礫	砂岩		1	46	7.32	被熱 接合No.4・20と同一母岩の可能性
555	C-68	61.111	礫	砂岩		1	46	14.02	被熱 接合No.4・20と同一母岩の可能性
559	C-68	61.132	礫	砂岩		1	46	8.09	被熱 接合No.4・20と同一母岩の可能性
445	C-78	61.121	礫	砂岩		1	48	77.56	被熱
541	C-77	61.117	礫	砂岩		1	48	151.43	被熱
471	C-68	61.128	礫	砂岩		1	52	194.81	被熱
540	C-77	61.126	礫	砂岩		1	52	7.61	被熱
453	C-77	61.183	礫	砂岩		1		37.65	被熱
468	C-68	61.148	礫	頁岩		1	51	48.70	被熱 No.470と接合して完形
470	C-68	61.149	礫	頁岩		1	51	34.63	被熱 No.468と接合して完形
447	C-78	61.177	礫	頁岩		1		11.53	被熱
316	C-86	61.220	礫	チャート		1	38	40.17	被熱
340	C-75	61.237	礫	チャート		1	38	1.56	被熱
460	C-76	61.194	礫	チャート		1	38	10.92	被熱
522	C-87	61.025	礫	チャート		1	38	12.16	被熱
337	C-76	61.214	礫	チャート		1	41	3.77	被熱 接合No.1・23・27と同一母岩の可能性
463	C-67	61.205	礫	チャート		1	41	11.04	被熱 接合No.1・23・27と同一母岩の可能性
339	C-75	61.229	礫	チャート		1	42	7.58	被熱
451	C-77	61.159	礫	チャート		1	42	2.55	被熱
458	C-76	61.213	礫	チャート		1	42	3.68	被熱
459	C-76	61.197	礫	チャート		1	42	3.18	被熱
539	C-76	61.094	礫	チャート		1	56	3.41	被熱
560	C-76	61.087	礫	チャート		1	56	2.42	被熱
331	C-77	61.221	礫	チャート		1		0.93	被熱
333	C-76	61.225	礫	チャート		1		21.40	被熱
338	C-75	61.196	礫	チャート		1		14.06	被熱
342	C-75	61.203	礫	チャート		1		6.93	被熱
343	C-75	61.209	礫	チャート		1		2.21	被熱
449	C-77	61.137	礫	チャート		1		64.26	被熱
488	C-87	61.118	礫	チャート		1		1.40	被熱
487	C-87	61.117	礫	珪化岩		1		0.37	被熱

第19表 伊勢崎Ⅲ遺跡 磯属性表（2）

No.	区	標高	器種	石材鑑定	石材備考	磯群	接合No.	重量(g)	備考
526	C-75	61.145	礫	珪化岩		1		17.31	被熱
294	A-10	61.110	礫	石英斑岩	古期	2		42.48	被熱
502	C-100	61.104	礫	流紋岩	古期	2	54	11.05	被熱
504	C-100	61.090	礫	流紋岩	古期	2	54	37.64	被熱
515	C-99	61.040	礫	流紋岩	古期	2	54	14.77	被熱
320	C-90	61.132	礫	流紋岩	新第三紀	2		94.29	被熱
562	C-100	61.037	礫	流紋岩	新第三紀	2		13.07	被熱
300	A-09	61.057	礫	デイサイト	新第三紀	2		7.84	被熱
302	A-08	61.097	礫	デイサイト	新第三紀	2		27.36	被熱
314	C-99	61.152	礫	デイサイト		2		6.04	被熱
516	C-99	61.066	礫	安山岩	新第三紀	2		82.55	被熱
518	C-90	61.123	礫	安山岩		2		8.28	被熱
303	A-08	61.122	礫	多孔質安山岩		2	36	190.13	被熱 №304と接合して完形
304	A-08	61.091	礫	多孔質安山岩		2	36	190.87	被熱 №303と接合して完形
296	A-10	61.112	礫	輝石安山岩		2	35	54.38	被熱
297	A-10	61.089	礫	輝石安山岩		2	35	13.67	被熱
411	A-10	61.058	礫	輝石安山岩		2	35	72.81	被熱
514	C-99	61.087	礫	輝石安山岩		2	35	85.20	被熱
298	A-10	61.063	礫	輝石安山岩		2		152.15	被熱
299	A-10	61.087	礫	輝石安山岩		2		152.59	被熱
301	A-09	61.093	礫	輝石安山岩		2		111.08	被熱
311	C-100	61.098	礫	輝石安山岩		2		251.79	被熱
312	C-100	61.142	礫	輝石安山岩		2		19.06	被熱
313	C-100	61.147	礫	輝石安山岩		2		30.60	被熱
315	C-99	61.093	礫	輝石安山岩		2		205.27	被熱
507	C-100	61.075	礫	輝石安山岩		2		12.44	被熱
433	C-99	61.122	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	鮮新世？	2		25.31	被熱
436	C-99	61.094	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	2		54.80	被熱
437	C-99	61.102	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	2		11.79	被熱
318	C-89	61.136	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	2	39	21.82	被熱
430	C-99	61.098	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	2	39	25.39	被熱
308	C-100	61.107	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	2	37	7.49	被熱
431	C-99	61.049	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	2	37	19.71	被熱
435	C-99	61.139	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	2	37	19.30	被熱
510	C-100	60.915	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	2	37	5.91	被熱
511	C-100	61.014	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	2	37	22.65	被熱
517	C-90	60.902	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	2	53	14.33	被熱
428	C-100	61.094	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	2		29.98	被熱
434	C-99	61.134	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	2		3.02	被熱
512	C-99	61.035	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	2		20.35	被熱
291	A-20	61.081	礫	頁岩		2	34	33.44	被熱
293	A-10	61.072	礫	頁岩		2	34	11.55	被熱
410	A-10	61.040	礫	頁岩		2		25.72	被熱
426	C-100	61.078	礫	頁岩		2		52.72	被熱
498	A-09	60.887	礫	頁岩		2		1.50	
425	C-100	61.140	礫	チャート		2		7.90	被熱
432	C-99	61.093	礫	チャート		2		111.35	被熱
503	C-100	61.077	礫	チャート		2		49.53	被熱
268	A-28	61.062	礫	黒雲母角閃石花崗閃綠岩		3	32	3.61	被熱 №400・414・424と接合して完形
400	A-28	61.051	礫	黒雲母角閃石花崗閃綠岩		3	32	37.51	被熱 №268・414・424と接合して完形
414	A-28	61.046	礫	黒雲母角閃石花崗閃綠岩		3	32	11.81	被熱 №268・400・424と接合して完形
424	A-28	61.059	礫	黒雲母角閃石花崗閃綠岩		3	32	25.82	被熱 №268・400・414と接合して完形
495	A-37	60.894	礫	流紋岩		3		2.11	被熱
239	A-38	61.018	礫	デイサイト		3		27.91	被熱
282	A-18	61.082	礫	安山岩		3		4.23	被熱
228	A-37	61.012	礫	多孔質安山岩		3		3.14	被熱
271	A-27	61.037	礫	多孔質輝石安山岩		3		21.39	被熱
403	A-28	61.085	礫	輝石安山岩	新第三紀	3	15	24.50	被熱
8	A-48	60.997	礫	輝石安山岩		3		5.15	被熱
274	A-27	61.099	礫	輝石安山岩		3		103.52	
279	A-17	61.092	礫	輝石安山岩		3		207.68	被熱
405	A-38	61.046	礫	輝石安山岩		3		176.84	被熱
415	A-28	61.063	礫	輝石安山岩		3		94.31	被熱
416	A-28	61.032	礫	輝石安山岩		3		94.95	被熱
417	A-26	60.995	礫	輝石安山岩		3		1.95	被熱
13	A-48	61.000	礫	流紋岩質溶結火山礫凝灰岩		3		32.82	
254	A-28	61.083	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	3		182.60	被熱
260	A-28	61.116	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	3		3.66	被熱
262	A-28	61.109	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	3		14.68	被熱
404	A-38	61.063	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	鮮新世？	3		35.86	被熱
232	A-37	61.060	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	3	7	167.33	被熱
251	A-28	61.061	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	3	8	25.76	被熱
256	A-28	61.081	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	29	63.62	被熱
257	A-28	61.080	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	29	174.60	被熱
258	A-28	61.099	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	30	48.09	被熱
277	A-26	61.090	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	30	283.30	被熱
266	A-28	61.118	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	31	71.45	被熱
399	A-27	60.970	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	31	34.16	被熱

第20表 伊勢崎III遺跡 碓属性表（3）

No.	区	標高	器種	石材鑑定	石材備考	礫群	接合No.	重量(g)	備考
283	A-18	61.090	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	33	53.95	被熱
285	A-18	61.085	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	33	196.49	被熱
287	A-18	61.063	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	33	185.52	被熱
408	A-18	61.079	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3	33	4.80	被熱
231	A-37	61.062	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3		0.79	被熱
233	A-38	61.037	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3		102.71	被熱
273	A-27	61.127	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3		32.19	被熱
275	A-27	61.107	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3		4.70	被熱
276	A-26	61.095	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3		14.32	被熱
280	A-18	61.085	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3		12.95	被熱
286	A-18	61.092	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	3		2.26	被熱
253	A-28	61.081	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	3	28	165.28	被熱
255	A-28	61.114	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	3	28	2.13	被熱
284	A-18	61.083	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	3	28	94.67	被熱
493	A-28	61.007	礫	流紋岩質溶結凝灰岩		3		27.08	
263	A-28	61.083	礫	礫岩		3		82.86	被熱
234	A-38	61.019	礫	礫質砂岩		3	26	3.20	被熱
236	A-38	61.092	礫	礫質砂岩		3	26	23.43	被熱
237	A-38	61.045	礫	礫質砂岩		3	26	79.77	被熱
406	A-38	61.018	礫	礫質砂岩		3	26	16.59	被熱
264	A-28	61.101	礫	砂岩		3	4	54.43	被熱 接合No.20・46と同一母岩の可能性
402	A-28	61.064	礫	砂岩		3	46	21.49	被熱 接合No.4・20と同一母岩の可能性
423	A-28	61.064	礫	砂岩		3		7.48	被熱
401	A-28	61.092	礫	頁岩		3		0.84	
2	A-47	61.009	礫	チャート		3	1	17.38	被熱 接合No.23・27・41と同一母岩の可能性
177	A-47	60.987	礫	チャート		3	1	21.75	被熱 接合No.23・27・41と同一母岩
230	A-37	61.094	礫	チャート		3	25	1.72	被熱
407	A-38	61.015	礫	チャート		3	25	7.42	被熱
238	A-38	61.113	礫	チャート		3	27	22.64	被熱 接合No.1・23・41と同一母岩の可能性
494	A-38	60.978	礫	チャート		3	27	36.93	被熱 接合No.1・23・41と同一母岩
240	A-48	61.077	礫	チャート		3		3.90	被熱
267	A-28	61.047	礫	チャート		3		25.91	被熱
38	A-58	61.050	礫	石英斑岩	古期	4	6	14.52	被熱
39	A-58	61.057	礫	石英斑岩	古期	4	6	15.98	被熱
199	A-58	61.040	礫	石英斑岩	古期	4	24	3.49	被熱
205	A-58	61.036	礫	石英斑岩	古期	4	24	0.97	被熱
159	B-81	60.895	礫	流紋岩	古期	4	21	10.66	被熱
160	B-81	60.929	礫	流紋岩	古期	4	21	97.76	被熱
81	A-60	60.979	礫	流紋岩	新第三紀	4		2.51	被熱
82	A-60	60.998	礫	流紋岩	新第三紀	4		13.99	被熱
213	A-57	60.844	礫	流紋岩	新第三紀	4		38.48	被熱
105	A-70	61.015	礫	デイサイト		4		66.27	被熱
132	B-71	60.930	礫	デイサイト	新第三紀	4		0.16	
163	B-82	60.876	礫	輝石デイサイト		4		13.46	被熱
156	B-81	60.922	礫	多孔質輝石デイサイト		4		9.80	被熱
79	A-59	60.915	礫	多孔質安山岩		4		6.77	被熱
86	A-60	60.979	礫	多孔質安山岩		4		121.20	被熱
191	A-59	60.890	礫	多孔質安山岩		4		0.23	被熱
73	A-59	61.030	礫	輝石安山岩	新第三紀	4	15	60.24	被熱
43	A-58	61.008	礫	輝石安山岩		4		93.94	被熱
93	A-68	60.887	礫	輝石安山岩		4		7.67	被熱
100	A-69	60.938	礫	輝石安山岩		4		23.85	被熱
106	A-70	60.915	礫	輝石安山岩		4		10.70	被熱
107	A-70	60.992	礫	輝石安山岩		4		2.95	被熱
112	B-61	60.976	礫	輝石安山岩		4		397.40	被熱
133	B-71	60.856	礫	輝石安山岩		4		2.33	被熱
135	B-71	60.914	礫	輝石安山岩		4		0.30	被熱
139	B-71	60.939	礫	輝石安山岩		4		63.29	被熱
157	B-81	60.929	礫	輝石安山岩		4		196.32	被熱
161	B-82	60.922	礫	輝石安山岩		4		75.00	被熱
170	B-91	60.787	礫	輝石安山岩		4		146.47	
171	B-91	60.747	礫	輝石安山岩		4		75.97	被熱
187	A-58	61.006	礫	輝石安山岩		4		13.07	被熱
207	A-100	60.700	礫	輝石安山岩		4		21.84	
113	B-61	60.971	礫	火山礫凝灰岩	古期	4	18	146.39	被熱
134	B-71	60.941	礫	火山礫凝灰岩	古期	4	18	403.69	被熱
56	A-58	61.020	礫	火山礫凝灰岩	古期	4		97.94	被熱
122	A-79	60.994	礫	火山礫凝灰岩	古期	4		111.69	被熱
59	A-58	61.008	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	4	12	51.16	被熱
178	A-58	61.004	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	4	12	105.90	被熱
114	B-61	60.961	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	4	19	110.95	被熱
115	B-61	60.967	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	4	19	22.07	被熱
40	A-58	61.054	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	4		74.25	被熱
94	A-68	61.001	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	4		195.94	被熱
218	A-88	60.692	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	4		8.22	被熱
42	A-58	61.062	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	7	60.58	被熱
44	A-58	61.086	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	1.63	被熱
46	A-58	61.008	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	55.89	被熱

第21表 伊勢崎Ⅲ遺跡 磯属性表(4)

No.	区	標高	器種	石材鑑定	石材備考	磯群	接合No.	重量(g)	備考
51	A-58	61.010	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	5.02	被熱
55	A-58	61.051	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	0.97	被熱
57	A-58	61.022	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	12.88	被熱
58	A-58	61.029	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	5.54	被熱
60	A-58	61.035	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	55.13	被熱
183	A-58	61.010	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	7.73	被熱
186	A-58	61.010	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	15.29	被熱
202	A-58	60.980	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	8	3.13	被熱
101	A-69	61.017	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	16	1,211.45	被熱
180	A-69	61.007	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4	16	13.60	被熱
20	A-49	61.087	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4		15.08	被熱
26	A-57	60.960	礫	流紋岩質凝灰岩	新第三紀	4		1.86	
37	A-58	61.001	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4		1.37	被熱
83	A-60	60.981	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4		3.22	被熱
109	A-70	60.899	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4		5.73	被熱
192	A-60	60.874	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4		5.05	被熱
193	A-60	60.888	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	4		2.47	被熱
219	A-90	60.740	礫	流紋岩質凝灰岩	新第三紀	4		15.69	被熱
220	A-80	60.760	礫	流紋岩質凝灰岩	新第三紀	4		2.86	被熱
29	A-57	60.980	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	3	2.42	被熱
30	A-58	60.992	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	3	201.70	被熱
179	A-58	61.004	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	3	19.49	被熱
47	A-58	61.057	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	10	15.13	被熱
48	A-58	61.037	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	10	33.54	被熱
49	A-58	61.023	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	10	55.68	被熱
50	A-58	61.008	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	11	3.89	被熱
66	A-58	61.049	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	11	23.75	被熱
67	A-58	61.044	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	11	44.97	被熱
68	A-58	61.052	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	11	2.31	被熱
69	A-58	61.046	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	14	1.30	被熱
72	A-58	61.026	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	14	167.20	被熱
102	A-69	60.975	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	17	82.13	被熱
103	A-69	61.019	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	17	57.55	被熱
124	A-79	60.989	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4	17	13.64	被熱
70	A-58	61.012	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		3.07	被熱
76	A-59	60.960	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		0.34	被熱
84	A-60	61.003	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		9.02	被熱
85	A-60	60.923	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		3.59	被熱
87	B-61	60.947	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		10.53	被熱
98	A-69	61.007	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		5.01	被熱
125	A-80	60.974	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		8.76	被熱
130	A-80	60.926	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		0.14	被熱
136	B-71	60.903	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		0.10	被熱
184	A-58	60.987	礫	デイサイト質凝灰岩		4		2.16	被熱
190	A-48	61.027	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		7.52	被熱
194	A-60	60.954	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		7.97	被熱
196	A-80	60.952	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		4.24	被熱
198	A-58	61.037	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		0.62	被熱
203	A-58	61.020	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		1.93	被熱
216	A-58	60.872	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	4		2.67	被熱
45	A-58	61.044	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	4	9	158.03	被熱
54	A-58	61.040	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	4	9	25.14	被熱
63	A-58	61.032	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	4	9	28.45	被熱
188	A-58	61.030	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	4	9	10.50	被熱
195	A-49	61.022	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	4	9	1.31	被熱
162	B-82	60.930	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	新第三紀	4		42.39	被熱
7	A-48	61.033	礫	砂岩		4	2	3.17	被熱
15	A-48	61.062	礫	砂岩		4	2	69.73	被熱
53	A-58	60.977	礫	砂岩		4	2	2.00	被熱
32	A-58	61.053	礫	砂岩		4	4	6.92	被熱 接合No.20・46と同一母岩の可能性
61	A-58	61.052	礫	砂岩		4	4	13.64	被熱 接合No.20・46と同一母岩の可能性
99	A-69	60.985	礫	砂岩		4	4	21.35	被熱 接合No.20・46と同一母岩の可能性
104	A-69	60.902	礫	砂岩		4	4	28.71	被熱 接合No.20・46と同一母岩の可能性
64	A-58	61.050	礫	砂岩	新第三紀	4	13	10.34	被熱
65	A-58	61.051	礫	砂岩	新第三紀	4	13	4.56	被熱
153	B-81	60.918	礫	砂岩		4	20	44.55	被熱 接合No.4・46と同一母岩の可能性
154	B-81	60.878	礫	砂岩		4	20	12.55	被熱 接合No.4・46と同一母岩の可能性
172	B-92	60.827	礫	砂岩		4	22	53.87	被熱
174	B-92	60.832	礫	砂岩		4	22	61.19	被熱
34	A-58	61.052	礫	砂岩	新第三紀	4		24.64	被熱
74	A-59	60.992	礫	砂岩	土器?	4		5.81	被熱
75	A-59	60.924	礫	砂岩		4		4.68	
78	A-59	60.994	礫	砂岩		4		11.15	
80	A-60	61.017	礫	砂岩		4		5.79	被熱
121	A-78	60.865	礫	砂岩		4		2.71	被熱
173	B-92	60.810	礫	砂岩		4		88.68	被熱
35	A-58	61.052	礫	チャート	变成チャート	4	5	30.72	被熱
200	A-58	61.026	礫	チャート	变成チャート	4	5	69.72	被熱

第22表 伊勢崎III遺跡 磯属性表（5）

No.	区	標高	器種	石材鑑定	石材備考	礫群	接合No.	重量(g)	備考
185	A-58	61.024	礫	チャート		4	23	0.77	被熱 接合No.1・27・41と同一母岩の可能性
189	A-58	60.964	礫	チャート		4	23	13.38	被熱 接合No.1・27・41と同一母岩の可能性
97	A-69	60.947	礫	チャート		4		0.30	
129	A-80	60.857	礫	チャート		4		1.07	
176	A-58	60.967	礫	チャート		4		1.59	被熱
204	B-81	60.797	礫	チャート		4		3.68	被熱
375	B-34	61.003	礫	石英斑岩	古期	5	45	8.02	被熱
377	B-34	61.010	礫	石英斑岩	古期	5	45	16.87	被熱
378	B-35	60.973	礫	石英斑岩	古期	5	45	10.11	被熱
394	B-24	61.042	礫	石英斑岩	古期	5	45	23.97	被熱
355	B-46	60.985	礫	流紋岩	新第三紀	5	43	9.30	被熱
392	B-24	60.995	礫	流紋岩	新第三紀	5	43	0.24	被熱
364	B-45	60.898	礫	デイサイト	新第三紀	5		1.42	被熱
380	B-36	60.937	礫	デイサイト	新第三紀	5		1.58	被熱
349	B-55	60.927	礫	輝石デイサイト	新第三紀	5		2.04	被熱
381	B-36	60.978	礫	安山岩		5		6.29	被熱
492	B-24	60.845	礫	多孔質輝石安山岩		5		20.89	被熱
372	B-44	60.975	礫	緻密質安山岩		5		10.05	被熱
374	B-34	60.990	礫	輝石安山岩		5		2.18	被熱
376	B-34	61.008	礫	輝石安山岩		5		56.13	被熱
379	B-35	60.945	礫	輝石安山岩		5		3.62	被熱
388	B-24	61.047	礫	輝石安山岩		5		78.48	被熱
348	B-55	60.945	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	古期	5		6.07	被熱
369	B-44	60.893	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	5		2.56	被熱
383	B-25	60.997	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	5		4.35	被熱
386	B-25	61.061	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	5		0.50	被熱
357	B-45	60.942	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	5		0.87	被熱
360	B-45	60.952	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	5		0.85	被熱
361	B-45	60.885	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	5		0.65	被熱
358	B-45	60.961	礫	砂岩		5		4.40	被熱
363	B-45	60.953	礫	砂岩		5		5.80	被熱
365	B-44	60.912	礫	砂岩		5		3.12	被熱
371	B-44	60.951	礫	砂岩		5		2.96	被熱
356	B-45	60.983	礫	頁岩		5	44	8.98	被熱
359	B-45	60.852	礫	頁岩		5	44	5.29	被熱
366	B-44	61.018	礫	頁岩		5	44	10.85	被熱
352	B-55	60.839	礫	頁岩		5		19.90	被熱
389	B-24	60.991	礫	頁岩		5		0.72	
346	B-54	60.926	礫	チャート		5		1.39	被熱
373	B-44	60.992	礫	チャート		5		48.53	
290	A-19	61.059	礫	石英斑岩	古期	外		262.37	被熱
215	A-45	60.830	礫	流紋岩	新第三紀	外		1.94	被熱
248	A-29	61.019	礫	デイサイト	新第三紀	外		12.26	被熱
167	A-99	60.875	礫	安山岩		外		1.15	被熱
289	A-19	61.045	礫	安山岩		外		3.02	被熱
210	A-77	60.824	礫	輝石安山岩		外		11.83	被熱
214	A-47	60.880	礫	輝石安山岩		外		8.34	被熱
222	A-85	60.721	礫	輝石安山岩		外		134.53	被熱
226	A-35	61.135	礫	輝石安山岩		外		18.06	被熱
245	A-29	61.072	礫	輝石安山岩		外		370.97	被熱
24	A-56	61.022	礫	火山礫凝灰岩	古期	外		25.78	被熱
398	B-16	61.064	礫	デイサイト質火山礫凝灰岩	古期	外		371.41	被熱
440	C-98	61.161	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	外		45.20	被熱
483	C-70	61.185	礫	デイサイト質溶結凝灰岩	古期	外		9.43	被熱
212	A-67	60.833	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	外		5.32	被熱
227	A-35	61.056	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	外		45.18	被熱
419	A-19	60.980	礫	流紋岩質凝灰岩	古期	外		67.21	被熱
441	C-88	61.077	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	外	37	60.49	被熱
224	A-85	60.852	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	外		35.84	被熱
278	A-26	61.093	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	外		1.13	
292	A-20	61.042	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	外		6.81	被熱
305	A-07	61.073	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	外		68.82	被熱
306	A-07	61.116	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	外		141.72	被熱
307	A-07	61.117	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	外		2.83	被熱
520	C-89	61.072	礫	デイサイト質凝灰岩	古期	外		5.58	被熱
485	C-80	61.095	礫	流紋岩質溶結凝灰岩	鮮新世?	外		13.78	被熱
88	A-66	61.146	礫	砂岩		外		0.64	被熱
208	A-97	60.790	礫	砂岩		外		0.31	
421	A-29	60.961	礫	砂岩		外		22.24	被熱
221	A-97	60.725	礫	頁岩		外		0.62	
209	A-87	60.725	礫	チャート		外		8.18	
211	A-76	60.835	礫	チャート		外		0.87	
317	C-88	61.185	礫	チャート		外		19.68	被熱
438	C-98	61.144	礫	チャート		外		13.12	被熱

(3) 積穴住居跡

今回の調査で発見された竪穴住居跡は、A区から2軒（S-1・2）、B区から2軒（S-30・32）の、併せて4軒である。いずれも台地から低地にかけての緩斜面上に構築されている。以下、各遺構ごとに詳述する。

S-1 (第49~51図、第23表、図版七・二六・三〇)

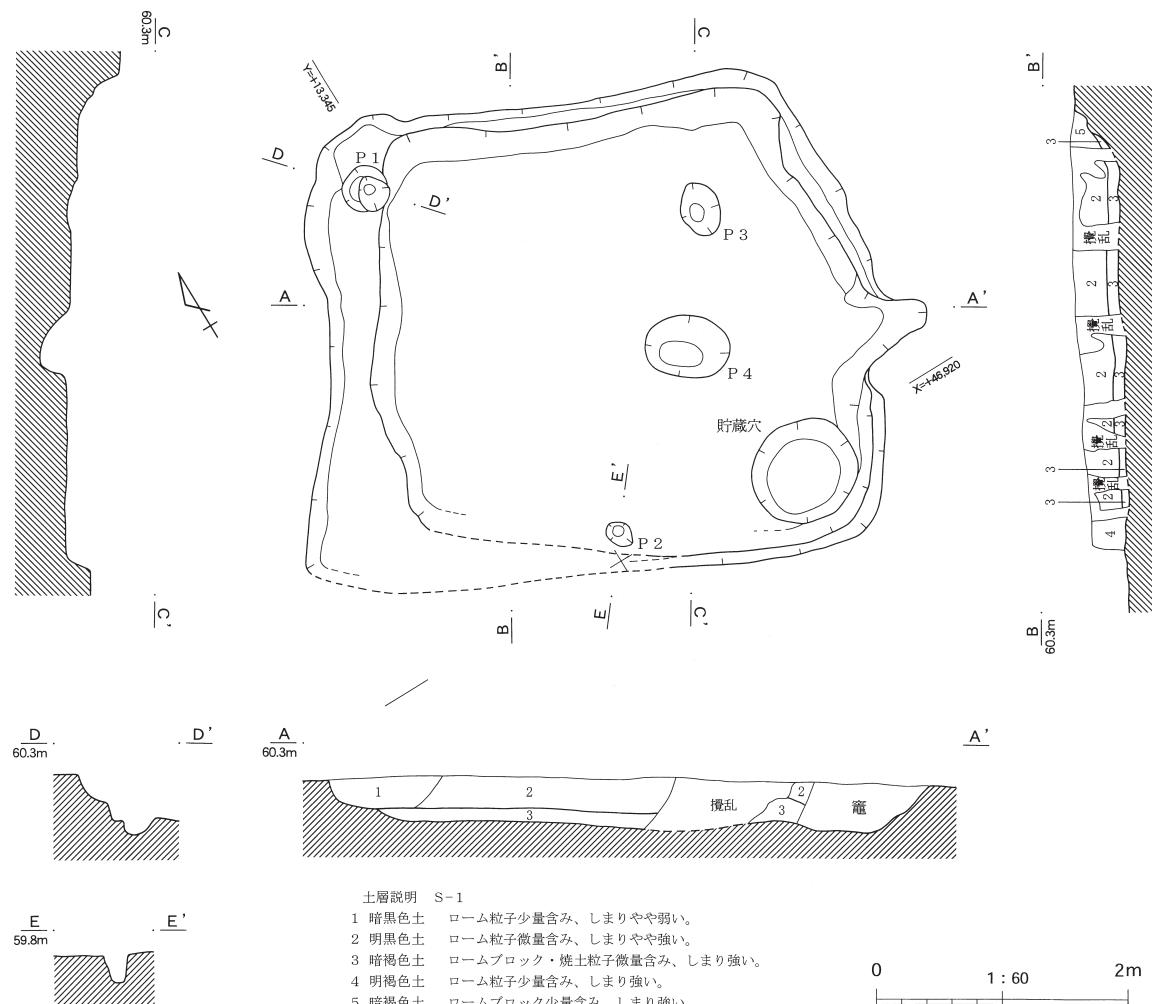
位置 A区の南東部に確認し、台地平坦面から緩斜面にかけて位置する。

新旧関係 他の遺構との重複はないが、建て替えに伴い拡張がなされている。

規模・形状 南西コーナー部分から南辺中央部分にかけて削平されているが、拡張後の住居（以下、「新住居」と呼称）が東西 4.49m・南北 3.95m の隅丸長方形状、拡張前の住居（以下、「旧住居」と呼称）が東西 3.98m・南北 3.69m の隅丸方形状と推定される。建て替えは、竈部分をやや西に造り直し、東・西・南・北の各辺を 0.12 ～ 0.90m 程度、拡張して行われている。また、全体的にゴボウ耕作による攪乱を受けている。

主軸方向 竈を上に見立てるとき、新・旧住居ともN-120°-Eである。

埋土 住居本体は、ゴボウ耕作による攪乱を除いて、新住居が4層、旧住居が1層に分層できる。新住居は、ロー



第49図 伊勢崎川遺跡 S-1 実測図 (1)

ム粒子・ロームブロックを少量含む明黒色土を中心に、旧住居は、焼土粒子・ロームブロックを微量含む暗褐色土で、ともに人為的に埋め戻されたと考えられる。

壁 新住居は、確認面から 0.25m 前後の深さで、ほぼ垂直に立ち上がる。

旧住居は、確認面から 0.40m 前後の深さで、ややなだらかに立ち上がる。造り替えによって浅くなっている。

床面・貼床 新住居は、ほぼ平坦で、埋め戻した貼床面（3層上面）のしまりが弱く、硬化範囲なども確認できないため、短期間での使用、もしくは敷物などを敷いて生活していた可能性などが考えられる。

旧住居は、ほぼ平坦だが、所々に小さな凹凸があり、貼床は施されていなかった。

掘方 新住居は確認できなかった。P 3・P 4 の落ち込みは、旧住居掘方の一部と考えられる。

周溝 新・旧住居とも確認できなかった。

柱穴 新・旧住居とも主柱穴は確認できず、いずれも壁で上屋を支えたか、もしくは竪穴の外に柱穴を持っていた可能性が考えられる。

入り口ピット 北西コーナーに P 1 が、また、東壁中央寄りにも P 2 が確認されている。いずれも上面の埋土が失われているので確定はできないが、平面的な位置から推測すると、新住居は南東コーナーか東辺中央に、旧住居は東辺中央に入り口を設けていた可能性が考えられる。

火処 新・旧住居とも東壁中央やや南寄りに、竈を造り付けている。建て替えの際、住居内側方向に煙道先端を 0.32m 移動させて造り直したことが分かっている。ゴボウ耕作による攪乱のため、新・旧いずれも天井部・袖部等の残存状況はあまり良くない。

新住居竈（以下、「新竈」と呼称）の平面形は、攪乱のため一部不明であるが、旧住居竈（以下、「旧竈」と呼称）と相似形であると考えられる。内側は若干焼けており、旧竈に比べて焼土粒子の堆積は少なかった。煙道は、先端が 75° の傾きで立ち上がる。燃焼部底面（2層）のしまりもやや弱く、短期間の使用であったと考える。

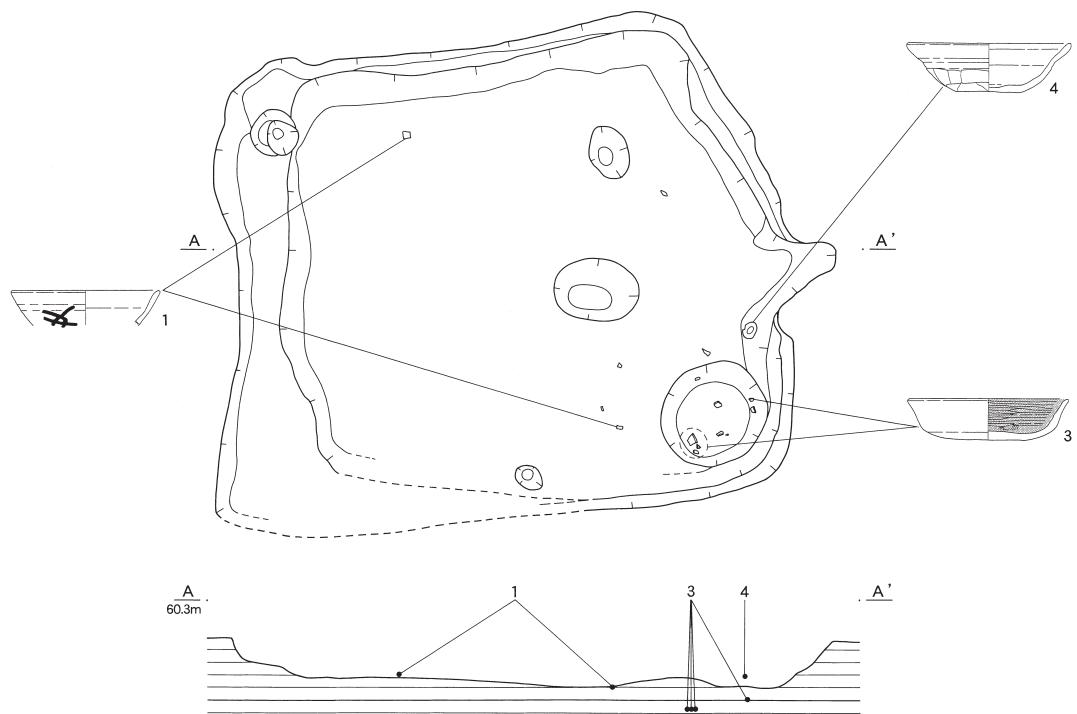
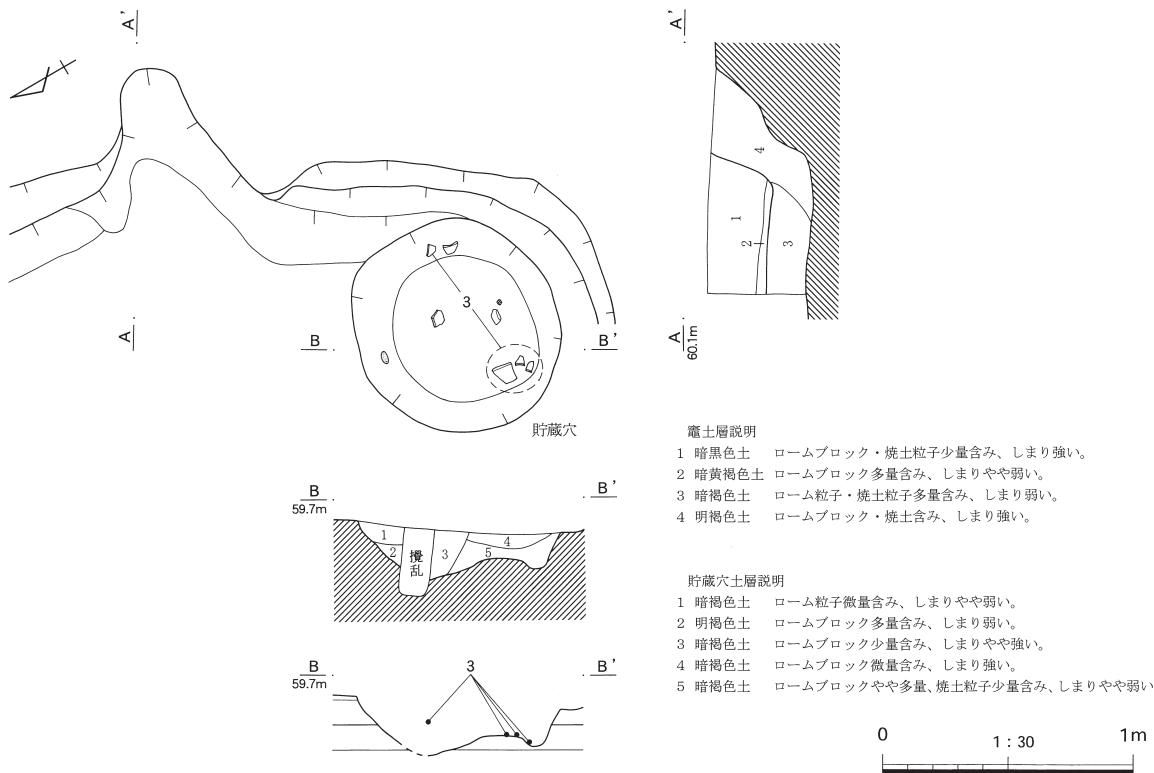
旧竈は、燃焼部から煙道にかけて良く焼けていた。煙道は、平面船首形状で、先端が 45° の傾きで緩やかに立ち上がり、掘方は東壁を幅 0.77m、奥行き 0.54m に掘り込んでいる。燃焼部内における焼土粒子の堆積が多いことから、新竈に比べて使用期間は長かったと考える。

貯蔵穴 南東コーナーに 1 基確認した。平面不整円形状、断面逆台形状で、規模は直径 0.80～0.88m、深さ 0.23m である。遺物は 3 が出土している。

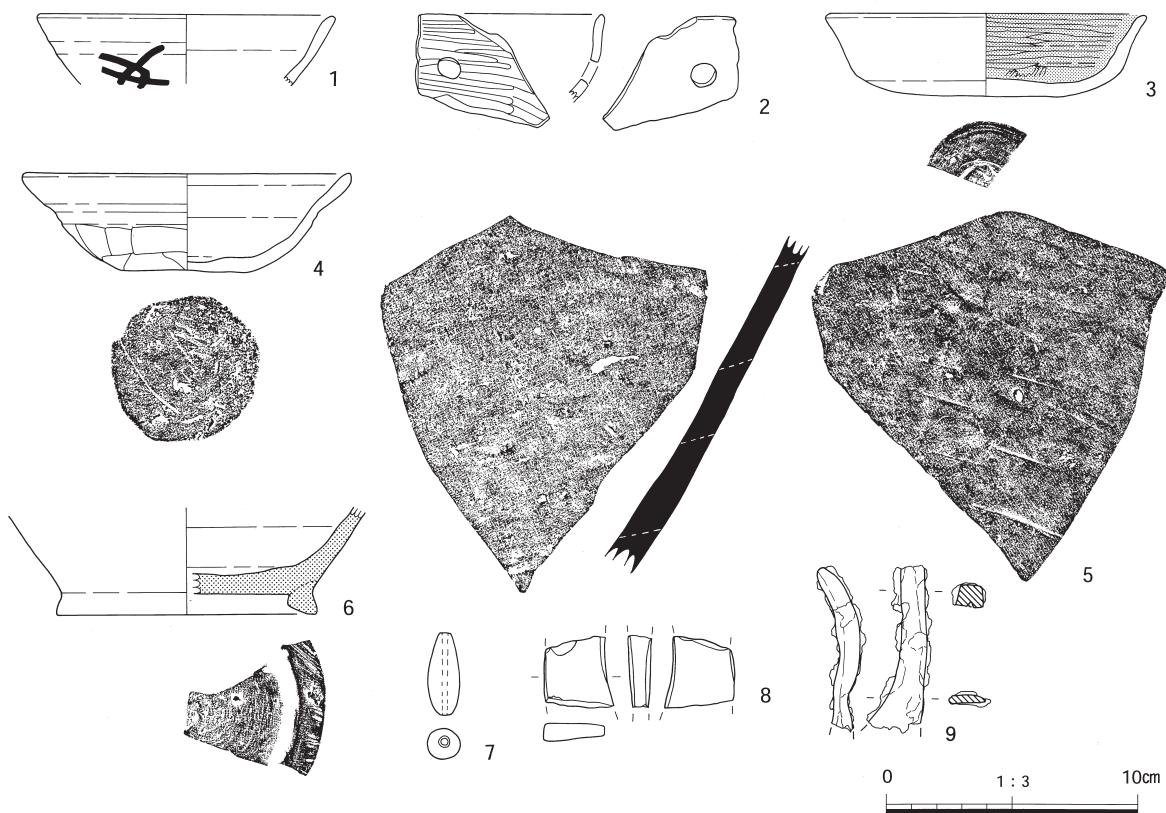
遺物 完形品と破片も含めて総数 551 点（うち土師器 533 点、須恵器 13 点）が出土した。当遺跡の中では、比較的出土遺物数の多い住居である。

調査時には 15 点の遺物を記載した。最終的に図示し得た遺物は第 51 図のとおりで、土師器の壺 4 点（1・2・3・4）、須恵器の甕 1 点（5）、灰釉陶器の壺・瓶類 1 点（6）、土錐 1 点（7）、砥石 1 点（8）、鉄製吊金具 1 点（9）の計 9 点である。図示した遺物の出土状態は、貼床内から 1 点（1）、竈前庭部床面直上 1 点（4）、貯蔵穴内 1 点（3）、埋土中 6 点（2・5・6・7・8・9）である。

1 の体部外面には、逆位に「女」銘の墨書きが書かれている。2 は焼成後に穿孔されているが、使用用途は不明である。4 は体部下端を手持ちヘラケズリするなど、須恵器製作技法が用いられており、最終的には灯明皿に転用されている。須恵器 5 の産地は不明である。6 の体部外面は薄い釉が施されており、猿投窓跡群産の可能性がある。9 は木心金属張三角錐形壺鑑の吊金具と考えられる。頂部は断面方形、板状の部分は両側縁の開きから鳩胸側留金具の可能性がある。または、短軸一方の側縁が直線状で、もう一方の側縁が弧状になっていることから、在地的な金属製壺鑑の枠金の可能性もある。他に縄文土器片（図示し得たのは 1 点）が出土したが、当遺構の時期に該当しないため「遺構外出土遺物」に掲載している。



第50図 伊勢崎III遺跡 S-1 実測図 (2)



第51図 伊勢崎III遺跡 S-1出土遺物実測図

第23表 伊勢崎III遺跡 S-1出土遺物観察表

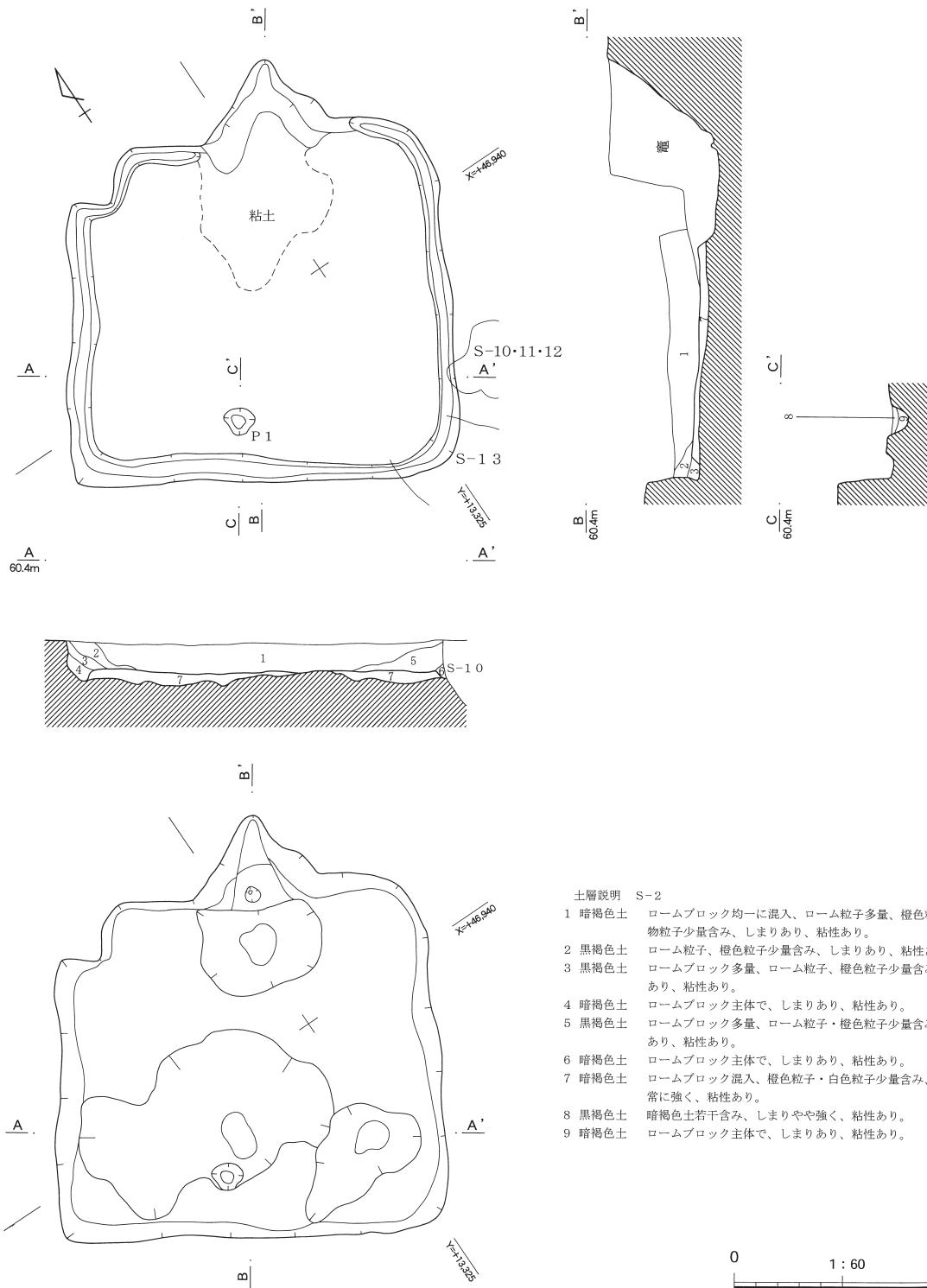
No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴 (外)	整形の特徴 (内)	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	土師器 壺	口径 (12.0) 器高 [2.8]	体部は直線的に開く	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・良 内: 7.5YR7/4 にぶい橙 外: 7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部 1/4	新住居の 貼床内	外面墨書「女」
2	土師器 壺	器高 [3.6]		ロクロナデ	ヘラミガキ	金雲母・良 内: 10YR3/2 黒褐 外: 10YR5/3 にぶい黄褐	口縁部 1/6	埋土中	焼成後穿孔 内面黒色処理
3	土師器 壺	口径 (13.0) 器高 3.3 底径 (5.0)	平底。体部はやや外反し て立ち上がる	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ ヘラミガキ	金雲母, 赤色粒・良 内: N2/ 黒 外: 7.5YR6/6 橙	1/4	貯蔵穴内	内面黒色処理
4	土師器 壺	口径 13.2 器高 3.8 底径 5.0	平底。体部は内弯するよ うに開き、中位から外反 する	口縁部ロクロナデ 体部下端・底部回転 ヘラ切り後、手持ち ヘラケズリ	ロクロナデ	砂粒・良 内: 10YR6/6 明黄褐 外: 10YR6/8 明黄褐	ほぼ完形	カマド 前庭部 床面上	内面黒色化
5	須恵器 甕			タタキ	ナデ	砂粒, 小礫・良 内: N4/ 灰 外: N4/ 灰	胴部破片	埋土中	内面接合痕 産地不明
6	灰釉陶器 壺・ 瓶類	器高 [4.3] 底径 (10.4)	高台断面三角形状	底部回転ヘラ切り後、 高台ハリツケ	ロクロナデ	砂粒・良 内: 7.5Y7/1 灰白 外: 7.5Y6/1 灰	底部 1/6	埋土中	狼投産?
7	土錘	長 3.3 幅 1.3 孔 0.2	管状紡錘形			良 外: 10YR6/3 にぶい黄橙	完形	埋土中	重量 5.38 g
8	砥石	長 2.9 幅 2.8 厚 0.9	側面が大きく抉られる撥 形で両端を欠損	長軸4面を底面とす る		10Y7/2 灰白	中央部 のみ	埋土中	重量 8.94 g 頁岩 (新第三紀) 製
9	鉄製品 鎧 吊金具	長 [6.7] 幅 1.5 厚 0.9	頂部は断面方形で板状			2.5YR3/2 暗赤褐	側縁部 のみ	埋土中	重量 16.23 g

S-2 (第52~56図、第24表、図版八・二六・二七)

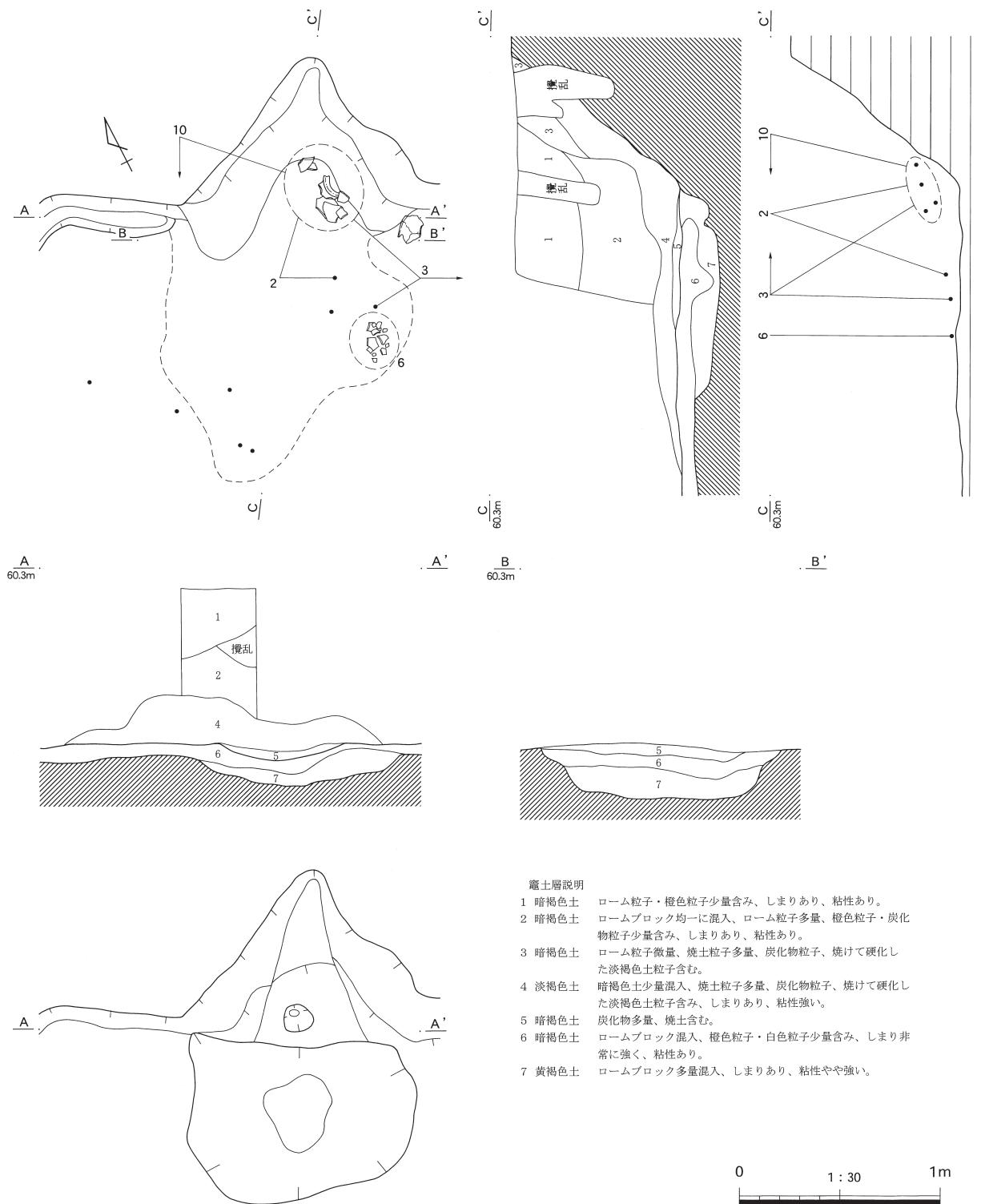
位置 A区の中央部北側に確認し、台地の平坦面上に位置する。

新旧関係 S-10・S-11・S-12・S-13より古い。

規模・形状 北西コーナーが内側に張り出すように掘り残されているが、掘り下げ時の断面観察では遺構の



第52図 伊勢崎III遺跡 S-2 実測図 (1)

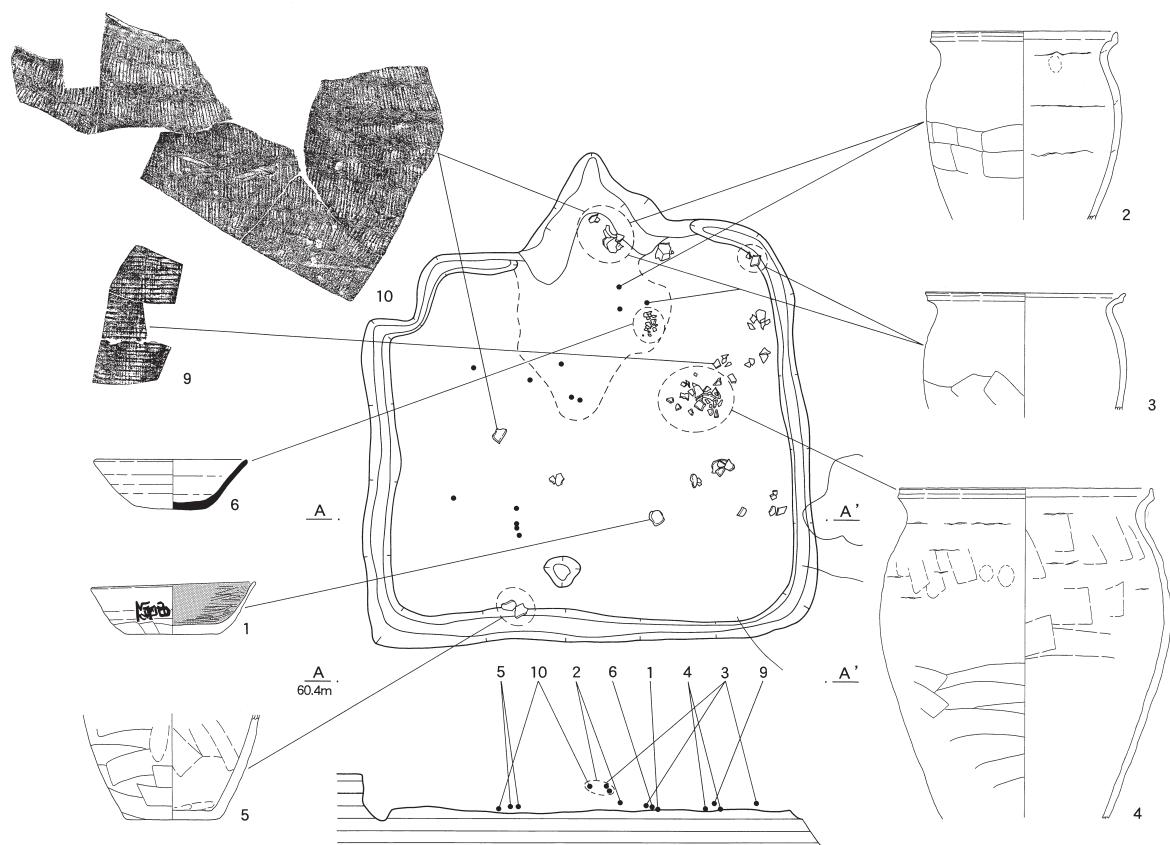


第53図 伊勢崎III遺跡 S-2 実測図 (2)

重複は認められなかった。よって、東西 3.52m・南北 3.35m の不整方形状である。また、全体的にゴボウ耕作による攪乱を受けているが、床面までは達していない。

主軸方向 築を上に見立てると、N-34°-E である。

埋土 住居本体は、ゴボウ耕作による攪乱を除いて 7 層に分層できる。第一次堆積 (2 ~ 4・6 層) が認めら



第54図 伊勢崎III遺跡 S-2 実測図 (3)

れるが、全体的にローム粒子・ロームブロックを多量に含むことから、住居が廃絶してしばらく放置され自然堆積した後に、暗褐色土や黒褐色土で埋め戻されたものと考える。

壁 深さは、竈周辺拡張部では確認面から 0.84m である。各辺ともほぼ垂直に立ち上がる。

床面・貼床 床面は平坦で、貼床（7層上面）が施され非常に硬くしまっている。竈前庭部には、粘土や炭化物粒子を含む、破壊された竈構築材が堆積していた。

掘方 深さ 0.15m 程度に、竈前提部分と住居南半の 2ヶ所が掘り窪められており、若干小さな凹凸が目立つ。

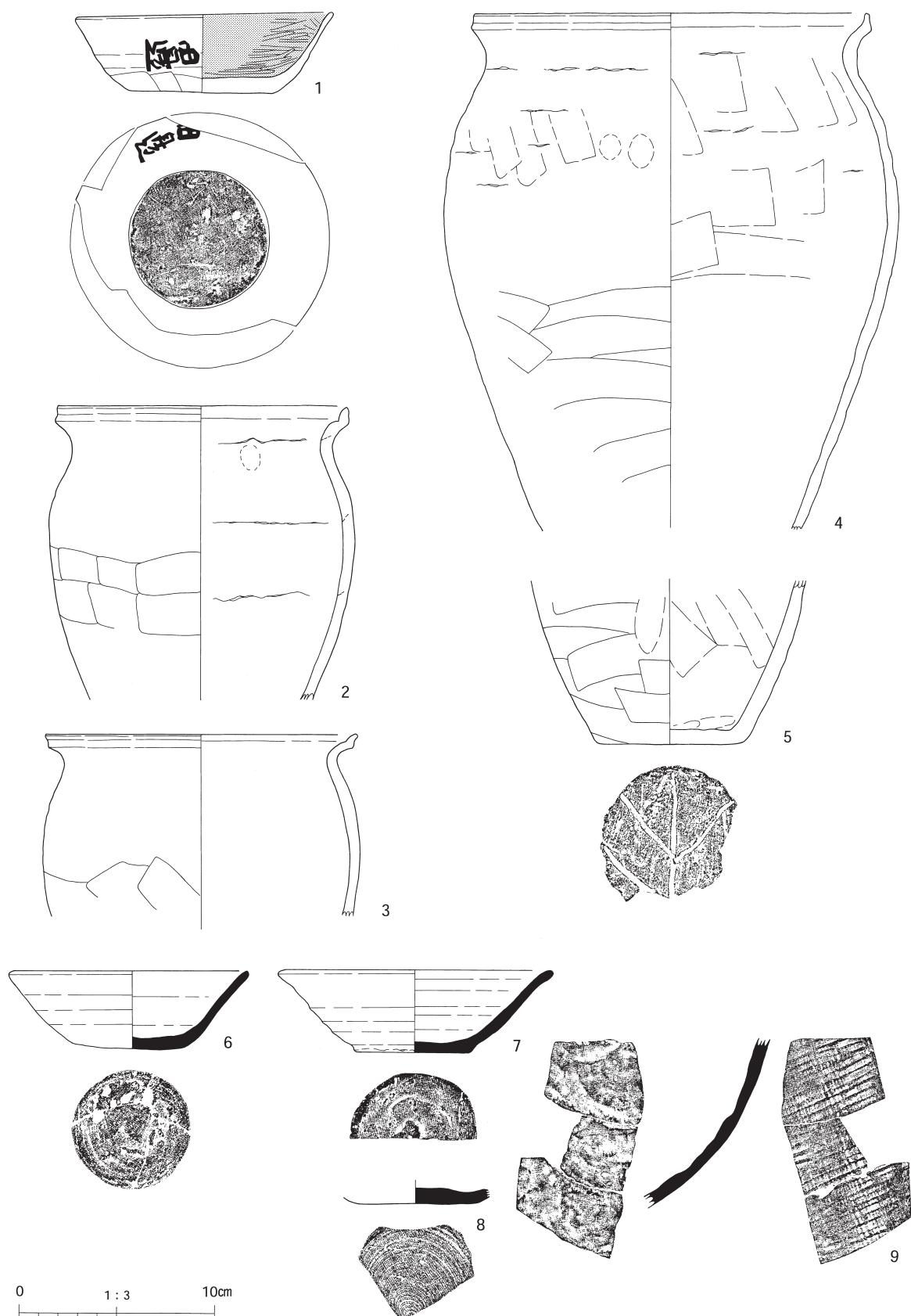
周溝 全周しており、各辺ともやや蛇行気味である。幅は、0.08～0.35m で、南西コーナー付近が最も広い。

深さは全体的に床面から 0.08m ほどで、断面形は U字状である。

柱穴 主柱穴は確認できず、壁で上屋を支えたか、もしくは竈外に柱穴があった可能性が考えられる。

入り口ピット 南壁中央に P1 が確認されている。直径は 0.30m、深さ 0.15m で、埋土は黒褐色土と暗褐色土からなる。柱痕等は確認できなかった。

火処 北壁やや中央東寄りに、竈を造り付けている。ゴボウ耕作による攪乱による影響は少ないものの、廃絶時に天井部・袖部等は徹底的に破壊・撤去されていた。確認できた規模は、幅 1.20m、奥行き 1.02m である。燃焼部から煙道にかけては良く焼けている。煙道は、平面三角形状で、先端が 54° の傾きで緩やかに立ち上がり、掘方は北壁を幅 1.20m、奥行き 0.74m に掘り込んでいる。床面は東西 1.10m、南北 0.76m の平面不整楕円形状、深さ 0.20m の断面皿状に掘り窪めた後に、暗褐色土や黄褐色土で埋め戻して火床（5層下面）としている。また、床面内にある直径 0.14m、深さ 0.05m の小穴は、位置的な関係から支脚の抜取痕の可能性がある。燃焼部内



第55図 伊勢崎III遺跡 S-2出土遺物実測図 (1)

における焼土粒子・炭化物粒子の堆積が多いことから、使用期間は長かったと考える。遺物は2・3・10が出土している。

貯蔵穴 確認できなかった。

遺物 完形品と破片も含めて総数316点（うち土師器233点、須恵器35点）が出土。比較的出土遺物数の多い住居である。

調査時には47点の遺物を記載した。最終的に図示し得た遺物は、第55・56図のとおりで、土師器の壺1点（1）・甕4点（2・3・4・5）、須恵器の壺3点（6・7・8）・甕2点（9・10）の計10点である。

図示した遺物の出土状態は、床面直上3点（1・4・6）、ほぼ床面直上2点（5・9）竈中3点（2・3・10）、埋土中2点（7・8）である。

1は内面黒色処理を施した壺で、体部外側には横位に「田邊」銘の墨書が書かれている。体部下端を持ちヘラケズリするなど、須恵器製作技法が用いられている。2～4は、下野型土師器甕（茨城県・千葉県における、いわゆる常総型土師器甕を指すが、当報告書では本県の先学に敬意を表し、下野型土師器甕の名称を使用する。以下、「下野型甕」と呼称）である。5は底部に木葉痕を模倣したと思われるヘラ描きが施されている。須恵器6は益子窯跡群産（以下、「益子産」と呼称）の可能性がある。7は益子産、8は三毳山麓窯跡群産（以下、「三毳産」と呼称）、9は新治窯跡群産（以下、「新治産」と呼称）、10は三和窯跡群産（以下、「三和産」と呼称）の製品である。

他に縄文土器片（図示し得たのは4点）・縄文時代石器（1点）・弥生土器片（1点）が出土したが、当遺構の時期に該当しないため、それぞれ「遺構外出土遺物 縄文土器・縄文時代石器・弥生土器」に掲載している。



第56図 伊勢崎III遺跡 S-2出土遺物実測図 (2)

第24表 伊勢崎III遺跡 S-2出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴（外）	整形の特徴（内）	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	土師器 壺	口径 13.2 器高 4.2 底径 7.3	平底。体部はやや内湾するように開く	底部・体部下端 手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	砂粒、赤色粒・良 内：N2/ 黒 外：10YR6/3 にぶい黄橙	3/4	床面直上	内面黒色処理 外面墨書「田邊」
2	土師器 鼎	口径 (14.8) 器高 [15.1] 胴径 (15.6)	口縁部は短く外反し、端部をつまみ上げ、口唇部直立	口縁部ヨコナデ 肩部ナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	雲母、赤色粒・良 内：5YR6/6 橙 外：5YR5/6 明赤褐	口縁部 ～胴部 1/2	カマド・ ほぼ床面直上	内面接合痕・指頭痕 外面一部黒色化
3	土師器 鼎	口径 (16.0) 器高 [9.4] 胴径	口縁部は短く外反し、端部をつまみ上げ、口唇部直立	口縁部ヨコナデ 肩部ナデ 胴部中位ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	金雲母、小礫・良 内：7.5YR4/2 灰褐 外：7.5YR4/3 褐	口縁部 ～胴部 1/3	カマド・ ほぼ床面直上	内面黒色化 外面炭化物付着
4	土師器 鼎	口径 (20.0) 器高 [26.2] 胴径 (23.2)	口縁部は短く外反し、端部をつまみ上げ、口唇部直立	口縁部ヨコナデ 肩部ナデ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ ヘラナデ	砂粒・良 内：7.5YR4/3 褐 外：2.5YR5/6 明赤褐	口縁部 ～胴部 1/2	床面直上	外面粘土付着顕著・ 指頭痕 口縁部内外面黒色化 外面接合痕
5	土師器 鼎	器高 [8.4] 底径 (7.5)	平底。胴部中位までは直線的に立ち上がる	胴部下半・底部ヘラケズリ 一部ヘラナデ	ヘラナデ 底部ユビナデ	小礫・良 内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：10YR4/4 褐	底部周辺 2/3	ほぼ床面直上	底部ヘラ記号
6	須恵器 壺	口径 12.3 器高 4.0 底径 6.0	平底。体部は直線的に開く	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	礫・良 内：5Y5/1 灰 外：5Y5/1 灰	3/4	床面直上	内外面礫露出 益子産
7	須恵器 壺	口径 (14.1) 器高 4.2 底径 (6.0)	平底。体部は直線的に開き、口縁部がわずかに外反する	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	礫・良 内：5Y5/2 灰オリーブ 外：5Y6/2 灰オリーブ	1/4	埋土中	内面礫露出 益子産
8	須恵器 壺	器高 [0.8] 底径 (6.0)	平底	底部回転糸切り	ロクロナデ	やや良 内：5Y5/2 灰オリーブ 外：5Y4/2 灰オリーブ	底部 3/4	埋土中	三毳産
9	須恵器 鼎			擬格子叩き	同心円タタキ	雲母・良 内：10YR2/1 黒 外：10YR3/1 黒褐	胴部破片	ほぼ床面直上	内外面黒色化 新治産
10	須恵器 鼎			平行叩き	ナデ	砂粒・良 内：2.5Y6/2 灰黄 外：2.5Y7/4 浅黄	胴部破片	カマド・ ほぼ床面直上	内面指頭痕 三和産

S-30 (第57~60図、第25表、図版八・九・二七)

位置 B区の南東部に確認し、台地の平坦面上に位置する。

新旧関係 他の遺構との重複はない。

規模・形状 東西 6.18m、南北 5.50m の、やや東西に長い長方形である。また、ゴボウ耕作による攪乱を受けているが、表土層が厚かったため全体的な影響は少ない。ただし、耕作に先行した土地改良時の上半部分の削平が著しい。

主軸方向 北辺を上にすると、N-2°-Wである。

埋土 住居本体は、ゴボウ耕作による攪乱を除いて3層に分層できる。第一次堆積（4層）が認められるが、全体的にローム粒子・ロームブロックを含むことから、住居が廃絶してしばらく放置され自然堆積した後に、暗褐色土や明褐色土などで埋め戻されたものと考える。

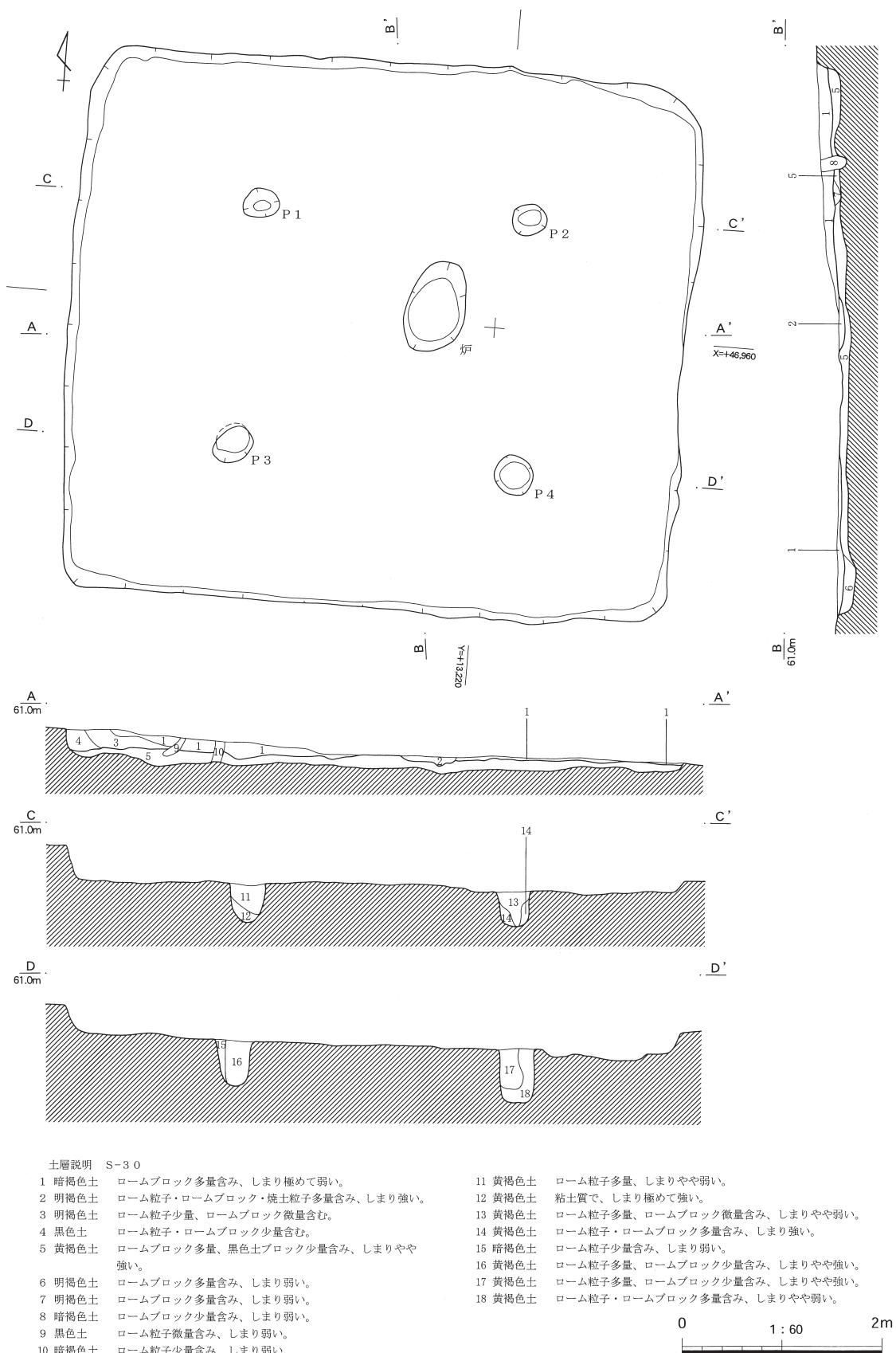
壁 深さは、確認面から 0.03 ~ 0.28m である。各辺とも 65 ~ 70°の傾きで立ち上がる。

床面・貼床 床面はほぼ平坦で、貼床（5層上面）が施されており、しまりはやや強い。

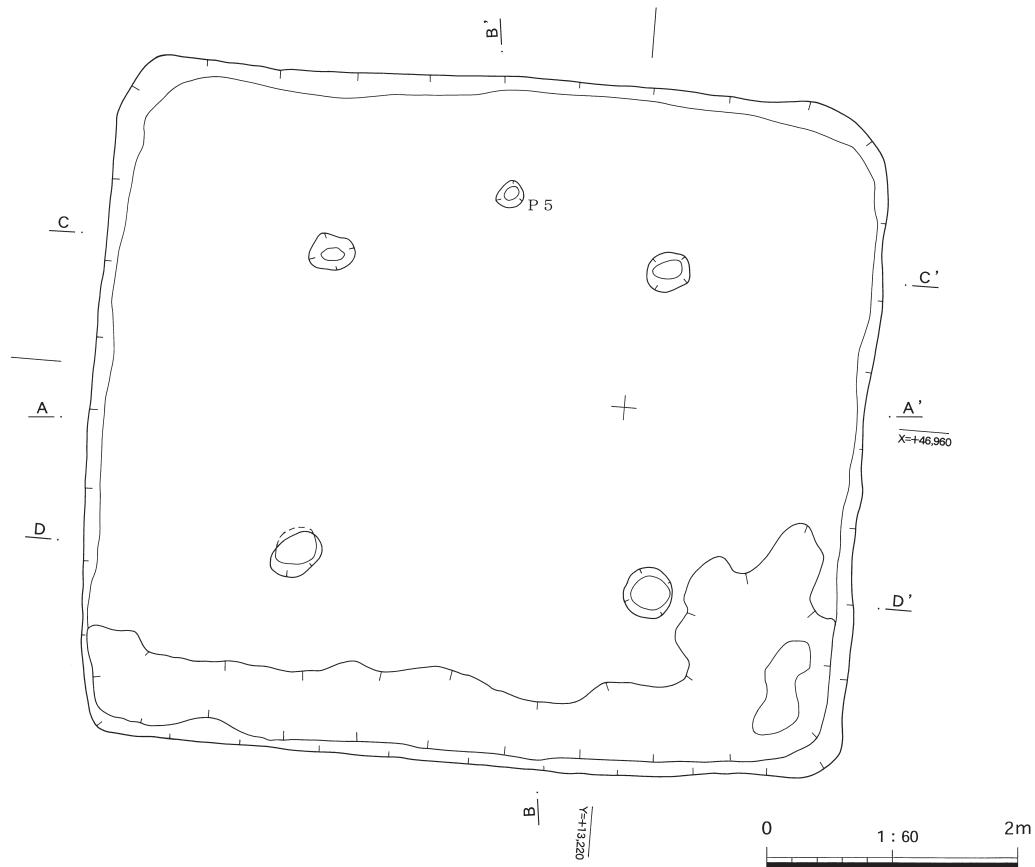
掘方 全体的に深さ 0.15m 程度に掘り窪められているが、特に南辺から南東コーナー周辺にかけての部分が深めとなっており、鹿沼軽石層上面まで達している。若干小さな凹凸が散在している。

周溝 確認できなかった。

柱穴 P 1 ~ P 4 が主柱穴で、ほぼ住居の各コーナーを結んだ対角線上に配置される。間隔は、東西間が 2.70m、南北間が 2.60m となっている。P 1 ~ P 3 は平面橿円形、断面U字状で、それぞれの規模が P 1 は長径 0.36m・短径 0.29m・深さ 0.40m、P 2 は長径 0.37m・短径 0.30m・深さ 0.34m、P 3 は長径 0.44m・



第57図 伊勢崎III遺跡 S-30実測図(1)



第58図 伊勢崎III遺跡 S-30実測図(2)

短径 0.37m・深さ 0.40m である。P 4 は平面円形状、断面U字状で、規模が直径 0.41m、深さ 0.56m である。11・13・16・17 層については、同様のローム粒子・ロームブロックを含む黄褐色土で埋まっていることと、周辺に柱を抜き取った痕跡がないことから、柱が腐った空間に落ち込んだ可能性が考えられる。これにより推定される柱材の直径は、0.15～0.20m である。柱当たりの痕跡は確認できなかった。

入り口ピット 確認できなかった。P 5 は確認面から掘り込まれており、結果的に住居には伴わなかった。

火処 中央部やや北東寄りに、炉が造られる。平面不整橢円形状、断面皿状で、規模は長径 0.96m、短径 0.62m、深さ 0.08m である。硬く締まった火床上面には、焼土粒子が多量に堆積している。

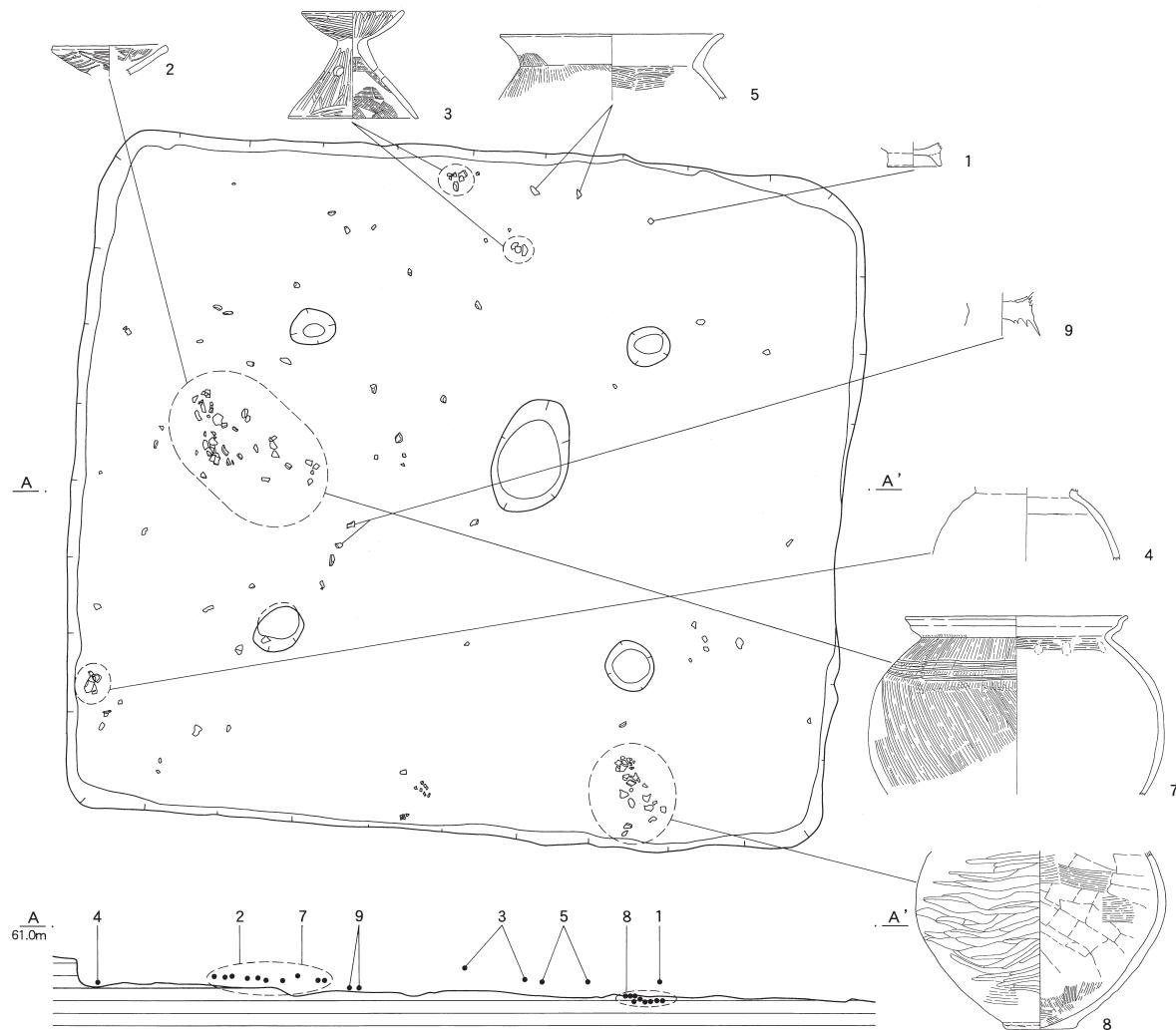
貯蔵穴 確認できなかった。

遺物 完形品と破片も含めて総数 148 点（うち土師器 144 点、須恵器 3 点）が出土した。上半部が削平されていたため、比較的出土遺物数は少ない。

調査時には 81 点の遺物を記載した。最終的に図示し得た遺物は第 60 図のとおりで、高台壺 1 点（1）・器台 2 点（2・3）・壇 1 点（4）・甕 4 点（5・6・7・9）・壺 1 点（8）とすべて土師器で、計 9 点である。

図示した遺物の出土状態は、床面直上 3 点（4・8・9）、ほぼ床面直上 4 点（2・3・5・7）、埋土中 2 点（1・6）である。

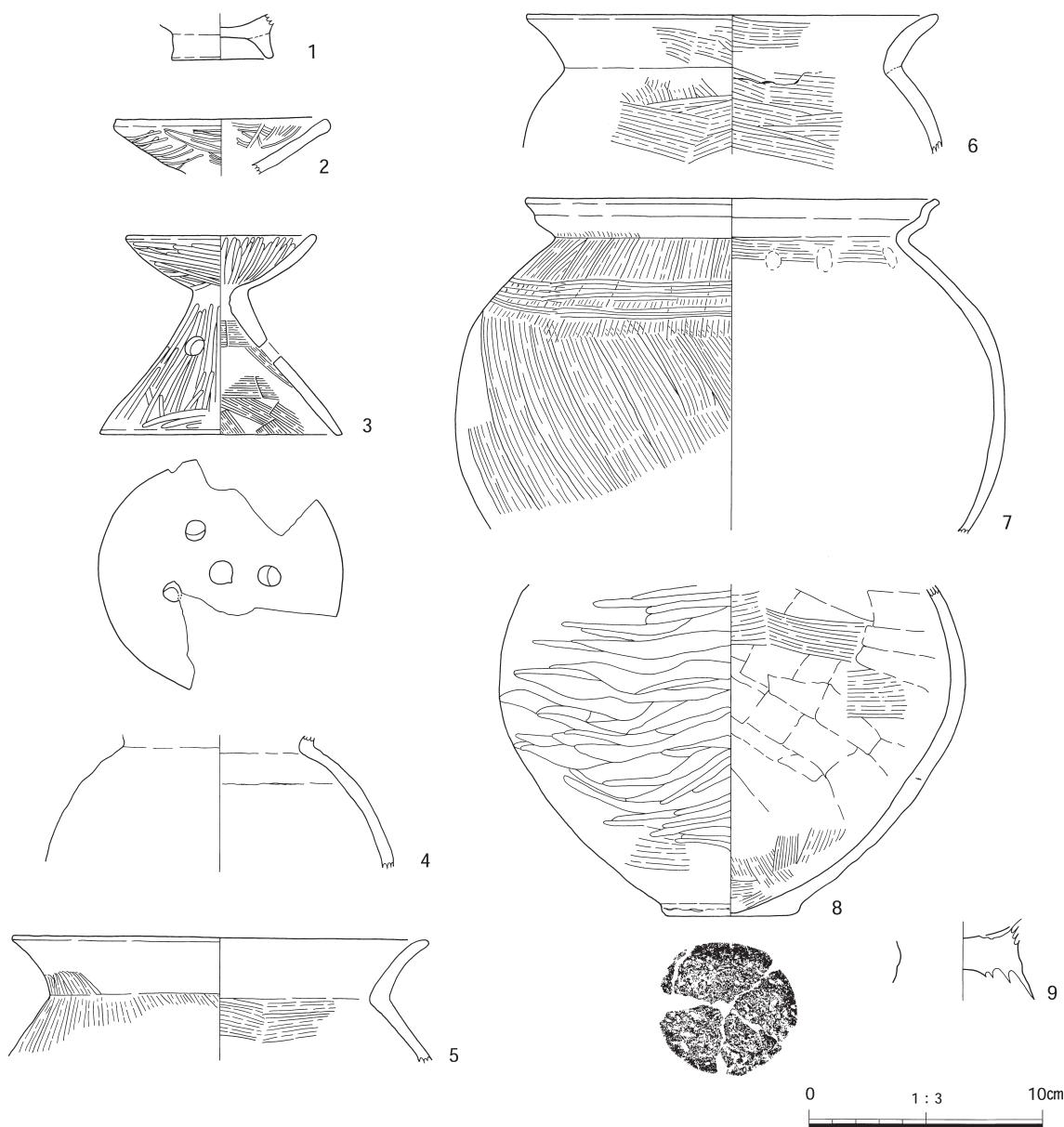
1 は高台付の台部として掲載したが、蓋のツマミである可能性も考えられる。2 の器台破片は器受部端部を平坦に作り、細かなミガキで成形を施している。3 も器台であるが、器受部端部は平坦ではなく、脚部の透かし孔の位置は、やや不規則な間隔ではあるが、点対称に 3 孔穿孔されており、細かなミガキで丁寧に成



第59図 伊勢崎III遺跡 S-30実測図(3)

形されている。4は器面の劣化が激しいが壇の胴部で、やや開きながら直立する口縁部を有していたと考えられる。推定ではあるが、細かなミガキで成形され、赤色に発色していた可能性もある。5・6は単口縁の甕類で、比較的粗雑なハケメが施されている。7はS字状口縁の甕で、比較的緻密なハケメを施す。ハケメは頸部から肩部が左下がりの斜位・肩部が横位・以下胴部中央にかけてが右下がりの斜位となっており、器厚も5・6に比べて薄く仕上がっている。3つとも地元で作成された可能性が高いが、5・6が在地技法で、7が東海系技法を忠実に守って成形したと考える。また、5・6・7は台部が付いていた可能性がある。ちなみに、胴部と台部を別々に成形して、胴部に差し込むようにし、粘土補強も多めに厚さを持って接合するのが在地技法、成形した胴部に筒状の台部をあて、粘土補強も少なめに接合するのが東海系技法と考える。よって、9の台部と胴部の接合手法は、在地技法と言える。8は胴部最大径を胴部中位からやや肩部よりも持つ平底の壺で、外面にハケメを施した後、その痕跡を残さないように密なミガキが加えられている。ハケメの単位としては6に施したもののが最も類似しているので、6と8は同一個体、もしくは同一の製作者集団による生産の可能性も考えられる。

他に縄文時代石器・弥生土器片（図示し得たのは1点）が出土したが、当遺構の時期に伴わないので「遺構外出土遺物 弥生土器」にまとめて掲載している。



第60図 伊勢崎III遺跡 S-30出土遺物実測図

S-32 (第61~68図、第26・27表、図版九・一〇・二八~三〇)

位置 B区の南東部に確認し、台地平坦面から緩斜面にかけて位置する。

新旧関係 他の遺構との重複はない。

規模・形状 東西5.61m、南北4.43mの、南辺に比べて北辺がやや短い隅丸長方形である。南半部は、土地改良による削平で鹿沼軽石層が確認面となっている。

主軸方向 築を上に見立てると、N-81°-Eである。

埋土 住居本体は大きく3層に分層できる。第一次堆積（3層）が認められるが、全体的にローム粒子・ロームブロックを含むことから、住居が廃絶してしばらく放置され自然堆積した後に、黒褐色土や暗黄褐色土で埋め戻されたものと考える。

壁 深さは0.65m程度で、今回調査では四辺とも含めての残存状況が最も良好である。各辺ともほぼ垂直か、

第25表 伊勢崎Ⅲ遺跡 S-30出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴(外)	整形の特徴(内)	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	土師器 高台壇	器高 [2.0]	高台「ハ」字状	高台ハリツケ		砂粒・良 内: 5YR5/4 にぶい赤褐 外: 5YR5/6 明赤褐	高台部のみ	埋土中	外面黒斑
2	土師器 器台	口径 (9.1) 器高 [2.3]	器受部端部に平坦面を持つ	ナデ後、ヘラミガキ	ナデ後、ヘラミガキ	砂粒・良 内: 10YR5/2 灰黄褐 外: 10YR5/2 灰黄褐	器受部 1/4	ほぼ床面直上	外面黒斑
3	土師器 器台	口径 8.2 器高 8.6 底径 10.5	器受部は皿状で、脚部は直線的に開く	ヘラミガキ	器受部ヘラミガキ 脚部ハケメ	砂粒・良 内: 10YR3/1 黒褐 外: 10YR7/4 にぶい黄橙	3/4	ほぼ床面直上	器受部内面・脚部 外面黒斑 脚部内面黒色化
4	土師器 壇	器高 [5.6]	胴部は扁平な球形と考えられる		ナデ	小礫・良 内: 7.5YR6/6 橙 外: 7.5YR6/4 にぶい橙	頸部 ~胴部 1/2	床面直上	内外面小礫露出 内面接合痕
5	土師器 甕	口径 (18.0) 器高 [5.3]	口縁部「く」字状で端部はやや外反する	口縁部ヨコナデ後、一部ハケメ	口縁部ヨコナデ 肩部ハケメ	礫・良 内: 7.5YR6/4 にぶい橙 外: 7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部 1/2	ほぼ床面直上	内外面礫露出・黒斑 外面一部黒色化 内面斑状剥離
6	土師器 甕	口径 (17.6) 器高 [6.5]	口縁部「く」字状	ハケメ	ハケメ	砂粒・良 内: 10YR4/2 灰黄褐 外: 10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部 1/8	埋土中	内外面黒色化 内面接合痕
7	土師器 甕	口径 17.9 器高 [14.3] 胴径 (23.7)	「S」字状口縁	口縁部ヨコナデ 肩部ハケメ	口縁部ヨコナデ 頸部ハケメ	砂粒・良 内: 10YR3/2 黒褐 外: 5YR6/6 橙	口縁部 ~肩部 2/3	ほぼ床面直上	内面指頭痕 ・斑状剥離 外面黒斑
8	土師器 壺	器高 [14.2] 底径 5.7 胴径 [20.0]	中位に最大径を有する扁平な球胴で、底部は凸形	ハケメ後、 ヘラミガキ 底部ヘラケズリ	ヘラナデ 一部ハケメ	砂粒・良 内: 2.5YR5/2 暗灰黄 外: 7.5YR4/2 灰褐	1/3	床面直上	内面斑状剥離 外面黒色化
9	土師器 台付甕	器高 [3.4]	台部は直線的に開くと考えられる		ヘラナデ	砂粒・やや良 内: 10R6/8 赤橙 外: 7.5YR8/6 浅黄橙	台部 接合部のみ	床面直上	

ややオーバーハング気味に立ち上がる。

床面・貼床 床面はほぼ平坦で、貼床（4・5層上面）が施され、二基の竈前庭部を中心とした住居東半部分が非常に硬くしまっている。

掘方 深さ 0.06～0.15m 程度に、鹿沼軽石層まで掘り込んでおり、北西コーナーおよび南東コーナー部分が深めに掘り窪められている。また、南側中央部分や南東コーナー付近にも直径 0.30～0.40m 程度の落ち込みがあり、全体的には小さな凹凸が顕著である。

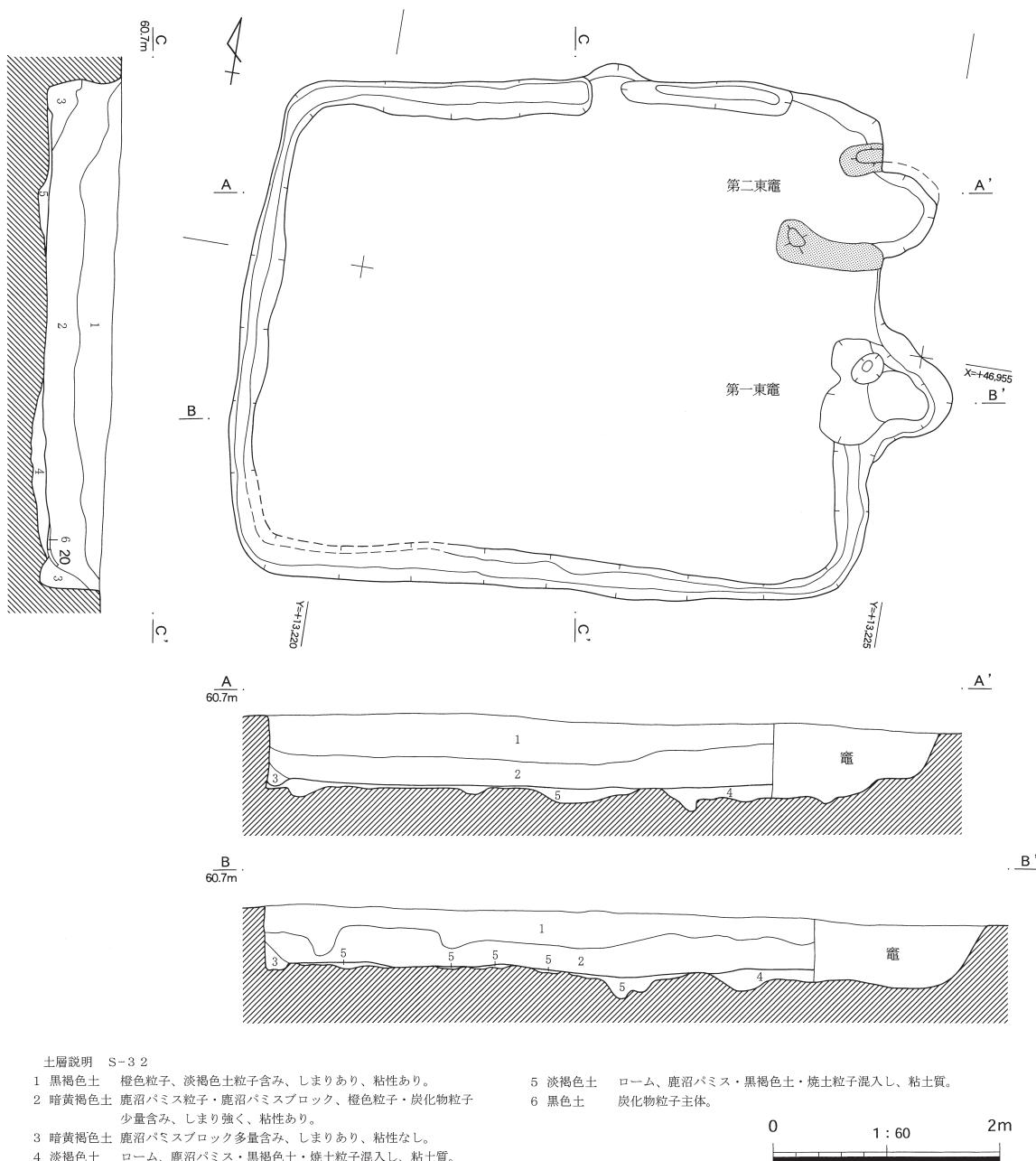
周溝 北辺中央部と北東コーナー部分を除いて全周しており、各辺ともやや蛇行気味である。幅は、0.14～0.35m で、北辺中央部付近が最も広い。深さは全体的に床面から 0.05m ほどで、断面は逆台形状である。

柱穴 主柱穴は確認できず、壁で上屋を支えたか、もしくは竈外に柱穴があった可能性が考えられる。

入り口ピット 確認できなかつたが、掘方確認時の南辺中央小ピットのいずれか、または北辺中央部の周溝が切れている部分から南側に位置する落ち込みが該当する可能性はある。

火処 北壁中央やや南寄りと、北東コーナー寄りの 2ヶ所に竈を造り付けている。調査時名称は北側竈と南側竈であったが、南側に竈が付いているとの誤解を防ぐため、報告では南側竈を「第一東竈」、北側竈を「第二東竈」と呼称する。新旧関係については、竈本体同士の切り合いは無かつた。ただし、第一東竈は本体部分がすべて破壊・撤去された後、火床に堆積した構築材の上に貼床が施され、煙道内堆積に閉塞した痕跡が確認できた。第二東竈は袖部や支脚が残存し、貼床の上に造られていた。以上のことから判断して、第一東竈→第二東竈の順に造られたと考えられる。

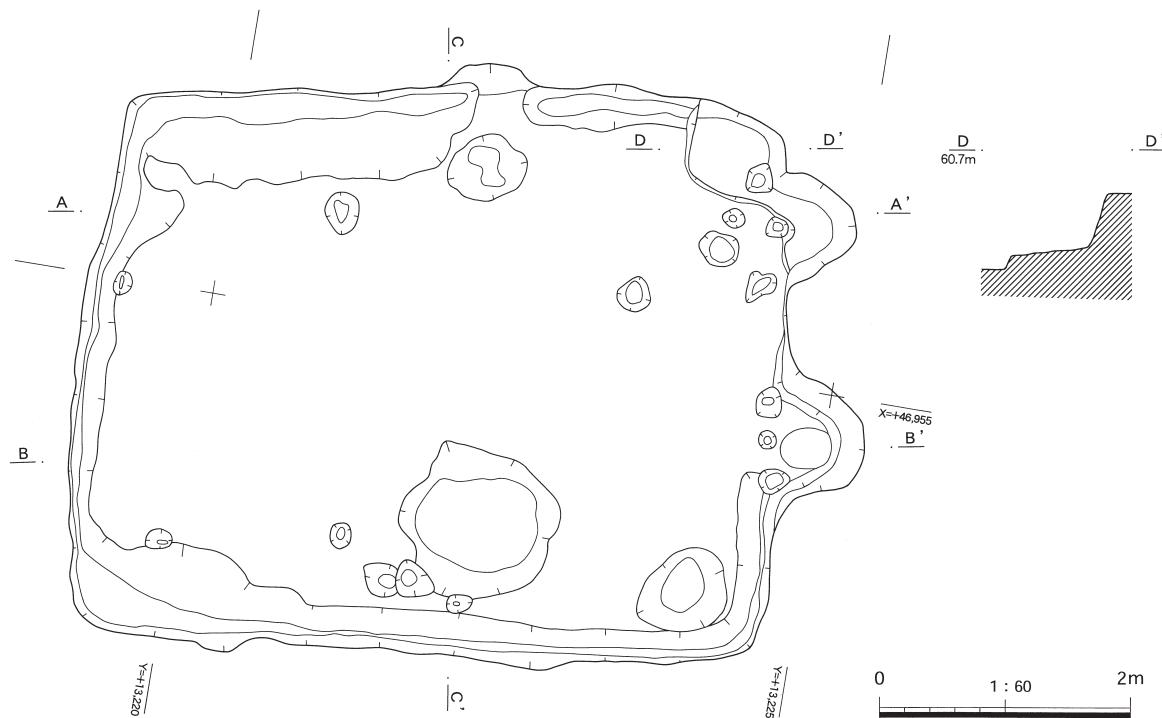
第一東竈は、造り替えにより本体部分は撤去されていたが、確認できた規模は、幅 1.24m、奥行き 1.15m である。燃焼部から煙道にかけては良く焼けており、煙道は平面船首形状で、先端が 58° の傾きで緩やかに立ち上がり、掘方は東壁を幅 1.24m、奥行き 0.71m に掘り込んでいる。床面は東西 0.94m、南北 0.90m の平



第61図 伊勢崎III遺跡 S-3 2実測図(1)

面不整橢円形状、深さ 0.18m の断面不整皿状に掘り窪めた後に、淡褐色土で埋め戻して火床（5層下面）としている。また、床面内にある3基の小穴は、位置的な関係から中央が支脚、両脇が芯材として立てた川原石などの抜取痕の可能性がある。燃焼部内における焼土粒子・炭化物粒子の堆積が多いことから、使用期間は長かったと考える。

第二東竈は、天井部などは崩落していたが、袖部・支脚などが残存していた。確認できた規模は、袖幅 1.16m、奥行き 1.37m である。燃焼部から煙道にかけては良く焼けており、特に煙道立ち上がり部分の地山ロームは赤変・硬化していた。煙道は平面半円形状で、先端が 60° の傾きで緩やかに立ち上がり、掘方は東壁を幅 1.16m、奥行き 0.50m に掘り込んでいる。床面は8層上面を火床としており、支脚・袖石の抜取痕も確認できた。支



第62図 伊勢崎III遺跡 S-3 2実測図(2)

脚は、地山を掘り込んで長さ33cmの輝石角閃石安山岩の川原石を立て、頂部には土師器壺(1)と女瓦片(22)を載せて粘質土でしっかりと固定されていた。向かって右袖部に使用した袖石は、長さ42cmの礫岩の川原石で粘土が本体上部と外側にかけて貼り付けてあった。燃焼部側に構築材は残存していなかったが、川原石が直接被熱した形跡がないので本来は粘土で覆われていたと考える。燃焼部内における焼土粒子・炭化物粒子の堆積が多いことと煙道立ち上がりの状況から、使用期間は長かったと考える。

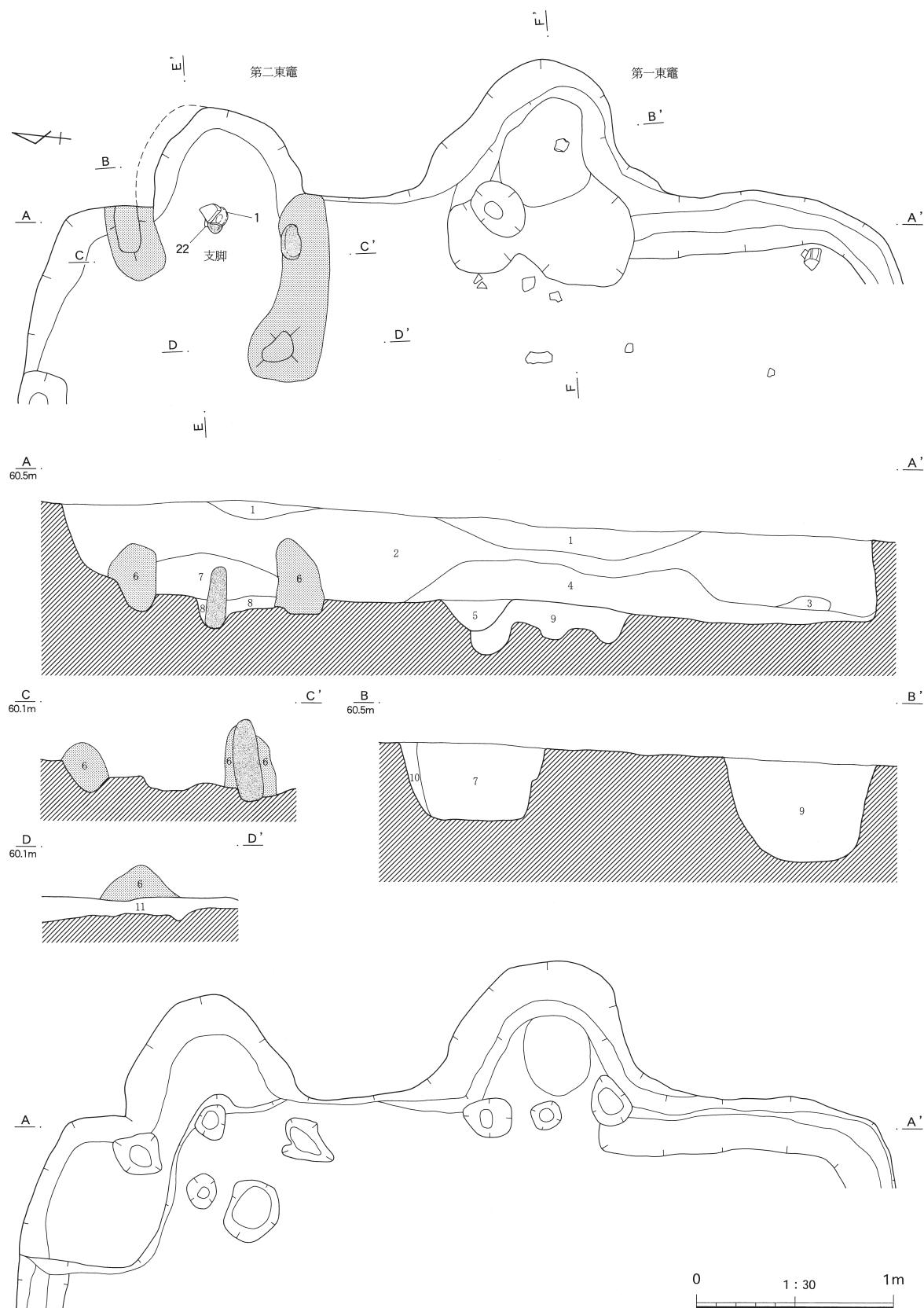
貯蔵穴 確認できなかった。

棚状遺構 北東コーナー床面部分が、一片0.70mの平面菱形状、高さ0.05mに掘り残されていた。上に置く形の貯蔵施設とも考えられるが、掘方発掘時に確認したので、床面レベルより高位で機能していたかの検証はできていない。掘方設置作業時の単なる足場としての可能性もある。

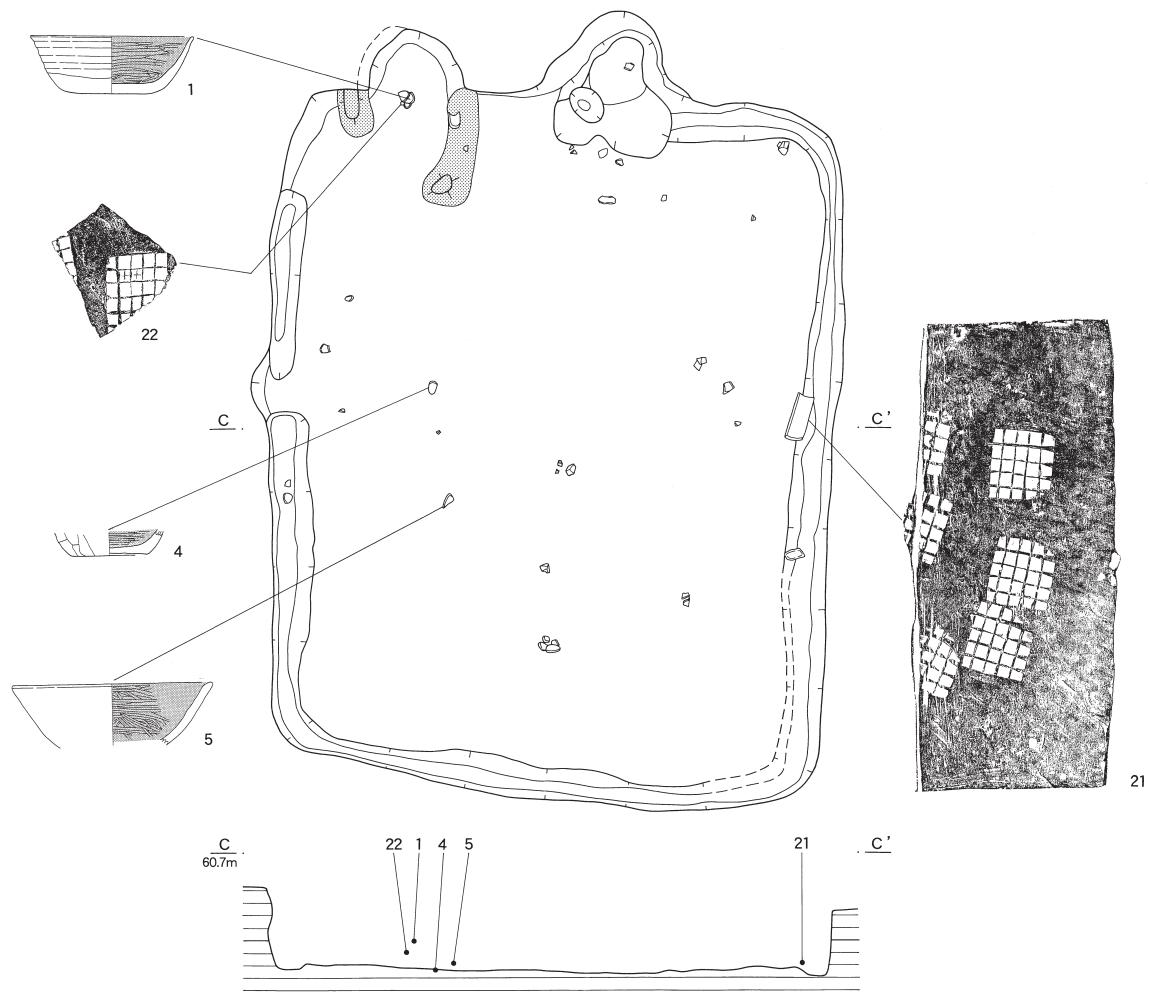
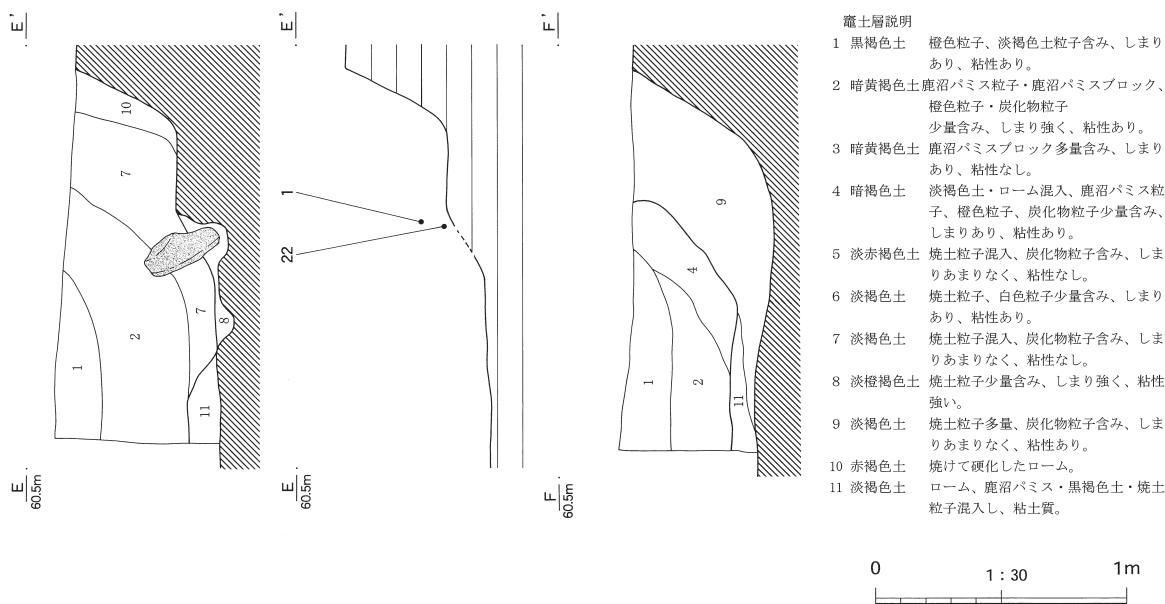
遺物 完形品と破片も含めて総数1,234点(うち土師器1,073点、須恵器134点)が出土した。今回の調査において最も出土遺物数の多い住居である。

調査時には75点の遺物を記載した。最終的に図示し得た遺物は第65～68図のとおりで、土師器の壺5点(1・2・3・4・5)・甕4点(6・7・8・9)、須恵器の壺5点(10・11・12・13・14)・高台壺1点(15)・蓋1点(16)・甕3点(17・18・19)、男瓦1点(20)・女瓦3点(21・22・23)、鉄製門1点(24)、鍛冶関連遺物の5点(25・26・27・28・29)の計29点である。なお、図示し得なかつたが、胎土に白色針状物質や金雲母を含む、1辺2～3cmの製塩土器破片(図版二八)が埋土中より4点出土している。図示した遺物の出土状態は、掘方中2点(8・9)、床面直上2点(4・21)、竈中2点(1・22)、埋土中23点(2・3・5・6・7・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・23・24・25・26・27・28・29)である。

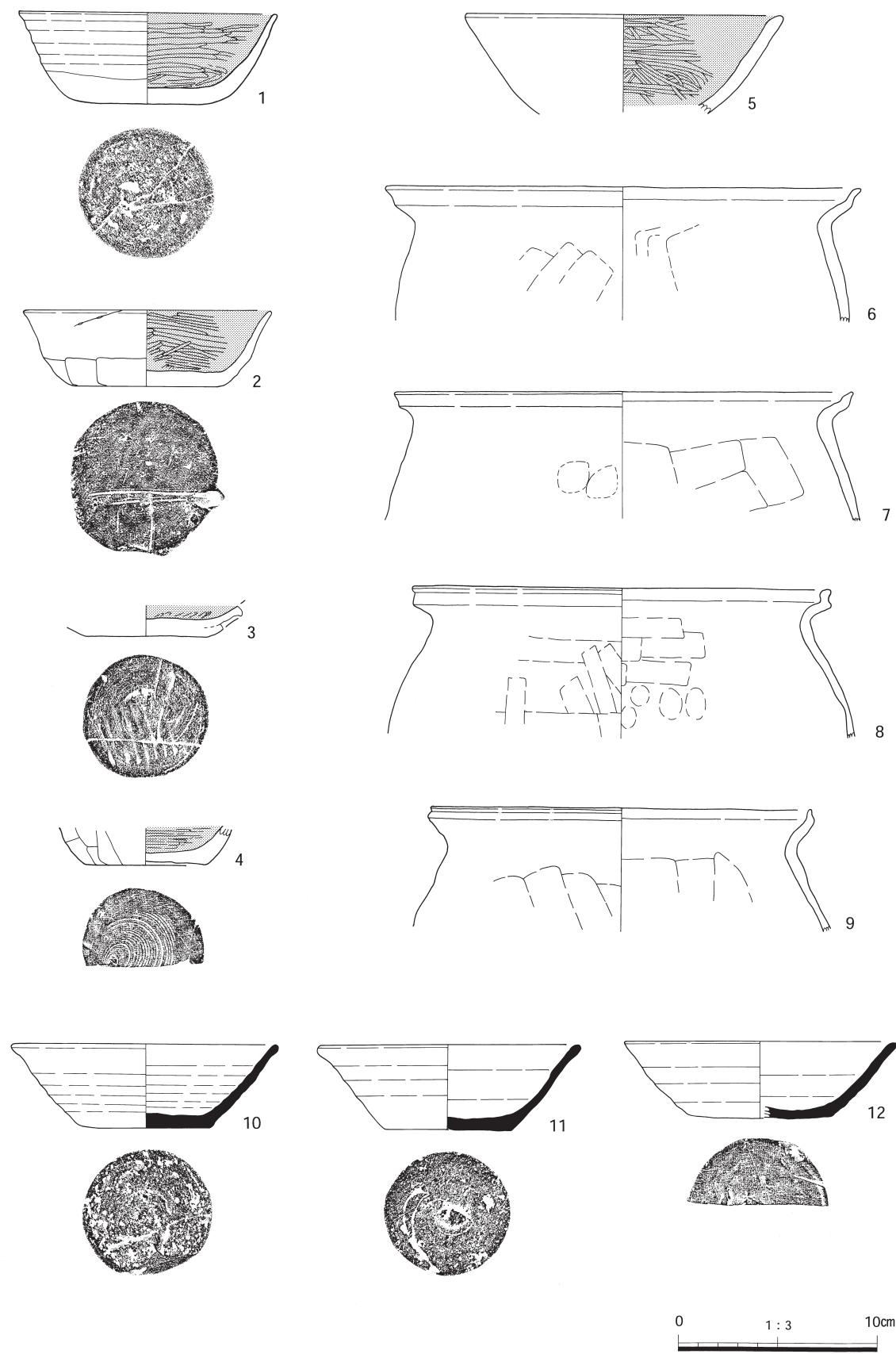
1～5は内面黒色処理を施した土師器壺である。1と3は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリを、2と4は同位置に手持ちヘラケズリを施している。2の内面は4単位に四方にヘラミガキされており、底部



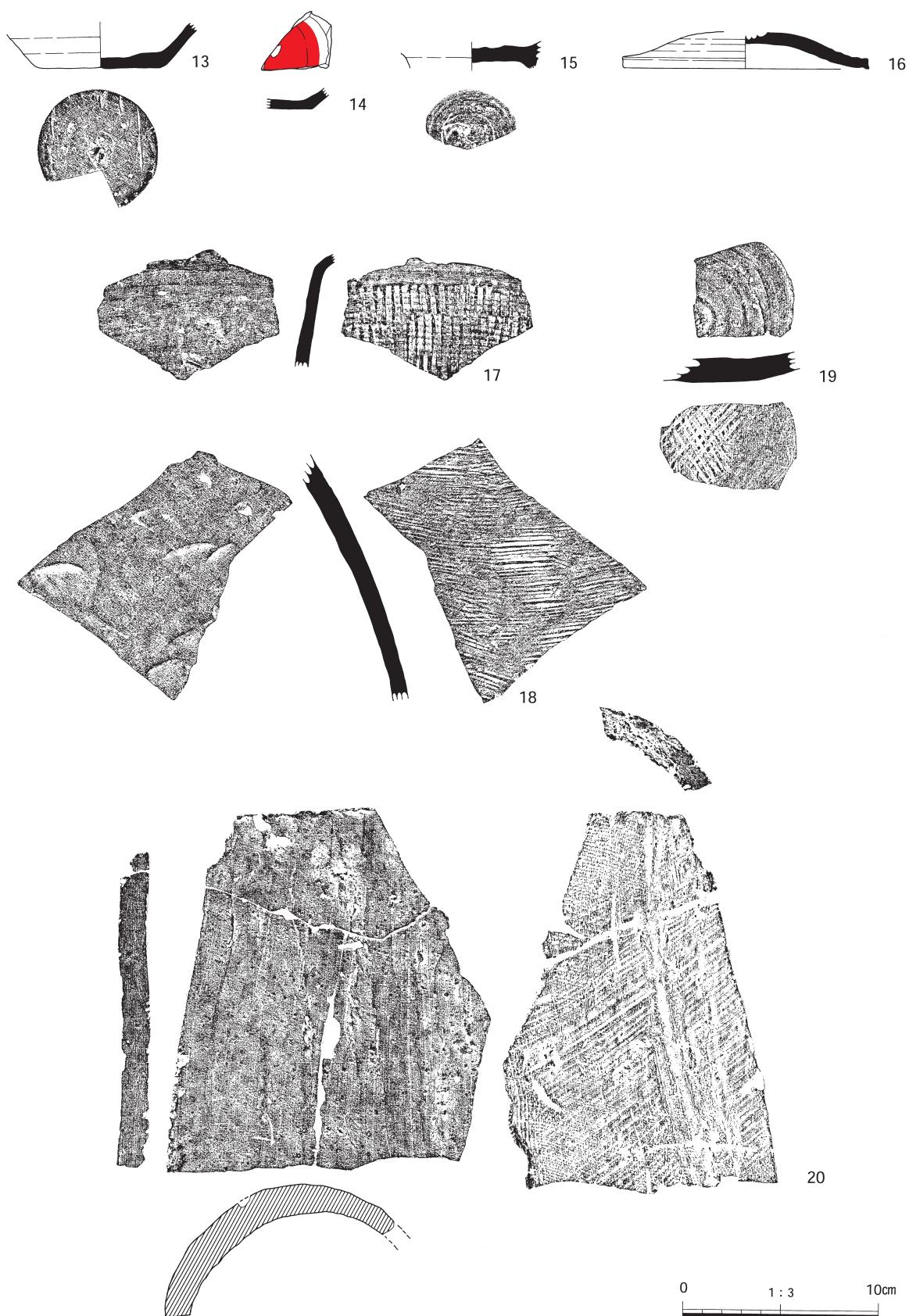
第63図 伊勢崎III遺跡 S-3-2実測図(3)



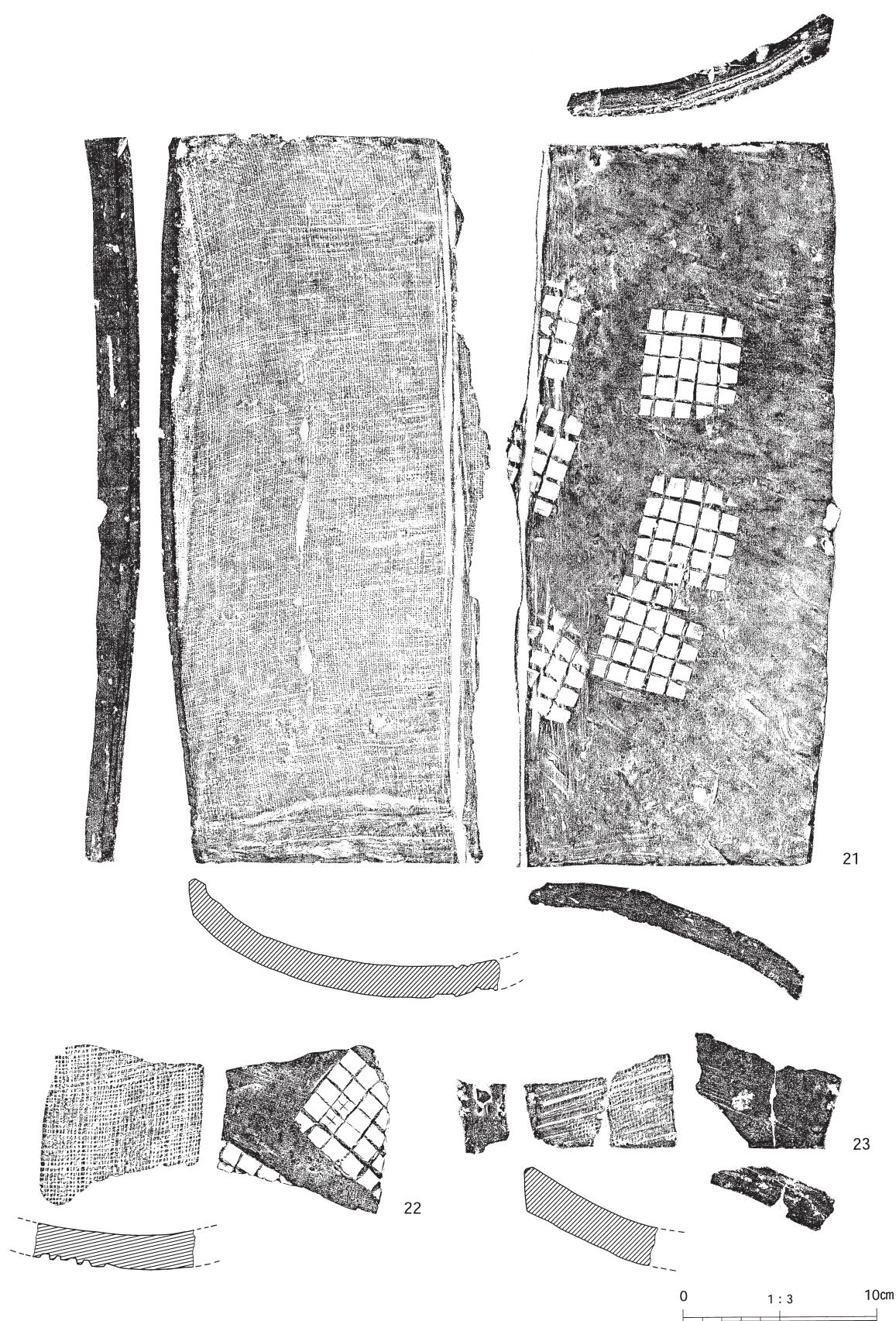
第64図 伊勢崎III遺跡 S-3 2実測図 (4)



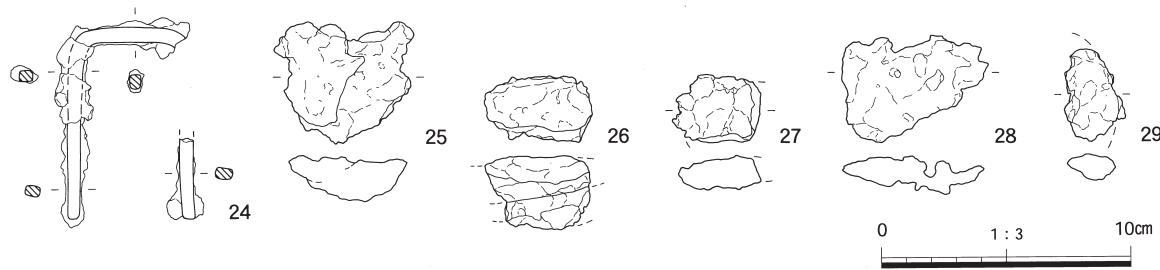
第65図 伊勢崎III遺跡 S-3 2出土遺物実測図 (1)



第66図 伊勢崎III遺跡 S-3 2出土遺物実測図 (2)



第67図 伊勢崎III遺跡 S-3 2出土遺物実測図（3）



第68図 伊勢崎III遺跡 S-3 2出土遺物実測図 (4)

外面には棒状圧痕がみられる。3は底部断面に接合痕が確認され、外面には5mmほどの間隔に7本の棒状圧痕がみられる。これは、成形後の生地が乾く前に、スダレ状のもの上に置いたときに付いた可能性がある。

6～9は、いわゆる下野型甕である。いずれも口縁部付近と残存率はあまり良くないが、この甕特有の短く外反し端部をつまみ上げる受け口状の口縁を呈している。胎土に雲母を顯著に含むのも特徴的である。

須恵器10・11・12・13・15・16は益子産、17は叩き整形や白雲母を含む胎土に特徴のある新治産の製品である。14は益子産の可能性があり、内面に朱墨が付着している。18は胎土に白色針状物質を含んでおり、可能性としては笠間窯跡産が挙げられる。底部外面に交差して平行叩きが施された19は、生産地不明である。

瓦は、2つに分割された21や、支脚に転用した22などから、本来の使用目的ではなく、2次的に持ち込まれたものである。20と21は凹面布目痕や胎土が似通っており、同じ生産地と考えられる。21は凸面に目数5×5単位の格子叩きが6ヶ所確認できる。焼成後に2分割されているので、本来は9ヶ所ほど叩かれていた可能性がある。また、分割方法は、鋭利な工具か扁平な石で、前もって瓦の凹面に2条・凸面に1条以上の溝を擦り切って、そこから折り取っていると考えられる。何に使用したかは不明であるが、丁寧に分割しようとした意志が感じられることから、一案として食物などの盛皿に転用したと考えたい。22と23は凹面布目痕や胎土色調、厚さなどから同一個体の可能性がある。23は目数5×6α単位の格子叩きが確認でき、区画内に陽刻で「十」字状の文様を2単位加えている。

24はコの字状をした鉄製の門と考えられるが、図中右側の屈曲点から中位にかけて破損している。左側の直線状の部分は、幅が均一であるが、下端に向かうにつれて厚さが薄くなり、最も薄い先端で2mm程になる。図中右下部分は、形状から左下部分と対を成していたと考えられる。

25～29は鍛冶関連遺物である。25は楕形鍛冶滓で、生成初期のものが2枚重なったものである。下面の滓は平面半円形状、上面の滓は平面不正楕円形状である。下面の滓の底面には気孔が散在し、炉床粘土は付いていないことから、木炭・灰の上に形成されたことが分かる。上面は小さな破面が概ね平坦で、滓はやや重量感がある。

26は楕形鍛冶滓で、側面に破面が4面ある。破面の観察から2枚の楕形鍛冶滓が重なったものと判断される。下層の滓は、気孔がやや少なく緻密で、底面には灰色の炉床粘土が付着しており、炉底に生成されたことがわかる。上面は平滑である。上層の滓は、下層よりも緻密な滓で、黒褐色を呈している。上面はやや波打っている。滓は全体に重量感がある。精鍊鍛冶滓と判断される。

27は側面に破面が2面ある小型楕形鍛冶滓で、底面には青灰色炉床粘土が付着しており、炉底に生成されたことがわかる。上面は、1cm大ほどの木炭痕が散在しており、凹凸が見受けられる。表面の特徴は紫褐色の酸化色になっている。破面から見る滓は、黒褐色で光沢があり緻密で、全体に重量感がある。精鍊鍛冶滓と判断される。

第3章 遺構と遺物

第26表 伊勢崎III遺跡 S-32出土遺物観察表(1)

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴(外)	整形の特徴(内)	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	土師器 壺	口径 (13.1) 器高 4.5 底径 6.0	平底。体部は直線的に開く	ロクロ成形痕明瞭 体部下端～底部回転 ヘラケズリ	ヘラミガキ	礫・良 内：7.5Y3/1 オリーブ黒 外：10YR6/4 にぶい黄橙	3/4	第二東 カマド 燃焼部	内面黒色処理 外面部斑状剥離 外面礫露出
2	土師器 壺	口径 (12.5) 器高 3.8 底径 7.8	平底。体部はやや外反しながら開く	ロクロナデ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部二方向 ヘラケズリ	ヘラミガキ	礫・良 内：N2/ 黒 外：10YR6/3 にぶい黄橙	2/3	埋土中	内面黒色処理 外面部礫露出・黒斑 粘土紐巻状痕 底部外面部棒状圧痕
3	土師器 壺	器高 [1.6] 底径 6.1	平底	体部下端・底部回転 ヘラケズリ	ヘラミガキ	砂粒・良 内：N2/ 黒 外：10YR7/4 にぶい黄橙	底部のみ	埋土中	内面黒色処理、外面部 黒斑、底部接合痕・ スダレ状圧痕
4	土師器 壺	器高 [1.9] 底径 (6.0)	平底。体部はやや内弯して開くと考えられる	体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸 切り後、周縁手持ち ヘラケズリ	ヘラミガキ	砂粒、赤色粒・良 内：N2/ 黒 外：7.5YR7/6 橙	底部 2/3	床面直上	内面黒色処理 外面部黒斑
5	土師器 壺	口径 (16.0) 器高 [5.0]	やや内弯して開く体部	ロクロナデ	ヘラミガキ	礫・良 内：N2/ 黒 外：7.5YR8/3 浅黄橙	体部 1/4	埋土中	内面黒色処理 外面部礫露出
6	土師器 甕	口径 (24.0) 器高 [6.7]	口縁部は短く外反し、端部をわずかにつまみ上げる	口縁部ヨコナデ 肩部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 肩部ヘラナデ	金雲母、白色砂・良 内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：5YR6/6 橙	口縁部 ～肩部 1/4	埋土中	
7	土師器 甕	口径 (23.0) 器高 [6.4]	口縁部は短く外反し、端部をわずかにつまみ上げる	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 肩部ヘラナデ	礫・良 内：10YR5/3 にぶい黄褐 外：7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部 1/2	埋土中	外面部礫露出 外面部指頭痕
8	土師器 甕	口径 (21.0) 器高 [7.5]	口縁部は短く外反し、端部をつまみ上げ、口唇部直立	口縁部ヨコナデ 肩部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 肩部ヘラナデ	金雲母、白色砂・良 内：10YR5/3 にぶい黄褐 外：10YR6/4 にぶい黄橙	口縁部 ～頸部 1/4	掘方 埋土中	内面黒色化 指頭痕顯著
9	土師器 甕	口径 (19.2) 器高 [6.2]	口縁部は短く外反し、端部をつまみ上げ、口唇部直立	口縁部ヨコナデ 肩部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ 肩部ヘラナデ	雲母、白色砂・良 内：5YR5/6 明赤褐 外：5YR6/6 橙	口縁部 ～肩部 1/3	掘方 埋土中	
10	須恵器 壺	口径 13.4 器高 4.3 底径 6.7	平底。体部は直線的に開く	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	礫・良 内：10R5/6 赤 外：2.5YR5/4 にぶい赤褐	ほぼ完形	埋土中	外面部礫露出 ロクロ成形痕明瞭 益子産
11	須恵器 壺	口径 13.2 器高 4.4 底径 6.4	平底。体部はやや内弯気味に開き、口縁部は外反する	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	礫・良 内：5Y5/1 灰 外：5Y5/1 灰	5/6	埋土中	外面部礫露出 益子産
12	須恵器 壺	口径 (13.8) 器高 3.9 底径 7.0	平底。体部はやや内弯気味に開く	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	小礫・良 内：2.5Y5/3 黄褐 外：2.5Y5/3 黄褐	1/3	埋土中	底部外面部 ヘラ描沈線 益子産
13	須恵器 壺	器高 [2.4] 底径 6.1	平底	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	礫・良 内：5Y5/1 灰 外：5Y5/1 灰	底部 3/4	埋土中	底部外面部 ヘラ描沈線 外面部礫露出 益子産
14	須恵器 壺	器高 [1.1]		ロクロナデ、体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	白色砂、小礫・良 内：10Y5/1 灰 外：7.5Y5/1 灰	底部 1/6	埋土中	内面朱墨付着 底部外面部礫露出
15	須恵器 高台付 壺	器高 [1.4]	高台「ハ」字状と考えられる	底部回転ヘラ切り後、 高台ハリツケ	ロクロナデ	白色砂・良 内：2.5Y3/2 黒褐 外：2.5Y4/1 黄灰	底部 1/3	埋土中	益子産
16	須恵器 蓋	口径 (12.6) 器高 [1.8]	つまみ欠損。口縁端部は短い折り返し。断面三角形状	天井部一部回転ヘラケズリ・ロクロナデ	ロクロナデ	白色砂・良 内：5Y5/1 灰 外：5Y5/1 灰	1/4	埋土中	益子産
17	須恵器 甕			擬格子叩き	ヨコナデ	白雲母・良 内：10YR6/4 にぶい黄橙 外：10YR6/3 にぶい黄橙	胴部破片	埋土中	新治産
18	須恵器 甕			平行叩き	ナデ	白色砂、白色針状物質・良 内：10Y5/1 灰 外：7.5Y5/1 灰	胴部破片	埋土中	内面當て具痕 笠間産?
19	須恵器 甕			底部平行叩き	ロクロナデ	白色砂・良 内：N5/ 灰 外：7.5YR5/2 灰褐	底部のみ	埋土中	産地不明
20	男瓦			凸面：ヘラケズリ後、 一部ナデ 側面：ヘラケズリ	狭端面：ヘラケズリ 凹面：布目合わせ目 痕一部残しナデ	砂粒・良 凹：2.5Y6/2 灰黄 凸：2.5Y6/2 灰黄	狭端面側 破片	埋土中	凸面指頭痕 重量 578.60g
21	女瓦	全長 32.2 広長 [13.8] 広厚 1.7 狭長 [14.4] 狭厚 1.7	四面側側縁に面を持つ	凸面：ナデ後、5×5 の格子叩き 側面：広端部・狭端部 ヘラケズリ	凹面：布目痕・糸切り痕を残す	砂粒、礫・良 凹：2.5Y6/2 灰黄 凸：5YR6/6 橙	1/2	床面直上	四面外面部 凸面指頭痕 焼成後に二分割 重量 1570.92g

第27表 伊勢崎III遺跡 S-3 2出土遺物観察表（2）

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴（外）	整形の特徴（内）	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
22	女瓦			凸面：5×6 αの格子叩き、中に陽刻で「十」の字状の文様を2単位加える	四面：布面痕を残す	砂粒、礫・良 凹：2.5Y6/2 灰黄 凸：5Y6/1 灰	破片	第二東 カマド 燃焼部	重量 191.77g
23	女瓦			凸面：ナデ 側面：狭端部ヘラケズリ	四面：布目痕・糸切り痕を残す	礫・良 凹：2.5Y6/2 灰黄 凸：5Y6/1 灰	狭端部 破片	埋土中	側面露出 重量 108.33g
24	鉄製品 門	長 幅 厚	[7.7] 0.6 0.4	「コ」字状を呈したと考えられ、一方の屈曲点が鈍角にL字に折れている		7.5YR4/4 褐	破片	埋土中	重量 18.58 g
25	鉄滓	長 幅 厚	4.9 5.7 1.7	生成初期のものが2枚重なったの椀形鍛治滓	下面滓底面気孔散在	5YR4/4 にぶい赤褐	ほぼ完形	埋土中	重量 55.82 g
26	鉄滓	長 幅 厚	2.5 [4.3] 2.9	2枚の椀形鍛治滓が重なったの椀形鍛治滓 精鍊鍛治滓	下面滓気孔少ない	5YR4/4 にぶい赤褐	破片	埋土中	重量 36.27 g
27	鉄滓	長 幅 厚	2.7 [3.4] 1.4	小型の椀形鍛治滓 精鍊鍛治滓	木炭痕散在 炉床粘土付着	5YR4/4 にぶい赤褐	破片	埋土中	重量 15.50 g
28	鉄滓	長 幅 厚	4.3 5.9 1.3	扇状の椀形鍛治滓 精鍊鍛治滓	顆粒状突起 炉床粘土付着	5YR4/4 にぶい赤褐	ほぼ完形	埋土中	重量 31.31 g
29	羽口	長 幅 厚	[3.7] 2.4 1.1		羽口側ガラス質化	5B2/1 青黒	先端部 破片	埋土中	重量 5.49 g

28は平面三角形で、破面のない椀形鍛治滓である。下面是顆粒状突起が1箇所あるが、炉床粘土が付着しておらず木炭上に生成されたものであろう。図中上面は断面斜めに生成しており、この滓は図中下から扇状に生成されていったことが考えられる。上面には直径7mm前後の木炭痕が散在している。小さな破面や表面には気孔がやや密にあり、滓は重量感に欠ける。精鍊鍛治滓であろう。

29の先端側表面は平滑で、羽口側の表面は黒色ガラス質化に至っているが、発泡している。外径から見て鍛治羽口の先端部破片と見られる。

焼礫や剥片が多数出土したが、北方向に石器ブロック・礫群が存在するので旧石器時代のものと考えられる。

他に旧石器製品（図示し得たのは3点）・縄文土器片（5点）・縄文時代石器（6点）・弥生土器片（6点）が出土したが、当遺構の時期に該当しないため、それぞれ「層位不明石器」「遺構外出土遺物 縄文土器・縄文時代石器・弥生土器」に掲載している。

（4）井戸跡

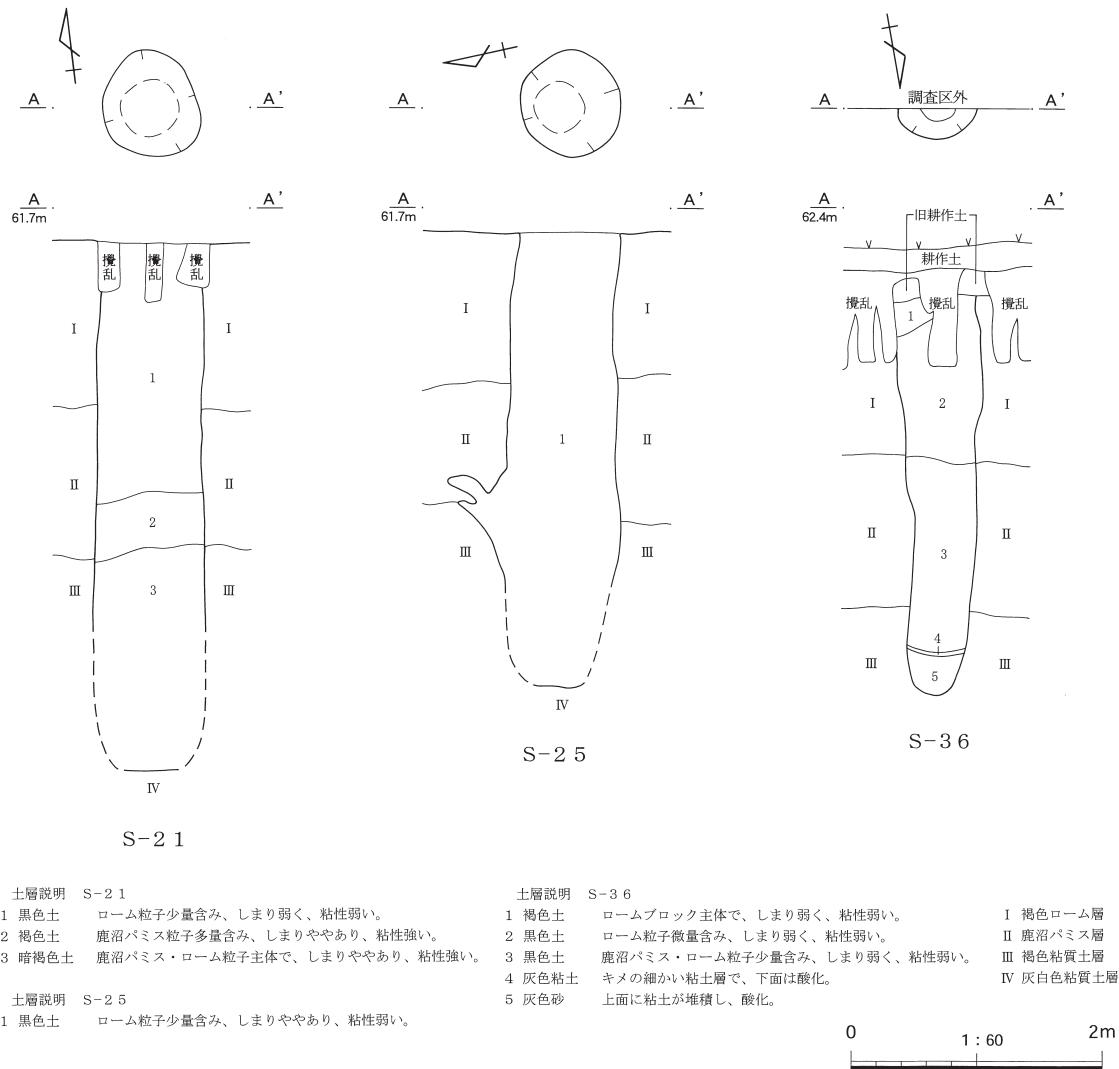
今回の調査で発見された井戸跡は3基（S-21・25・36）で、すべてC区の台地上平坦面に確認された。通常の掘り下げと併用して截ち割りによる調査を行ったが、著しい湧水や安全が確保できない場合を除き、可能な限り基本土層と深さを把握するよう努めた。以下、各遺構ごとに詳述する。

S-21（第69図、図版一〇）

位置 C区の南東部に確認し、台地上平坦面に位置する。

新旧関係 他の遺構との重複はない。

規模・形状 上面土坑部分の平面形は不整橢円形状で、規模は長径0.87m、短径0.75mである。井筒部分の断面形は長方形で幅0.85～0.90m、湧水のため不明であるが、底部にあたる辺は隅丸を呈していたと考え



第69図 伊勢崎III遺跡 S-21・25・36実測図

られる。残存している側面掘方は滑らかで、崩落等は起こしていない。推定される底部平面は円形で直径0.45mである。最終的には灰褐色粘質土層まで掘り込まれ、確認面からの深さは4.22mである。また、上面土坑部分は全体的にゴボウ耕作による攪乱を受けている。

埋土 ゴボウ耕作による攪乱と水没部分を除くと3層に分層できる。2・3層は鹿沼パミス粒やローム粒子を多く含む廃絶に伴う埋戻し、1層はローム粒子をあまり含まない自然堆積である。

遺物 出土しなかった。

S-25 (第69図、図版一〇)

位置 C区の南部中央に確認し、台地上平坦面に位置する。

新旧関係 他の遺構との重複はない。

規模・形状 上面土坑部分の平面形は円形状で、規模は直径0.82mである。井筒部分の断面形は不整長方形状で幅0.84～1.34m、湧水のため詳細は不明であるが、底部にかけて狭くなっていたと考えられる。残存し

ている側面掘方はやや崩落を起こして断面的に蛇行している。図面左側面の掘り込みは井戸の付属施設とは考えにくく、木根痕か崩落であろうか。推定される底部平面は円形で直径 0.40m である。最終的には灰褐色粘質土層まで掘り込まれ、確認面からの深さは 3.62m である。また、上面土坑部分はゴボウ耕作による攪乱を受けている。

埋土 ゴボウ耕作による攪乱と水没部分を除いて单層である。ローム粒子をあまり含まない自然堆積である。

遺物 出土しなかった。

S-3 6 (第 69・70 図、第 28 表、図版一〇・二九)

位置 C 区の南西部に確認し、台地上平坦面に位置する。半分以上が調査区外に存在する。

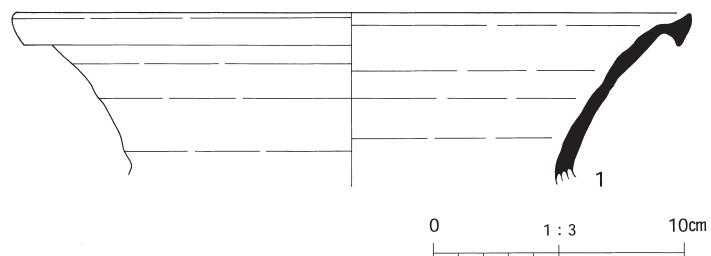
新旧関係 ゴボウ耕作による攪乱により直接の切り合いは不明であるが、S-2 7 より新しいと考える。

規模・形状 上面土坑部分の平面形は円形状と考えられ、残存規模は直径 0.63m 以上である。井筒部分の断面形は残存部分から漏斗状を呈していた可能性も考えられ、幅は 0.68 ~ 0.48m、底部は丸みを帯びる。残存している側面掘方はやや崩落を起こして蛇行している。底部平面は円形で直径 0.27m 以上である。最終的には褐色粘質土層まで掘り込まれ、確認面からの深さは 3.40m である。また、上面土坑部分はゴボウ耕作による攪乱が著しい。

埋土 ゴボウ耕作による攪乱を除いて 5 層に分層でき、1 ~ 3 層は廃絶後埋没に伴う自然堆積である。5 層を構成する砂層が、井戸水の濾過な

どを目的として施工時に意図的に敷かれたものだとすれば、4 層の薄く堆積した灰色粘土酸化層下面は、あくまでも可能性であるが、井戸機能時の底面であったと考えられる。

遺物 須恵器甕口縁部破片が 1 点のみ出土したが、生産地は不明である。



第 70 図 伊勢崎III遺跡 S-3 6 出土遺物実測図

第 28 表 伊勢崎III遺跡 S-3 6 出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴 (外)	整形の特徴 (内)	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	須恵器 甕	口径 (27.0) 器高 [6.8]	頸部から大きく外反し、 口縁部に至り、端部は 折り返す	口縁部ヨコナデ ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・良 内: N5/ 灰 外: N7/ 灰白	口縁部 1/6	埋土中	内外面自然釉付着 産地不明

(5) 溝 跡

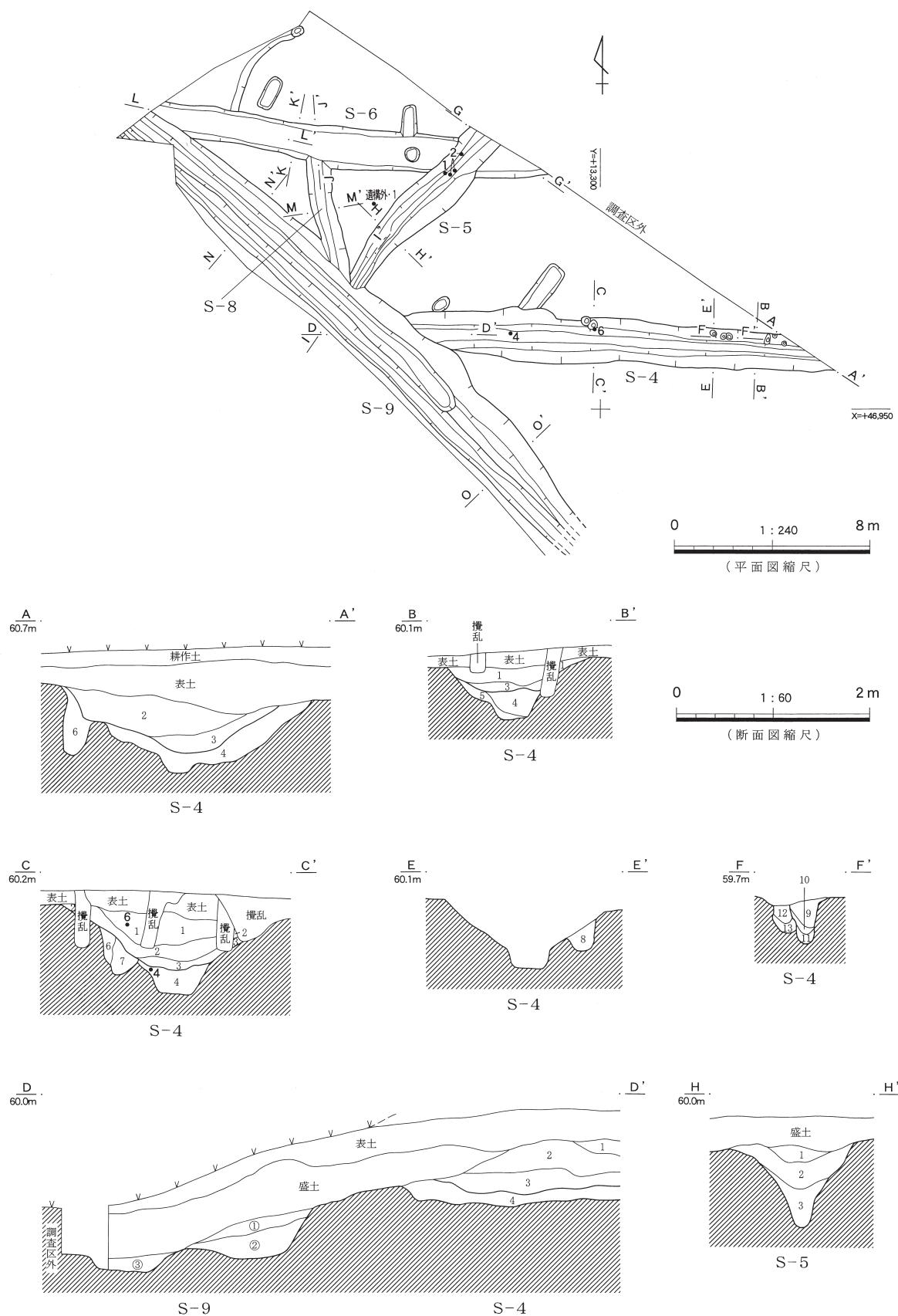
今回の調査で発見された溝跡は、A 区から 5 条 (S-4・5・6・8・9)、B 区から 1 条 (S-3 1)、C 区から 2 条 (S-2 6・2 7) の、併せて 8 条である。主に台地上平坦面、および低地にかけての緩斜面上に確認されている。以下、各遺構ごとに詳述する。

S-4 (第 71 ~ 73 図、第 29 表、図版一〇・一一・二九・三〇)

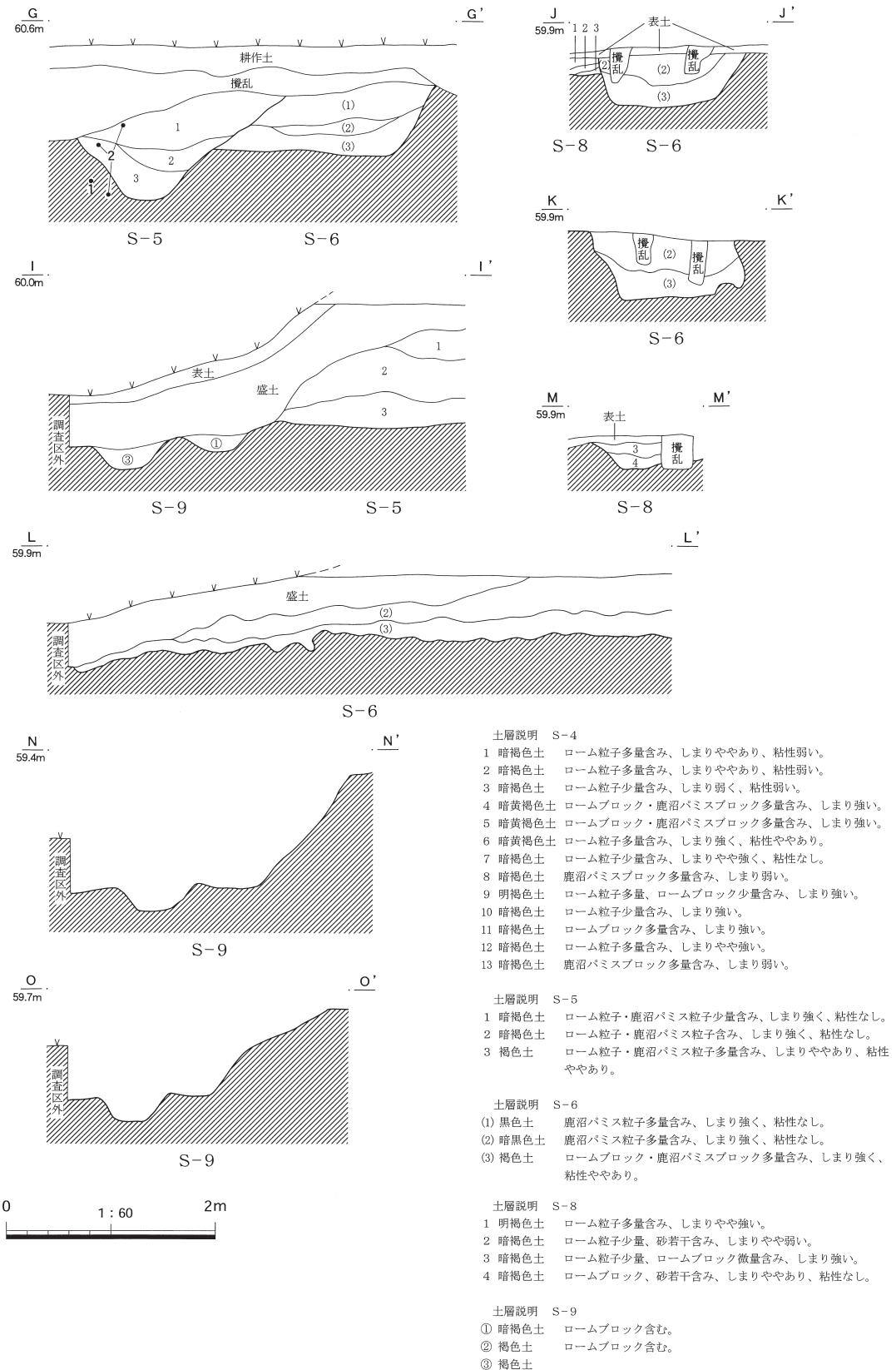
位置 A 区の北西部に確認し、台地平坦面上から緩斜面にかけて位置する。

新旧関係 位置的に S-9 と切り合うが、該当箇所が土地改良時に削平を受けているので不明である。

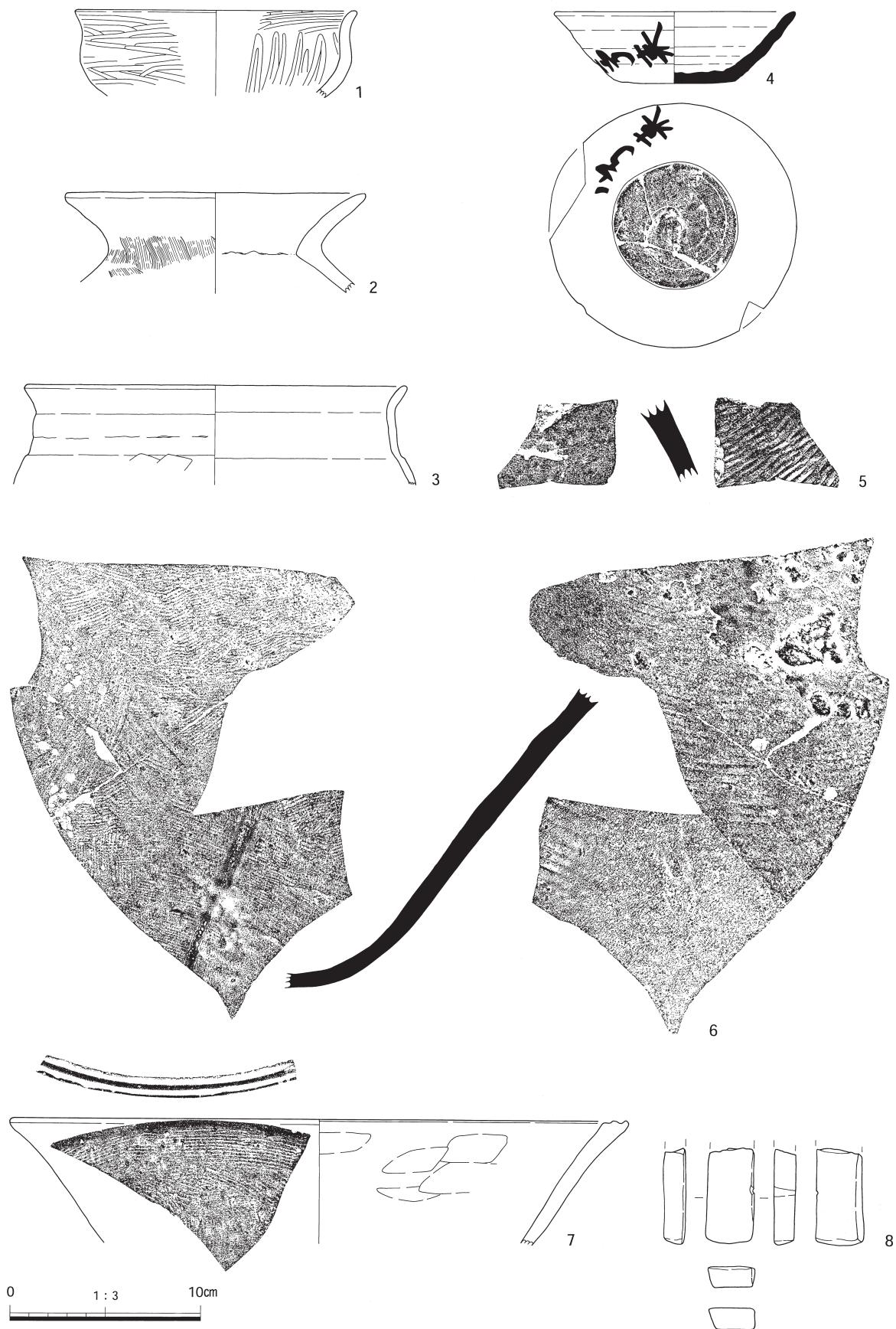
規模・形状 確認した長さは 17.78m で、東端は調査区外に存在し、西端は低地に至り消滅すると考えられる。



第71図 伊勢崎III遺跡 S-4・5・6・8・9実測図(1)



第72図 伊勢崎III遺跡 S-4・5・6・8・9実測図(2)



第73図 伊勢崎III遺跡 S-4出土遺物実測図

第29表 伊勢崎III遺跡 S-4出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴(外)	整形の特徴(内)	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	土師器 壺	口径 (14.8) 器高 [4.5]	口縁部は外反する	ヘラミガキ	ロクロナデ後、ヘラ ミガキ	良 内: 2.5YR5/6 明赤褐 外: 7.5YR5/4 にぶい褐	口縁部 ～体部 1/4	埋土中	
2	土師器 壺	口径 (15.8) 器高 [5.2]	口縁部「く」字状	口縁部ヨコナデ 頸部ハケメ	口縁部ヨコナデ	赤色粒・良 内: 7.5YR7/4 にぶい橙 外: 7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 1/3	埋土中	内面接合痕
3	土師器 甕	口径 (20.0) 器高 [5.2]	口縁部「コ」字状	口縁部ヨコハケ 肩部ヘラケズリ	口縁部ヨコハケ	黒色粒子・良 内: 7.5YR6/4 にぶい橙 外: 7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部 1/4	埋土中	外面接合痕 内外面一部黒斑
4	須恵器 壺	口径 12.7 器高 3.7 底径 6.0	平底。体部は直線的に開 く	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	礫・良 内: 10Y5/1 灰 外: 7.5Y6/1 灰	ほぼ完形	埋土中	内外面礫露出 外面墨書「□方ケ来」 益子産
5	須恵器 甕			平行叩き	ナデ	小礫・良 内: N4/ 灰 外: N4/ 灰	胴部破片	埋土中	産地不明
6	須恵器 甕			平行叩き	当て具痕	小礫・良 内: 7.5Y4/1 灰 外: 7.5Y4/1 灰	胴部破片	埋土中	外面窯体片癒着 内面一部自然釉 産地不明
7	鉢類	口径 (32.0) 器高 [6.5]	口縁端部に凹線を 2 条持 つ	ロクロナデ後、ヘラ ナデ	ロクロナデ後、ナデ	砂粒・良 内: 5Y6/2 灰オリーブ 外: 2.5Y7/2 灰黄	口縁部 1/6	埋土中	外面ヘラナデ、ハケ メ状・一部黒色化
8	砥石	長 [5.0] 幅 2.4 厚 1.1	側面が小さく抉られる撥 形。上部を欠損	長軸 4 面、短軸 1 面 を砥面とする		内: 5GY8/1 灰白 外: 5GY8/1 灰白	2/3	埋土中	重量 27.07g 輝石デイサイト製

上場は両辺とも直線的に伸びるが、やや蛇行気味で、断面形状は上幅が 1.49 ~ 2.21m、中幅が 0.48 ~ 1.08m、下幅が 0.28 ~ 0.37m、確認面からの深さが 0.53 ~ 0.86m の、中位に段を持つ逆台形状、いわゆる薬研堀である。底面はほぼ平坦で鹿沼軽石層まで掘り込まれており、西側低地に向かって緩やかに傾斜している。本体上半部分は、全体的にゴボウ耕作による攪乱を受けている。北辺内側に散在する 8 基の小穴は平面円形もしくは橢円形状で直径が 0.20m 前後、断面 U 字状で深さ 0.30 ~ 0.45m 程度であるが、南辺に対を為さないことと、明確な柱痕が無いなどの理由で、橋脚跡とは考えにくい。

主軸方向 N - 86° - W で、S - 6 主軸とほぼ平行し、S - 8 主軸とほぼ直交する。

埋土 溝本体はゴボウ耕作による攪乱を除いて 5 層に分層できる。暗褐色土や暗黄褐色土からなる自然堆積で、確認面から 0.22 ~ 0.60m の深さで一回以上の掘り返しが認められる。シルト層の堆積など、常時水を湛えていた痕跡は見つかっていない。

遺物 比較的多く出土したが、そのほとんどが様々な時期の流れ込みと考えられる。図示し得た遺物は第73図のとおりで、土師器壺 1 点 (1)・壺 1 点 (2)・甕 1 点 (3)、須恵器壺 1 点 (4)・甕 2 点 (5・6)、鉢類 1 点 (7)、砥石 1 点 (8) の計 8 点である。2 はハケメ調整から古墳時代前～中期の遺物と考えられる。3 は口縁部がコ字状を呈する武藏型土師器甕で、今回調査で唯一の出土例である。須恵器 4 は益子産の製品、5・6 は生産地不明である。4 は体部外面に横位に「□方ケ来」銘の墨書が書かれている。6 は内面に自然釉の垂れた痕、外面には剥がれた窯体が付着している。7 は還元炎焼成ベースで一部酸化炎焼成されており、口縁端部に沈線を 2 条施している。中世の所産と考えられ、溝跡の時期に該当する。他に縄文土器 (図示し得たのは 2 点)、縄文時代石器 (2 点) が出土したが「遺構外出土遺物」に掲載している。

S - 5 (第 71・72・74 図、第 30 表、図版一〇・一一・三〇)

位置 A 区の北西部に確認し、台地平坦面上から緩斜面にかけて位置する。

新旧関係 S - 6 より新しい。S - 9 とは位置的に切り合うが、該当箇所の土地改良時削平により不明である。

規模・形状 確認した長さは 8.38m で、北東端は調査区外に存在し、南西端は低地に至り消滅すると考えられる。上場は両辺とも蛇行気味で、断面形状は上幅が 1.31m、中幅が 0.60m、下幅が 0.16m、確認面からの深さが 0.83m の、中位に段を持つ逆台形状、いわゆる薬研堀である。底面は平坦で鹿沼軽石層まで掘り込まれ、南西側低地に向かって緩やかに傾斜している。本体上半部分は、全体的にゴボウ耕作による攪乱を受けている。

主軸方向 N-43°-E で、S-9 主軸とほぼ直交する。

埋土 溝本体はゴボウ耕作による攪乱を除いて 3 層に分層でき、暗褐色土や褐色土からなる自然堆積である。當時水が流れている痕跡などは見つかっていない。

遺物 土師器・内耳土器・カワラケの破片などが出土し、うち 2 点を図示した。1 はカワラケの小皿で内外面の一部にススが付着しており、灯明皿として転用された可能性がある。また、S-4 出土の小破片と接合したことから、お互いの溝跡は同じ時期に埋没した可能性がある。2 は比較的器高が高い中世の所産で、なべツルによる耳擦れの痕はない。いずれも溝跡の時期に該当すると考えられる。他に縄文時代石器（図示し得たのは 1 点）が出土したが「遺構外出土遺物」に掲載している。

第30表 伊勢崎III遺跡 S-5出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴（外）	整形の特徴（内）	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	カワラケ 小皿	口径 11.5 器高 3.0 底径 4.2	平底。体部はやや内湾して開き、口縁部付近で外反する	クロナデ 底部回転糸切り	クロナデ	砂粒・良 内：7.5YR8/4 浅黄橙 外：10YR7/3 にぶい黄橙	3/4	埋土中	S-4 出土破片と接合 内外面一部スス付着
2	内耳 土器	口径 (41.0) 器高 [11.6]	体部はほぼ直線的に開く	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母・良 内：7.5YR5/4 にぶい褐 外：10YR5/3 にぶい黄褐	口縁部 ～体部 1/6	埋土中	外面スス付着 内耳接合部指頭痕

S-6 (第71・72・74図、第31表、図版一〇・一一・三〇)

位置 A 区の北西部に確認し、台地平坦面上から緩斜面にかけて位置する。

新旧関係 S-16 より新しく、S-5 より古い。S-9 とは位置的に切り合うが、該当箇所の土地改良時削平により不明である。S-15 は底面まで掘り下げてから確認したので、新旧関係は不明である。

規模・形状 確認した長さは 16.24m で、長軸方向両端は調査区外に存在する。上場は両辺とも直線的に伸び、断面形状は上幅が 1.40m 前後、下幅が 0.90 ~ 1.04m、確認面からの深さが 0.50 ~ 0.65m の、断面逆台形状である。底面は凹凸があるがほぼ平坦で、鹿沼軽石層まで掘り込まれており、西側低地に向かって傾斜している。本体上半部分は、全体的にゴボウ耕作による攪乱を受けている。また、主軸延長線が同一で、断面形も相似する B 区の S-31 とは、埋没谷を挟んで同一遺構の可能性がある。

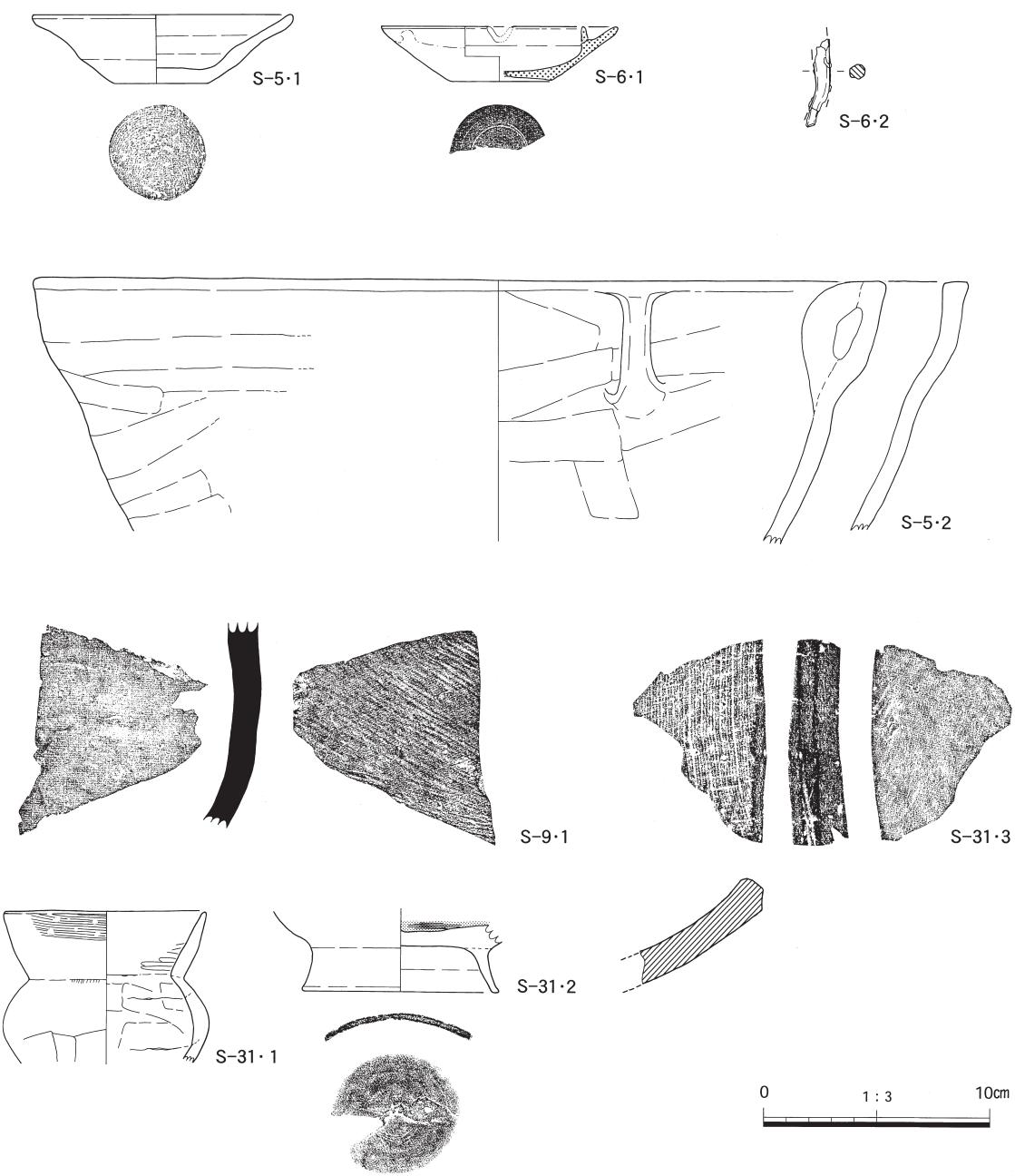
主軸方向 N-83°-W で、S-4 主軸とほぼ平行、S-8 主軸とほぼ直交する。

埋土 溝本体はゴボウ耕作による攪乱を除いて 3 層に分層でき、全体的にローム粒子・ロームブロックを多量に含み、人為的に埋め戻された可能性がある。當時水が流れている痕跡などは見つかっていない。

遺物 土師器・須恵器・常滑・近世陶磁器の破片などが出土し、うち 2 点を図示した。1 は灯蓋式（上皿と受皿を 2 枚重ねる方法）の陶製灯火受付皿で、受部高が口縁部上端とほぼ同じである。2 は棒状鉄製品で、長軸両端を欠損し、断面は円形である。断面の形態などの類例を探せば火箸などが候補に挙げられる。

第31表 伊勢崎III遺跡 S-6出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴（外）	整形の特徴（内）	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	陶器 灯火 受付皿	口径 (10.4) 器高 2.4 底径 (4.4)	受部高が器高とほぼ同じ	クロナデ 底部回転ヘラケズリ	クロナデ	良 内：10Y6/2 オリーブ灰 外：2.5Y6/2 灰黄	1/2	埋土中	内外面スス・タール付着 透明釉、下部無釉
2	鉄製品 火箸	長 [3.9] 幅 0.7 厚 0.6	棒状で断面円形 長軸両端欠損			5YR3/2 暗赤褐	先端部 破片	埋土中	重量 2.75g



第74図 伊勢崎Ⅲ遺跡 S-5・6・9・31出土遺物実測図

S-8 (第71・72図、図版一〇・一一)

位置 A区の北西部に確認し、台地平坦面上から緩斜面にかけて位置する。

新旧関係 S-6より古い。S-5・9とは位置的に切り合うが、該当箇所が土地改良時の削平により不明。

規模・形状 確認した長さは5.54mで、北端はS-6中で、南端は低地に至り消滅すると考えられる。上場は両辺ともやや「く」字状に屈曲し、断面形状は上幅が0.60m以上、下幅が0.24m、確認面からの深さが0.25mの、断面逆台形状である。底面は平坦で、鹿沼軽石層まで掘り込まれており、南側低地に向かって緩やかに傾斜している。本体上半部分は、全体的にゴボウ耕作による攪乱を受けている。

主軸方向 N-5°-Wで、S-4・6主軸とほぼ直交する。

埋土 溝本体はゴボウ耕作による攪乱を除いて4層に分層でき、全体的にローム粒子・ロームブロックを含み、人為的に埋め戻された可能性がある。當時水が流れていた痕跡などは見つかっていない。

遺物 出土しなかった。

S-9 (第71・72・74図、第32表、図版一〇・一一・三〇)

位置 A区の北西部に確認し、緩斜面に位置する。

新旧関係 位置的にS-4・5・6・8と切り合うが、該当箇所が土地改良時に削平を受けているので不明。

規模・形状 確認した長さは24.48mで、長軸方向両端は調査区外に存在する。上場は両辺ともやや蛇行気味に伸び、断面形状は上幅が2.70m以上、下幅が1.80m以上、確認面からの深さが0.81～1.21mの逆台形状で、更にその底面中央部に上幅が0.65～0.78m、下幅が0.25m前後、底面からの深さが0.25mの断面逆台形状に掘り込まれる。全体的に見ると中位に段を持つ逆台形状、いわゆる薬研堀の可能性がある。底面は中位・下位ともほぼ平坦で、下位は鹿沼軽石層まで掘り込まれており、ともに北西方向に緩やかに傾斜している。本体上半部分は、全体的にゴボウ耕作による攪乱を受けているが底面までは達していない。

主軸方向 N-45°-Wで、S-5主軸とほぼ直交する。

埋土 ゴボウ耕作および土地改良時の削平でほとんど失われている。確認できた層はロームブロックを含んでいるが、壁面崩落によるものか、人為的埋戻しによるものかは不明である。當時水を湛えていた痕跡は見つかっていない。

遺物 須恵器・近世陶磁器・近世瓦の破片が出土し、うち1点を図示した。須恵器1の生産地は不明である。

第32表 伊勢崎III遺跡 S-9出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴（外）	整形の特徴（内）	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	須恵器 甕			平行叩き	ナデ	砂粒・良 内：7.5YR5/1灰 外：10Y4/1灰	胴部破片	埋土中	産地不明

S-26 (第75図、図版一一)

位置 C区の北部に確認し、台地平坦面上に位置する。

新旧関係 他の遺構との切り合いはない。

規模・形状 確認した長さは20.20mで、長軸方向両端は調査区外に存在する。上場は両辺ともほぼ直線的に伸び、断面形状は上幅が1.24～1.50m、下幅が0.32～0.50m、確認面からの深さが0.28～0.42mの、断面皿状である。底面は凹凸があるがほぼ平坦である。一部にゴボウ耕作による攪乱を受けている。

主軸方向 N-58°-Wである。

埋土 溝本体は3層に分層でき、暗褐色土を中心とした自然堆積と考えられる。また、當時水が流れていた痕跡などは見つかっていない。

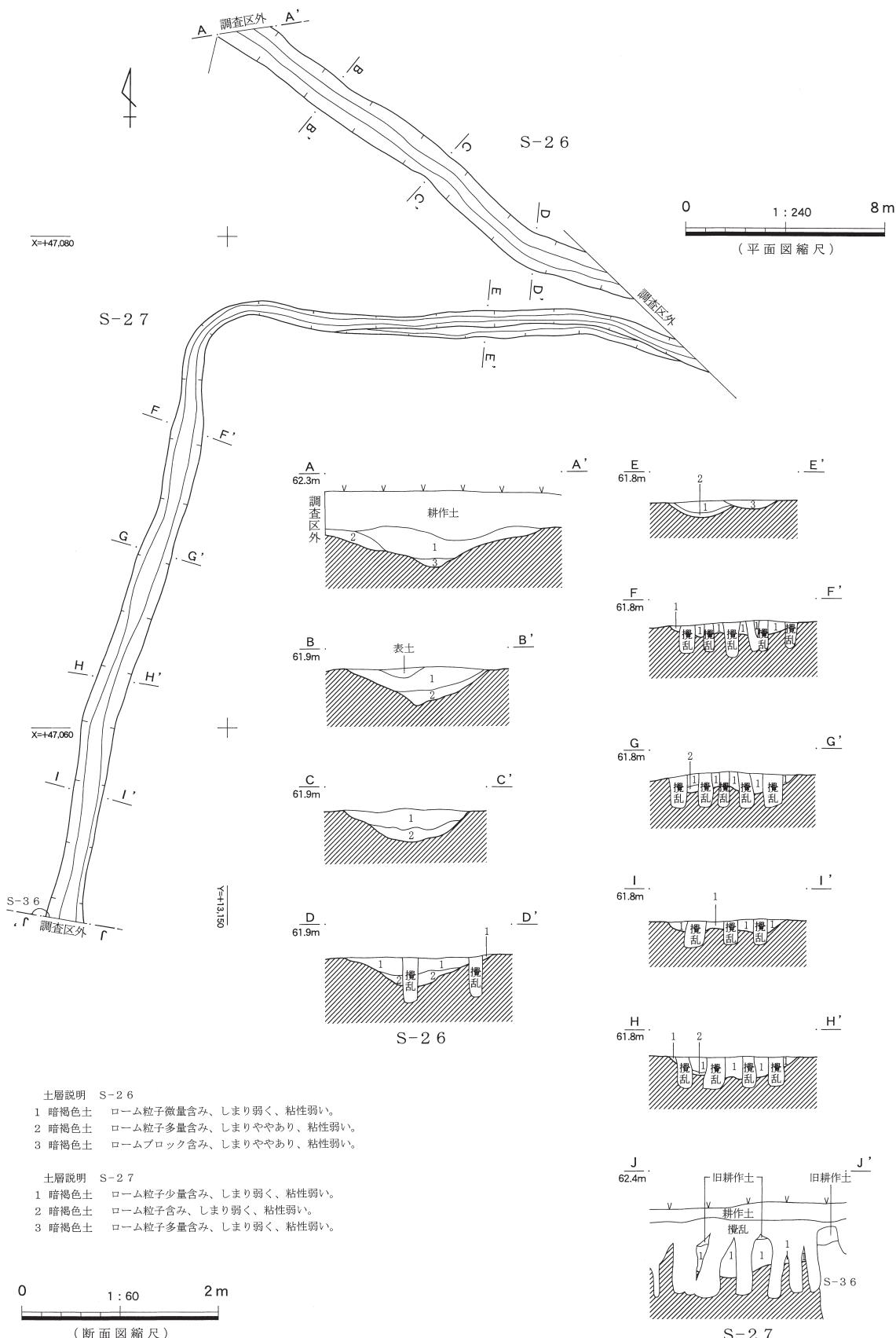
遺物 常滑産の陶器破片などが出土したが、図示し得た遺物は無い。

S-27 (第75図、図版一二)

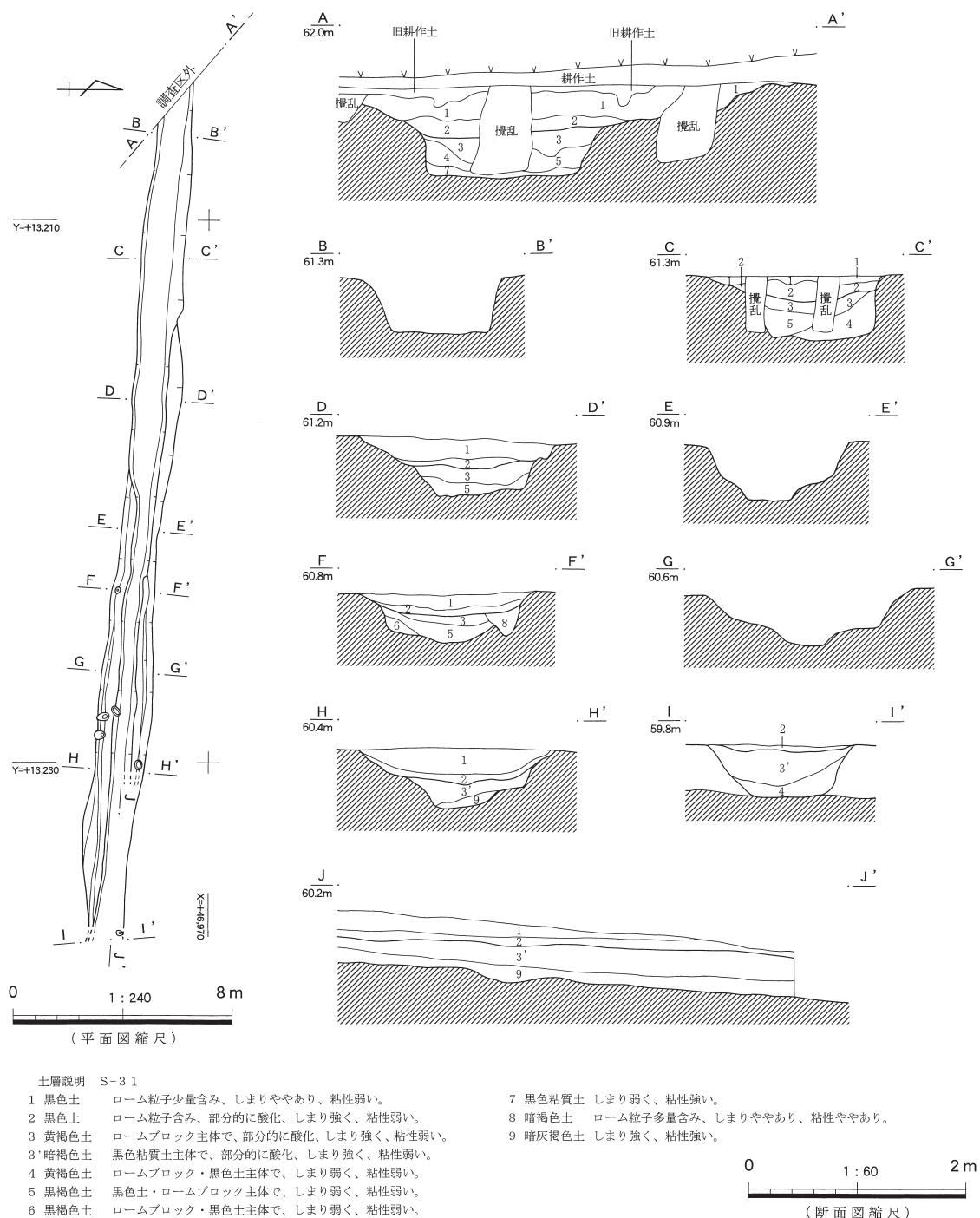
位置 C区の西部に確認し、台地平坦面上に位置する。

新旧関係 ゴボウ耕作による攪乱のため直接の切り合いは不明であるが、S-36より古いと考えられる。

規模・形状 東端調査区外から西方向に20.35m伸びて南に直角に折れ、屈曲点から25.46m伸びて再び調



第75図 伊勢崎III遺跡 S-26・27実測図



第 76 図 伊勢崎 III 遺跡 S-3 1 実測図

査区外に至る。断面形状は上幅が 1.11 ~ 1.53m、下幅が 0.17 ~ 0.69m、確認面からの深さが 0.14 ~ 0.40m の、断面皿状である。底面は凹凸があるがほぼ平坦である。全体的にゴボウ耕作による攪乱が著しい。

主軸方向 東側部分が N - 92° - E、屈曲点から南側部分が N - 20° - E である。

埋土 溝本体はゴボウ耕作による攪乱を除いて 3 層に分層でき、暗褐色土を中心とした自然堆積であろう。

また、當時水が流れていた痕跡などは見つかっていない。

遺物 近世陶器片などが出土したが、図示し得た遺物は無い。

S-31 (第74・76図、第33表、図版一二・三〇)

位置 B区の南東部に確認し、台地の平坦面上に位置する。

新旧関係 他の遺構との重複はない。

規模・形状 確認した長さは31.24mで、東端は調査区外に存在するが、クロップマークが続いており、埋没谷を越えてA区に至ると考えられる。また、主軸延長線が同一で、断面形も相似するA区のS-6とは埋没谷を挟んで同一遺構の可能性がある。上場は両辺ともほぼ直線的に伸び、東半部の断面形状は上幅が1.27～1.90m、下幅が0.40～1.02m、確認面からの深さが0.37～0.57mの逆台形状で、更にその底面中央部に上幅が0.54m、下幅が0.45m、底面からの深さが0.16mの断面逆台形状に掘り込まれる。西半部の断面形状は上幅が1.27～1.79m、下幅が0.80～0.95m、確認面からの深さが0.50～0.59mの逆台形状である。底面は全体を通してほぼ平坦で、鹿沼輕石層まで掘り込まれており、東側埋没谷に向かって傾斜している。本体上半の一部は、ゴボウ耕作による攪乱を受けている。

主軸方向 N-85°-Wである。

埋土 溝本体はゴボウ耕作による攪乱を除いて9層に分層できるが、ローム地山を掘り込んでいる西半部と、埋没谷の堆積土を掘り込んでいる東半部では、埋土の構成が異なる。西半部ではローム粒子・ロームブロックが含まれることから、人為的に埋め戻されたものであると考える。東半部では埋没谷堆積土が主体となるが、この部分だけ自然堆積とは考えにくく、人為的に埋め戻された可能性が高い。確認面から0.05～0.36mの深さで、一回以上の掘り返しが認められる。シルト層などの、常時水が流れていた痕跡などは見つかっていない。

遺物 土師器・須恵器・瓦の破片が出土したが、近在するS-30・32からの流れ込みであろう。図示し得た遺物は3点である。1は古墳時代前期の土師器壇で、赤彩が施されていた可能性がある。2は平安時代の高台付壺で、体部に内面黒色処理が施されている。3は女瓦で胎土の特徴がS-32の20・21と相似している。他に縄文土器（図示し得たのは2点）、縄文時代石器（1点）、弥生土器（5点）が出土したが「遺構外出土遺物」に掲載している。

第33表 伊勢崎III遺跡 S-31出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴（外）	整形の特徴（内）	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	土師器 壇	器高 [6.7] 胴径 (9.1)	口縁部は直線的に開き、 胴部は中央に胴径があり やや扁平な球形	口縁部ヨコナデ 一部ハケメ 胴部下半ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 一部ヘラミガキ 胴部ヘラナデ	砂粒・良 内：2.5YR5/6 明赤褐 外：7.5YR6/3 にぶい褐	2/3	埋土中	内面接合痕 外面黒斑
2	土師器 高台付 壺	器高 [3.7] 底径 (8.7)	薄く長い高台がやや外反 しながら「ハ」字状に開く	ロクロナデ 底部回転ヘラ切り後 高台ハリツケ	ヘラミガキ	砂粒・良 内：N2/ 黒 外：7.5YR7/4 にぶい橙	底部 3/4	埋土中	内面黒色処理 斑状剥離
3	女瓦		凹面側側縁に面を持つ	凸面：ナデ 側面：ヘラケズリ	凹面：布目痕を残す	小礫・やや良 凹：5YR7/6 橙 凸：10YR7/3 にぶい黄橙	側面破片	埋土中	凹凸面露出 重量 93.80g

(6) 土坑

今回の調査で発見された土坑は、調査途中で欠番になったものを除くと、A区から7基（S-10・11・12・13・14・15・16）、B区から3基（S-33・34・35）の、併せて10基である。C区からは発見されていないが、ゴボウ耕作の攪乱が確認を困難にした原因の一つであろう。以下、各遺構ごとに詳述する。

S-10 (第77図、図版一二)

位置 A区中央部北側に確認し、台地の平坦面上に位置する。新旧関係 S-12・2より新しく、S-11

より古い。規模・形状 長径 0.68m、短径 0.42m、深さ 0.65m で、平面は東西に長い橢円形状、断面U字状である。全体的にゴボウ耕作による攪乱を受ける。埋土 ロームブロック・炭化物粒子を含む暗褐色土の单層で、人為的な埋戻しと考えられる。遺物 土師器片が数点出土したが、図示し得なかった。

S-1 1 (第 77 図、図版一二)

位置 A 区中央部北側に確認し、台地の平坦面上に位置する。新旧関係 S-1 1・3 2 より新しい。規模・形状 長径 0.36m、短径 0.26m、深さ 0.59m で、平面は北西-南東に長い橢円形状、断面長方形形状である。埋土 ロームブロックを含む暗褐色土の单層で、人為的な埋戻しと考えられる。遺物 土師器片が数点出土したが、図示し得なかった。

S-1 2 (第 77 図、図版一二)

位置 A 区中央部北側に確認し、台地の平坦面上に位置する。新旧関係 S-1 0・1 1 より古い。規模・形状 長径 0.72m、短径 0.53m、深さ 0.29m で、平面は南北に長い不整橢円形状、断面逆台形状である。全体的にゴボウ耕作による攪乱を受ける。埋土 ロームブロック・炭化物粒子を含む暗褐色土の单層で、人為的な埋戻しと考えられる。遺物 出土しなかった。

S-1 3 (第 77 図、図版一二)

位置 A 区中央部北側に確認し、台地の平坦面上に位置する。新旧関係 S-2 より新しい。規模・形状 長径 1.20m 以上、短径 0.98m、深さ 0.28m で、平面は南北に長い不整橢円形状、断面皿状で、底面は平坦である。上半部は、全体的にゴボウ耕作による攪乱を受ける。埋土 暗褐色土を中心とした人為的な埋戻しと考えられる。遺物 出土しなかった。

S-1 4 (第 77 図、図版一二)

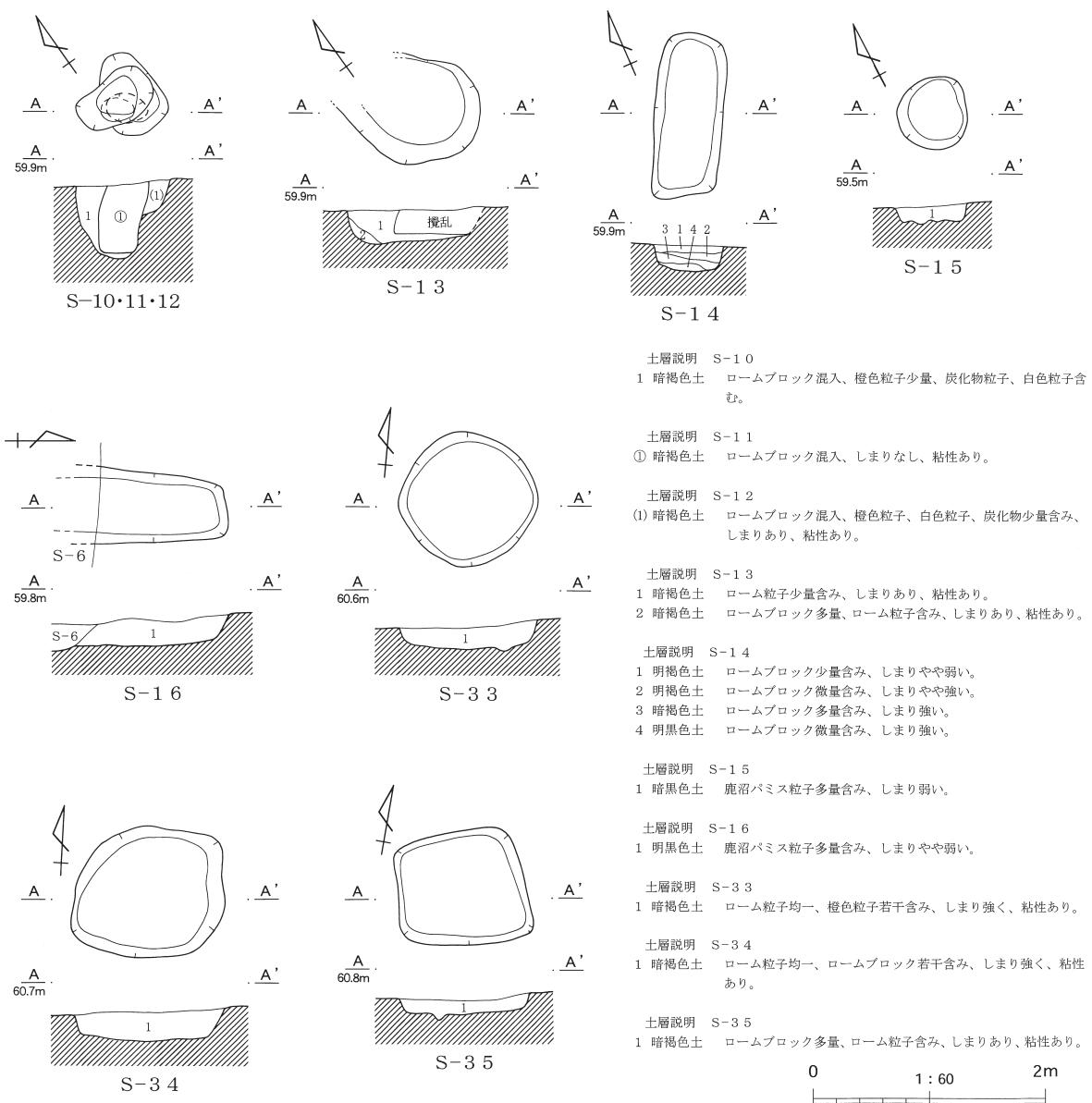
位置 A 区の北西部に確認し、台地上平坦面に位置する。新旧関係 他の遺構との重複はない。規模・形状 長軸 1.45m、短軸 0.60m、深さ 0.23m で、平面は北東-南西に長い隅丸長方形形状、断面逆台形状で、底面は丸みを帯び、やや凹凸がある。埋土 明褐色土を中心とした人為的な埋戻しと考えられる。遺物 出土しなかった。

S-1 5 (第 77 図、図版一二)

位置 A 区の北西部に確認し、台地上平坦面に位置する。新旧関係 位置的に S-6 と切り合うが不明である。規模・形状 直径 0.57m、深さ 0.16m で、平面円形状、断面皿状で、底面は鹿沼軽石層まで掘り込まれ、丸みを帯びる。全体的にゴボウ耕作による攪乱を受ける。埋土 鹿沼パミス粒を多量に含む暗黒色土の单層である。遺物 出土しなかった。

S-1 6 (第 77 図、図版一三)

位置 A 区の北西部に確認し、台地上平坦面に位置する。新旧関係 S-6 より古い。規模・形状 長軸 1.34m 以上、短軸 0.67m、深さ 0.24m で、平面は東西に長い長方形形状、断面皿状で、底面は鹿沼軽石層まで掘り込まれ、ほぼ平坦で小穴状の凹凸がある。全体的にゴボウ耕作の攪乱を受ける。埋土 鹿沼パミス粒を多量に含む明黒色土の单層で、人為的な埋戻しと考えられる。遺物 土師器片数点の出土で、図示し得なかった。



第77図 伊勢崎III遺跡 土坑実測図

S-3 3 (第77図、図版一三)

位置 B区の南東部に確認し、台地の平坦面上に位置する。
新旧関係 他の遺構との重複はない。
規模・形状 直径1.15m、深さ0.22mで、平面円形、断面皿状である。底面は鹿沼軽石層まで掘り込まれており、丸みを帯びる。
埋土 ローム粒子を含む暗褐色土の単層である。
遺物 土師器片・須恵器片が数点出土したが、図示し得なかった。

S-3 4 (第77図、図版一三)

位置 B区の南東部に確認し、台地の平坦面上に位置する。
新旧関係 他の遺構との重複はない。
規模・形状 直径1.12～1.28m、深さ0.25mで、平面不整円形、断面皿状で、底面は丸みを帯びる。
埋土 ローム粒子・ロームブロックを含む暗褐色土の単層である。
遺物 土師器片が数点出土したが、図示し得なかった。

S-35 (第77図、図版一三)

位置 B区の南東部に確認し、台地の平坦面上に位置する。新旧関係 他の遺構との重複はない。規模・形状 直径1.00～1.10m、深さ0.13mで、平面隅丸方形、断面皿状で、底面はやや凹凸がある。埋土 ローム粒子・ブロックを多量に含む暗褐色土の单層である。遺物 土師器片数点の出土で、図示し得なかった。

(7) 性格不明遺構

S-28 (第78図、第34表、図版一三・三〇)

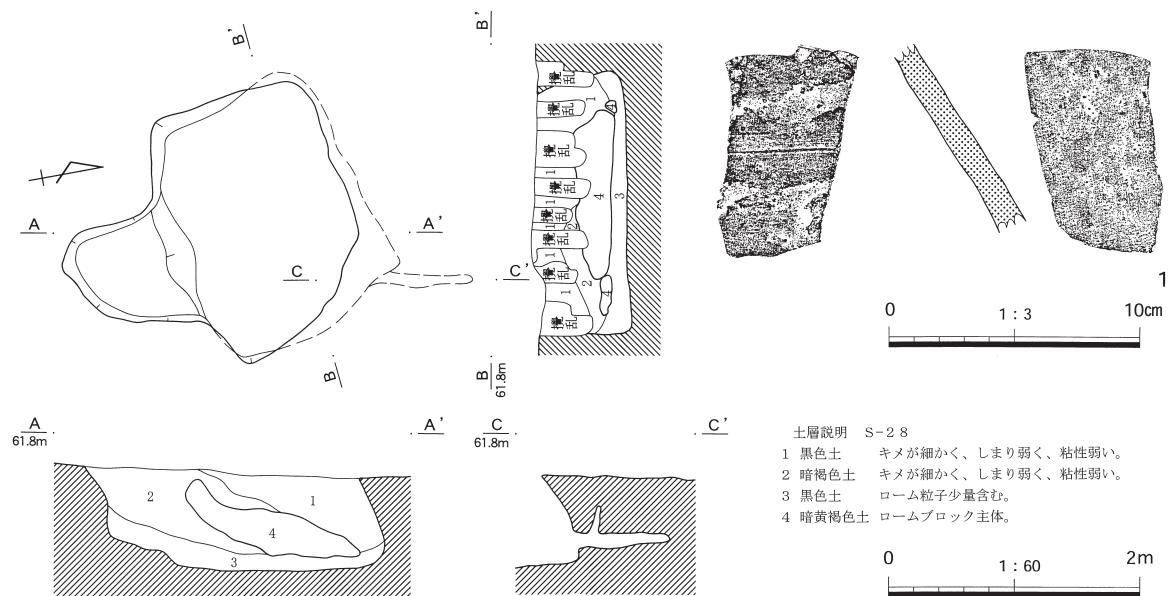
これまでの県内調査事例に照会し、その形状から所謂の地下式壙として報告する。

位置 C区の西部に確認し、台地平坦面上に位置する。新旧関係 他の遺構との重複はない。

規模・形状 平面形は丸いつまみの付いた分銅形状で、墓室が1室の单室構造である。豊坑は墓室南辺に付き幅1.02m、奥行き0.90mの平面船首形状で、確認面からの深さは0.64mである。墓室は長軸2.05m、短軸1.48mの東西に長い不整隅丸方形で、深さ0.69～0.79mの断面台形状である。豊坑から墓室奥壁までの長さは2.32mである。奥壁と両側壁がオーバーハングしており、天井部に向かって窄まっていた可能性がある。ローム地山を掘り残した天井部は崩落しており、幅1.35～1.50m、厚さ0.35mにわたって痕跡が認められる。底面は平坦で、豊坑に向かって0.15m程度浅くなり、各コーナーは丁寧に直角に掘られている。北東コーナー部分の横穴は本地下式壙に付随する施設とは考えにくく、しいて例を挙げるならば小型ほ乳類などの掘ったものであろうか。上半部はゴボウ耕作による攪乱が著しいが、底面にまでは達していない。

埋土 3層と2層の一部が自然堆積した時点で天井崩落(4層)が起き、さらに1層が堆積したと考えられる。

遺物 常滑産の陶器破片1点が出土したのみである。



第78図 伊勢崎III遺跡 S-28実測図・出土遺物実測図

第34表 伊勢崎III遺跡 S-28出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴(外)	整形の特徴(内)	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	陶器 甕			ナデ	ナデ	砂粒・良 内: 7.5YR5/3 にぶい褐 外: 2.5YR4/3 にぶい赤褐	胴部破片	埋土中	常滑産

(8) 遺構外出土遺物

縄文土器 (第79図、第35表、図版二三・二四)

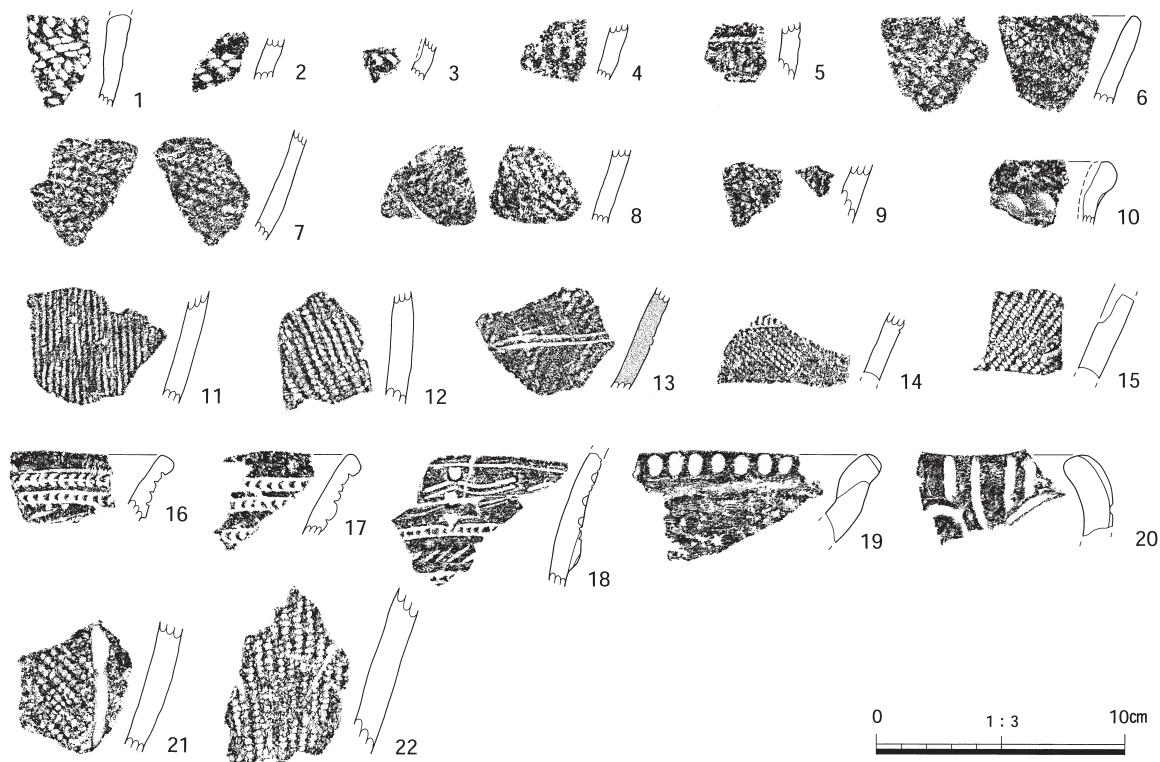
第1群 多縄文系土器

第1類 押圧縄文を施す土器 (第79図1~5)

これらは胎土に砂粒、少量のガラス質粒子および多量の白色の小礫を含み、色調はにぶい黄褐色 (10YR 5/3) を呈す。1は、1段Rの短い縄を密に押捺し、隣接する上下で向きを変え、綾杉状の効果をあげたと思われる。あるいは、半截竹管に1段Rの縄を巻いた単軸絡条体の腹側を押捺したものかもしれない。この場合、巻く方向を違えた単軸絡条体を交互に押捺したことになる。2~4は1段Rの縄を、間隔を開けて押捺している。5は、1~4よりも細い1段Rの縄を、横位に押捺している。器厚は、3が4mmと薄手で、他は6~7mmである。

第2類 表裏縄文の土器 (第79図6~9)

6は口縁部破片で、表裏に2段LRの縄の横位施文による単節斜縄文を施している。胎土には少量の石英粒および多量の砂粒、白色粒を含んでいる。色調は、灰黄褐色 (10YR 6/2) を呈す。7は表裏に2段LRの縄



第79図 伊勢崎III遺跡 遺構外出土縄文土器実測図

第35表 伊勢崎III遺跡 遺構外出土縄文土器属性表

遺物No.	出土位置	遺物No.	出土位置	遺物No.	出土位置	遺物No.	出土位置
1	S-3 2北西2層中	7	S-4 埋土中	13	表土中	19	B区表土中
2	S-3 2・2層中	8	S-4 埋土中	14	S-2 埋土中	20	S-2 埋土中
3	S-3 2南東2層中	9	表土中	15	S-3 1 埋土中	21	S-3 1 埋土中
4	S-3 2・2層中	10	B区表土中	16	A区表土中	22	B区表土中
5	A区表土中	11	S-2 埋土中	17	S-2 竈埋土中		
6	A区表土中	12	S-3 2 埋土中	18	S-1 埋土中		

の横位施文による単節斜縄文、8は2段LRの縄の縦位施文による単節斜縄文を施している。9は、2段LRの縄を、表面に縦位施文、裏面に横位施文している。7～9は、胎土に砂粒、白色粒及び雲母の微細破片を含み、色調はにぶい褐色(7.5YR 5/4)を呈している。

第2群 撫糸文系土器(第79図10～12)

10は肥厚する井草式の口縁部破片である。肥厚した口縁に、2段RLの縄の横位施文による単節斜縄文がみられる。肥厚部下端には、爪、もしくは籠状工具による斜位の押捺がみられる。11・12は2段の縄を斜位に施文した条の縦走する縄文がみられる。原体は、11が2段RLの縄で、12が2段LRの縄である。いずれも胎土には、ガラス質微粒、砂粒、白色の小礫および多量の白色粒を含んでいる。色調は、11がにぶい褐色(7.5YR 5/4)、12が橙色(7.5YR 6/6)を呈している。

第3群 黒浜式土器(第79図13)

13は、2段RLの縄の縦位施文による単節斜縄文を地文とし、横位の有節平行沈線を施している。胎土には砂粒、雲母片および植物纖維を含んでいる。色調はにぶい褐色(7.5YR 5/4)を呈す。

第4群 諸磯・浮島式土器(第79図14～18)

14は、2段RLの縄の横位施文による単節斜縄文を地文とし、横位の爪形文を施している。15は2段LRの縄の横位施文による単節斜縄文を施す体部破片である。縄文の節が細かく、この時期のものと判断した。胎土にはガラス質粒子および多量の微砂粒を含み、色調は褐灰色(10YR 4/1)を呈している。諸磯a式から諸磯b式の古い段階に比定される。

16・17は同一個体である。口縁に沿って爪形文を2条施し、以下斜位のキザミを加えた隆帶を配している。爪形文は、半截竹管で平行沈線を引いた後、半截竹管端部を押捺したものである。胎土には砂粒および少量のガラス質粒子を含み、色調はにぶい黄橙色(10YR 7/4)を呈している。18は、横位の細い爪形文に画された施文域に平行波状沈線を配し、縦位の刺突を加えている。爪形文直下には、斜位のキザミを加えた幅広い隆帶を配している。地文に微かな撫糸文が看取され、浮島I式に比定される。胎土には雲母の微細破片および多量の微砂粒を含み、色調は橙色(7.5YR 6/4)を呈す。

第5群 阿玉台式土器(第79図19)

19は、口端にキザミ目を加え、以下を無文とする。胎土には小礫、白色粒および雲母片を多量に含み、色調は橙色(7.5YR 6/4)を呈す。口部断面形および胎土の特徴から阿玉台式の無文深鉢と判断できた。

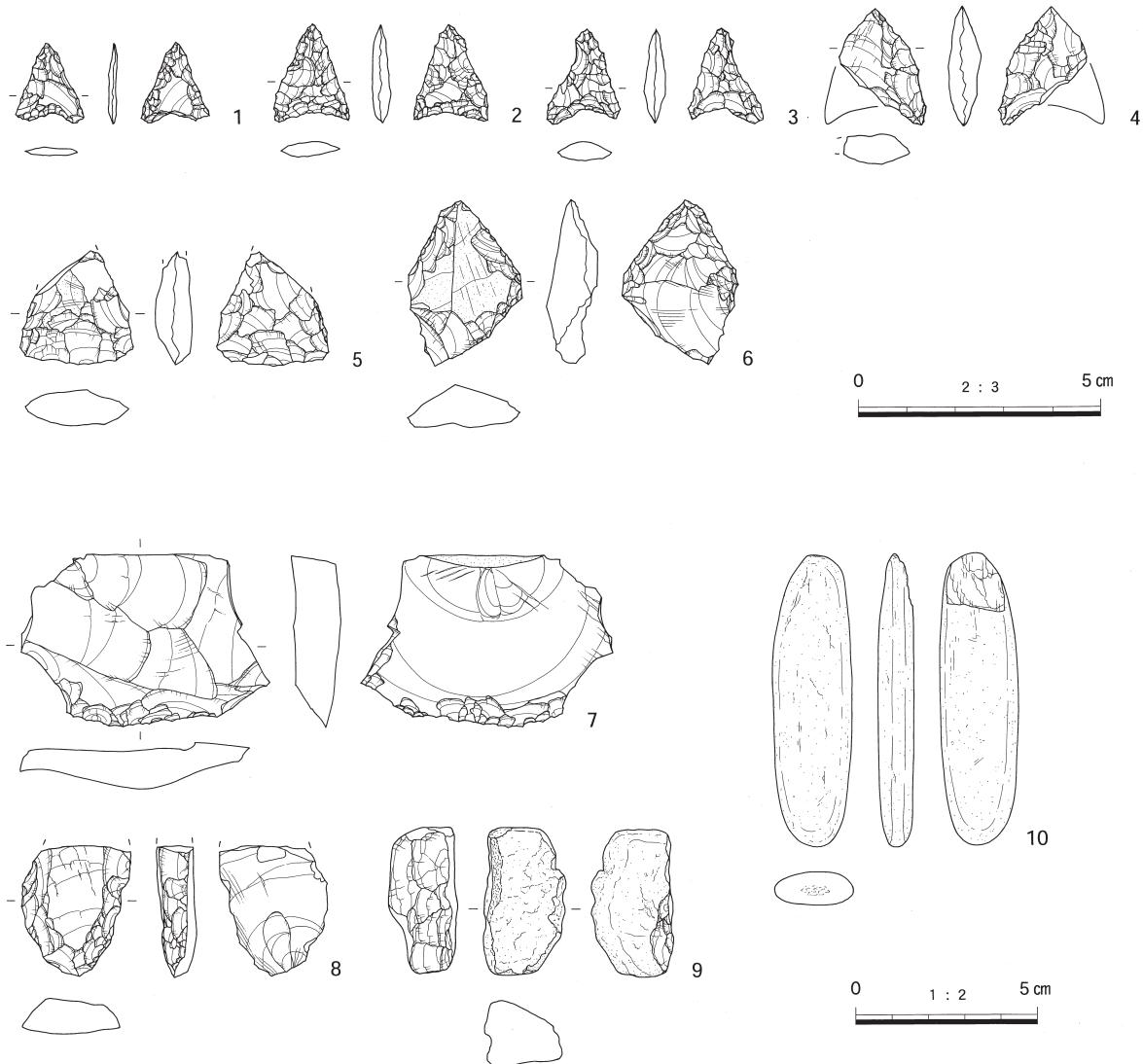
第6群 加曾利E式土器(第79図20～22)

20は無文地に縦位の密な沈線と渦巻状の沈線を施す口縁部破片である。関東地方東部の加曾利E I式期に多い土器である。21は沈線が沿う隆帶がみられる。地文は2段RLの縄の縦位施文による単節斜縄文である。

22は2段RLの縄の縦位施文による単節斜縄文がみられる体部破片である。これらは胎土に雲母片および多量の砂粒、白色粒を含む。色調は、20・21がにぶい橙色(7.5YR 6/4)、22がにぶい黄褐色(10YR 5/4)を呈す。

縄文時代石器（第80・81図、第36表、図版二五）

1～4は無茎の石鏃である。1・2は基部の抉りは広く浅い。両側縁は概ね直線的で、僅かに弧状に窪む。1は特に小型で、薄手の剥片を使用する。3は左右非対称の石鏃で、側縁部は一方がやや強く抉られており、脚部の長さも2mm程度の差を有する。4は厚手の剥片を素材とし、剥離はやや粗雑で、片方の脚部を欠損している。5・6は石鏃の未成品である。5は表面の一部に自然面を残す。先端部は節離面から折損したもの



第80図 伊勢崎III遺跡 遺構外出土縄文時代石器実測図（1）

第36表 伊勢崎III遺跡 遺構外出土縄文時代石器属性表

遺物No.	出土位置	石材	重量(g)	遺物No.	出土位置	石材	重量(g)
1	S-2埋土中	チャート	0.31	10	S-4埋土中	頁岩	24.47
2	表土中	チャート	0.77	11	S-4埋土中	輝石安山岩	245.33
3	S-3 1埋土中	チャート	0.62	12	S-3 2埋土中	輝石安山岩	257.12
4	S-3 2・1層中	頁岩	1.75	13	S-3 2南西1層中	輝石安山岩	566.17
5	B区表土中	チャート	3.69	14	S-3 2埋土中	多孔質輝石安山岩	157.75
6	S-3 2埋土中	チャート	5.49	15	A区表土中	多孔質輝石安山岩	576.27
7	A区表土中	チャート	39.50	16	A区表土中	輝石安山岩	313.22
8	A区表土中	頁岩	12.27	17	B区表土中	多孔質輝石安山岩	185.12
9	S-5埋土中	脈石英	22.39	18	S-3 2埋土中	多孔質安山岩	241.94



第81図 伊勢崎III遺跡 遺構外出土縄文時代石器実測図(2)

と考えられる。6は厚手の横長剥片を素材とし、表面には自然面（或いは節理面か）が大きく残っている。1・2・3・5・6はチャート製、4は頁岩製である。

7はスクレイパーで、厚手の剥片の下端部に両面からの加工を施し、刃部を作り出しており、チャート製である。8は縦長剥片の両側縁に急角度の剥離を施している。スクレイパーと考えられるが、先端部を欠損した尖頭器の可能性もある。石材は頁岩である。

9は脈石英製の小礫を素材とし、左側縁端部に敲打痕が認められるため、敲石と考えられる。左側面および腹面に加工痕があるが明確ではない。10は敲石と考えられ、扁平な礫の上端部および下端部に僅かな敲打痕を有する。上端部は大きく剥離している。

11～15は磨石をまとめた。11は表面中央部が良く研磨されている。12・13は顕著な研磨は確認できないが全体的にスベスベしている。14は扁平な礫を使用しているが、器面の風化が顕著で研磨痕等は確認できない。15は比較的大型の磨石で、上部約1/3を欠損している。全体的に良く研磨されており、両側面および下端部は平坦面を有している。石材は11～13が輝石安山岩、14・15が多孔質輝石安山岩である。

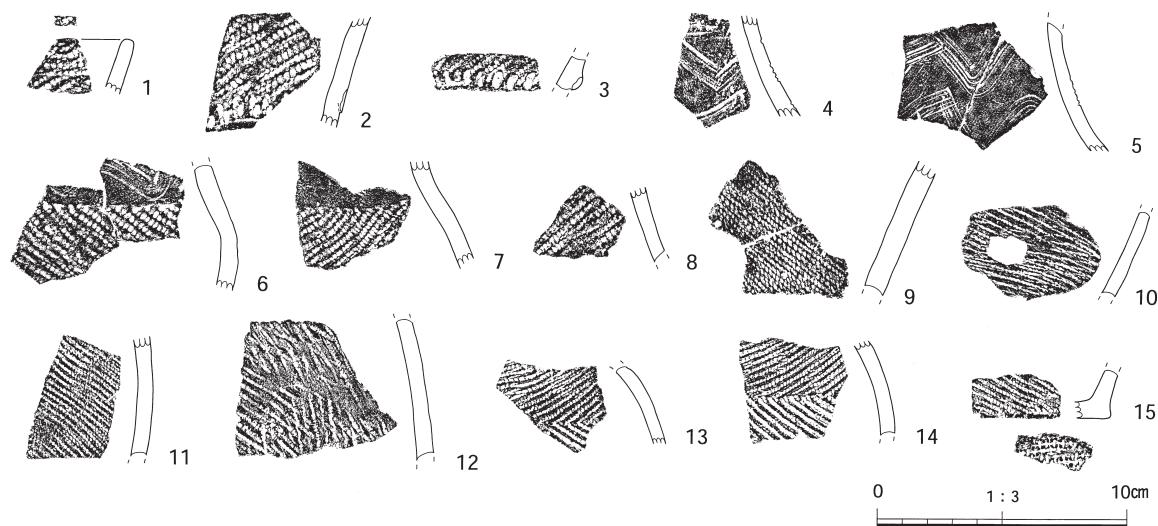
16・17は打製石斧である。16は表裏に自然面が残ることから扁平な礫を素材としたことが分かる。刃部は使用時に潰れたものと考えられる。石材は輝石安山岩である。17は表のみに自然面を残すため、剥片を素材とした可能性もある。器面の風化が顕著で使用痕等は確認できない。石材は多孔質輝石安山岩である。

18は石皿端部の破片と考えられ、厚さは約4cm、残存部が少なく全容は不明である。多孔質安山岩製である。

弥生土器（第82図、第37表、図版二四）

第7群 弥生時代後期の土器

第1類 有文の口縁部



第82図 伊勢崎III遺跡 遺構外出土弥生土器実測図

第37表 伊勢崎III遺跡 遺構外出土弥生土器属性表

遺物No.	出土位置	遺物No.	出土位置	遺物No.	出土位置	遺物No.	出土位置
1	S-3 2 埋土中	5	S-3 1 埋土中	9	S-2 埋土中	13	S-3 2・1層中
2	S-3 1 埋土中	6	S-3 1 埋土中	10	S-3 2・1層中	14	S-3 2 北西2層中
3	S-3 1 埋土中	7	S-3 2 竈埋土中	11	S-3 1 埋土中	15	S-3 2 埋土中
4	S-3 1 埋土中	8	B区表土中	12	S-3 0 埋土中		

第1種 複合口縁の土器 (第82図1~3)

1~3は広口壺形土器の複合口縁の破片と思われる。いずれも2段LRの縄の横位施文による単節斜縄文を施している。3は複合部下端が段をなし、2はその段が痕跡的となっている。2・3は、複合部下端に、口縁の縄文と同一原体を押捺している。

第2種 櫛描波状文を施すもの (第82図4~6)

これらは、頸部を無文とし、櫛歯状工具による横方向の条線文を施している。4は横位の鋸歯文、5は横位の波状文がみられる。6は頸部に横位の波状文を配し、体部に2段RLの縄の横位施文による単節斜縄文を施している。

第2類 地文のみの胴部および底部破片

第1種 単節縄文が施される土器 (第82図7~9)

7・8は2段LRの縄の横位施文による単節斜縄文が施されている。9は直前段3条の2段RLの縄の横位施文による単節斜縄文がみられる。

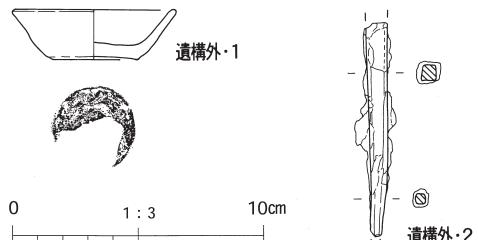
第2種 附加条付き縄による縄文がみられる土器 (第82図10~15)

いずれも附加条第1種の縄による縄文を施している。10・11・15は2段RLの軸縄に1段Lの縄2条を附加した原体を横位施文している。15は底部直上の破片で、底部には網代痕がみられる。12は10・11と同種の原体を横位、斜位に施文している。13・14は2段RLの軸縄に1段Lの縄2条を附加した原体と2段LRの軸縄に1段Rの縄2条を附加した原体を横位施文して羽状の条を形成している。

以上の土器は、胎土に微砂粒、白色粒およびガラス質微粒を含む。色調は、にぶい黄橙色(10YR 6/4, 7/4)や、にぶい黄褐色(10YR 5/4)が多いが、6・7のように灰黄褐色(10YR 4/2)を呈する暗いもの、4・8のように橙色(7.5YR 6/4)を呈する明るいものもある。

その他 (第71・83図、第38表、図版三〇)

遺構外・1のカワラケはS-5・6付近の確認面上から出土し、第71図中に平面位置を示した。口縁部内外面にタールが付着しており、灯明皿として使用されたものである。遺構外・2は表採品で鉄製の釘である。断面方形で長軸両端が欠損しており、図化した面は両側縁に沿って層状剥離が広く認められ、図中側面からは見られない。このため、層状剥離の見られる両面が鍛造時の主要鍛打面と判断できる。また、黒錆が随所に見受けられる。



第83図 伊勢崎III遺跡 遺構外出土遺物実測図

第38表 伊勢崎III遺跡 遺構外出土遺物観察表

No.	器種	寸法 cm	器形の特徴	整形の特徴(外)	整形の特徴(内)	胎土・焼成・色調	遺存率	出土状態	備考
1	カワラケ 灯火皿	口径 (6.6) 器高 2.0 底径 (3.4)	平底。体部は直線的に開 'く'	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒・良 外: 2.5Y7/1 灰白 内: 2.5Y8/2 灰白	1/3	確認面上	口縁部内外面タール付着
2	鉄製品 釘	長 [8.6] 幅 0.6 厚 0.4	断面方形 長軸両端欠損	両側縁層状剥離		5YR3/2 暗赤褐	2/3	埋土中	黒錆付着 重量 18.24g

第4章 調査の成果

第1節 原北遺跡について

大小の溝跡が並行して確認された。どちらも中世の薬研堀で主軸をほぼ同一とする。同時期存在か、もしくはSD-01から02・SD-02から01への作り替えの可能性が考えられるが、中世遺物が伴わないとため、詳細は不明である。水を湛えた形跡はないので、地割りを目的としたものと考える。また、覆土中から縄文土器・弥生土器の破片が相当数出土したため、調査対象区外周辺に当該期の遺構が存在した可能性がある。

第2節 茅堤北遺跡について

中世の薬研堀を確認した。Y字分岐のa・bの新旧については、断面観察からbが新しいか、同時期機能のいずれかである。東側埋没谷に至って消滅し、水があった形跡が無いので、地割りを目的としたものと考える。

第3節 伊勢崎III遺跡について

旧石器時代 まず石材の獲得について概観する。本遺跡から出土している主な石器石材は、頁岩・珪質頁岩、チャート、瑪瑙・玉髓、黒曜石、黒色安山岩である。以下に各石材の産地について概観する。なお、ここで言う「産地」とは、いわゆる露頭だけを指すのではなく、採集可能な河川も含めている。それは、本遺跡から出土する石器類に河川礫の特徴を示す自然面がみられる場合も多々あるからである。

頁岩・珪質頁岩は、多くの場合、県内の荒川や江川流域で採集されたものであろう。ただ、一部の良質で光沢のある珪質頁岩については、遠隔地（米沢方面）からもたらされた可能性がある。チャートは本県域では八溝山地や足尾山地に分布し、これらを流れる河川で採集が可能である。瑪瑙・玉髓は県内では茂木町、またそれと隣接する茨城県常陸大宮市で産出する。黒曜石の産地は、本県の遺跡から出土する石器類の場合、高原山・信州系・神津島がほとんどである。今回、出土した15点すべてを分析したが、その結果、推定も含め和田峠系11点、高原山3点、星ヶ塔1点となった。黒色安山岩は、県中南部を流下する多くの河川（姿川・鬼怒川・五行川など）で採集可能であり、しかもそれらは同一給源（日光系）であるとされている（森嶋ほか2006）。今回11点を分析したが¹、結果は上記日光系も含め、周知の産地のいずれにも当てはまらないとされた。これは、未発見の産地がどこかに存在する可能性もあるということを意味している。この石材は本遺跡において最も多く出土しており、また自然面が残されている資料も多いことから、この「未発見の産地」が遠隔地にあるとは思えない。今後、県東部のより詳細な石材調査を実施し、産地の発見に努めたい。

以上のことから、本遺跡においては黒曜石の多くと珪質頁岩の一部については遠隔地から、それ以外の石材については比較的近隣から持ち込まれていると考えられる。

剥片生産については、石刃に分類可能な資料が1点出土している。しかし、接合資料や石核には石刃技法を窺わせるような例は無い。これらは伊勢崎II遺跡で設定されたC類型（打面を転位しながら求心的に不定形な剥片を生産するもの）やD類型（打面と作業面を頻繁に転位しながら不定形な剥片を生産するもの）に分類されるものである（森嶋2000）。したがって、本遺跡では、石刃技法は中心的な剥片生産技術ではないと言えよう。

編年的な位置については、まず出土層位から検討してみる。本遺跡の石器のほとんどは暗色帶中（IVa層・IVb層）より出土している。テフラ分析によれば、IVa層とIVb層の間が始良Tn火山灰（AT）の降灰層準であるという（p.120）。したがって、本石器群はAT降灰前後（南関東でいうVI層段階）、あるいはAT下位（同じくVII層段階・IX層段階）の石器群のいずれかに位置付けられよう。ただ、IVa層とIVb層を併せて層

厚が40cm程度と薄いこともあり、出土層位だけではこれ以上細かな編年的位置を決めることが困難である。

器種構成や石材組成に注目してみると、本遺跡においては、数は少ないながらもナイフ形石器や台形様石器が出土している。また、石材には黒色安山岩・黒曜石・頁岩・珪質頁岩等が利用されている。このような特徴は、本遺跡から東に300mほど離れたところにある伊勢崎II遺跡の第II文化層の石器群に類似している。この文化層の層準はAT下位の暗色帶で、南関東のVII層段階に位置付けられている（森嶋2006）。

このように、製作技法・出土層位・器種構成・石材組成を併せて検討すると、本石器群の編年的位置は伊勢崎II遺跡・第II文化層と同じVII層段階とするのが、現段階では妥当であろう。ただ、一般にVII層段階は石刃技法が発達する段階とされ、伊勢崎II遺跡第II文化層でも石刃が比較的多く出土し、接合資料でも石刃技法が認められる。これに対して、本石器群においては、上記のように石刃技法がほとんどみられない。本石器群をVII層段階に位置付けた場合、ネックになるのはこの点である。しかしながら、この問題について今回は検討できなかった。編年的位置の再検討までも視野に入れ、今後改めて考えてみたい²。

註 *1 この石材は、風化面に蛍光X線をあてても正確な値が出ないという指摘があるため（森嶋ほか2006）、資料を切断し、断面（未風化面）を分析した。なお、分析したものは後世の遺構等から層位不明で出土した資料である。

*2 伊勢崎II遺跡第II文化層との関係も改めて検討し直す必要がある。今回は器種構成や石材組成の類似性を評価した。しかし、両石器群には、本文述べた石刃技法に関する違いのほかにも、伊勢崎II遺跡で多数出土している流紋岩質溶結凝灰岩が本遺跡では出土していない事など、相違点も目につくのである。

縄文・弥生時代 他時期の遺構覆土中から縄文土器片・縄文時代石器・弥生土器片が出土したが、今回の調査対象区内からは当該期の遺構は見つかっていない。調査区外周辺に存在していた可能性がある。

古墳時代 S-30からS字状口縁部土師器甕（7）が出土しており、4世紀中頃の竪穴住居跡と考えられる。栃木県の土器編年（今平1997）ではI新とIIの間に位置付けられる。この時代も伊勢崎II遺跡との関連は深い。

奈良・平安時代 当該期の竪穴住居跡は3軒で、S-1が土師器壺（3）と須恵器壺（4）から9世紀末～10世紀前葉、S-2が土師器壺（1）から9世紀中葉～後葉、S-32が土師器壺（1）から9世紀中葉と位置付けられよう。墨書き土器は「女」「田邊」「□方カ来」銘が確認されているが、S-2出土土師器壺の「田邊」に関しては、伊勢崎II遺跡（吉田1999）S-I-23出土土師器壺（1）と、器形・製作技法、墨書きの筆致まで類似しており、隣接集落との関係が密接であったことが窺える。また、土師器甕5は底部に木葉痕模倣のヘラ描が施され、本来、成形過程で結果的に着く痕を、わざわざケズリ仕上げ後に記号化して施す点が興味深い。

以下、特記すべき事項を並記する。臨海地域との流通を示す製塩土器（津野2006）の破片が確認されている。出土須恵器を産地別に見ると、圧倒的に益子産が多い。土師器甕は下野型中心で武藏型は1例しかなく、しかも溝覆土からの一括である。瓦の型押しは、下野国府・国分寺出土のものに類似例をもとめられる。

中世 A区の北西部に確認したS-4・5に代表される小規模な薬研堀は、地割を目的としたものと考える。周辺から出土したカワラケ（S-5・1、遺構外・2）は15世紀末から16世紀前葉と考えられる（今平2001）。C区は、墓壙が確認できなかったものの、地下式壙と井戸の存在から、中世の墓域の可能性がある。

参考文献

- 大橋泰夫 1997『下野国分寺跡II 瓦編』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
今平利幸 1997「栃木県における古墳時代前期の様相-土器を中心として-」『前方後円墳の世界II』pp.53-55 栃木県教育委員会
今平利幸 2001「下野における中世土師器皿について」『栃木県考古学会誌 第22集』pp.107-122 栃木県考古学会
田熊清彦 1990『下野国府跡IX 瓦類調査報告』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
津野仁 2006「栃木県出土の古代製塩土器について」『研究紀要 第14号』pp.1-10（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
森嶋秀一ほか 2006「栃木県域における黒色安山岩の産地に関する諸問題」『栃木県立博物館研究紀要-人文-23』pp.2-25
森嶋秀一 2006「北関東地方（茨城・栃木・群馬）の石刃石器群」『東北日本の石刃石器群』pp.244-263 東北日本の旧石器文化を語る会
吉田哲 1998『八木岡I遺跡』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
吉田哲 1999『伊勢崎II遺跡（古墳・奈良・平安時代編）』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
吉田哲・森嶋秀一 2000『伊勢崎II遺跡（旧石器・縄文・弥生時代編）』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団

付 章 自然科学分析

第1節 伊勢崎III遺跡の火山灰分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

栃木県県域平野部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、日光火山群、赤城、浅間、榛名など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や九州地方などの火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようにになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層や遺物が検出された伊勢崎III遺跡においても、地質調査を行って土層層序を記載するとともに、採取された試料を対象に火山ガラス比分析と屈折率測定を行って指標テフラの検出同定を行い、土層や遺物の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象地点は、第1～3地点である。

2. 土層の層序

(1) 第1地点

第1地点では、下位より灰褐色土（層厚28cm以上）、黄色軽石層（層厚28.8cm, VI b層）、黄色軽石に富む褐色土（層厚9cm, VI a層）、黄褐色土（層厚30cm, V層）、灰褐色土（層厚19cm, IV b層）、若干灰色がかった褐色土（層厚21cm, IV a層）、赤褐色スコリアを少量含む黄褐色土（層厚18cm, スコリアの最大径4mm, III層）、若干色調が明るい灰褐色土（層厚8cm）

灰褐色土（層厚6cm）、暗褐色土（層厚13cm, 以上II層）、黒褐色土（層厚23cm, I層）が認められる（図1）。これらのうち、黄色軽石層の最下部には、黄色砂質細粒火山灰層（層厚0.8cm）が認められる。

これらのうち、IV b層の黄色軽石層については、層相から約3.1～3.2万年前¹に赤城火山から噴出した赤城鹿沼テフラ（Ag-KP, 新井, 1962, 町田・新井, 2003）に同定される。

(2) 第2地点

石器が検出された第2地点では、下位より灰褐色土（層厚16cm以上, IV b層）、若干灰色がかった褐色土

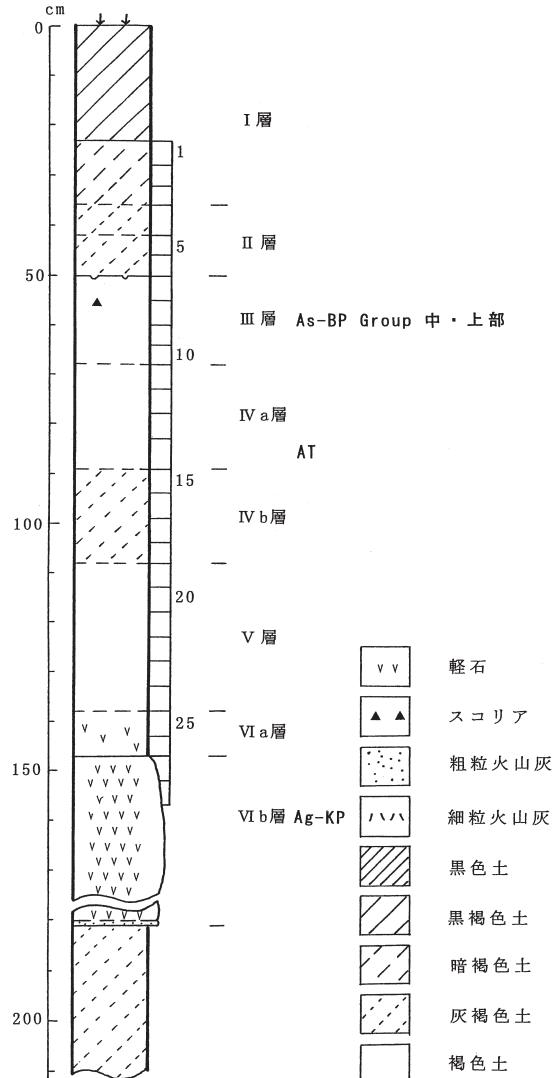


図1 第1地点の土層柱状図

数字はテフラ分析の試料番号

(層厚 19 cm, IV a 層)、黄褐色土 (層厚 14 cm, III 層)、黒褐色土 (層厚 18 cm) が認められる (図 2)。石器は、IV a 層から多く検出されている。

(3) 第3地点

埋没谷部に位置する第3地点では、下位より黄白色軽石混じり黄色土 (層厚 10 cm 以上, 軽石の最大径 2 mm)、成層したテフラ層 (層厚 8 cm)、赤褐色スコリアを多く含む暗灰褐色土 (層厚 9 cm, スコリアの最大径 7 mm)、赤褐色スコリア混じり黒色土 (層厚 22 cm、スコリアの最大径 5 mm)、黒褐色土 (層厚 29 cm)、暗褐色土 (層厚 35 cm)、特に軟らかい暗褐色土 (層厚 22 cm 以上) が認められる (図 3)。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の黄色粗粒火山灰層 (層厚 2 cm) と、上部の桃色砂質細粒火山灰層 (層厚 6 cm) からなる。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

指標テフラの層位を明らかにするために、いわゆるローム層が認められた第1地点と第2地点において、基本的に厚さ 5 cm ごとに設定採取された試料のうち、18 点を対象に火山ガラス比分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料 15g を秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°C で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4 ~ 1/8 mm の粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡化で 250 粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める。

(2) 分析結果

第1地点および第2地点の火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして、図4と図5に示す。また、火山ガラス比分析結果の内訳を表1に示す。第1地点では、試料 26 から試料 18 にかけて、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスが減少する傾向が伺える。試料 14 には、無色透明のバブル型ガラスの出現ピーク (4.0%) が認められる。さらに試料 4 には、分厚い中間型ガラスや、スポンジ状や纖維束状に発泡した軽石型ガラスの出現ピーク (6.4%) が認められる。なお、試料 10 や試料 8 では、斜方輝石や単斜輝石など mafic 鉱物が非常に多く含まれている。

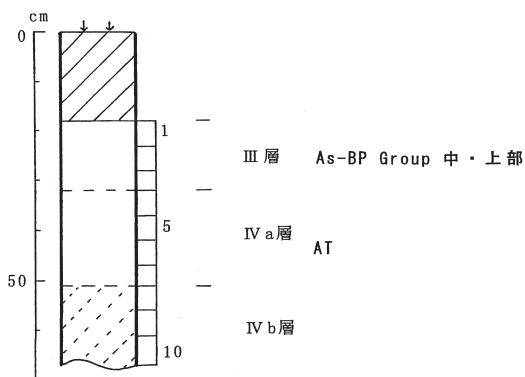


図2 第2地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

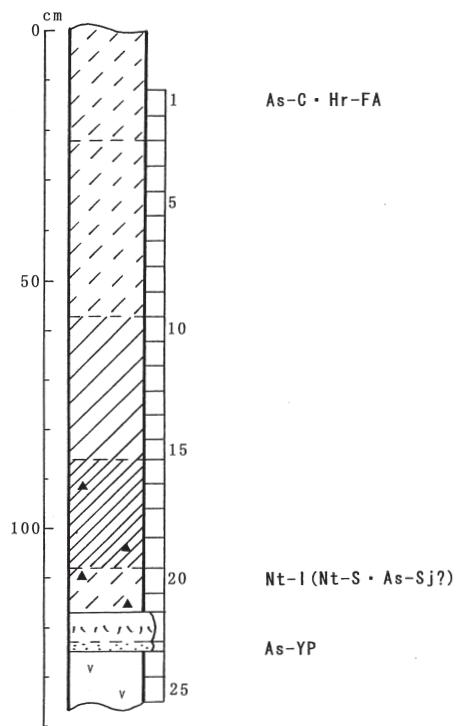


図3 第3地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

第2地点では、さほど顕著でないながらも、試料6に無色透明のバブル型ガラスの出現ピーク(2.8%)が認められる。また試料4や試料2に、斜方輝石や単斜輝石などmafic鉱物が非常に多く含まれている。

4. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

更新世末期以降の指標テフラの層位を明らかにするために、第3地点においてテフラ層ごと、または厚さ約5cmごとに設定採取された試料のうち、14点を対象にテフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実態顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表2に示す。成層したテフラ層の下部から採取された試料23には、よく発泡した黄白色軽石(最大径1.8mm)が多く含まれている。一方、上部から採取された試料22には、スポンジ状、または繊維束状に発泡した軽石型ガ

ラスが特に多く含まれている。試料21には、無色透明のほか、灰白色や白色の軽石型ガラスが認められる。試料15から試料11にかけて、含まれる火山ガラスの量は減少するものの、試料9より上位では再び火山ガラスの比率は高くなる。試料1には、スポンジ状に比較的よく発泡した灰白色軽石(最大径2.0mm)や、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径1.2mm)が比較的多く含まれている。

5. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

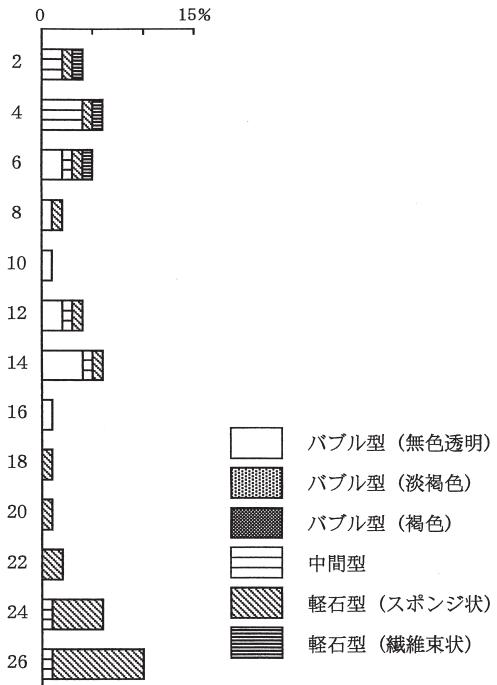


図4 第1地点の火山ガラス比ダイヤグラム

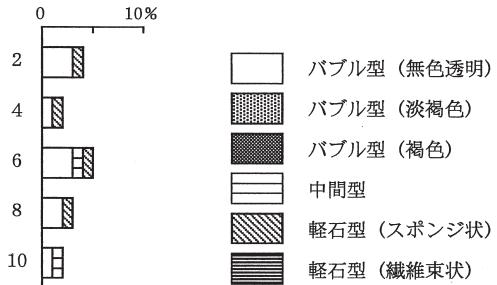


図5 第2地点の火山ガラス比ダイヤグラム

表1 火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(c1)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
第1地点	2	0	0	0	5	2	1	242	250
	4	0	0	0	11	3	2	234	250
	6	1	0	0	2	2	1	244	250
	8	1	0	0	0	1	0	248	250
	10	1	0	0	0	0	0	249	250
	12	5	0	0	3	2	0	240	250
	14	10	0	0	1	2	0	237	250
	16	2	0	0	0	0	0	248	250
	18	0	0	0	0	1	0	249	250
	20	0	0	0	0	1	0	249	250
	22	0	0	0	0	4	0	246	250
	24	0	0	0	1	12	0	237	250
	26	0	0	0	3	22	0	225	250
第2地点	2	7	0	0	0	3	0	240	250
	4	3	0	0	0	3	0	244	250
	6	7	0	0	1	3	0	239	250
	8	6	0	0	0	2	0	242	250
	10	2	0	0	1	0	0	247	250

数字は粒子数。bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状。

第1地点においてテフラの降灰層準のある可能性が考えられた試料14、試料10、試料4の3試料について、位相差法（新井, 1972など）をもとに開発された温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

（2）測定結果

屈折率の測定結果を表3に示す。試料14に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499 – 1.500である。また、試料10と試料4に含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は、各々1.702 – 1.708と1.704 – 1.710である。

6. 考察

屈折率測定の対象となった試料のうち、試料14（IVa層下部）付近に降灰層準があると推定されるテフラは、無色透明のバブル型ガラスで特徴づけられることや、その屈折率などから、約2.4~2.5万年前²に南九州の

姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT, 町田・新井, 1976, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995）と考えられる。したがって、第2地点の試料6（IVa層下部）付近に降灰層準がある無色透明のバブル型ガラスで特徴づけられるテフラについても、ATと考えられる。

試料10（III層下部）に含まれる斜方輝石については、その産状や屈折率などから、約1.9~2.4万年前²に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群（As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 早田, 未公表資料）の中・上部と思われる。試料8にも、斜方輝石や単斜輝石が多く含まれていることから、III層がAs-BP Group中・上部の降灰層準に相当すると考えられる。第2地点についても、斜方輝石や単斜輝石が多く含まれているIVa層最上部からIII層にかけて、As-BP Group中・上部の降灰層準があると考えられる。また、試料4に含まれる斜方輝石については、その屈折率から、約1.7万年前²に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石（As-Ok1, 中沢ほか, 1985, 町田・新井, 1992, 早田, 1996）などに由来する可能性が考えられる。

以上のことから、IVb層からIVa層にかけて検出された石器については、As-BP Group中・上部より下位で、AT降灰層準の下位から上位にかけての層位にあると推定される。また、検出された石器のうち、上位に層位があるものの中には、As-BP Group中・上部降灰層準付近にあるものも含まれているのかも知れない。

第3地点の成層したテフラ層については、層位や層相、さらに軽石や火山ガラスの特徴などから、約1.3~1.4万年前²に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992）と考えられる。試料21に含まれるテフラ粒子のうち、赤褐色スコリアについては、その層位や岩相などから、約1.2~1.3万年前²に男体火山から噴出した男体今市スコリア（Nt-I, 原田, 1943, 町田・新井, 1992など）と考えられる。さらに同試料に含まれる白色や灰白色の軽石型ガラスについては、その特徴から男体七本桜軽石

表2 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス	
		量	色調	最大径	量	形態
第3地点	1	++	灰白, 白	2.0, 1.2	++	pm
	3	-	-	-	+	pm>bw
	5	-	-	-	++	pm>bw
	7	-	-	-	++	pm>bw
	9	-	-	-	++	pm, bw
	11	-	-	-	+	pm, bw
	13	-	-	-	+	bw, pm
	14	-	-	-	+	bw, pm
	15	-	-	-	+	bw, pm
	17	-	-	-	++	pm>bw
	19	-	-	-	++	pm>bw
	21	-	-	-	++	pm>bw
	22	-	-	-	++++	pm
	23	+++	黄白	1.8	++	pm
	25	-	-	-	++	pm
						白

++++: とくに多い、 +++: 多い、 ++: 中程度、 +: 少ない、 -: 認められない。最大径の単位は、mm. bw: バブル型、 pm: 軽石型。

表3 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)
第1地点	4	-	1.704~1.710
	10	-	1.702~1.708
	14	1.499~1.500	-

温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）による。

– 120 –

(Nt-S, 原田, 1943, 町田・新井, 1992 など) や、約 1.1 万年前² に浅間火山から噴出した浅間総社軽石 (As-Sj, 早田, 1990, 1991, 1996) に由来する可能性が指摘されよう。

さらに試料 1 に含まれるスポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石と、さほど発泡が良くない白色軽石については、その岩相から、各々 3 世紀終末～4 世紀初頭に浅間火山から噴出した浅間 C 軽石 (As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000) と、6 世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名ニッ岳渋川テフラ (Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992) に由来すると考えられる。

7.まとめ

伊勢崎III遺跡において、地質調査、火山ガラス比分析、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より赤城鹿沼テフラ (Ag-KP, 約 3.1 ～ 3.2 万年前)、始良 Tn 火山灰 (AT, 約 2.4 ～ 2.5 万年前²)、浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約 1.9 ～ 2.4 万年前²) の中・上部、浅間大窪沢第 1 軽石 (As-Ok1, 約 1.7 万年前²)、浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 約 1.3 ～ 1.4 万年前²)、男体今市スコリア (Nt-I, 約 1.2 ～ 1.3 万年前²)、浅間 C 軽石 (As-C, 3 世紀終末～4 世紀初頭)、榛名ニッ岳渋川テフラ (Hr-FA, 6 世紀初頭) などのテフラ層やそれらに由来するテフラ粒子を検出できた。本遺跡で検出された石器 (IV b ～ IV a 層) の多くについては、As-BP Group 中・上部より下位で、AT 降灰層準前後の層位にあると考えられる。

*1 約 4.5 万年前以前とする説もある (町田・新井, 2003).

*2 放射性炭素 (¹⁴C) 年代.

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no. 157, p.41-52.
- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65 p.
- 原田正夫 (1943) 関東ローム層の生成について. 東大土肥教室報告, 3, p.1-140.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州, 始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法による ¹⁴C 年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良 Tn 火山灰の発見とその意義-. 科学, 46, p. 339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276 p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336 p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良 Tn 火山灰 (AT) の ¹⁴C 年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ピストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討-タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の ¹⁴C 年代. 地質雑, 99, p. 787-798.
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒斑～前掛期のテフラ層序. 第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.
- 坂口 一 (1986) 榛名ニッ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p. 103-119.
- 早田 勉 (1989) 6 世紀における榛名火山の 2 回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.
- 早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土. 群馬県史通史編, 1, p.37-129.
- 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p. 2-7.
- 早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第 1 テフラより上位のテフラについて-. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告, 7, p.256-267.
- 友廣哲也 (1988) 古式土師器出現期の様相と浅間山 C 軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.
- 若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く-古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

第2節 伊勢崎III遺跡出土石器の石材肉眼鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

伊勢崎III遺跡は鬼怒川と五行川に限られた宝積寺台地上に立地する。これまでの発掘調査により旧石器時代や縄文時代などの石器類が多量出土している。

今回の自然科学分析調査では、本遺跡から出土した旧石器時代の石器・礫、縄文時代の石器、古代の石製品などを対象として、石材の肉眼鑑定を行う。本報告では石質に関する資料を作成すると共に、周辺地質との比較から産地についても検討する。

1. 試料

鑑定の対象は、旧石器時代 595 点、縄文時代 26 点および古代 4 点の計 625 点の試料である。旧石器時代の石器は、器種別にはナイフ形石器 4 点、台形様石器 1 点、彫刻刀形石器 1 点、尖頭器 1 点、スクレイパー 3 点、抉入石器 1 点、二次加工のある剥片 22 点、微細剥離痕のある剥片 2 点、敲石 1 点、剥片 118 点、石刃 1 点、碎片 40 点、石核 14 点および礫 386 点となっている。縄文時代の石器は、石鏃 5 点、石鏃未成品 2 点、スクレイパー 1 点、二次加工ある剥片 2 点、分銅形打製石斧 2 点、磨石 10 点、磨石？ 1 点、敲石 1 点、石皿 1 点および不明 1 点である。古代の石製品は、砥石 2 点、カマド支脚 1 点およびカマド袖石 1 点である。

2. 分析方法

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。個々の石材のより正確な岩石名は、薄片作製観察、X線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができるが、今回は肉眼鑑定のみに留めるため、鑑定された岩石名は概査的な岩石名であることに留意されたい。

3. 結果

岩石名	器種	石鏃	石鏃未成品	スクレイパー	二次加工ある剥片	分銅形打製石斧	磨石	磨石？	敲石	石皿	不明	合計
												1
火山岩類												
多孔質安山岩								1		1		2
多孔質輝石安山岩						1	4					5
輝石安山岩						1	6					7
堆積岩類												
頁岩	1			2						1	4	
チャート	4	2	1									7
鉱物												
脈石英								1				1
合計	5	2	1	2	2	10	1	1	1	1	1	26

表4 器種別石器組成（旧石器時代）

岩石名	器種	ナイフ形石器	台形様石器	彫刻刀形石器	尖頭器	スクレイパー	抉入石器	二次加工ある剥片	微細剥離痕ある剥片	敲石	剥片	石刃	碎片	石核	礫	合計
深成岩類																
黒雲母角閃石花崗閃綠岩															5	5
半深成岩類																
石英斑岩															14	14
花崗斑岩															1	1
黒雲母角閃石花崗斑岩															1	1
黒雲母角閃石花崗閃綠斑岩															2	2
火山岩類																
黒曜石		1		1				1		3		6				12
流紋岩															15	15
デイサイト									1						11	12
輝石デイサイト															2	2
多孔質輝石デイサイト															1	1
安山岩															7	7
無斑晶ガラス質安山岩		1					2		69		11	12				95
無斑晶質安山岩															1	1
多孔質安山岩															6	6
多孔質輝石安山岩															2	2
緻密質安山岩															2	2
輝石安山岩															50	50
石英含有輝石安山岩															1	1
火山碎屑岩類																
火山礫凝灰岩															5	5
デイサイト質火山礫凝灰岩															1	1
流紋岩質溶結火山礫凝灰岩															1	1
デイサイト質溶結凝灰岩															19	19
流紋岩質凝灰岩															33	33
デイサイト質凝灰岩															82	82
流紋岩質溶結凝灰岩															19	19
堆積岩類																
礫岩															1	1
礫質砂岩															4	4
砂岩											1				39	40
頁岩		2	1	1	2		6	1	18		3	1	15		50	
珪質頁岩					1	1	2		10		7				21	
チャート							8		7	1	9				44	69
変成岩類																
董青石ホルンフェルス										1						1
カタクラサイト										2						2
変質岩類																
珪化凝灰岩								1		1						2
珪化岩															2	2
鉱物																
玉髓								3		6		3	1		13	
瑪瑙												1				1
合計		4	1	1	1	3	1	22	2	1	118	1	40	14	386	595

岩類として董青石ホルンフェルス 1 点およびカタクラサイト 2 点、変質岩類として珪化凝灰岩 2 点、および、鉱物として玉髓 13 点および瑪瑙 1 点と鑑定された。一方、礫は、深成岩類として黒雲母角閃石花崗閃綠岩 5 点、半深成岩類として石英斑岩 14 点、花崗斑岩 1 点、黒雲母角閃石花崗斑岩 1 点および黒雲母角閃石花崗閃綠斑岩 2 点、火山岩類として黒曜石 12 点、流紋岩 15 点、デイサイト 12 点、輝石デイサイト 2 点、多孔質輝石デイサイト 1 点、安山岩 7 点、無斑晶ガラス質安山岩 95 点、無斑晶質安山岩 1 点、多孔質安山岩 6 点、多孔質輝石安山岩 2 点、緻密質安山岩 2 点、輝石安山岩 50 点および石英含有輝石安山岩 1 点、火山碎屑岩類として火山礫凝灰岩 5 点、デイサイト質火山礫凝灰岩 1 点、流紋岩質溶結火山礫凝灰岩 1 点、デイサイト質溶結凝灰岩 19 点、流紋岩質凝灰岩 33 点、デイサイト質凝灰岩 82 点および流紋岩質溶結凝灰岩 19 点、堆積岩類として礫岩 1 点、礫質砂岩 4 点、砂岩 40 点、頁岩 50 点、珪質頁岩 21 点およびチャート 69 点、变成岩類として董青石ホルンフェルス 1 点およびカタクラサイト 2 点、変質岩類として珪化凝灰岩 2 点および珪化岩 2 点、および、鉱物として玉髓 13 点および瑪瑙 1 点という礫種組成となっている。礫種組成については、円グラフとして図 1 に示す。図に示されるように凝灰岩類が最も多く、チャート、頁岩、砂岩といった堆積岩類や安山岩類が主要な構成岩類となっている。

縄文時代の石器は、火山岩類として多孔質安山岩 2 点、多孔質輝石安山岩 5 点および輝石安山岩 7 点、堆積岩類として頁岩 4 点およびチャート 7 点、および、鉱物として脈石英 1 点となっている。

古代の石製品は、火山岩類として輝石デイサイト 1 点および輝石角閃石安山岩 1 点、および、堆積岩類として礫岩 1 点および頁岩 1 点と鑑定された。

4. 考察

伊勢崎Ⅲ遺跡が立地する台地は後期更新世の砂礫層や段丘礫層などから構成されている。遺跡周辺における段丘礫や河床礫などの礫の供給源としては大河川である鬼怒川の上流域の地質が想定される。

鬼怒川は栃木県と福島県の県境にある帝釈山地を源流として広大な流域面積を示すため、その水系には各種の地質が分布する。鬼怒川上流域の基盤は足尾帯に属するジュラ紀堆積岩コンプレックスであり、硬質の砂岩、頁岩、チャートなどから構成される。これらは後期白亜紀～古第三紀の花崗岩類に貫かれており、鬼怒川支流の大谷川上流においては花崗岩類と同時代の奥日光流紋岩類と呼ばれる流紋岩 - デイサイト質火碎岩に覆われている。鬼怒川本流域において、足尾帯および花崗岩類は、さらに前期中新世～鮮新世のデイサイト - 流紋岩質火碎岩によって覆われている。花崗岩類および前期中新世～鮮新世のデイサイト - 流紋岩質火碎

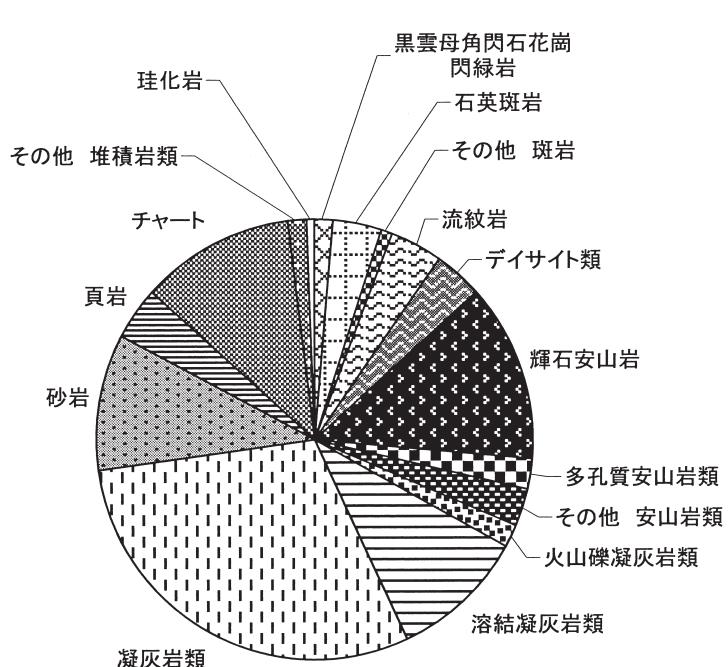


図 1 磫種組成 (旧石器時代)

岩には、中新世の流紋岩およびデイサイト-流紋岩岩脈が各所に貫入している。第四紀火山も流域に数多く存在し、男体火山、女峰赤薙火山などの日光火山群や、高原火山といった玄武岩-デイサイト溶岩・火碎岩などを構成岩石とする火山が点在している。

このような地質背景を踏まえ、以下では出土石材の産地について検討する。旧石器時代の礫、旧石器時代の石器、縄文時代の石器および古代の石製品の順に述べる。なお、地質に関する記述は、日本の地質「関東地方」編集委員会（1986）および山元ほか（2000）を参考としている。

（1）旧石器時代の礫

旧石器時代の礫は、上述の鬼怒川水系の地質と整合する礫種組成となっている。

花崗閃緑岩、花崗斑岩、花崗閃緑斑岩といった深成岩・半深成岩類に属する花崗岩質岩は、鬼怒川上流部の後期白亜紀～古第三紀の花崗岩体に由来する石材である。石英斑岩は、石英斑晶を多含する硬質岩であり、奥日光流紋岩類に由来する石材である。

火山岩類の流紋岩類、デイサイト類、安山岩類は、鬼怒川上流域の主要構成岩類であり、新第三紀中新世から第四紀に至る地質に由来するものである。安山岩類の多くは未変質で新鮮なものが多く、大部分は第四紀火山に由来していると考えることができる。

火山碎屑岩類は、デイサイト～流紋岩質なものが多く、その由来から大きく2種に大別される。一つは堅硬緻密質で古い時代の地質である奥日光流紋岩類に由来するもので（表1の備考に「古期」と記したもの）、もう一つは新鮮で一部に溶結組織が認められる後期中新世以降の地質に由来すると思われるものである（表1の備考に「新第三紀」または「鮮新世？」と記したもの）。鬼怒川下流域において採取されやすい石材は、耐磨耗性のある奥日光流紋岩類に由来するものであり、出土礫にも多量に認められている。

堆積岩類は、足尾帯に由来する砂岩、頁岩、チャートといった硬質岩が主体となっている。ただし、砂岩および頁岩の一部には、新第三紀以降の地質に起源すると考えられる軟質岩も認められている。

変質岩としては珪化岩が2点だけ含まれている。岩相からは火山岩の珪化岩とみられ、中新統の地質に伴う石材と推定される。

以上のように、礫の種類は、鬼怒川水系の地質に含まれる岩石構成から説明が可能である。したがって、鬼怒川由来の碎屑物から主に構成されると考えられる遺跡周辺の第四紀の堆積物や、遺跡より近い江川の河床礫などが利用されたと推測することができる。

（2）旧石器時代の石器

旧石器時代の石器の種類は表4に示されるように数種類に留まる。黒曜石、無斑晶ガラス質安山岩、頁岩質頁岩、チャート、玉髓などが主要な材料となっている。

黒曜石はナイフ形石器、彫刻刀形石器、剥片、碎片などとして出土している。栃木県下における黒曜石の産地としては、高原山がよく知られているが、肉眼による産地の判定は困難であるため、成分分析等を併用した検討が必要である。

無斑晶ガラス質安山岩は、剥片として多量に認められるほか、ナイフ形石器、碎片、石核などとしても出土している。出土した無斑晶ガラス質安山岩は、風化面の表皮が褐灰色を示し、象の肌状を呈するが、破断面は黒灰色でガラス質である。径2mm以下程度の輝石斑晶を1%以下で含み、径2mm以下の孔隙が5%以下程度で散在する。安山岩としては比重がやや大きく、玄武岩質な可能性が考えられる。無斑晶ガラス質安

山岩の産地としては、関東地域において、群馬県の武尊山、群馬-長野県境の八風山・荒船山、千葉県銚子半島などが知られている。黒曜石と同様に成分分析を含めた検討を要する。なお、無斑晶ガラス質安山岩とした石材は、考古学で用いられる黒色安山岩（須藤, 1995 など）とほぼ同質のものである。

頁岩は、ナイフ形石器、台形様石器、尖頭器、スクレイパー、剥片、碎片、石核などに利用されている。大部分は足尾帯由来の硬質頁岩と判断されるが、一部、新第三系にみられる岩相を示すものも認められる。いずれも鬼怒川の地質に由来する在地性の石材と考えられる。

珪質頁岩は、スクレイパー、抉入石器、剥片、碎片などとして出土している。頁岩と同様に新第三系および足尾帯に由来するものが大部分であるとみられる。1点のみ出土している抉入石器には、表皮に凝灰質な碎屑片が膠着しており、中新統の凝灰岩などに含まれるマッドボールと類似した特徴を有する。その他、珪質頁岩の剥片の一部には、珪酸分が多く良質で、褐色を呈するものが認められている。それらは山形県米沢市に産する珪質頁岩と類似した岩相を示しており、このような地域からの搬入の可能性が疑われる資料といえる。

チャートは、石刃、剥片、碎片などとして認められる。チャートは、礫としても多く出土している在地性石材の代表的なものである。ごく近隣の地域から入手された石材と考えることができる。

玉髓は、剥片、碎片、石核などとして出土している。玉髓は、微小な石英の網目状集合体である。碎片として1点だけ出土している瑪瑙も同様な玉髓から構成されるが、縞状組織を有することで区別されている。玉髓や瑪瑙の近隣の産地としては、茨城県久慈郡大子町～常陸大宮市の北富田地域などが知られており、このような地域から持ち込まれた可能性も考えられる。しかし、玉髓は一般に流紋岩などの酸性火山岩に細脈や孔隙充填物として産出することが多いため、流紋岩類が少なからず分布する鬼怒川流域に由来する可能性も考慮しておく必要がある。

その他の石材としては、デイサイト、董青石ホルンフェルス、カタクラサイト、珪化凝灰岩などが認められるが、いずれも鬼怒川水系の地質に由来する在地性の石材とみなされる。

(3) 縄文時代の石器

縄文時代の石器としては、安山岩類、頁岩、チャートおよび脈石英が出土している。

安山岩類は分銅形打製石斧、磨石、石皿などとして利用されている。第四紀火山に由来するとみられる新鮮な岩相を呈していることから、鬼怒川水系の地質に由来する在地性の石材が用いられていると考えられる。

頁岩およびチャートは、石鏃、石鏃未製品、スクレイパー、2次加工のある剥片などとして利用されている。いずれも、足尾帯に由来する代表的な在地性石材である。

脈石英は、敲石として利用されている。脈石英は、各種の地質に細脈として産出する石英である。鬼怒川由来の礫からも容易に採取できるため、在地性の礫が利用されたものと考えられる。

(4) 古代の石製品

古代の石製品は、頁岩および輝石デイサイトが砥石として、輝石角閃石安山岩がカマド支脚として、礫岩がカマド袖石として使用されている。いずれも、鬼怒川河床礫などから採取できる石材である。輝石デイサイトは、比較的産出の稀な石材ではあるが、旧石器時代の礫としても数点出土していることから、鬼怒川水系の地質に由来する石材と考えることができる。

5.まとめ

伊勢崎Ⅲ遺跡からは、旧石器時代、縄文時代および古代というおよそ3つの時代に跨った石材が出土している。旧石器時代の礫は、386点と大量に出土しており、鬼怒川水系の地質と整合する礫種であることが確認された。おそらくは、遺跡周辺の第四紀堆積物中の礫や、江川河床礫などが利用されたものと推測できる。一方、旧石器時代の石器は頁岩、チャートなどの在地性の石材も多く使用されているが、鬼怒川中下流域の礫には含まれない黒曜石、無斑晶ガラス質安山岩といった遠方から搬入されたとみることができる石材も多く認められている。

これに対し、縄文時代の石器には安山岩類、頁岩、チャートといった代表的な在地性石材ばかりが使用されるという傾向が認められる。古代の石製品については、出土数は少ないが、砥石やカマドに関連する石材にはほぼ在地で採取できる石材が利用されている。

引用文献

- 日本の地質「関東地方」編集委員会, 1986, 日本の地質3「関東地方」, 共立出版, p.335.
須藤隆司, 1995, 八風山黒色安山岩原産地遺跡. 第3回岩宿フォーラムシンポジウム, 石器石材 予稿集, 岩宿文化資料館, 28-31.
山元孝広・滝沢文教・高橋 浩・久保和也・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久, 2000, 20万分の1地質図幅「日光」, 地質調査所.

※「表1・2・3」については、それぞれ第3章の旧石器属性表・遺構外出土石器一覧表・出土遺物観察表に岩石名と備考を記載し、ここでは割愛した。

第3節 伊勢崎Ⅲ遺跡出土黒曜石・黒色安山岩の産地同定分析

株式会社 第四紀 地質研究所

はじめに

黒曜石は地質学においてはガラス質火山岩と呼ばれ、本質は非晶質の自然ガラスであり、一般的な工業用ガラスと物性は異なる。

古代人にとっての黒曜石やサヌカイト（ガラス質安山岩）は人工的に精練されて製作された鋭利な鉄器や青銅器のない時代の鋭利な刃物を容易に製作できる材質として位置づけられ、尖頭器、ナイフ形石器、石鎌、搔器、剥器、細石刃など多種の使用目的に利用される石材である。

考古学分野における黒曜石研究では、黒曜石の原産地調査、肉眼的な岩相分類、石材としての適性などを対象として原産地黒曜石を研究してきた。（原産地とは黒曜石が採取される産地のこと、産状は特定しない。産状としては黒曜石岩体、礫層中の礫、岩体や礫層中の礫が洗い出されて沢や河床に堆積しているもの一転石がある。）この原産地黒曜石の研究と併行して遺跡出土の黒曜石遺物の研究が行われ、原産地黒曜石との肉眼観察による岩相的対比により原産地を特定し、遺跡に至る黒曜石のルートの解明や、流通機構などについての研究が行われてきた。黒曜石はガラスであるため、個々の原石に際立った特徴がなく、肉眼的な岩相区分にとつてはこの点が限界となる。（岩相とは岩石学的な面でとらえた特徴）言い換えれば、原産地の黒曜石の岩相区分による分類では遺跡出土遺物がどの原産地の黒曜石であるのか判別ができないものが出てくることになる。

このような岩相区分の難しさと肉眼観察の限界に対する危機意識から、物理的に数値化された機器分析による分析への要望が分析分野に対してなされた。分析分野と言っても、化学分野の分析と地質学分野の分析は各々その対象とするものに対する考え方方が異なることから、元素を中心とする化学分野での分析と酸化物濃度による岩石学的な分類をする地質学分野とでは基本的な考え方方に違いがある。この分析対象への考え方の違いは、考古学者の間で、初期の段階では余りよく理解されていなかった。

本節では、地質学分野の岩石学的な分析法と分類法で黒曜石とガラス質安山岩を分類し、本手法が安山岩から流紋岩に至る SiO_2 量の広い領域でも、流紋岩領域のうち黒曜石が対象となる SiO_2 量の狭い領域でも適応できることを示し、各原石の酸化物濃度での標準化を行い、組成領域を確定した。この標準化により、遺跡出土黒曜石遺物と原産地黒曜石の同定が容易となり、考古学分野の研究者に共有できるデータとして寄与できることを示した。

1. 実験条件

化学分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製 J S X-3200）で行なった。この分析装置は標準試料を必要としないファンダメンタルパラメータ法（F P法）による自動定量計算システムが採用されており、6 C～92 Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大 30 k V、4 mA）の採用で微量試料～最大 290 mm² × 80 mm Hまでの大型試料の測定が可能である。小型試料では 16 試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はバルク F P法で行った。F P法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

分析にあたっては、試料をX線照射範囲が約 15 mm²の試料台に直接のせ分析した。実験条件はバルク F P

法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝R h、加速電圧＝30 kV、管電流＝自動制御、分析時間＝200秒（有効分析時間）である。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素である。

2. 結果の取り扱い

分析値は試料の含水量＝0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量%は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量%では小数点以下3～4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

岩石の化学組成を構成する主要元素と微量元素の中から、岩石の骨格となるSiとAl、有色鉱物の主要元素であるFe, Ca、無色鉱物の主要元素であるNaとKの関連からK、副成分鉱物のイルメナイトからFeとTi、微量元素ではRbとSrの各元素組み合わせにより黒曜石を分類する図を作成した。基本的には主要元素の各元素が重複しない組み合わせとしたが、Fe, Mn, Tiは鉄質関連として相関性の高い元素であり、TiはFeとMnの2元素との対比となっている。主要元素と微量元素の酸化物濃度（重量%）で $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$, $\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{TiO}_2$, $\text{K}_2\text{O} - \text{CaO}$ の各相関図、Rb-Srは積分強度の相関図の4組の組み合わせで図を作成した。

3. 化学分析結果

第1表の化学分析表には黒曜石とガラス質安山岩（黒色安山岩）の分析結果と原産地対比を記載した。黒色安山岩と呼ばれているものは地質学的に言うとガラス質安山岩であり、ここではガラス質安山岩と呼称した。黒曜石は図-1.1～4.2の各元素相関図に示し、ガラス質安山岩は図-5.1～8.2の各元素相関図に示した。

4. まとめ

黒曜石は図-2.2の $\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{TiO}_2$ 図、図-3.2の $\text{K}_2\text{O} - \text{CaO}$ 図にみられるように伊勢崎III-3と9の遺物は高原山起源の黒曜石と判断される。伊勢崎III-14は高原山産で、被熱していると考えられるので高原山？とした。伊勢崎III-2は和田峠系-2の星ヶ塔である。伊勢崎III-1, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 15は被熱しているために K_2O の値が高く、原産地の判別は難しいが Fe_2O_3 の分布状況と対比すると和田峠系-2（星ヶ塔、男女倉-5）に近いものではないかと推察される。

ガラス質安山岩は図-5.1・2の $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ 図では SiO_2 が61～64%で君津系の領域に近い。図-6.1・2の $\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{TiO}_2$ 図では君津系の領域にある。図-7.1・2の $\text{K}_2\text{O} - \text{CaO}$ 図ではどの原産地の領域とも合致せず、ガラス質安山岩の栃木県、群馬県、千葉県の標準試料と比較しても該当するものもなく、栃木県内の未知の原石があるのかもしれない。

引用文献

- 井上 嶽 (2000) 東北・北陸北部における原産地黒曜石の蛍光X線分析 (XRF) 北越考古学、第11号、23-38/
 井上 嶽 (2001) テフラ中の火山ガラスの同定に関する一提言、軽石学雑誌、第7号 23-51.
 井上 嶽 (2001) 平成13年度姿川・武子川流域のガラス質安山岩の蛍光X線分析報告書
 井上 嶽 (2008) 東北日本の原産地黒曜石データ集 関東・中部・東海編
 上野修一・二宮修二・網干 守・大沢真澄 (1986) 石器時代の本県域における黒曜石の利用について、栃木県立博物館紀要、第3号、91-115.

第1表 化学分析表

試料名	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	Rb2O	SrO	Y2O3	ZrO2	Total	Rb	Sr	種類	原産地
伊勢崎 III - 1	4.225	0.353	13.171	73.463	1.030	5.576	0.829	0.198	0.067	1.026	0.028	0.003	0.008	0.022	100.000	2076	232	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 2	4.250	0.000	11.925	77.082	0.359	5.000	0.452	0.088	0.085	0.710	0.027	0.000	0.009	0.014	100.000	2104	0	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 3	4.087	0.231	11.840	75.440	0.882	3.637	1.540	0.243	0.000	2.050	0.011	0.008	0.005	0.027	100.000	778	560	黒曜石	星ヶ塔
伊勢崎 III - 4	3.341	0.134	11.246	77.587	0.870	5.144	0.531	0.255	0.041	0.809	0.020	0.005	0.006	0.014	100.000	1474	367	黒曜石	高原山
伊勢崎 III - 5	2.317	0.000	11.380	75.188	0.433	7.864	0.594	1.069	0.068	1.033	0.032	0.000	0.004	0.020	100.000	2017	0	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 6	3.954	0.199	11.886	76.793	0.536	5.090	0.533	0.136	0.060	0.778	0.017	0.003	0.005	0.009	100.000	1433	243	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 7	3.711	0.000	11.668	76.834	0.534	5.700	0.596	0.089	0.062	0.779	0.014	0.000	0.005	0.009	100.000	1072	0	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 8	3.859	0.013	12.302	76.004	0.684	5.271	0.633	0.181	0.054	0.947	0.019	0.003	0.009	0.023	100.000	1412	235	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 9	4.103	0.162	11.565	76.227	0.836	3.478	1.454	0.231	0.001	1.879	0.013	0.013	0.008	0.030	100.000	884	877	黒曜石	高原山
伊勢崎 III - 10	3.769	0.082	12.831	75.532	0.969	5.086	0.596	0.136	0.055	0.905	0.018	0.002	0.005	0.014	100.000	1435	127	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 11	3.579	0.201	14.544	73.192	0.962	5.458	0.710	0.196	0.052	1.062	0.020	0.003	0.004	0.018	100.000	1442	186	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 12	4.306	0.101	12.104	75.758	0.799	5.304	0.584	0.123	0.053	0.827	0.021	0.004	0.002	0.014	100.000	1658	299	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 13	3.385	0.055	12.399	75.901	0.318	6.150	0.560	0.129	0.057	0.978	0.036	0.000	0.016	0.017	100.000	2385	0	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 14	3.645	0.093	11.675	76.869	0.274	3.809	1.458	0.236	0.011	1.870	0.012	0.012	0.007	0.030	100.000	817	773	黒曜石	高原山?
伊勢崎 III - 15	3.808	0.036	11.868	77.019	0.627	5.063	0.538	0.115	0.059	0.833	0.017	0.002	0.005	0.008	100.000	1427	184	黒曜石	和田岬系・被熱
伊勢崎 III - 16	4.032	1.531	15.021	61.170	0.759	1.934	6.301	0.978	0.000	8.215	0.002	0.025	0.006	0.027	100.000	109	1134	黒色安山岩	原産地不明
伊勢崎 III - 17	4.013	1.172	14.830	62.253	0.860	1.835	6.042	0.945	0.000	7.989	0.001	0.033	0.001	0.020	100.000	457	1500	黒色安山岩	原産地不明
伊勢崎 III - 18	3.744	1.519	14.998	62.882	0.442	1.756	5.952	0.911	0.000	7.744	0.001	0.029	0.003	0.020	100.000	38	1397	黒色安山岩	原産地不明
伊勢崎 III - 19	3.858	1.409	15.159	62.575	0.285	1.750	6.065	0.959	0.000	7.893	0.002	0.026	0.003	0.018	100.000	78	1141	黒色安山岩	原産地不明
伊勢崎 III - 20	3.886	1.451	14.940	63.169	0.409	1.791	5.747	0.911	0.000	7.640	0.004	0.028	0.005	0.019	100.000	218	1333	黒色安山岩	原産地不明
伊勢崎 III - 21	3.692	1.600	15.032	62.821	0.449	1.775	5.833	0.965	0.000	7.787	0.007	0.022	0.000	0.017	100.000	320	1027	黒色安山岩	原産地不明
伊勢崎 III - 22	3.795	1.378	14.974	62.769	0.377	1.875	5.805	0.970	0.000	8.002	0.008	0.021	0.003	0.023	100.000	384	959	黒色安山岩	原産地不明
伊勢崎 III - 23	3.590	1.314	15.106	62.135	0.752	1.870	6.619	0.983	0.000	7.582	0.007	0.023	0.001	0.019	100.000	279	949	黒色安山岩	原産地不明
伊勢崎 III - 24	3.528	1.416	14.848	63.546	0.337	1.807	5.713	0.889	0.000	7.859	0.003	0.026	0.006	0.021	100.000	148	1161	黒色安山岩	原産地不明

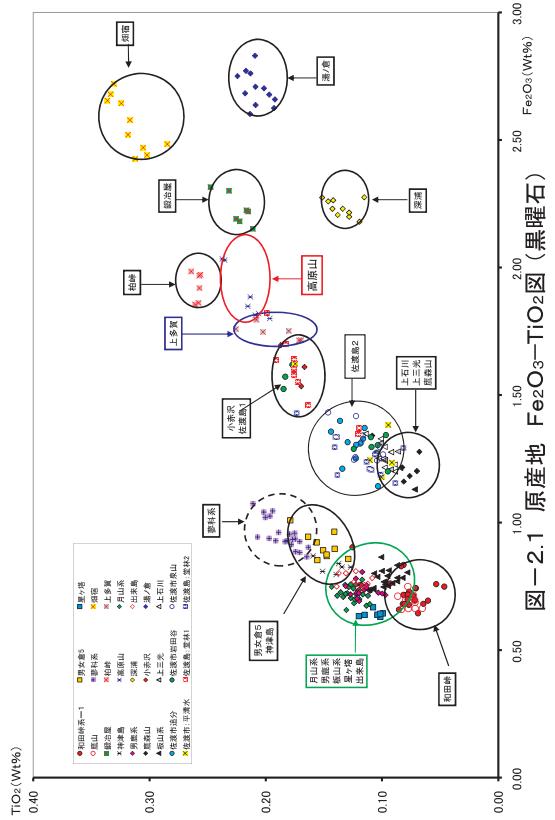


図-2.1 原产地 $Fe_2O_3-TiO_2$ (黒曜石)

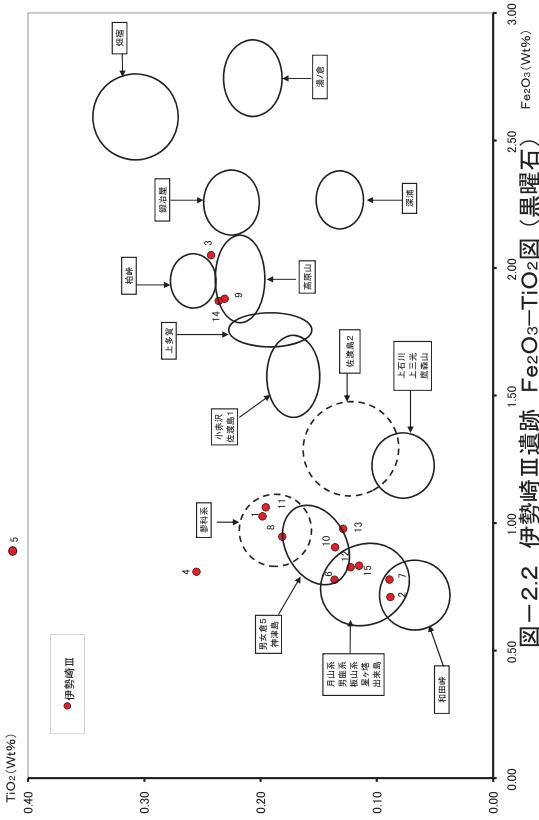


図-2.2 伊勢崎III遺跡 $Fe_2O_3-TiO_2$ (黒曜石)

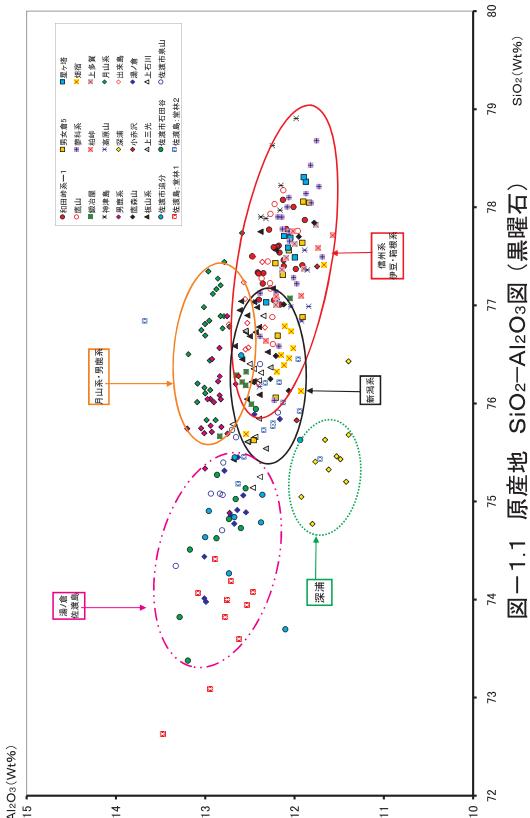


図-1.1 原产地 $SiO_2-Al_2O_3$ (黒曜石)

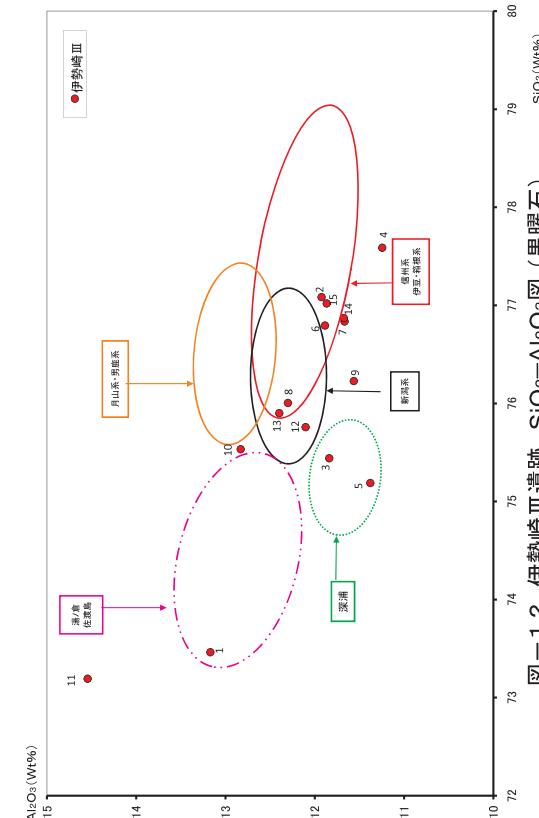


図-1.2 伊勢崎III遺跡 $SiO_2-Al_2O_3$ (黒曜石)

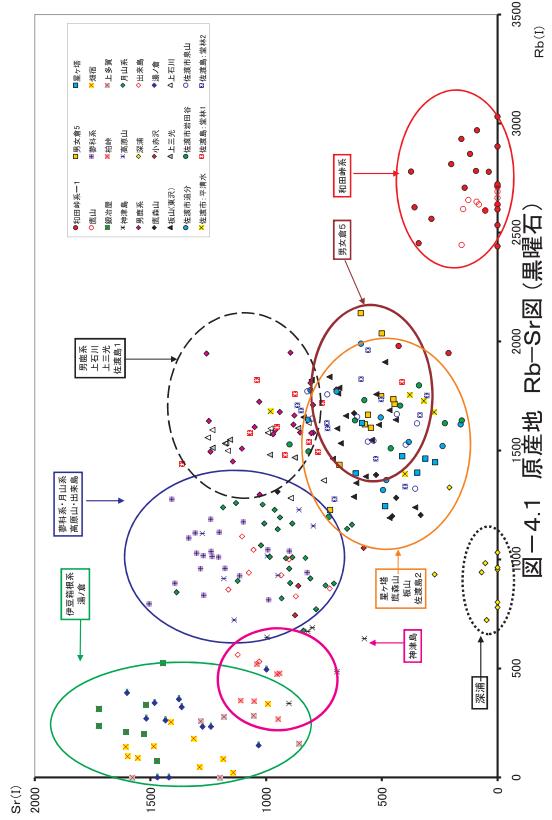


図-4.1 原产地 Rb-Sr図 (黒曜石)

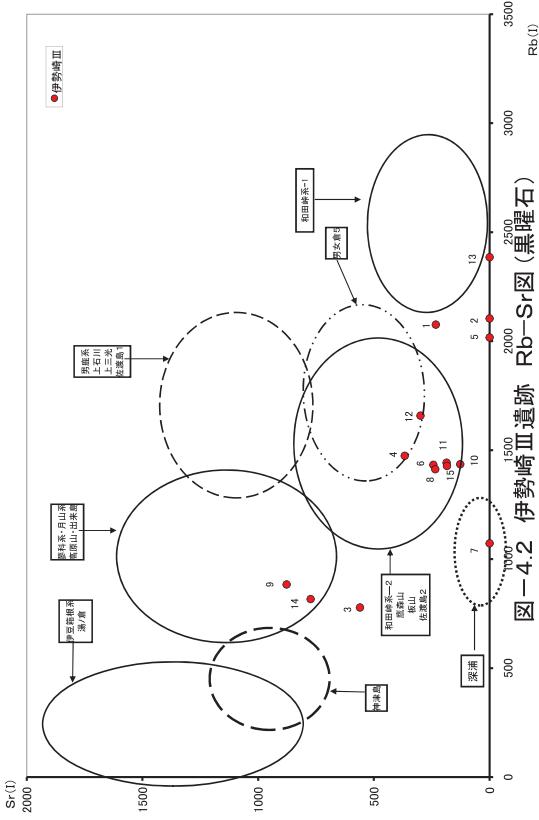


図-4.2 伊勢崎III遺跡 Rb-Sr図 (黒曜石)

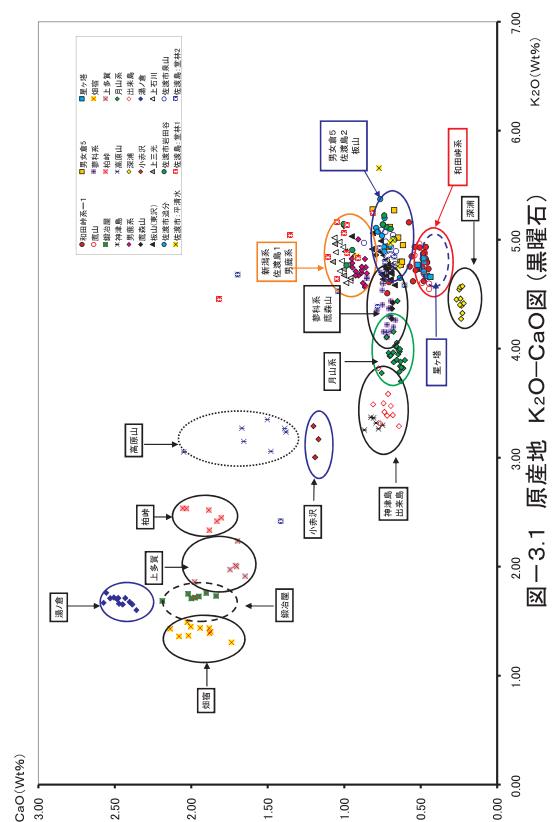


図-3.1 原产地 K₂O-CaO図 (黒曜石)

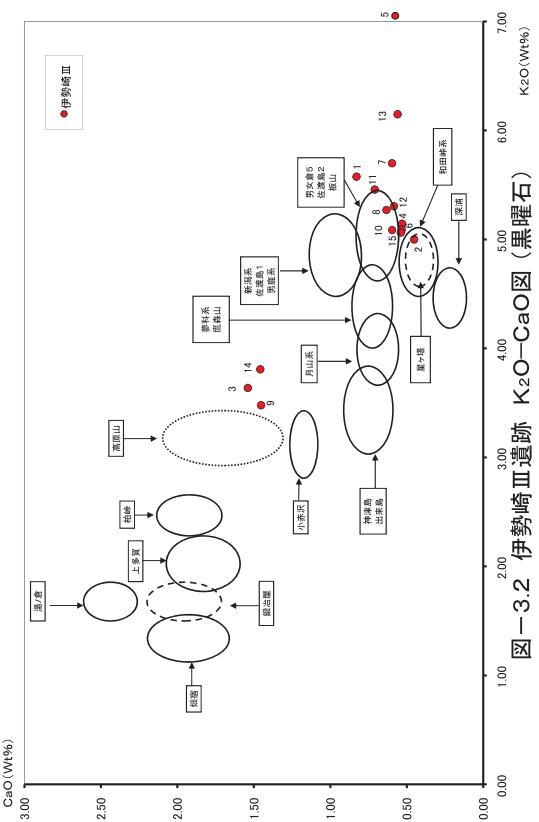


図-3.2 伊勢崎III遺跡 K₂O-CaO図 (黒曜石)

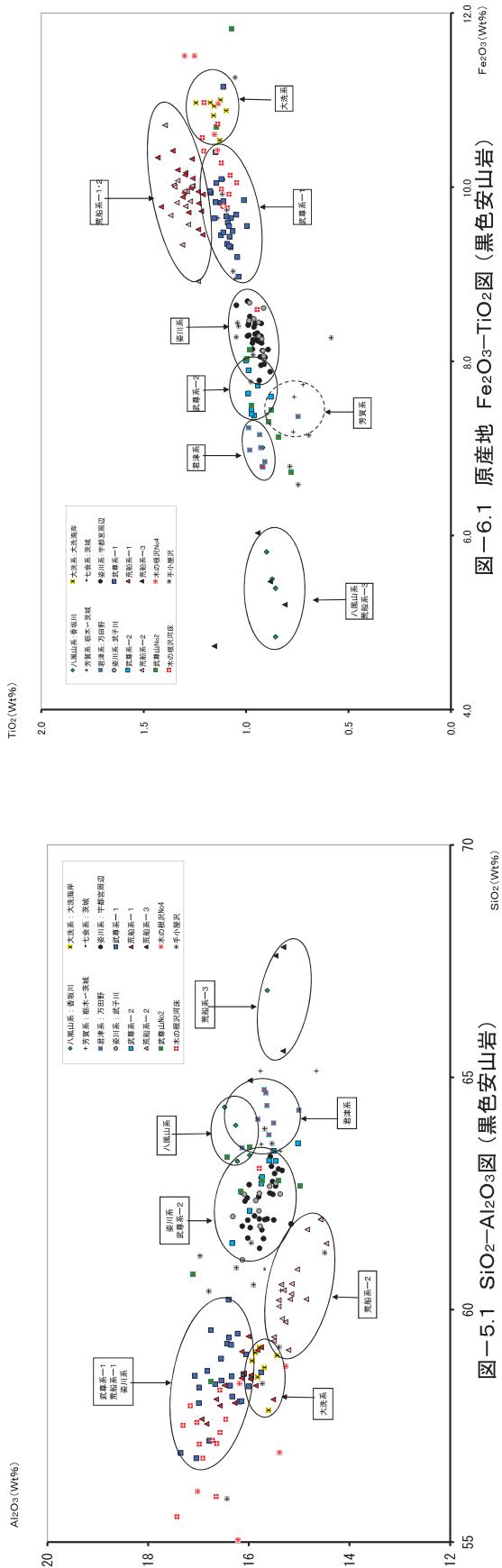


図-5.1 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 図 (黒色安山岩)

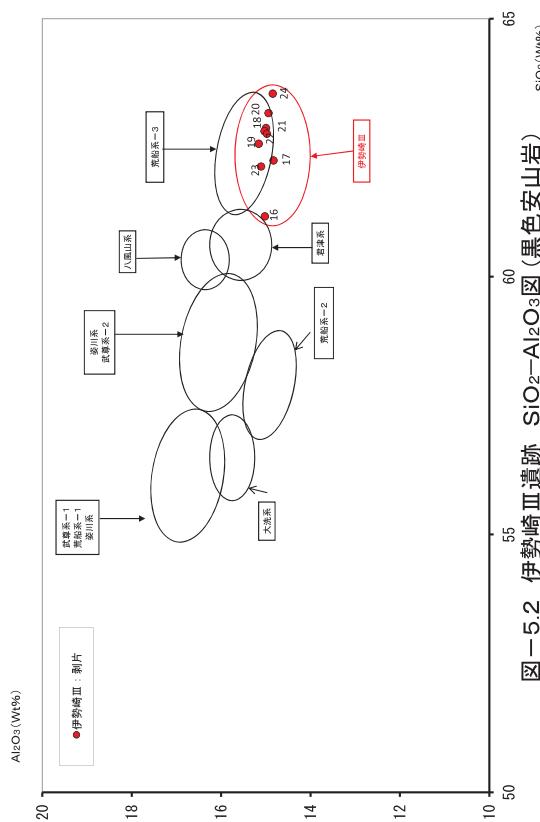


図-5.2 伊勢崎III遺跡 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 図 (黒色安山岩)

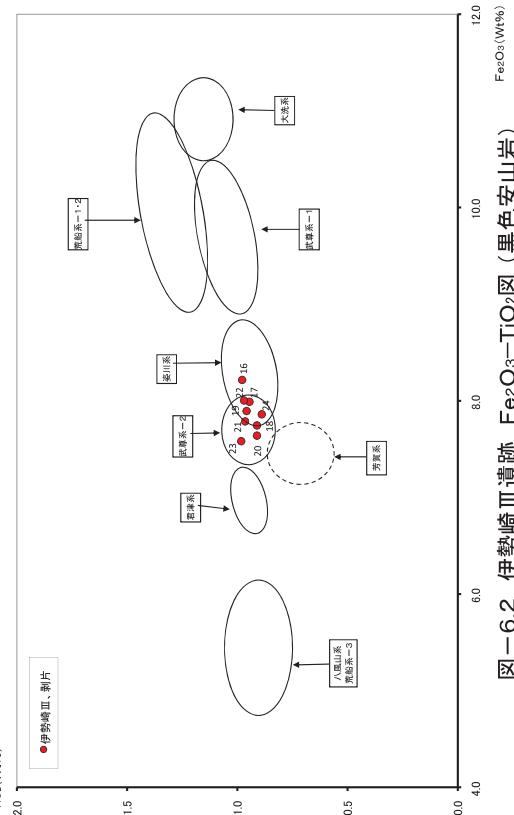


図-6.1 原产地 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 図 (黒色安山岩)

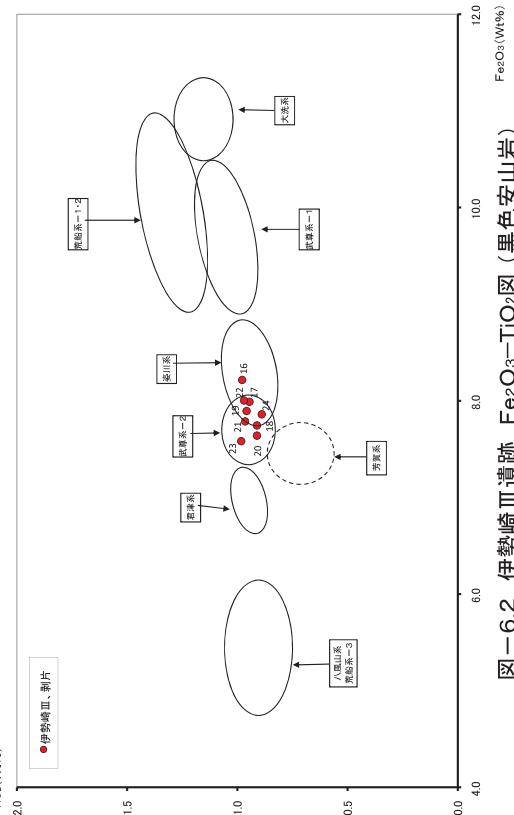


図-6.2 伊勢崎III遺跡 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-TiO}_2$ 図 (黒色安山岩)

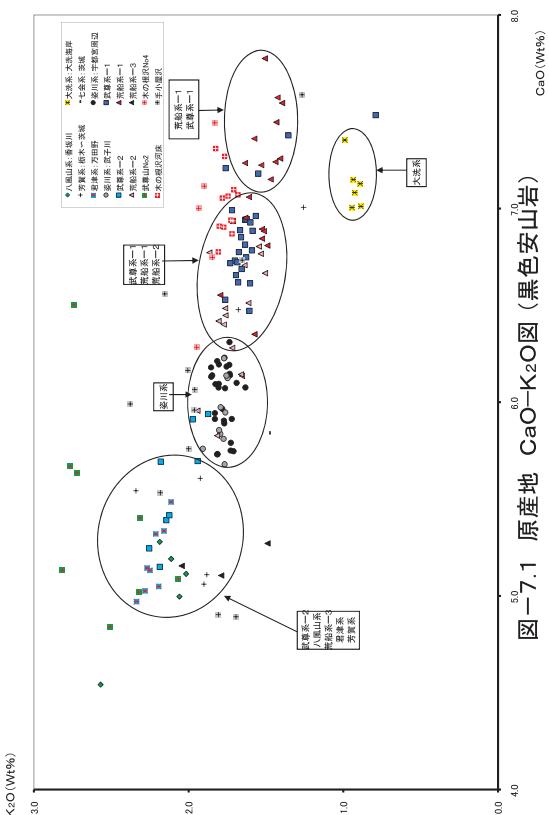


図-7.1 原产地 $\text{CaO}-\text{K}_2\text{O}$ 図 (黒色安山岩)

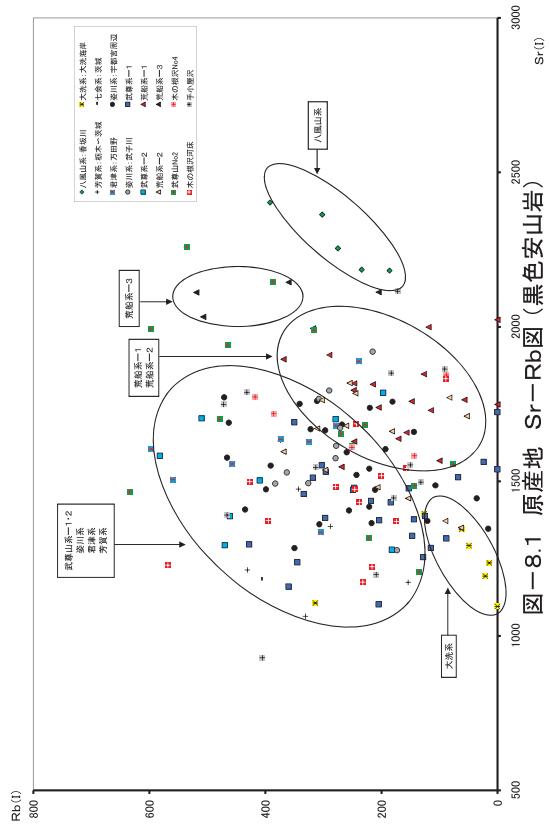


図-8.1 原产地 $\text{Sr}-\text{Rb}$ 図 (黒色安山岩)

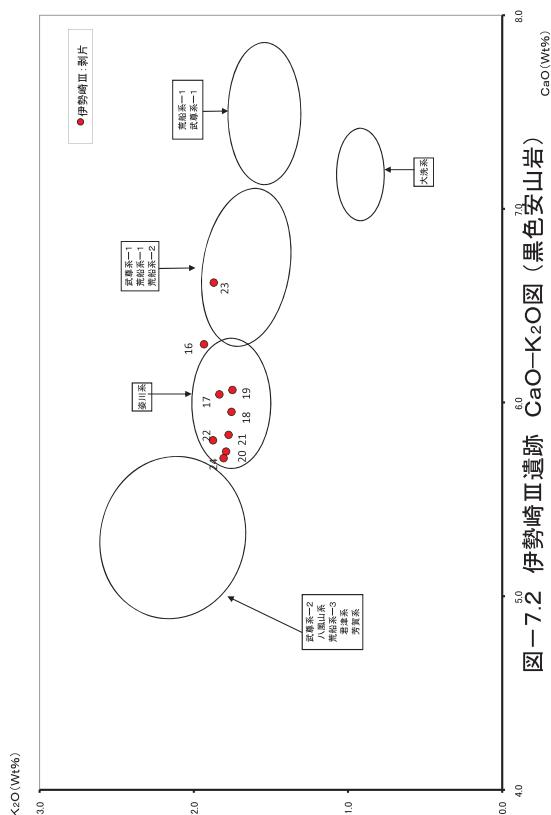


図-7.2 伊勢崎III遺跡 $\text{CaO}-\text{K}_2\text{O}$ 図 (黒色安山岩)

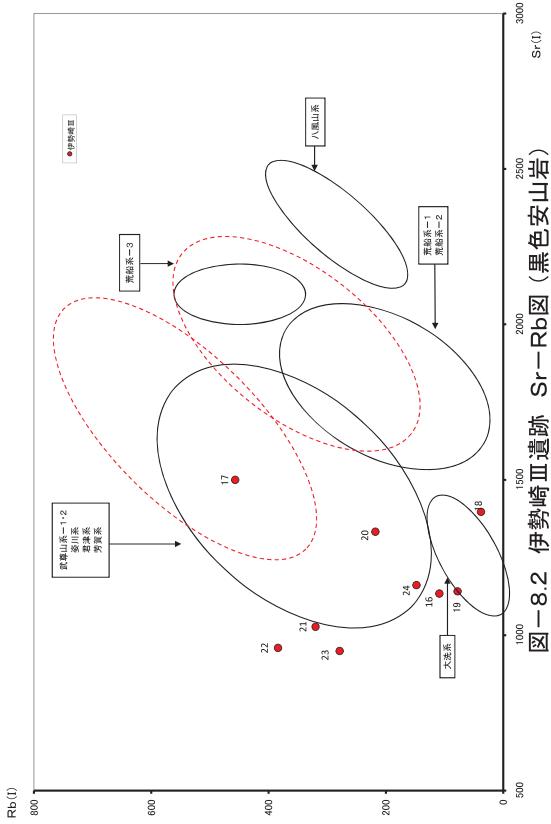


図-8.2 伊勢崎III遺跡 $\text{Sr}-\text{Rb}$ 図 (黒色安山岩)

写 真 図 版



柳林遺跡(仮称) 現況(南から)



柳林遺跡(仮称) トレンチ1(南西から)



柳林遺跡(仮称) トレンチ1セクション(南から)



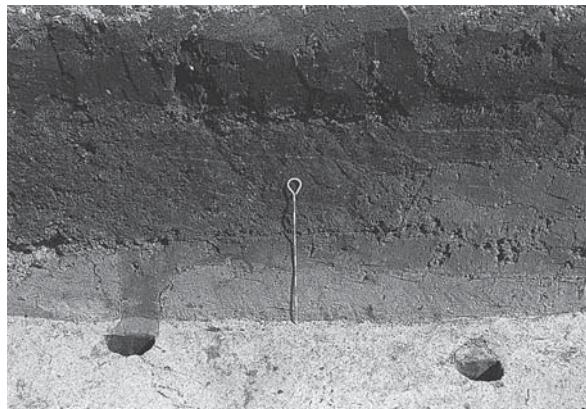
柳林遺跡(仮称) トレンチ7作業風景(北東から)



山王遺跡 トレンチ1(北東から)



山王遺跡 トレンチ1セクション(東から)



山王遺跡 トレンチ5小穴半截(西から)



山王遺跡 トレンチ4作業風景(南西から)

図版一
確認調査・遺構



原北遺跡 トレンチ 1 (南から)



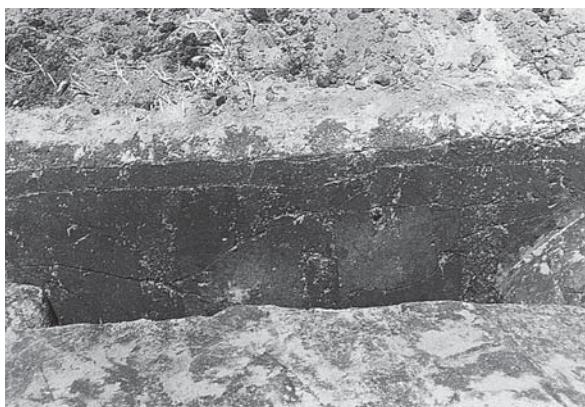
原北遺跡 トレンチ 3 セクション (南から)



原北遺跡 トレンチ 4 作業風景 (南から)



原北遺跡 SD-01・02 確認状況 (西から)



原北遺跡 SD-01 セクション (西から)



原北遺跡 SD-02 セクション (西から)



原北遺跡 SD-01・02 完掘 (東から)



原北遺跡 SD-01・02 完掘 (南西から)



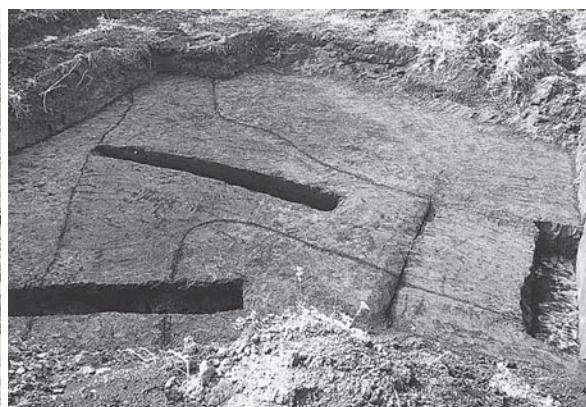
茅堤北遺跡 トレンチ1（西から）



茅堤北遺跡 トレンチ5セクション（南西から）



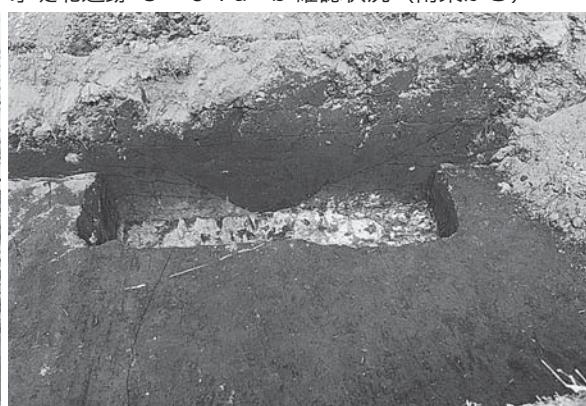
茅堤北遺跡 トレンチ5作業風景（南東から）



茅堤北遺跡 S-01a・b 確認状況（南東から）



茅堤北遺跡 S-01 Bセクション（東から）



茅堤北遺跡 S-01 Dセクション（西から）



茅堤北遺跡 S-01 Fセクション（南から）

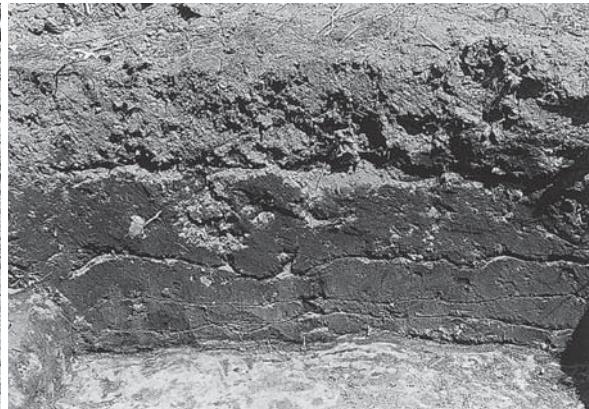


茅堤北遺跡 S-01 Gセクション（西から）

図版四
確認調査



伊勢崎IV遺跡 トレンチ1（南東から）



伊勢崎IV遺跡 トレンチ1セクション（南西から）



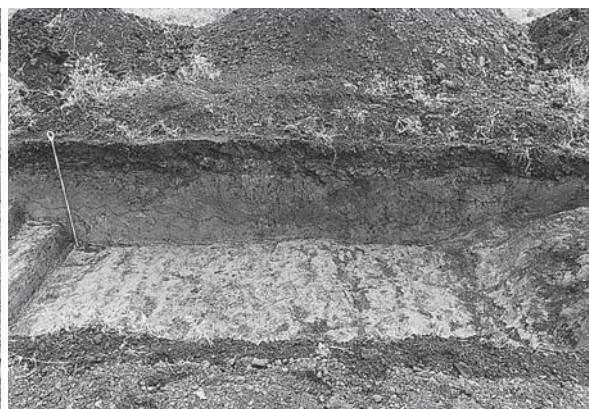
伊勢崎IV遺跡 トレンチ1・2・3（東から）



伊勢崎IV遺跡 トレンチ4作業風景（南東から）



伊勢崎III遺跡 トレンチ3（西から）



伊勢崎III遺跡 トレンチ3セクション（南西から）



伊勢崎III遺跡 トレンチ5（南西から）



伊勢崎III遺跡 トレンチ2・3・4実測作業（北東から）



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区 現況（北西から）



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区 全景（北西から）



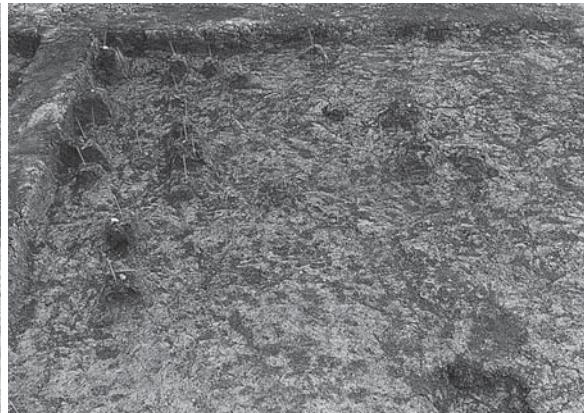
伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Aグリッドセクション（南から）



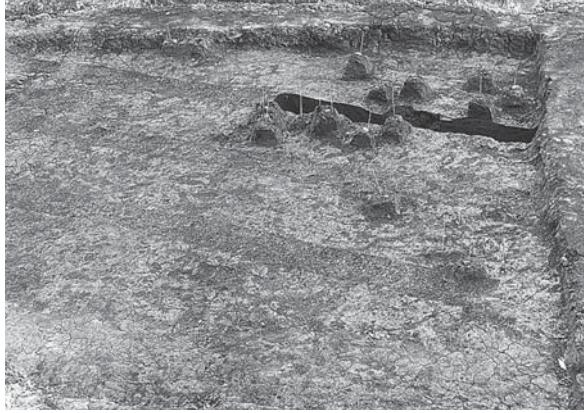
伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Aグリッド（南から）



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Bグリッド（南から）



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Bグリッド東部（南から）



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Bグリッド西部（南から）



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区Cグリッド（北西から）



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区A-58 グリッド(西から)



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区A グリッド作業風景(南西から)



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区A-58 グリッド(東から)



伊勢崎III遺跡 旧石器調査区A グリッド写真撮影(北西から)



伊勢崎III遺跡 No.225 旧石器出土状況(東から)



伊勢崎III遺跡 No.19 旧石器出土状況(南から)



伊勢崎III遺跡 No.22 旧石器出土状況(南から)



伊勢崎III遺跡 No.118 旧石器出土状況(南から)



伊勢崎III遺跡 A区 全景（北西から）



伊勢崎III遺跡 B区北部 全景（東から）



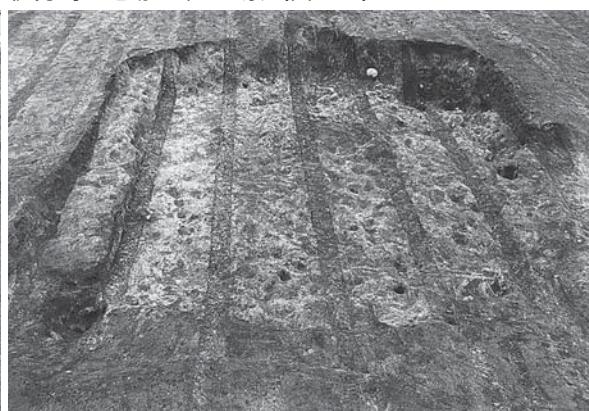
伊勢崎III遺跡 B区南部 全景（東から）



伊勢崎III遺跡 C区 全景（西から）



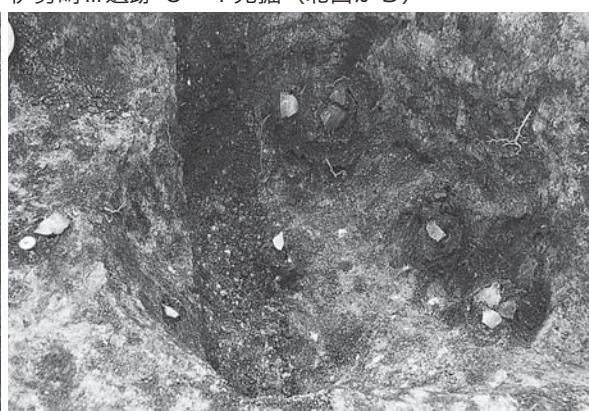
伊勢崎III遺跡 S-1セクション（南西から）



伊勢崎III遺跡 S-1完掘（北西から）



伊勢崎III遺跡 S-1竈遺物出土状況（北西から）



伊勢崎III遺跡 S-1貯蔵穴遺物出土状況（北西から）



伊勢崎III遺跡 S-2セクション（南西から）



伊勢崎III遺跡 S-2遺物出土状況（南西から）



伊勢崎III遺跡 S-2竪遺物出土状況（南西から）



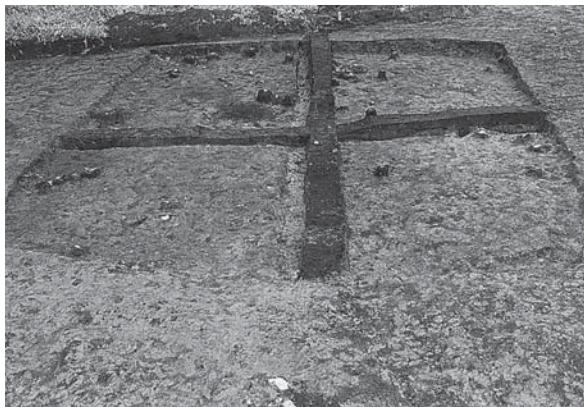
伊勢崎III遺跡 S-2掘方完掘（南西から）



伊勢崎III遺跡 S-2竪掘方完掘（南から）



伊勢崎III遺跡 S-2 P1完掘（南西から）



伊勢崎III遺跡 S-30セクション（東から）



伊勢崎III遺跡 S-30遺物出土状況（北から）



伊勢崎III遺跡 S-30 挖方完掘（南から）



伊勢崎III遺跡 S-30 P4 完掘（南から）



伊勢崎III遺跡 S-32 遺物出土状況（西から）



伊勢崎III遺跡 S-32 作業風景（西から）



伊勢崎III遺跡 S-32 No.21 女瓦出土状況（西から）



伊勢崎III遺跡 S-32 第一・第二東竈完掘（南西から）



伊勢崎III遺跡 S-32 第二東竈完掘（北西から）



伊勢崎III遺跡 S-32 第一東竈掘方完掘（西から）



伊勢崎III遺跡 S-32 掘方完掘（西から）



伊勢崎III遺跡 S-32 第二東竈脇 棚状施設（西から）



伊勢崎III遺跡 S-21 完掘（南から）



伊勢崎III遺跡 S-25 完掘（西から）



伊勢崎III遺跡 S-36 セクション（北から）



伊勢崎III遺跡 S-4・5・6・8・9 完掘（東から）



伊勢崎III遺跡 S-4 Cセクション（西から）



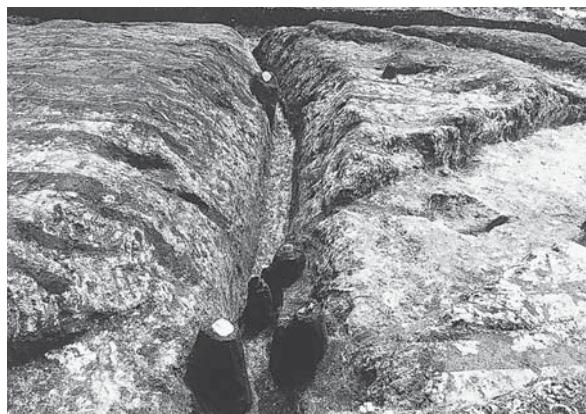
伊勢崎III遺跡 S-4 Dセクション（南から）



伊勢崎III遺跡 S-4 完掘（東から）



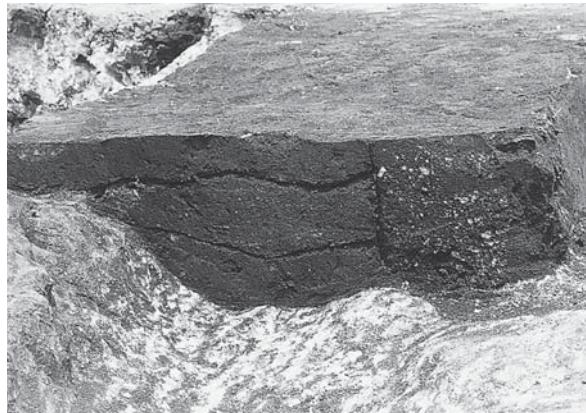
伊勢崎III遺跡 S-5・6 Gセクション（南から）



伊勢崎III遺跡 S-5 完掘（北東から）



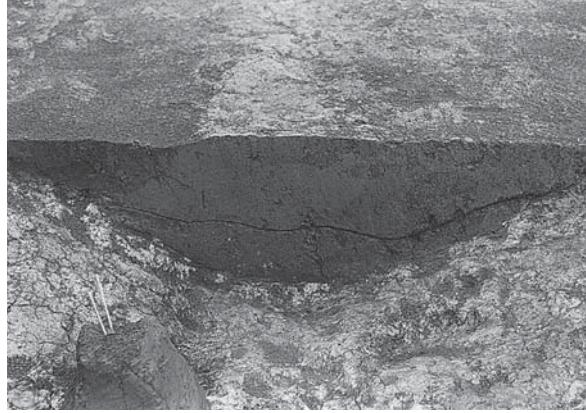
伊勢崎III遺跡 S-6・8 Jセクション（東から）



伊勢崎III遺跡 S-8 Mセクション（南から）



伊勢崎III遺跡 S-9 完掘（北西から）



伊勢崎III遺跡 S-26 Cセクション（西から）



伊勢崎III遺跡 S-26 完掘（北西から）



伊勢崎III遺跡 S-27 Cセクション（南から）



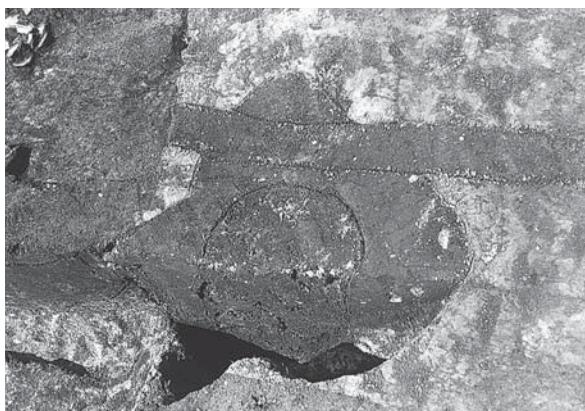
伊勢崎III遺跡 S-27 完掘（北西から）



伊勢崎III遺跡 S-31 Aセクション（北東から）



伊勢崎III遺跡 S-31 完掘（西から）



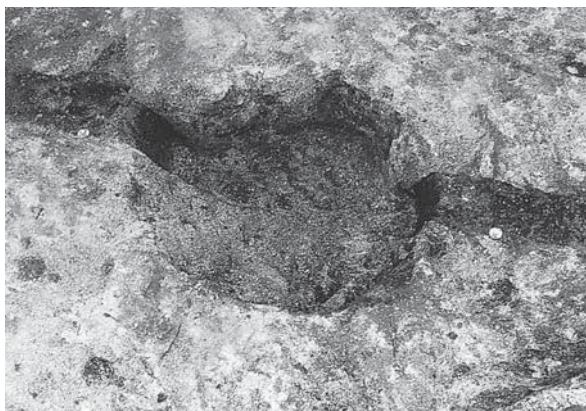
伊勢崎III遺跡 S-10・11・12 セクション（南から）



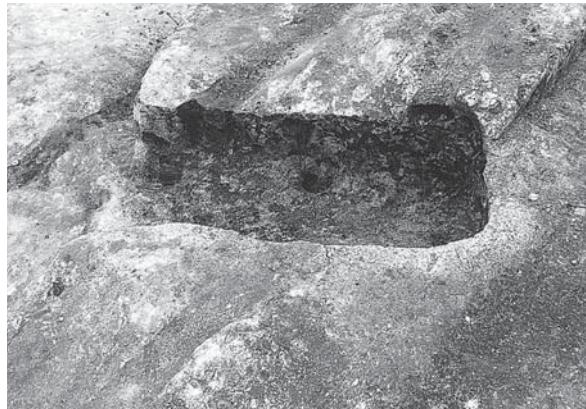
伊勢崎III遺跡 S-10・11・12・13 完掘（西から）



伊勢崎III遺跡 S-14 完掘（北から）



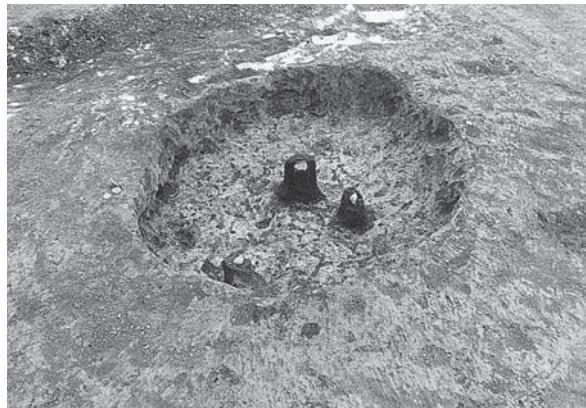
伊勢崎III遺跡 S-15 完掘（南から）



伊勢崎III遺跡 S-16 完掘（東から）



伊勢崎III遺跡 S-33 遺物出土状況（南から）



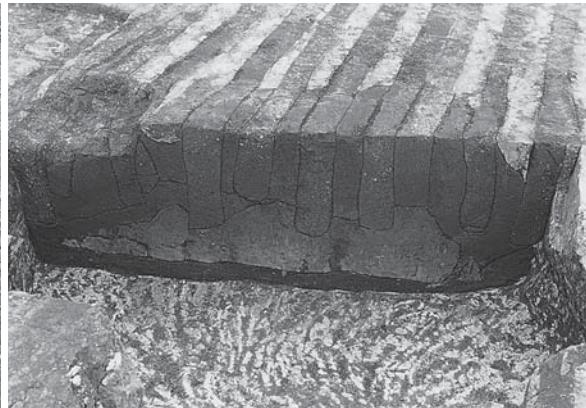
伊勢崎III遺跡 S-34 遺物出土状況（南から）



伊勢崎III遺跡 S-35 遺物出土状況（南から）



伊勢崎III遺跡 S-28 Aセクション（東から）



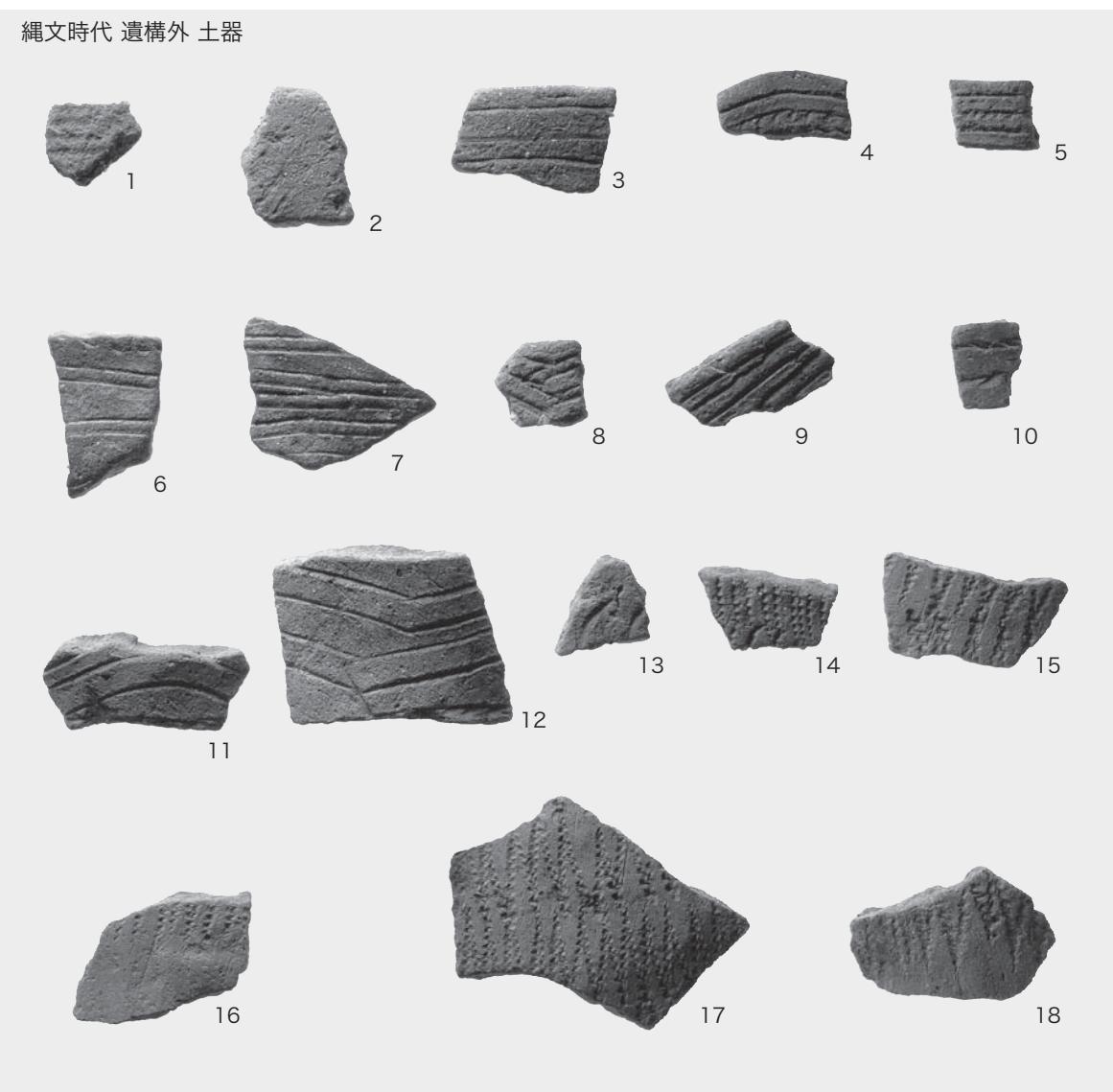
伊勢崎III遺跡 S-28 Bセクション（南から）

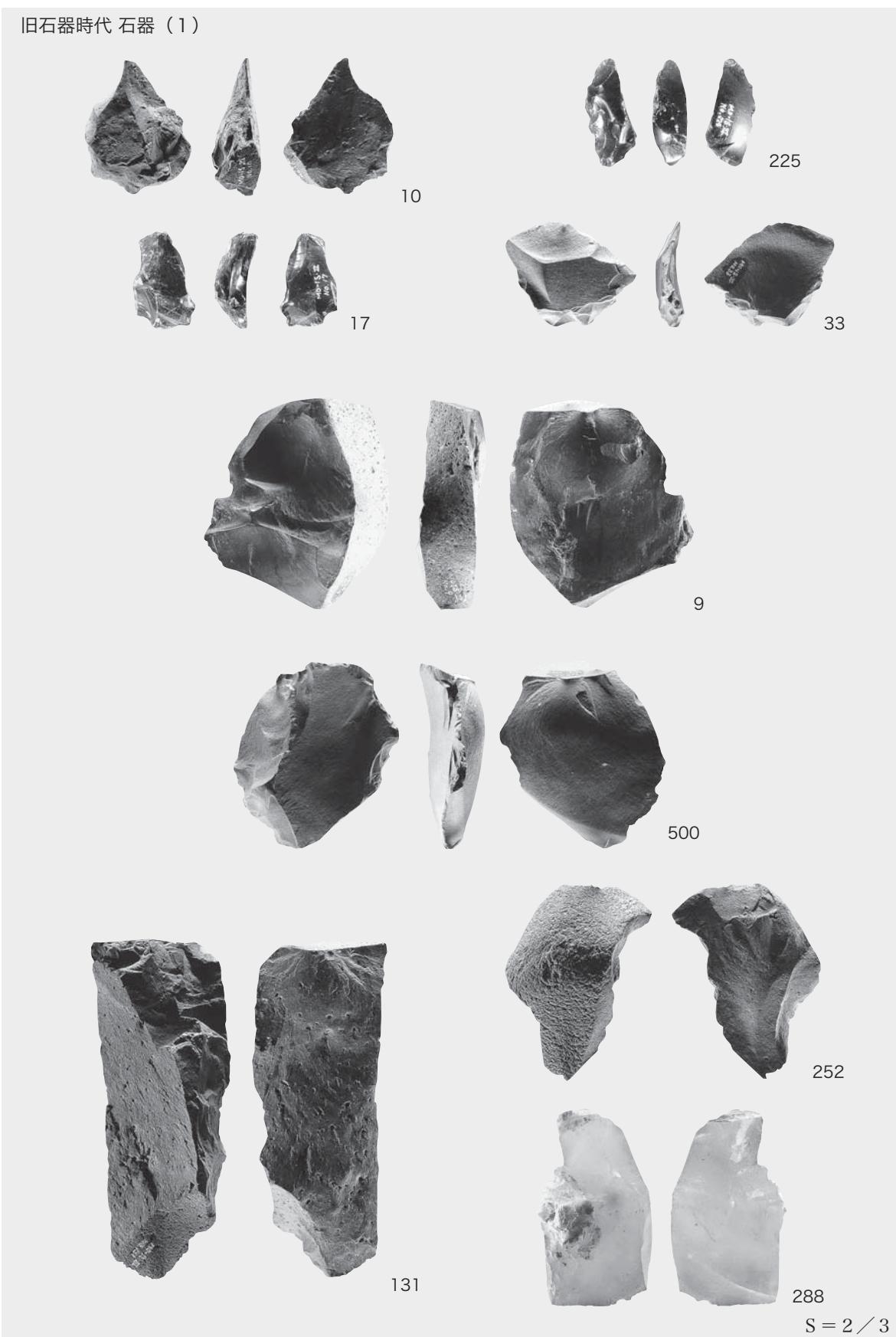


伊勢崎III遺跡 S-28 天井部崩落状況（南東から）

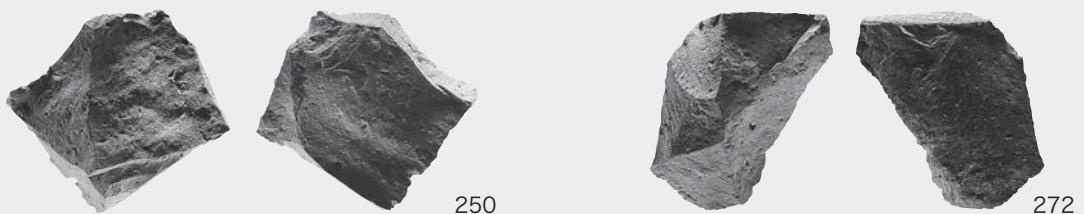
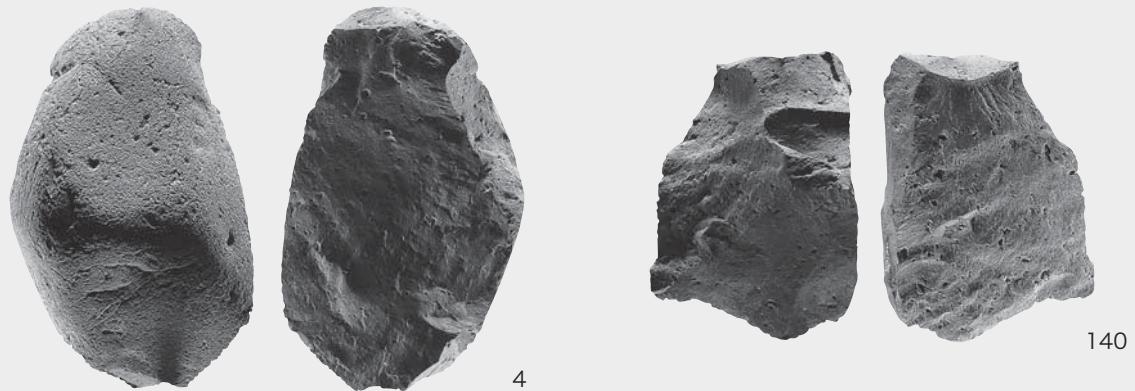
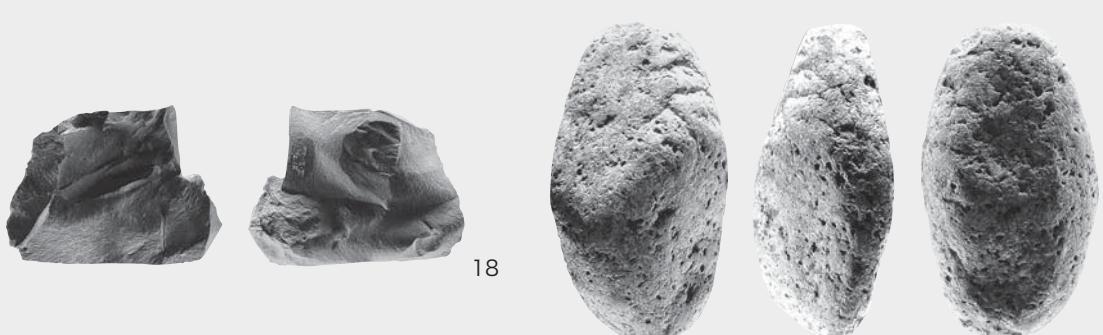


伊勢崎III遺跡 S-28 完掘（南から）





旧石器時代 石器（2）



S = 2 / 3

旧石器時代 石器 (3)



324



350



396



397



519



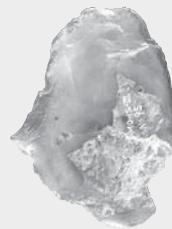
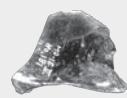
525



439



181



95



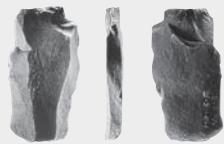
118



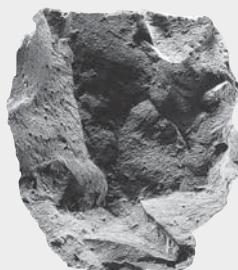
120

S = 2 / 3

旧石器時代 石器 (4)



413



390



457



476



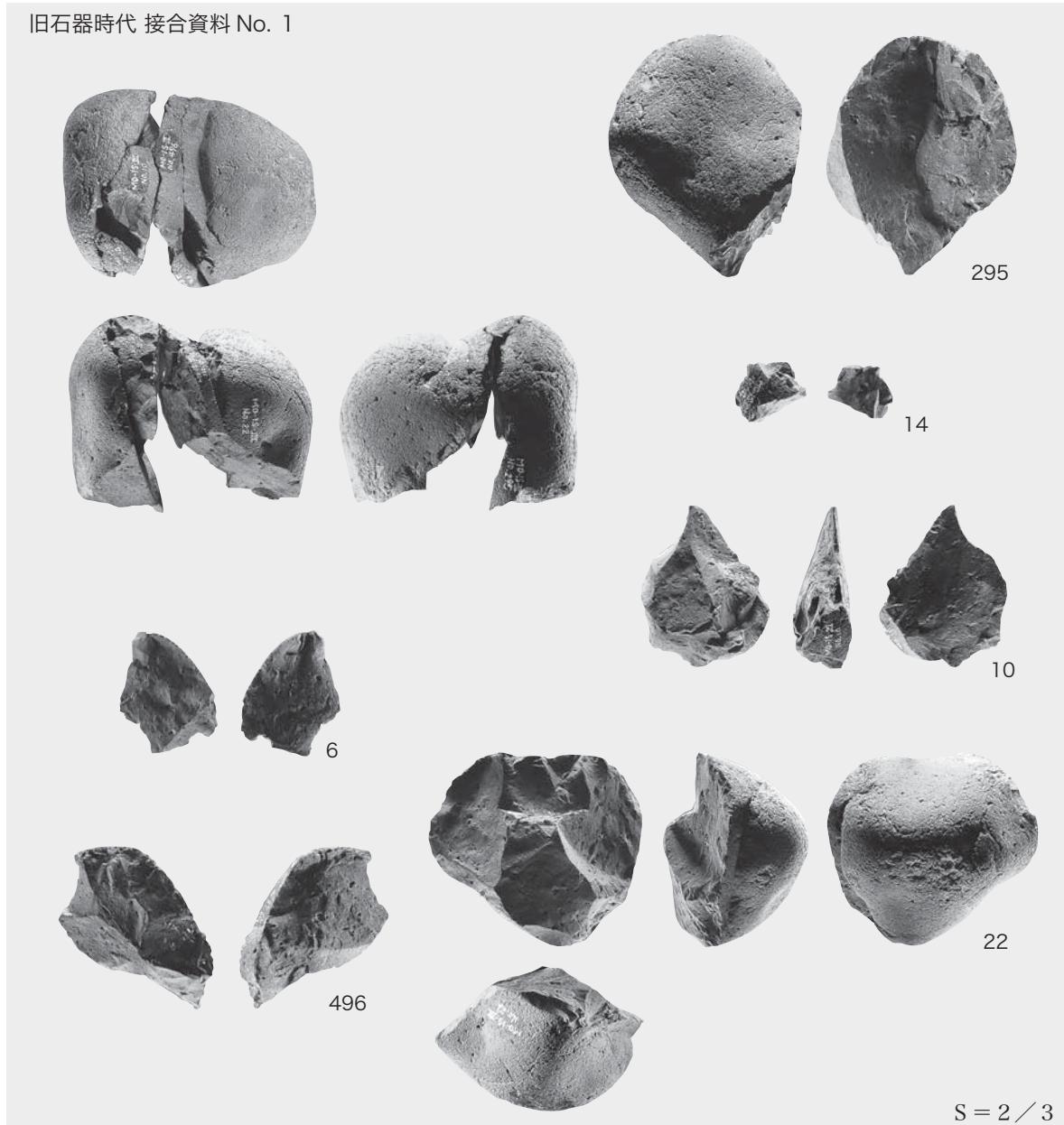
395



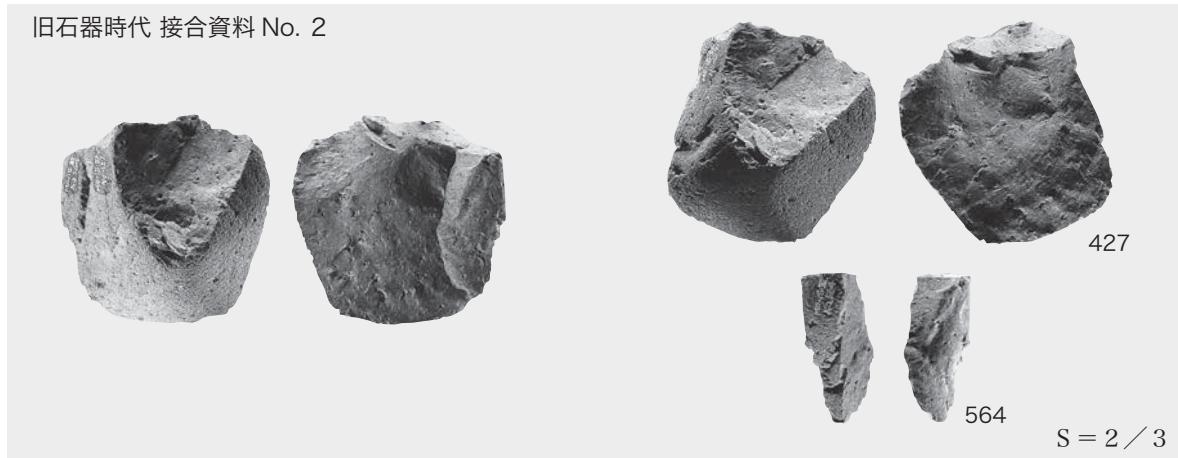
S = 2 / 3

圖版一九 伊勢崎III遺跡
遺物

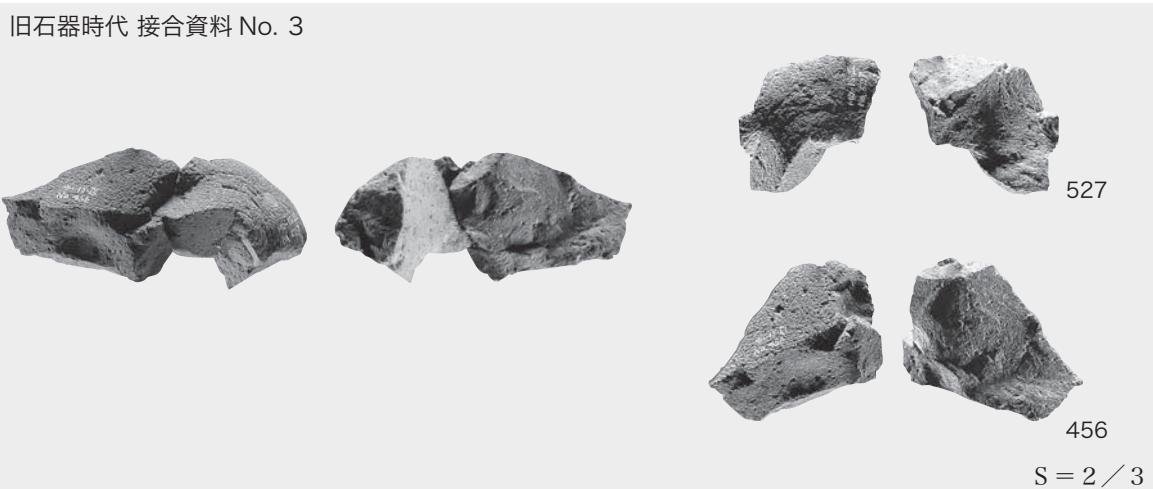
旧石器時代 接合資料 No. 1



旧石器時代 接合資料 No. 2



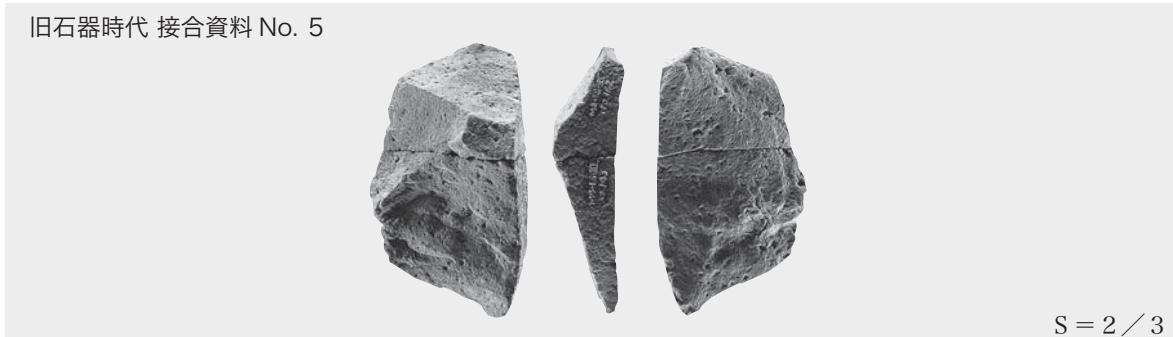
旧石器時代 接合資料 No. 3



旧石器時代 接合資料 No. 4



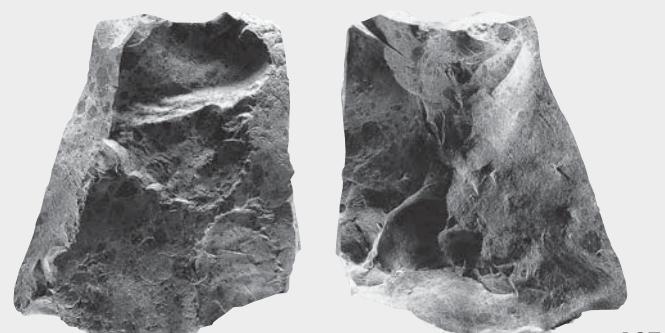
旧石器時代 接合資料 No. 5



旧石器時代 接合資料 No. 6



旧石器時代 接合資料 No. 9



$S = 2/3$

旧石器時代 接合資料 No.10



$S = 2/3$

旧石器時代 接合資料 No.11

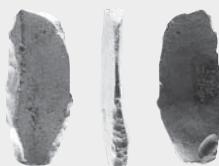


$S = 2/3$

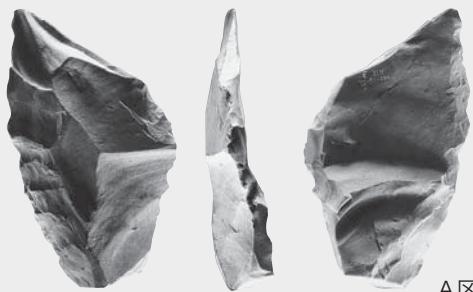
旧石器時代 出土層位不明 石器



S-32・3



A区・1



A区・3



A区・2



S-32・4



S-32・1



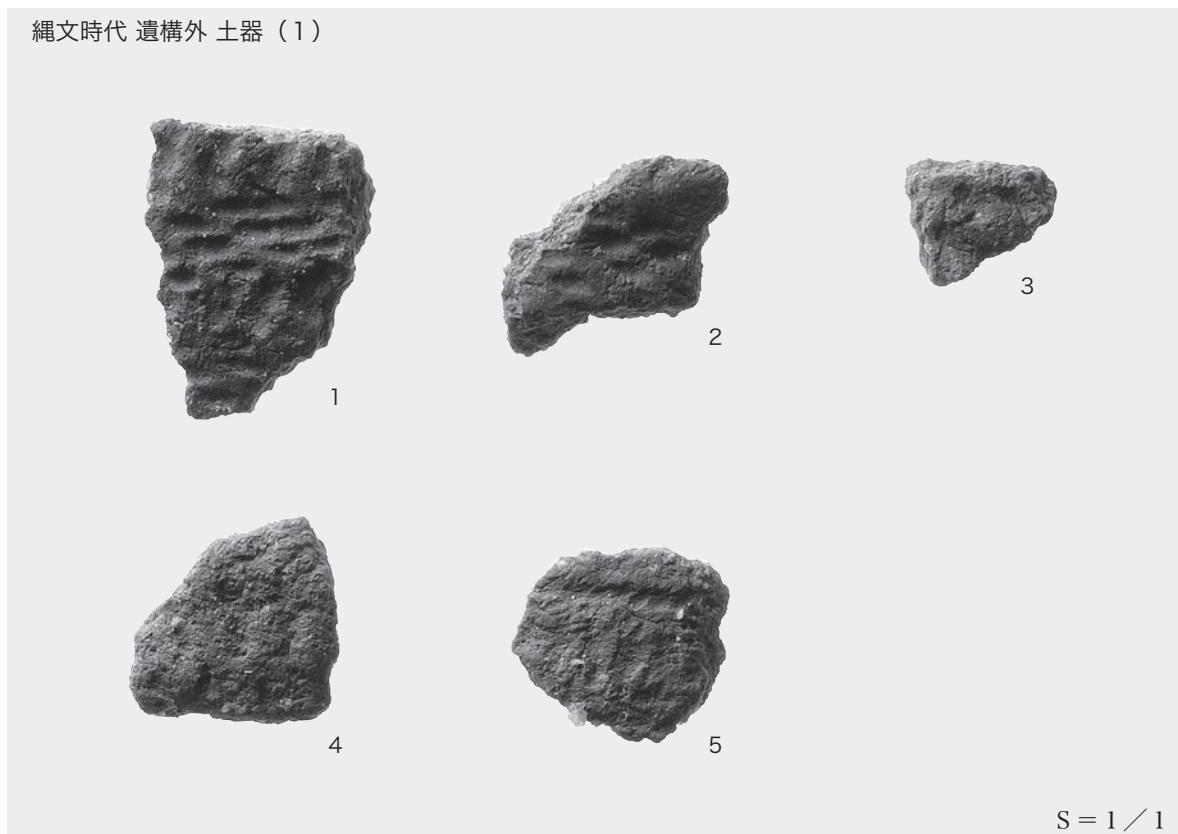
S-9



S-32・2

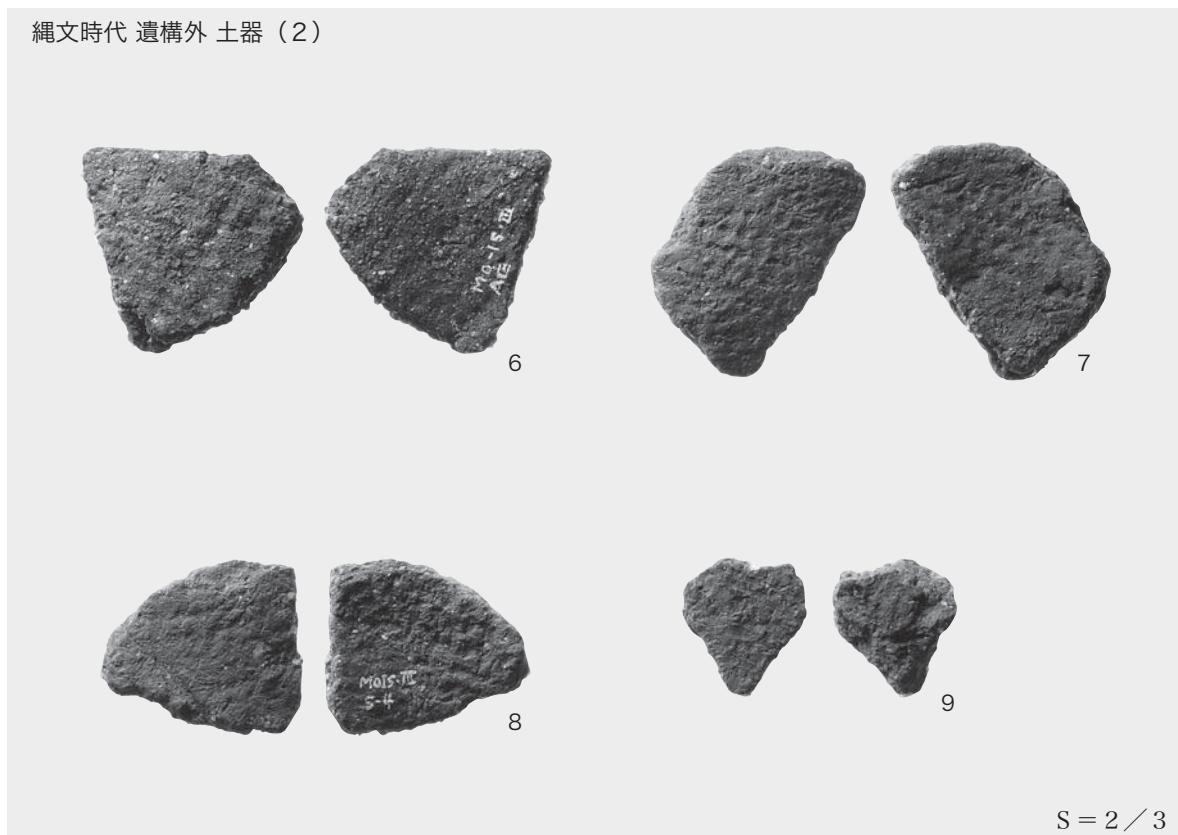
S = 2 / 3

縄文時代 遺構外 土器 (1)

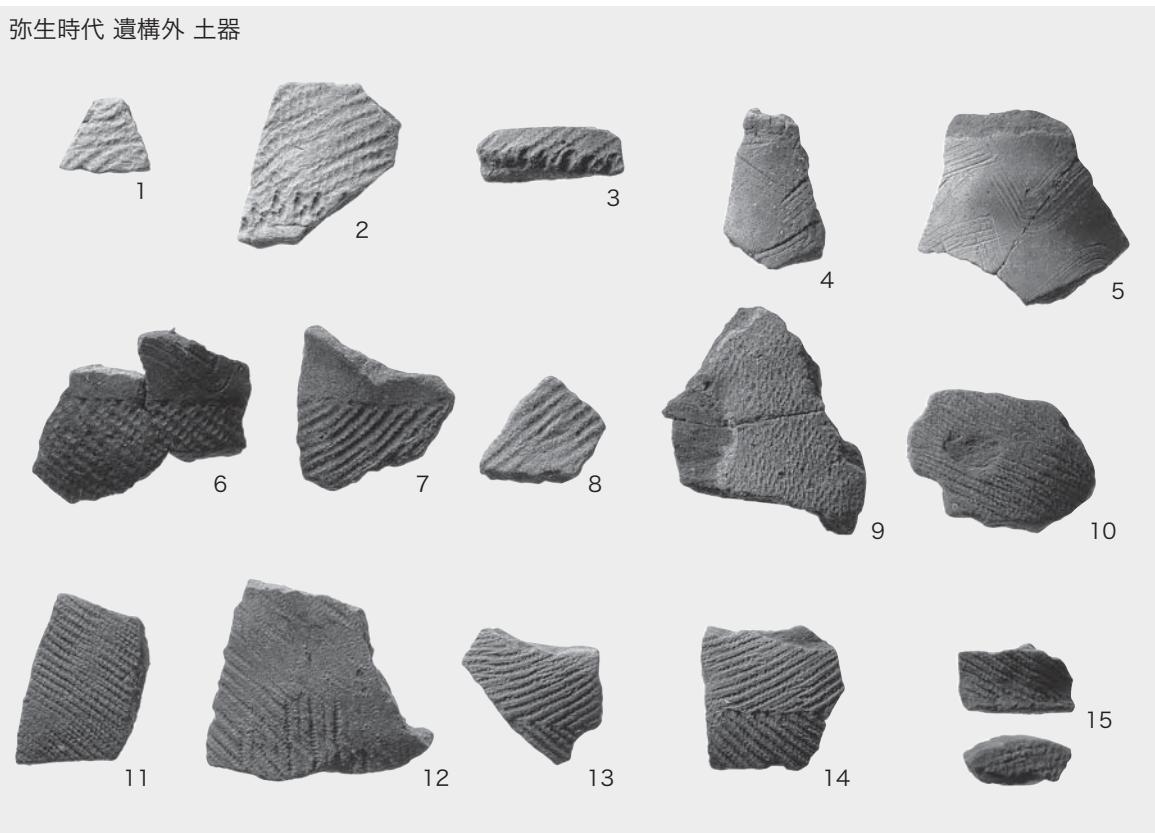
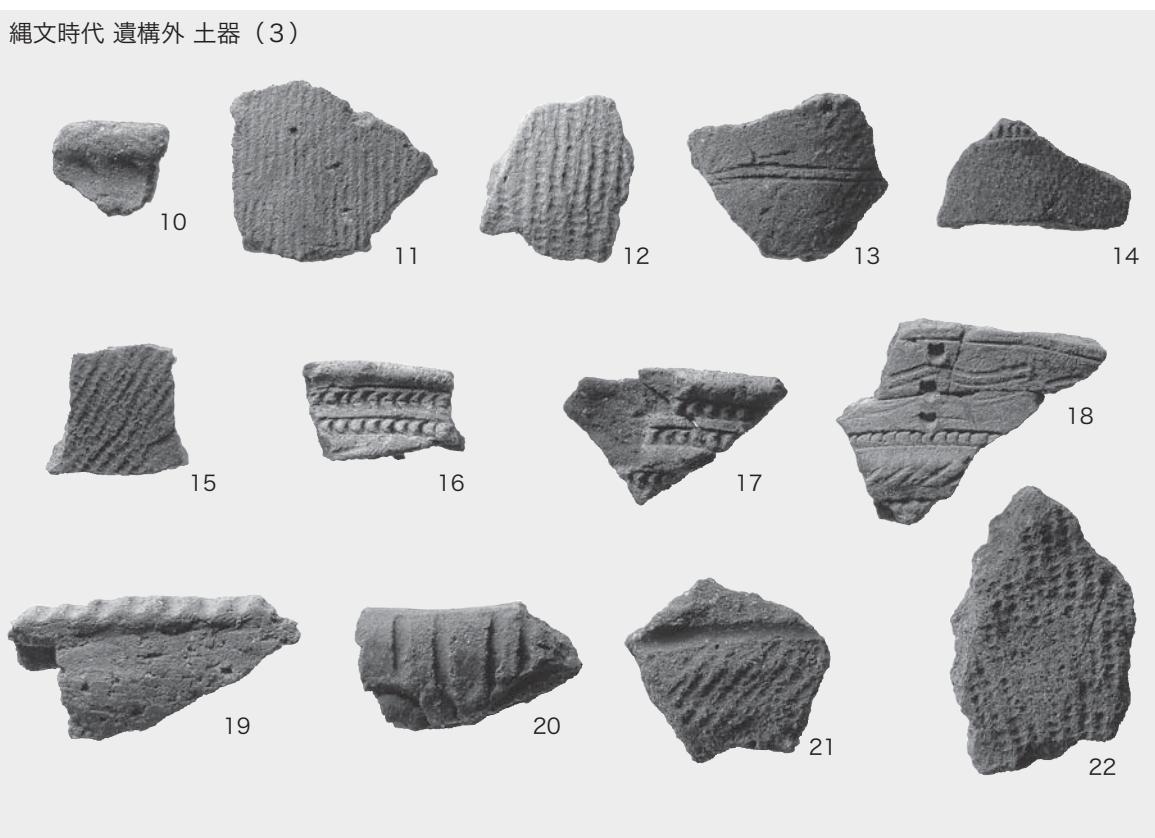


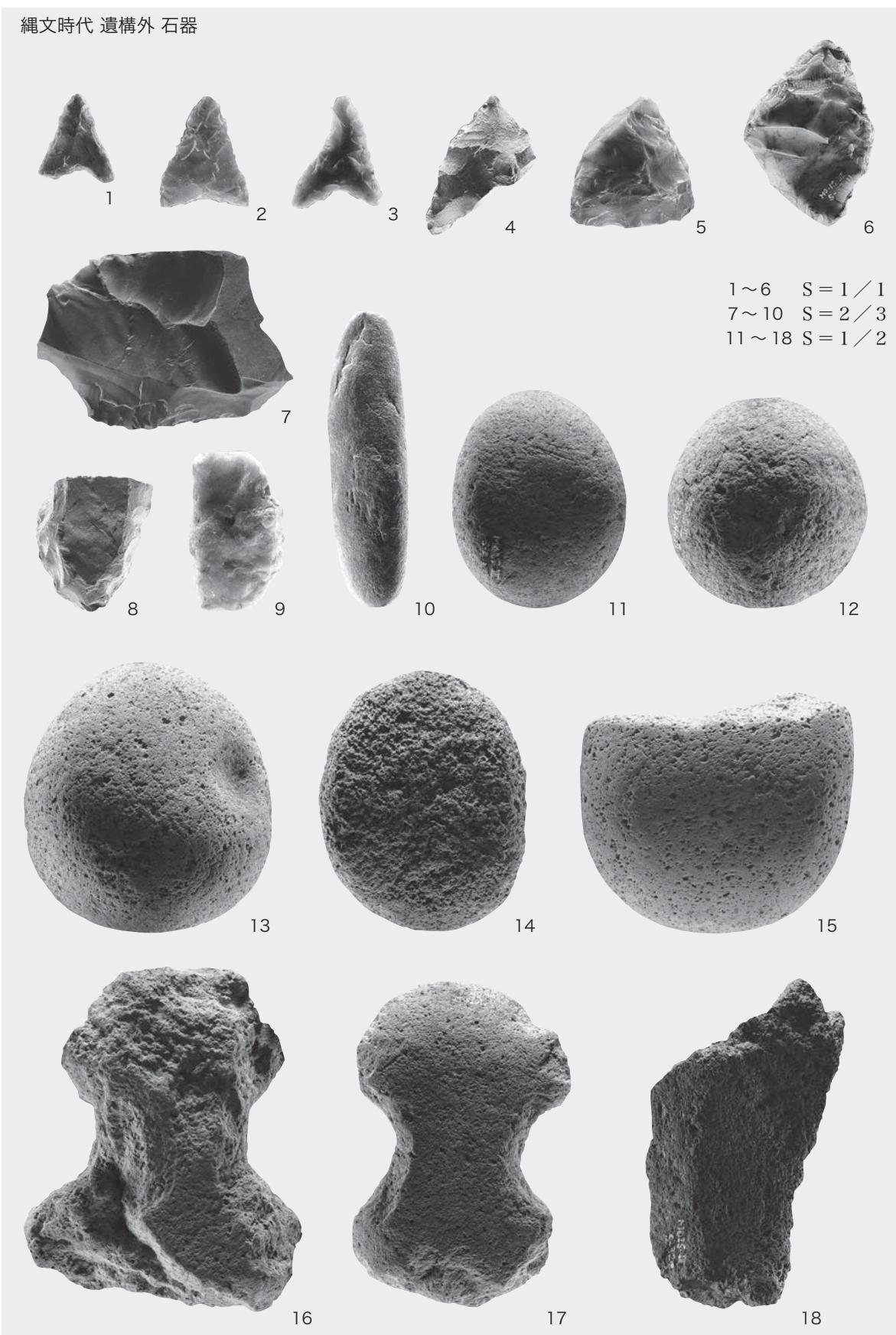
S = 1 / 1

縄文時代 遺構外 土器 (2)

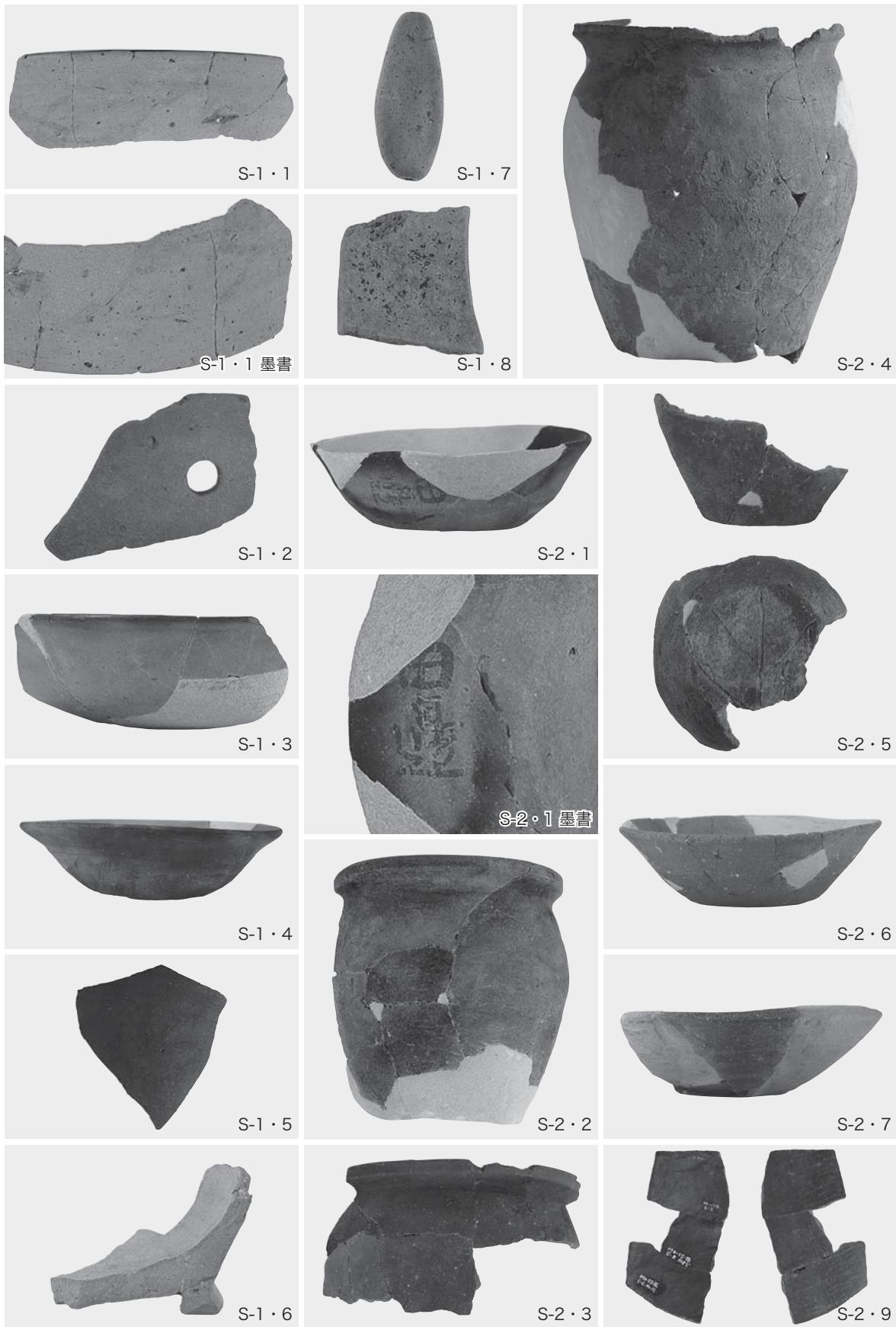


S = 2 / 3

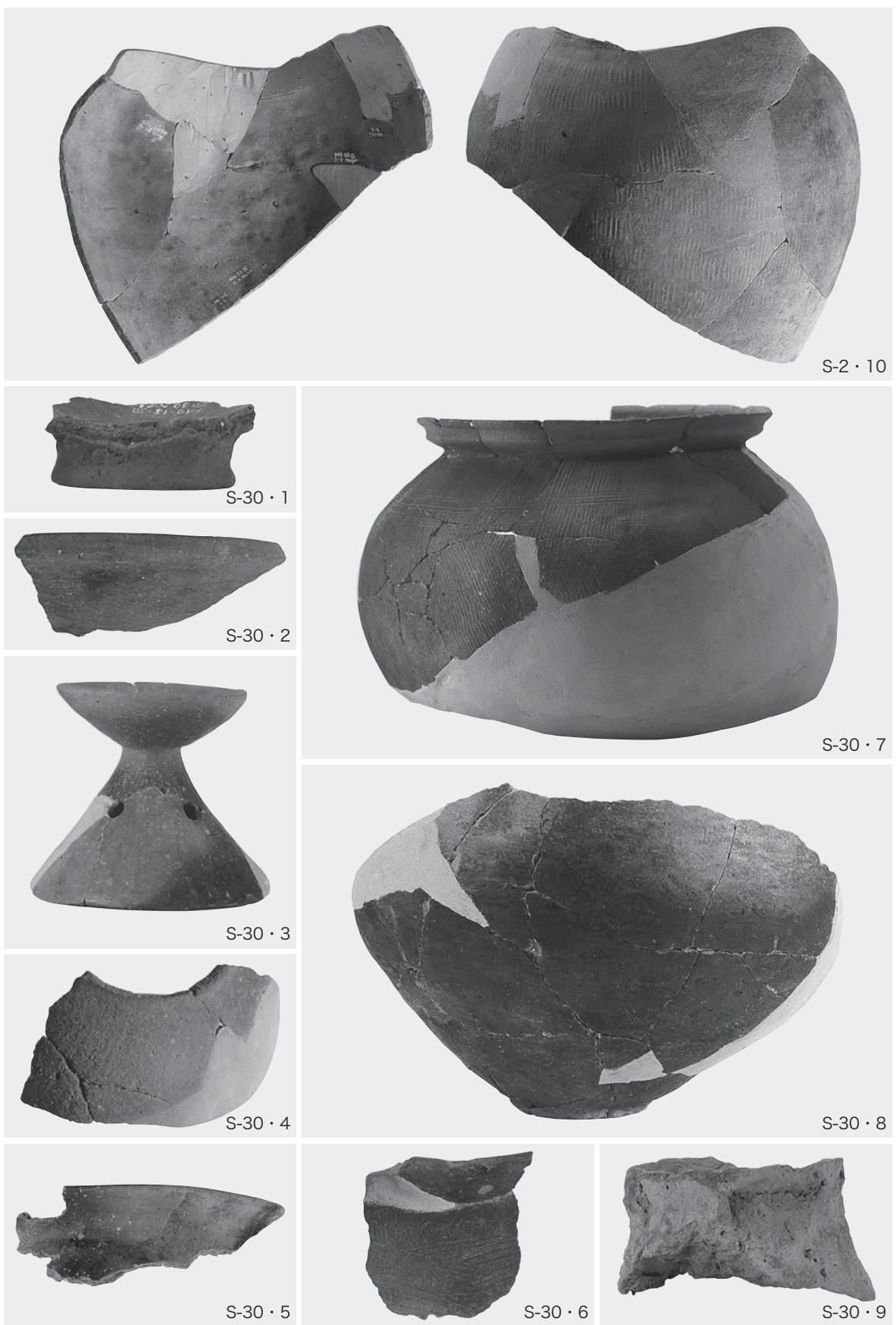




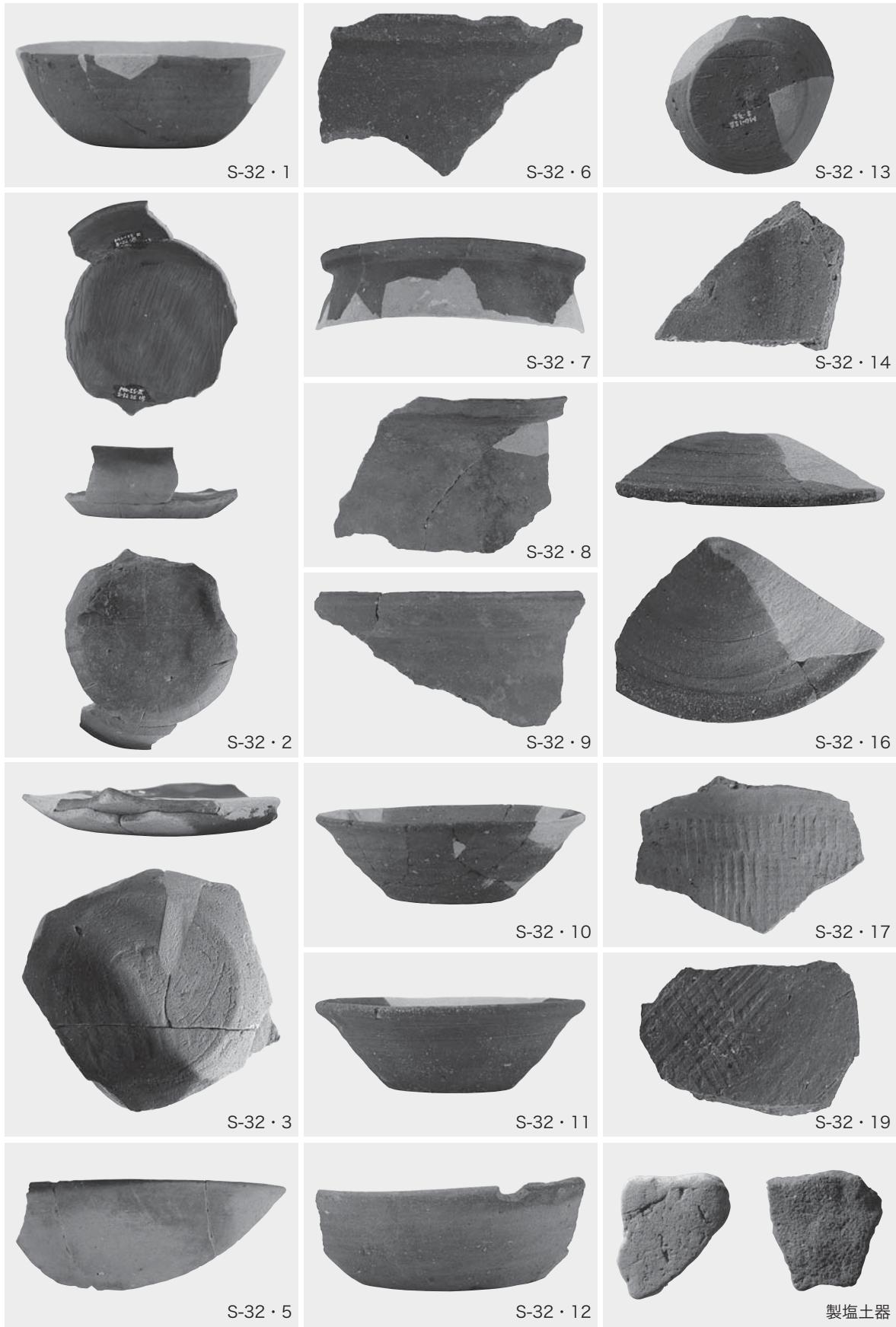
圖版二六 伊勢崎川遺跡 遺物



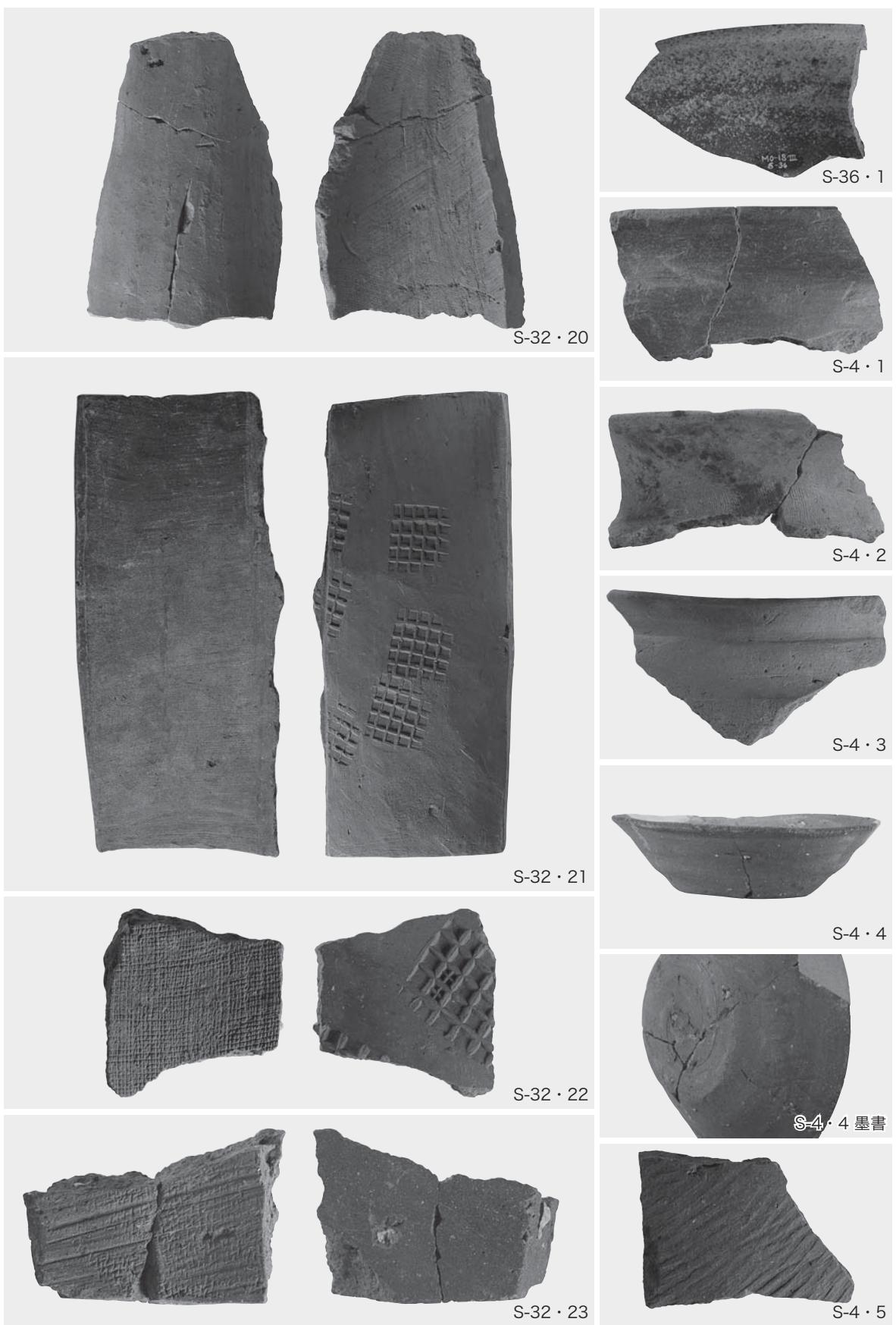
図版二七 伊勢崎III遺跡 遺物



圖版二八 伊勢崎川遺跡
遺物

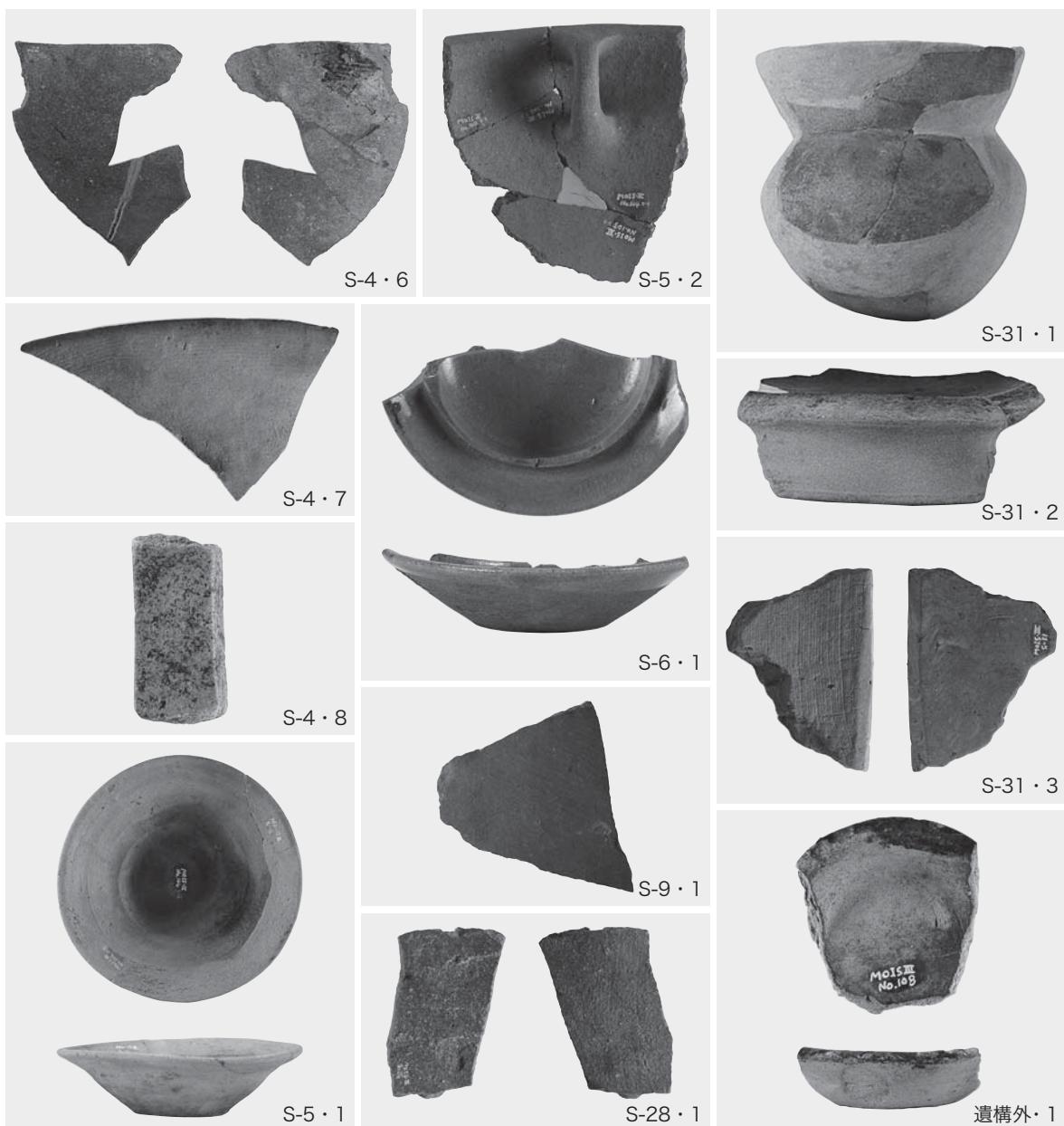


図版一九
伊勢崎III遺跡
遺物

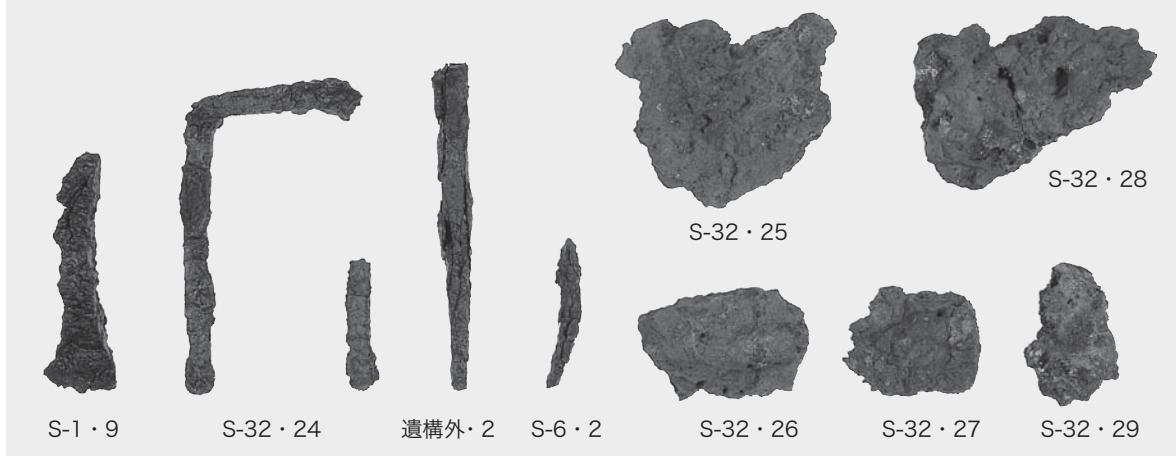


圖版三〇 伊勢崎III遺跡

遺物



鐵製品・鐵滓・羽口破片



報告書抄録

ふりがな	はらきたいせき・かやつつみきたいせき・いせさきさんいせき
書名	原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎III遺跡
副書名	北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査XV
卷次	15
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第323集
編著者名	吉田 哲
編集機関	財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
発行年月日	西暦 2009年3月19日 (平成21年3月19日)

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °・'・"	東経 °・'・"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山王遺跡	真岡市長田	09209	261	36° 26' 35"	139° 58' 10"	20020909～ 20050331	1,018	道路(北関東自動車道)建設
原北遺跡	真岡市西高間木	09209	264	36° 25' 58"	139° 58' 20"	20020802～ 20031113	2,070	
茅堤北遺跡	真岡市西高間木	09209	265	36° 25' 43"	139° 58' 30"	20020826～ 20020904	804	
伊勢崎IV遺跡	真岡市伊勢崎	09209	271	36° 25' 34"	139° 58' 38"	20020828～ 20020830	620	
伊勢崎III遺跡	真岡市伊勢崎	09209	270	36° 25' 23"	139° 58' 51"	20020902～ 20031112	8,504	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王遺跡			遺構なし	遺物なし	
原北遺跡		時代不明	溝跡2条	縄文土器片、弥生土器片	
茅堤北遺跡		時代不明	溝跡1条	遺物なし	
伊勢崎IV遺跡			遺構なし	縄文土器片	
伊勢崎III遺跡		旧石器時代 縄文～弥生時代	石器集中地点6基 礫群5基	ナイフ形石器、彫刻刀形石器、剥片等 縄文土器片、弥生土器片	安山岩接合資料等
	集落跡	古墳～平安時代	竪穴住居跡4軒 井戸跡3基 溝跡8条 土坑10基 地下式坑1基	土師器、須恵器、石製品、土製品、鉄製品	S字状口縁甕 「田邊」銘 墨書き土器 製塙土器破片

要約	確認調査をした5遺跡とも鬼怒川と五行川に挟まれた、宝積寺(真岡)台地の上面に立地する。原北遺跡では、溝跡が2条確認できた。断面形葉研堀状で中世のものと考えられる。茅堤北遺跡では、溝跡が1条確認できた。断面形葉研堀状で中世のものと考えられる。伊勢崎III遺跡では、旧石器時代の石器集中地点6基・礫群5基、古墳時代から平安時代の4軒の竪穴住居跡などを確認した。旧石器時代文化層および古墳時代前期集落に関しては、隣接する伊勢崎II遺跡との関連がうかがえる。
----	---

北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

- I 「一本松遺跡・文珠山遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 230 集 1999 年 3 月
- II 「杉村・磯岡・磯岡北」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 241 集 2000 年 3 月
- III 「八剣遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 254 集 2001 年 3 月
- IV 「谷向・国谷馬場・中の内・惣宮・鍋小路」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 255 集 2001 年 3 月
- V 「上神主・茂原 茂原向原 北原東」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 256 集 2001 年 3 月
- VI 「権現山遺跡・百目鬼遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 257 集 2001 年 3 月
- VII 「西赤堀遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 304 集 2007 年 3 月
- VIII 「峰高前遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 308 集 2007 年 9 月
- IX 「高島遺跡群」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 309 集 2008 年 3 月
- X 「下陰遺跡 I」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 310 集 2008 年 3 月
- XI 「西物井遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 316 集 2009 年 3 月
- XII 「西根 2 遺跡・小野寺城跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 320 集 2009 年 3 月
- XIII 「谷向遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 321 集 2009 年 3 月
- XIV 「五靈遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 322 集 2009 年 3 月
- XV 「原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎 III 遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 323 集 2009 年 3 月
- XVI 「曲田遺跡・馬場先遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第 324 集 2009 年 3 月

栃木県埋蔵文化財調査報告第 323 集

原北遺跡・茅堤北遺跡・伊勢崎 III 遺跡

—北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 XV—

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市塙田 1-1-20

TEL 028 (623) 3425

財団法人とちぎ生涯学習文化財団

宇都宮市本町 1-8

TEL 028 (643) 1011

平成 21 年 3 月 19 日発行

編集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474

TEL 0285 (44) 8441

印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
